熊本県文化財調査報告書　第239集

上ノ郷遺跡

九州新幹線建設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査

2007

熊本県教育委員会

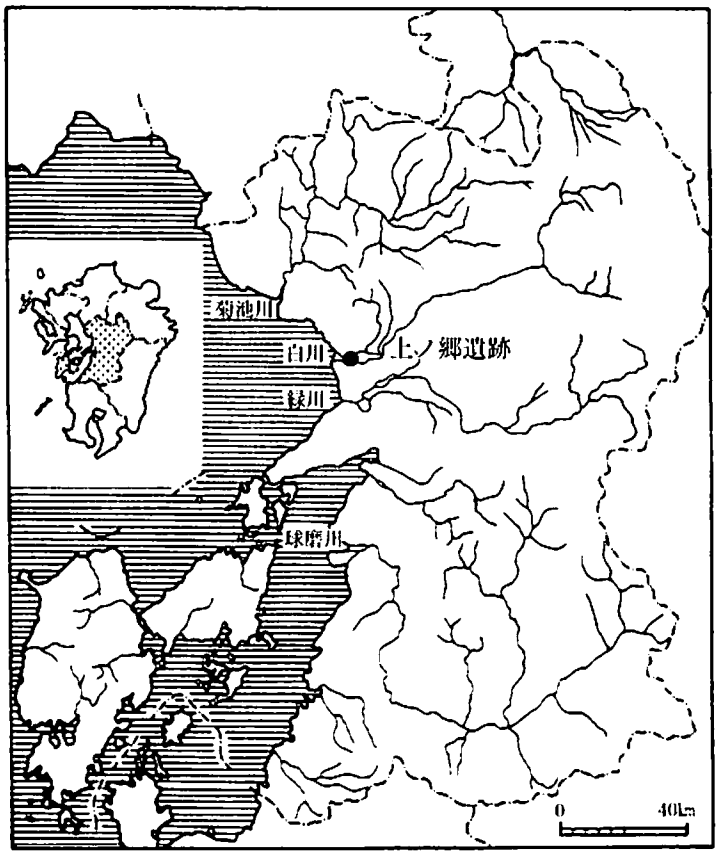
上ノ郷遺跡調査区全景

調査区遠景（白川を望んで…）

調査区全景

上ノ郷遺跡

九州新幹線建設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査



2007

熊本県教育委員会

序　文

熊本県教育委員会では、平成15年5月21日から平成16年1月31日まで、独立行政法人鉄道建設・運輸施設整備支援機構鉄道建設本部九州新幹線建設局の九州新幹線建設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査として、熊本県熊本市島町に所在する上ノ郷遺跡の発掘調査を実施しました。

調査の結果、主に弥生時代中期から後期にかけての遺構及び遺物が発見されました。特に、弥生時代中期の甕棺墓12基と土壙墓6基が確認され、その中から、人骨20体が発見されたことは、当時の埋葬の様子を知るうえで貴重な発見と言えるでしょう。

この報告書が県民の皆様をはじめ、多くの方々に活用され、埋蔵文化財に関する関心と理解を深めていただく一助になれば、喜びに堪えません。

なお、調査の円滑な実施に御理解と御協力をいただいた地元の方々並びに関係機関、そして、調査に対する御指導と御助言をいただいた諸先生方に対して厚く御礼を申し上げます。

平成19年3月

熊本県教育長　柿　塚　純　男

例　言

1．本書は、九州新幹線建設工事に伴い、平成15年5月21日から平成16年1月31日にかけて実施した熊本県熊本市島町に所在する上ノ郷遺跡の発掘調査報告書である。
2．発掘調査は、独立行政法人鉄道建設・運輸施設整備支援機構鉄道建設本部九州新幹線建設局の依頼を受け、熊本県教育庁文化課が実施した。
3．遺物の整理は、平成16年度から平成18年度にかけて、熊本県教育庁文化課文化財資料室で実施した。なお、平成19年3月31日現在文化財資料室にて一括保管している。
4．本書の遺跡地図は、熊本県遺跡地図に加筆修正したものを利用した。
5．国土座標軸による測量基準杭の設定は、（株）十八測量に委託した。
6．本書で使用した航空写真は、（有）スカイサーベイと（株）ＧＩＳに委託した。
7．甕棺墓・土壙墓等から出土した人骨の実測及び遺物取り上げは、山口県豊浦郡豊北町（現在下関市）にある土井ヶ浜遺跡人類学ミュージアムの館長松下幸生氏に依頼した。
8．現場での遺構実測・遺物取り上げ・写真撮影は、今村和徳、和田敏郎、濱田教靖、宇田員将、横田光智が中心に行い、坂口圭太郎、長谷部善一がこれを補助し、一部を（株）埋蔵文化財サポートシステムに委託した。
9．遺物実測、遺構製図及び遺物製図は、横山明代、西畑美希、濱崎清子、古閑満代、井上裕美、緒方千代子、永山邦子が中心に行い、一部を（株）アジア航測、（株）九州文化財研究所、（株）埋蔵文化財サポートシステムに委託した。遺物の写真撮影は、村田百合子、手鳴裕子が中心に行った。
10．本書の執筆については、Ⅴ章を松下氏（土井ヶ浜遺跡人類学ミュージアム館長）が、それ以外は今村が行った。
11．本書の編集及び校正は、今村、横山、西畑があたった。

凡　例

1．現地での実測は、以下の縮尺で実測した。
　甕棺墓…1/10　　竪穴住居跡…1/20　　土坑・土壙墓・不明遺構…1/10
2．報告書は、以下の縮尺で掲載した。
　甕棺墓…1/20　　竪穴住居跡…1/60　　土坑・土壙墓・不明遺構…1/30
　溝状遺構…1/100（1号・2号）　1/60（3号・4号）
　甕棺…1/8　　土器…1/3　　石器…2/3（石鏃）　1/2（石包丁・磨製石斧）
3．遺構図に示した方位は真北である。
4．須恵器は、断面に網掛けを行った。
5．熊本県内の弥生時代や中期から後期にかけて脚台を有する甕型土器及び鉢形土器については、「脚付」や「台付」、などの名称を付していたが、本報告書では「台付」という名称に統一した。

本 文 目 次

序　文
例言・凡例・目次

第Ⅰ章　調査の経過 …… 1
　第１節　調査の契機 …… 1
　第２節　調査の組織 …… 1
　第３節　調査の過程 …… 3
第Ⅱ章　位置と環境 …… 5
　第１節　地理的環境 …… 5
　第２節　歴史的環境 …… 5
第Ⅲ章　調査の概要 …… 11
　第１節　調査の方法 …… 11
　第２節　層位と包含層 …… 12
第Ⅳ章　調査の結果 …… 17
　第１節　はじめに …… 17
　第２節　甕棺墓と甕棺 …… 17
　　（１）　甕棺墓 …… 17
　　（２）　甕棺 …… 37
　第３節　その他の遺構 …… 42
　　（１）　竪穴住居跡 …… 42
　　（２）　土壙墓 …… 54
　　（３）　土坑 …… 55
　　（４）　溝状遺構 …… 68
　　（５）　不明遺構 …… 68
　第４節　遺物 …… 70
　　（１）　竪穴住居跡出土遺物 …… 70
　　（２）　土坑出土遺物 …… 92
　　（３）　溝状遺構出土遺物 …… 92
　　（４）　不明遺構出土遺物 …… 99
　　（５）　その他の遺物 …… 99
　　（６）　石器 …… 105
　第５節　まとめ …… 106
　参考文献 …… 107
第Ⅴ章　熊本市上ノ郷遺跡出土の弥生人骨 …… 109

観察表 …… 131
写真図版 …… 145
あとがき …… 161
報告書抄録

挿 図 目 次

第 1 図　調査区位置図 …… 2
第 2 図　周辺遺跡分布図 …… 8
第 3 図　遺構配置図・土層図 …… 13 ～ 14
第 4 図　甕棺分布図 …… 15 ～ 16
第 5 図　1 号甕棺墓実測図 …… 18
第 6 図　2 号甕棺墓実測図 …… 19
第 7 図　3 号甕棺墓実測図 …… 20
第 8 図　4 号甕棺墓実測図 …… 21
第 9 図　5 号・8 号甕棺墓実測図 …… 22
第 10 図　6 号・7 号甕棺墓実測図 …… 23
第 11 図　9 号甕棺墓実測図 …… 24
第 12 図　10 号甕棺墓実測図 …… 25
第 13 図　11 号甕棺墓実測図 …… 26
第 14 図　12 号甕棺墓実測図 …… 27
第 15 図　1 号・2 号甕棺 …… 28
第 16 図　3 号甕棺 …… 29
第 17 図　4 号甕棺 …… 30
第 18 図　5 号・6 号・7 号・8 号甕棺 …… 31
第 19 図　9 号・12 号甕棺 …… 32
第 20 図　10 号甕棺 …… 33
第 21 図　11 号甕棺 …… 34
第 22 図　13 号・14 号・15 号甕棺 …… 35
第 23 図　4 号竪穴住居跡内出土甕棺 …… 36
第 24 図　3 号不明遺構内出土甕棺 …… 37
第 25 図　1 号竪穴住居跡実測図 …… 42
第 26 図　2 号竪穴住居跡実測図 …… 43
第 27 図　3 号・4 号・5 号竪穴住居跡実測図 …… 44
第 28 図　6 号竪穴住居跡、3 号・4 号溝実測図 …… 45
第 29 図　7 号・8 号・13 号・14 号竪穴住居跡、22 号土坑実測図 …… 46
第 30 図　9 号竪穴住居跡実測図 …… 47
第 31 図　10 号竪穴住居跡・10 号竪穴住居跡内 Pit 遺物出土状況実測図 …… 48
第 32 図　11 号・12 号竪穴住居跡実測図 …… 49
第 33 図　15 号竪穴住居跡実測図 …… 50
第 34 図　16 号竪穴住居跡実測図 …… 51
第 35 図　17 号竪穴住居跡実測図 …… 52
第 36 図　1 号・2 号・3 号土壙墓実測図 …… 53
第 37 図　4 号・5 号・6 号土壙墓実測図 …… 54
第 38 図　1 号・2 号土坑実測図 …… 55

第 39 図　3 号・4 号・5 号・6 号土坑実測図 …… 56
第 40 図　7 号・8 号・9 号土坑実測図 …… 57
第 41 図　10 号・11 号土坑実測図 …… 58
第 42 図　12 号・13 号・14 号・15 号土坑実測図 …… 59
第 43 図　16 号・17 号・21 号土坑実測図 …… 60
第 44 図　18 号・19 号・20 号土坑実測図 …… 61
第 45 図　23 号・24 号・25 号土坑実測図 …… 62
第 46 図　1 号・2 号溝実測図 …… 65
第 47 図　1 号・2 号不明遺構実測図 …… 66
第 48 図　3 号・4 号不明遺構実測図 …… 67
第 49 図　1 号竪穴住居跡出土遺物実測図 …… 71
第 50 図　2 号・5 号・8 号竪穴住居跡出土遺物実測図 …… 72
第 51 図　4 号竪穴住居跡出土遺物実測図 …… 73
第 52 図　6 号竪穴住居跡出土遺物実測図 …… 74
第 53 図　9 号竪穴住居跡出土遺物実測図 …… 75
第 54 図　9 号竪穴住居跡出土遺物実測図 …… 76
第 55 図　11 号竪穴住居跡出土遺物実測図 …… 80
第 56 図　11 号竪穴住居跡出土遺物実測図 …… 81
第 57 図　11 号竪穴住居跡出土遺物実測図 …… 82
第 58 図　11 号竪穴住居跡出土遺物実測図 …… 83
第 59 図　11 号竪穴住居跡出土遺物実測図 …… 84
第 60 図　12 号・13 号・15 号竪穴住居跡出土遺物実測図 …… 85
第 61 図　15 号竪穴住居跡出土遺物実測図 …… 86
第 62 図　15 号竪穴住居跡出土遺物実測図 …… 87
第 63 図　16 号・17 号竪穴住居跡出土遺物実測図 …… 88
第 64 図　21 号・23 号・24 号土坑、1 号・2 号溝出土遺物実測図 …… 89
第 65 図　3 号不明遺構出土遺物実測図 …… 90
第 66 図　4 号不明遺構出土遺物実測図 …… 91
第 67 図　一括遺物実測図 …… 93
第 68 図　一括遺物実測図 …… 94
第 69 図　一括遺物実測図 …… 95
第 70 図　一括遺物実測図 …… 96
第 71 図　一括遺物実測図 …… 97
第 72 図　一括遺物実測図 …… 98
第 73 図　10 号竪穴住居跡内 Pit 出土石器実測図 …… 103
第 74 図　9 号・11 号竪穴住居跡、4 号溝、6 号土壙墓出土石器実測図 …… 104

表　目　次

第1表　周辺遺跡一覧表 ……9
第2表　甕棺墓一覧表 ……131
第3表　甕棺法量表 ……132
第4表　土器観察表 ……135
第5表　石器観察表 ……143

写真図版目次

PL. 1　上ノ郷遺跡調査区全景 …… 巻頭
PL. 2　調査区遠景（白川を望んで…）
PL. 3　調査区全景
PL. 4　3号甕棺出土状況 ……145
PL. 5　4号甕棺出土状況
PL. 6　6・7号甕棺出土状況
PL. 7　6号甕棺人骨出土状況
PL. 8　9号甕棺人骨出土状況 ……146
PL. 9　12号甕棺人骨出土状況
PL.10　10号甕棺人骨出土状況
PL.11　4号・5号・6号土壙墓人骨出土状況全景 ……147
PL.12　4号・5号土壙墓人骨出土状況
PL.13　6号土壙墓人骨出土状況
PL.14　1号・2号甕棺出土状況 ……148
PL.15　3号甕棺出土状況
PL.16　4号甕棺出土状況
PL.17　5号甕棺出土状況
PL.18　8号甕棺出土状況
PL.19　9号甕棺出土状況
PL.20　10号甕棺出土状況
PL.21　12号甕棺出土状況
PL.22　11号甕棺（上）出土状況 ……149
PL.23　11号甕棺（下）出土状況
PL.24　2号甕棺人骨出土状況
PL.25　3号甕棺人骨出土状況
PL.26　9号竪穴住居跡完掘状況
PL.27　10号竪穴住居跡石包丁出土状況
PL.28　11号・12号・13号竪穴住居跡完掘状況
PL.29　16号竪穴住居跡（古代）完掘状況
PL.30　5号竪穴住居跡、5号～8号土坑完掘状況 ……150
PL.31　7号・8号竪穴住居跡、17号～21号土坑完掘状況

PL.32　1号土壙墓完掘状況
PL.33　1号土壙墓人骨出土状況
PL.34　1号溝完掘状況
PL.35　4号溝遺物出土状況
PL.36　4号不明遺構遺物出土状況
PL.37　調査区水没状況（調査終了1時間後）
PL.38　1号甕棺 ……151
PL.39　2号甕棺
PL.40　9号甕棺
PL.41　8号甕棺
PL.42　3号甕棺 ……152
PL.43　3号甕下棺 口縁打ち欠き
PL.44　4号甕上棺 口縁打ち欠き
PL.45　4号甕棺
PL.46　4号甕下棺 口縁打ち欠き
PL.47　5号甕棺 ……153
PL.48　6号甕棺（上棺の可能性あり）
PL.49　6号甕下棺
PL.50　7号甕棺
PL.51　12号甕棺
PL.52　10号甕棺……154
PL.53　11号甕棺
PL.54　3号不明遺構出土甕
PL.55　4号不明遺構出土甕（赤色土器）
PL.56　甕棺集合（1）……155
PL.57　甕棺集合（2）
PL.58　甕棺集合（3）
PL.59　1号竪穴住居跡出土台付甕 ……156
PL.60　2号竪穴住居跡出土高杯
PL.61　2号竪穴住居跡出土鉢（黒髪式）
PL.62　8号竪穴住居跡出土杯
PL.63　4号竪穴住居跡出土コップ型土器
PL.64　6号竪穴住居跡出土鉢
PL.65　6号竪穴住居跡出土台付甕
PL.66　9号竪穴住居跡出土壺
PL.67　11号竪穴住居跡出土鉢……157
PL.68　11号竪穴住居跡出土鉢
PL.69　11号竪穴住居跡出土鉢
PL.70　11号竪穴住居跡出土鉢
PL.71　11号竪穴住居跡出土台付甕
PL.72　11号竪穴住居跡出土台付甕

PL.73　11 号竪穴住居跡出土台付甕
PL.74　15 号竪穴住居跡出土鉢
PL.75　15 号竪穴住居跡出土鉢……158
PL.76　15 号竪穴住居跡出土鉢
PL.77　15 号竪穴住居跡出土甕
PL.78　15 号竪穴住居跡出土台付甕
PL.79　15 号竪穴住居跡出土壺
PL.80　21 号土坑出土台付甕
PL.81　一括 無頸壺
PL.82　一括 鉢
PL.83　17 号竪穴住居跡出土鉢……159
PL.84　17 号竪穴住居跡出土手づくね
PL.85　17 号竪穴住居跡出土高杯
PL.86　23 号・24 号土坑出土杯
PL.87　一括 壺
PL.88　一括 甑
PL.89　10 号竪穴住居跡内 Pit 出土石包丁
PL.90　石鏃
PL.91　甕集合……160
PL.92　壺集合
PL.93　鉢集合

第Ⅰ章　調査の経過

第Ⅱ章　位置と環境

第Ⅲ章　調査の概要

第Ⅰ章　調査の経過

第１節　調査の契機

本遺跡の調査は、独立行政法人鉄道建設・運輸施設整備支援機構鉄道建設本部九州新幹線建設局（以下「鉄道建設・運輸機構」と省略する。）の九州新幹線建設工事に伴う事前の記録保存を目的とした発掘調査である。

工事の実施に先立ち、予定地内が周知の埋蔵文化財包蔵地「熊本平野条里跡」に位置することから、踏査及び確認調査を実施した。その結果、後世の削平により古代以降の条里制に伴う遺構や遺物は確認されなかったが、新たに弥生時代を中心とした遺構や遺物が発見され、遺跡の存在が確認された。その後、埋蔵文化財の発掘調査が必要な範囲を鉄道建設・運輸機構に連絡し、協議を重ねたうえで、調査を行う運びとなった。

熊本県教育庁文化課では、本調査の日程を平成15年5月からの約1年間と設定し、鉄道建設・運輸機構の費用負担で実施することとなった。

遺跡の名称及び時代と確認した遺構・遺物の内容が違うため、熊本市教育委員会文化財課と協議を行い、平成18年10月に「上ノ郷遺跡」という名称で新規登録を行った。

第２節　調査の組織

【平成14年度　踏査及び確認調査】

調査責任者　成瀬烈大（文化課長）、島津義昭（教育審議員・課長補佐）
調査総括　高木正文（主幹兼調査第1係長）
調査事務局　小田信也（教育審議員・課長補佐）、中村幸宏（主幹兼総務係長）、天野寿久（主任主事）、杉村輝彦（主事）
調査担当　坂口圭太郎（文化財保護主事）

【平成15年度　本調査】

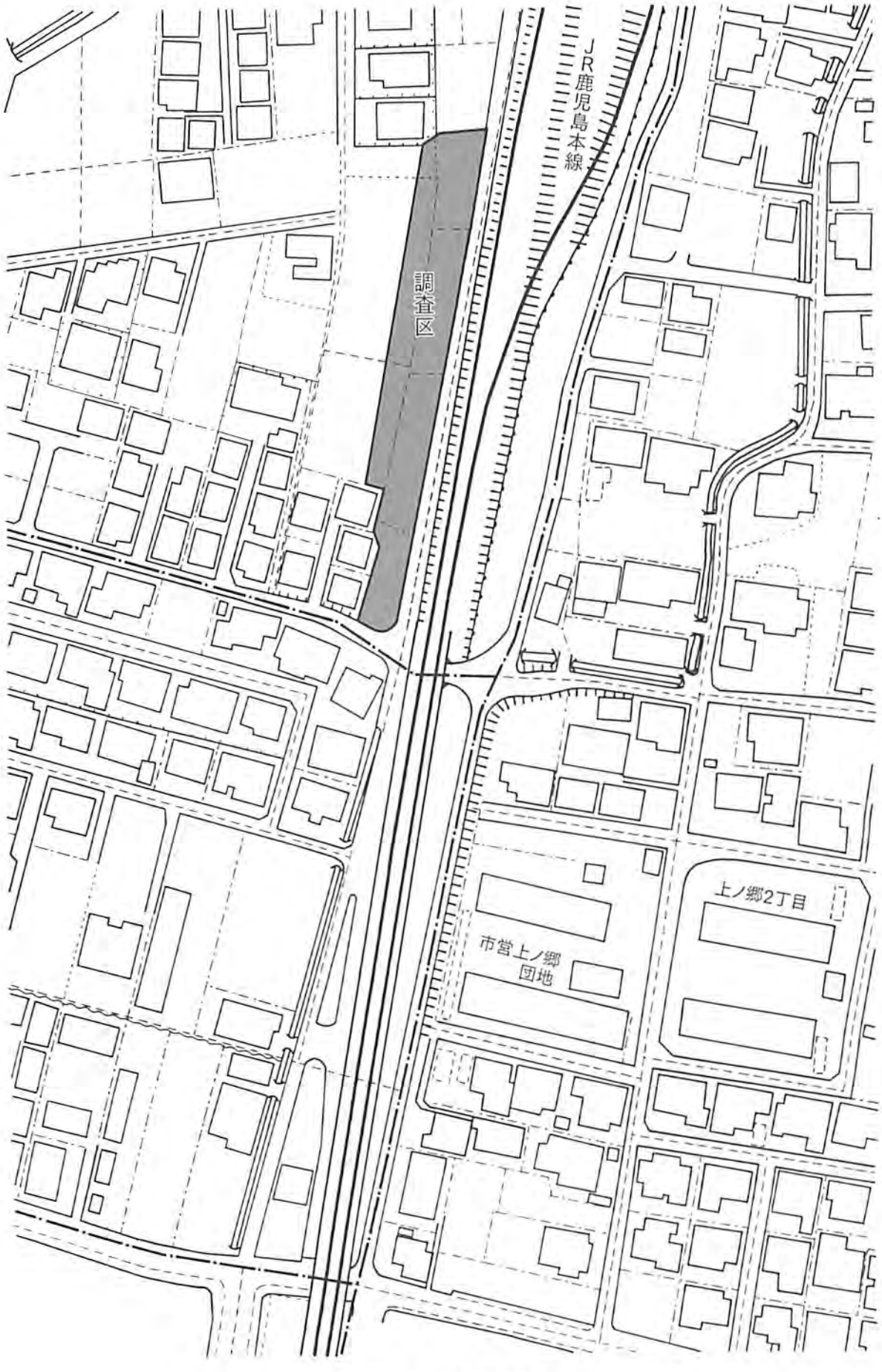
調査責任者　成瀬烈大（文化課長）、島津義昭（教育審議員・課長補佐）
調査総括　高木正文（主幹兼調査第1係長）
調査事務局　吉田恵（課長補佐）、櫚杭正義（主幹兼総務係長）、天野寿久（主任主事）、杉村輝彦（主事）
調査担当　今村和徳（文化財保護主事）、和田敏郎（嘱託）、濱田教靖（嘱託）、宇田員将（嘱託）、横田光智（嘱託）

【平成17年度　報告書作成】

調査責任者　梶野英二（文化課長）、倉岡博（課長補佐）
調査総括　高木正文（課長補佐・調査第1係担当）、野田拓治（主幹・文化財資料室室長）
調査事務局　吉田恵（課長補佐）、四元正明（主幹兼総務係長）、塚原健一（参事）、小谷仁志（主事）
整理担当　今村和徳（文化財保護主事）、横山明代（嘱託）、西畑美希（嘱託）

【平成18年度　製本・印刷】

調査責任者　梶野英二（文化課長）、江本直（課長補佐）
調査総括　高木正文（課長補佐・調査第1係担当）、野田拓治（主幹・文化財資料室室長）
調査事務局　吉田恵（課長補佐）、高宮優美（主幹兼総務係長）、塚原健一（参事）、小谷仁志（主事）
整理担当　今村和徳（文化財保護主事）、横山明代（嘱託）、西畑美希（嘱託）



第１図　調査区位置図

第３節　調査の過程

本調査は、平成15年5月21日から平成16年1月31日まで行った。以下に、調査日誌から特筆すべき事項や内容を簡潔に述べることとする。

【5月】

21日～、重機を使い調査Ⅰ区の表土除去を行う。その後、手作業による掘り下げを行い、遺構検出に入る。

【6月～8月】

6月12日～、(株) 十八測量が調査Ⅰ区の4級基準点測量及びメッシュ杭設置を行う。

5月に引き続き、手作業による掘り下げを行うが、昭和時代と推定される重機による撹乱のため、条里制に伴う遺構は検出できなかった。ただ、弥生土器の破片が多数出土し始めた。

梅雨の長雨や台風接近による雨風及び地下水の湧水により、調査区が水没し、水抜き作業に時間を費やし、なかなか遺構検出が進まない状況が続いた。調査区の両端に水抜き用の溝を切るなどの対策をとるが、なかなか水位が下がらず、8月には、水抜き用の溝が幅1m、深さ1m50cmにまで達した。そこからも弥生土器の破片が多数出土した。

【9月】

3日～、重機を使い調査Ⅱ・Ⅲ区の表土除去を行う。Ⅰ区の反省から、今回は、重機で両側に幅80cm、深さ50cm程度の水抜き用の溝を切ることにした。

11日、調査Ⅰ区から2号溝を検出する。初めての遺構検出まで約4か月弱の期間を費やした。

19日～、(株) 十八測量が、調査Ⅱ・Ⅲ区のメッシュ杭設置を行う。

【10月】

調査区が広くなったため、電源を確保し、水中ポンプを追加し、常時水抜きを行えるようにした。また、作業員の増員に伴い、コンテナハウス・倉庫・トイレも追加した。

調査Ⅱ・Ⅲ区の西側は、新しい時代（近代）の掘削で切られていることが判明する。砂質土であり、水路として活用されていた可能性が高いように思われる。

【11月】

14日、1号甕棺墓、2号甕棺墓を検出する。それ以降、続々と甕棺墓が確認されるようになる。

29日、2号甕棺より人骨が出土する。周辺に多くの土坑が存在し、そこから骨粉や歯を検出したので、墓群が存在したのではないかと推定した。ただし、住居跡などからも骨片や歯が出土したため、今回の調査では、はっきりと土壙墓とされるもの以外は、土坑とした。

【12月】

3日、調査Ⅰ区の掘削をほぼ終了する。(有) スカイサーベイが、調査Ⅰ区の空中撮影を行う。

11日、調査Ⅰ区の実測を終了し、鉄道建設・運輸機構への受け渡しを行う。

調査Ⅲ区の南側では、手作業によるトレンチ掘りで地形的に下がっていることを確認していたので、17日から重機による掘り下げに入る。約1m程度掘り下げる。

17日～、(株) 埋蔵文化財サポートシステム熊本支店が甕棺の実測に入る。甕棺の中から、人骨が出土し始める。水位が高く、水に浸かっていた状態が長く続いたことが幸いし、人骨が残っていたと考えられる。

【1月】

7日～、調査Ⅲ区の南側がさらに下がっていることが確認されたため、再度重機による掘り下げを行うが、湧水のため、難航する。最南端部からは遺構・遺物は検出されなかった。

8日、文化課長谷部氏に甕棺墓から出土した人骨の写真撮影を依頼する。また、4号・5号・6号土壙墓からも人骨が出土する。6号土壙の人骨の腹部から磨製石鏃が出土した。

13日～、山口県豊北町（現下関市）土井ヶ浜遺跡人類学ミュージアムの松下館長に来ていただき、人骨の取り上げ等についての指導を受ける。

15日、文化課と鉄道建設・運輸機構との協議により、調査II・III区の受け渡しが1月末と正式決定する。

31日、調査区ののり面下にあった3号甕棺、11号甕棺を取り上げ、調査を終了する。

水中ポンプの電源を切ると、調査区全体が1時間もかからないうちに水没した。

【2月】

図面整理等を始める。資料室で、甕棺8基の接合を行う。

【3月】

12日、現場事務所にて、接合した甕棺を展示し、遺物説明会を行う。(80名程度の参加がある。)

第II章　位置と環境

第１節　地理的環境

熊本市は、九州中部に位置し、北西部には金峰山があり、有明海と内陸部を隔てている。北部・東部には河岸段丘や火砕流台地が広がり、阿蘇山の西側外輪山斜面へと続いている。南部は熊本平野で占められている。熊本市の中心部には阿蘇山を源とする白川が流れ、坪井川、井芹川、加勢川、緑川等と共に、熊本平野を潤している。熊本平野は、これらの川の堆積作用で生じた沖積平野であり、有明海の臨海部は干拓地である。

上ノ郷遺跡は、熊本県熊本市島町及び上ノ郷町に所在し、熊本市の南西部、白川の下流域左岸に立地している。白川左岸には、数条の自然堤防が残っているが、その堤防上の微高地を中心として、弥生時代・古墳時代・古代・中世の遺物が広く散在していたと考えられる。上ノ郷遺跡は、平田町遺跡、近見町遺跡、白藤遺跡群、護藤遺跡群などが散在する平田町から川尻町へと続く自然堤防上にある。現在の標高は約５～６ｍであり、白川の氾濫を幾度となく受けていると考えられる。

現在は、農地、宅地、道路の整備が進められ、白川の堤防沿いを除き一面の平地となっている。

第２節　歴史的環境

縄文時代（約 13,000 年前～ 2,300 年前）は、気温の温暖化に伴い海水面が現在より５ｍ程度高かったと言われている。このため、白川下流域や島町や上ノ郷町を含む南西部は海底であったと考えられ、平田町遺跡や近見遺跡で縄文時代後晩期の土器が数点発見されている以外は、縄文時代の遺跡の発掘例は上ノ郷遺跡周辺では確認されていない。

弥生時代（約 2,300 年前～ 1,700 年前）になると、海水面が低下し、遺跡の数が増える。ここでは、上ノ郷遺跡周辺の弥生時代の遺跡を挙げることとする。

平田町遺跡では、昭和 37 年に多量の弥生土器が発見されている。中には甕棺の破片と思われるものがあり、丹塗土器や重弧文土器もあることから、弥生時代中期後半から後期にかけての墓地跡があったと考えられる。また、縄文時代後晩期の土器や須恵器片も少量発見されており、縄文時代後晩期から平安時代にかけての埋蔵文化財包蔵地とされている。

近見遺跡では、昭和 29 年頃に郵便局付近で弥生土器、土師器・須恵器が散布しているのが発見されている。縄文時代後晩期の条痕文土器が発見されており、縄文後晩期、弥生時代、古代の遺物包含層が存在すると言われている。

白藤遺跡群は、倉小路甕棺、倉小路箱式石棺、屋敷遺跡、今村遺跡、刈草遺跡、蔦町遺跡、田宮石棺等の遺跡の総称である。

倉小路甕棺では、昭和 36 年に白藤町の西方の畑地から１組の合口甕棺が出土している。全長が約 138cm、口縁部の断面がＴ字状になり、須玖式に属する。

今村遺跡では、合志町今村の中心部、今村若宮や合志乙丙耕地整理記念碑付近に弥生土器や土師器・須恵器が散布している。弥生土器の中には、黒髪式土器の口縁部と思われる破片も出土している。

刈草遺跡では、戦前の昭和８年の用水路工事の際に、弥生時代中期の黒髪式土器や弥生後期の土器、古式土師器の壺や高杯などが出土している。

蔦町遺跡では、蔦天神付近の地下側溝工事で、近世の陶磁器片と共に、弥生土器が出土した。中には、甕棺と思われる土器片もある。蔦町 1200 番地付近では、弥生土器、土師器・須恵器などの遺物が出土している。

近年、宅地や公共施設の開発等に伴い発掘調査例は増えてきており、白藤遺跡群では、熊本市教育委員会が、平成4年度以降、十数回に及ぶ調査を行っている。

平成6年の調査では、荒尾町北田で弥生時代中期の竪穴住居跡群、溝、甕棺、土壙が確認されている。

平成8年～9年の調査では、鳶町で弥生時代後期の竪穴住居跡と溝が確認されている。平成9～10年の調査では、鳶町天神の南側で、弥生時代中期から古墳時代、中世の遺構が確認された。弥生時代中期の遺構としては、1～9基の小群から構成される甕棺群20余が存在し、248基の甕棺が確認され、甕棺埋葬と同時期の祭祀土坑や祭祀土器なども確認されている。

平成9年度の調査では、島町で弥生時代中期の甕棺墓・土壙墓・竪穴住居跡、弥生時代後期の竪穴住居跡が確認されている。遺物の中には、熊本県内の初例とされる弥生時代青銅器鋳型やミニチュア銅矛、ヒスイ製の勾玉などが出土している。その後、同じ地区で3回行われた調査でも、弥生時代中期と後期の竪穴住居跡・甕棺墓・土坑などが確認されている。

護藤遺跡群は白藤遺跡群の西側に位置し、出土する遺物は白藤遺跡群と同様と考えられる。水路工事に伴い多量の遺物が採取されたが、弥生時代中期の須玖式土器や黒髪式土器が多く含まれており、「朝鮮系無文土器」も確認されている。また、磨製石包丁・磨製石剣・柱状石斧・打製石鏃などの石器も出土している。土層観察から竪穴住居跡、溝などの遺構が確認され、中には、環濠とも考えられる溝状遺構もある。遺物の内容や遺構密度の高さから、弥生時代中期の拠点的な集落と想定され、その後の各時代においても遺跡が重複している可能性を示している。

八ノ坪遺跡では、平成16年に熊本市教育委員会が調査を行い、弥生時代の竪穴住居跡、甕棺墓、土壙墓、土坑などが検出されている。26体の人骨が出土し、その埋葬跡は、弥生時代前期末から中期初頭のものである。小銅鐸のほぼ完全な鋳型と銅戈の鋳型や朝鮮系無文土器も出土している。

対岸の白川右岸には、蓮台寺町に道城方遺跡と南新宮遺跡、八島町に八島町遺跡がある。

道城方遺跡は、配水溝工事の際に、弥生時代後期の土器や土師器が多量に出土した。溝の断面から竪穴住居跡の痕跡が確認されている。

南神宮遺跡は、道城方遺跡の東側に位置する。やはり、弥生時代後期の土器や土師器が多量に出土しており、道城方遺跡と一連の遺跡と考えられる。

八島町遺跡は、平成15年度、熊本県教育庁文化課が調査し、多数の竪穴住居跡群・土坑・溝状遺構が確認されている。弥生時代の後期の集落が存在したと考えられ、大量の弥生土器と共に青銅製の鏡2点が出土している。

弥生時代以降の発掘例としては、次のものが挙げられる。

白藤遺跡群の倉小路箱式石棺では、昭和39年に、安山岩の板石を用いた古墳時代の箱式石棺が出土している。

同じ白藤町遺跡群の田宮石棺でも、以前から古墳時代の箱式石棺の存在が知られていたが、平成4～5年の熊本市教育委員会が行った調査で、1基と思われていた箱式石棺が2基あり、その周囲に溝が確認されたことから、方形周溝墓というが想定がなされている。

平成9年～10年の弥生時代中期の甕棺墓が248基確認された熊本市教育委員会の鳶町での調査では、古墳時代の周溝墓群8基と木棺墓・土壙墓・石棺墓群9基が確認されている。この調査では、中世の土坑に溝を付設した遺構が150基余り確認されており、当時の条里制を窺う手がかりと考えられる。

平成9年の熊本県初の弥生時代青銅器鋳型が発見された熊本市教育委員会の島町での調査では、多数の井戸・土坑が検出され、ウシやウマの動物遺体が出土している。

白藤遺跡群の屋敷遺跡では、土師器・須恵器、青磁・白磁の破片と共に、平安時代の和鏡（瑞花双鳥文八稜鏡　直径11.1cm）が出土している。

【参考文献】

「飽田町誌」 1972年 飽田町役場

「新熊本市史　資料編第1巻　考古資料」 1996年 熊本市

「新熊本市史　通史編第1巻　自然原始・古代」 1998年 熊本市

「新熊本市史　通史編第1巻　中世」 1998年 熊本市

「熊本市埋蔵文化財調査年報　第1号　－昭和63年度～平成3年度－」 1995年 熊本市教育委員会

「熊本市埋蔵文化財調査年報　第2号　－平成4年度～平成8年度－」 1999年 熊本市教育委員会

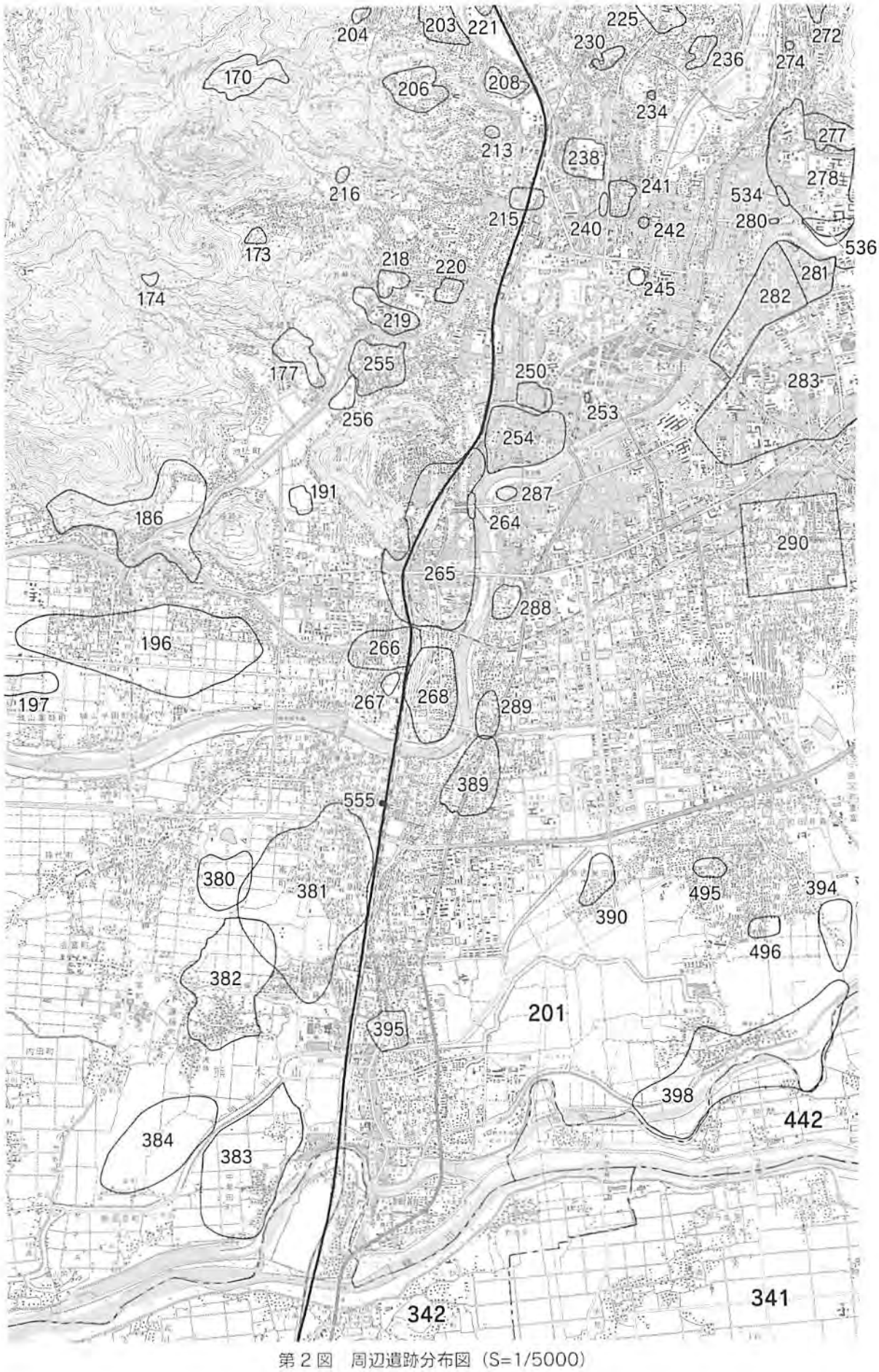
「熊本市埋蔵文化財調査年報　第3号　－平成9年度～平成10年度－」 2000年 熊本市教育委員会

「熊本市埋蔵文化財調査年報　第4号　－平成11年度－」 2001年 熊本市教育委員会

「熊本市埋蔵文化財調査年報　第5号　－平成12年度～平成13年度－」 2003年 熊本市教育委員会

「熊本市埋蔵文化財調査年報　第6号　－平成14年度－」 2004年 熊本市教育委員会

「熊本市埋蔵文化財調査年報　第7号　－平成15年度－」 2005年 熊本市教育委員会



第２図　周辺遺跡分布図（S=1/5000）

第１表　周辺遺跡一覧表

遺跡番号	遺跡名	所在地	時　代	種別	旧遺跡名	備　考
201-170	馬ノ水	花園町	縄文・弥生	包蔵地		縄文晩期、弥生櫛描波状文・重弧文
201-173	荒尾南	島崎町	縄文～中世	包蔵地		
201-174	西大谷	谷尾崎町	縄文～中世	包蔵地		
201-177	野添平	池上町野添平	縄文～中世	包蔵地		県では野添遺跡
201-186	高橋町遺跡群	高橋町	古墳～平安	包蔵地	高坊古墳・皆城古墳群・二本松古墳群 小松山古墳群・烏帽子山古墳・章八郎古墳 高橋窯跡・上高橋堂園遺跡・上高橋高田遺跡 築打遺跡・高橋貝塚・高橋南貝塚・宮山古墳 聖徳寺跡・烏帽子山遺跡・上高橋遺跡 高坊遺跡・浦田坂遺跡・放牛阿弥陀像	
201-191	清水原	池上町	縄文～中世	包蔵地		
201-196	上代町遺跡群	城山上代町	縄文～平安	包蔵地	上代町遺跡・下代町遺跡・中代遺跡・お徳・徳兵衛古墳	弥生前期土器
201-197	城山薬師	城山薬師町	縄文～平安	包蔵地		
201-203	柿原遺跡群	花園町柿原字柿原	縄文～中世	包蔵地	柿原城跡・柿原甕棺群遺跡・柿原城の原六地蔵	柿原城壁子木寝心居城
201-204	柿原馬の木	花園町	縄文～中世	包蔵地		
201-206	経塚遺跡群	花園町柿原字経塚	弥生・古墳	包蔵地	経塚古墳群２基・柿原美女尻甕棺遺跡・中尾遺跡	巨石墳須恵器多数、合口須玖式
201-208	池亀	池亀町	弥生	包蔵地	池亀の放牛地蔵・六地蔵・池亀八幡境内板碑	板碑阿弥陀三尊、地蔵
201-213	井芹	花園町５丁目	弥生	包蔵地		黒髪式・須玖式甕棺多数
201-215	牧崎	花園町１丁目	弥生	包蔵地		甕棺14基以上
201-216	小山田	島崎町	縄文～中世	包蔵地		
201-218	石神原	島崎町３丁目	弥生～平安	包蔵地	宇佐公光墓・島崎城跡	
201-219	千原台遺跡群	島崎町３丁目　他	縄文～平安	包蔵地	千原台遺跡・城西小学校敷地内遺跡・消防学校遺跡・放牛の墓	
201-220	迎田	島崎町	縄文～平安	包蔵地		
201-221	北島遺跡群	池田町４丁目	弥生～中世	包蔵地	北島城跡・北島城跡周辺土器散布地	
201-225	池田山伏塚遺跡群	池田２丁目、清水町高平	弥生・古墳	包蔵地	山伏塚Ａ～Ｃ遺跡・長迫古墳・電通学園石棺 長迫遺跡	電通石棺箱式珠文鏡、 長迫横穴式石室
201-230	池田町(池田小学校)	池田町１丁目	弥生～平安	包蔵地		池田小学校庭甕棺群
201-234	舟場	清水町津浦	縄文～中世	包蔵地		
201-236	打越遺跡群	清水町打越	弥生・中世	包蔵地	打越城跡・打越甕棺遺跡	
201-238	京町台遺跡群	京町	弥生～中世	包蔵地	伝赤尾丸城跡・熊本営林局構内弥生式土器出土地・静慶庵跡	
201-240	京町２丁目	京町２丁目	縄文～近世	包蔵地		
201-241	伝大道寺遺跡群	京町２丁目	縄文～近世	包蔵地		伝大道寺跡を含む
201-242	内坪井	内坪井町	弥生	包蔵地		
201-245	藤陵中学校校庭	千葉城町	弥生～平安	包蔵地		甕棺群あり
201-250	船場町	新町２丁目、鍛冶屋町	弥生	包蔵地	新町2丁目甕棺	甕棺群
201-253	辛島町	辛島町	弥生・古墳	包蔵地		
201-254	古町(旧唐人町)	唐人町、古町　他	弥生～明治	包蔵地	令永寺跡・勤院松林寺跡・本覚寺福聚山多聞院跡 護国寺常住院跡・聖山寺跡・古往生院跡・明十橋際遺跡	
201-255	戸坂	戸坂町	弥生～平安	包蔵地	戸坂五輪塔群	甕棺群
201-256	戸坂御田尻	戸坂町	縄文～中世	包蔵地		
201-264	石塘(白川橋)	二本木１・２丁目	弥生～中世	建造物		
201-265	二本木遺跡群	二本木１・２丁目 他	弥生～中世	包蔵地	二本木国府跡及び関連遺跡・春日町遺跡・田崎本町遺跡・古町小学校校庭遺跡・延命寺塔心礎	二本木国府推定地
201-266	八島町	八島町	弥生	包蔵地		
201-267	道城方	蓮台寺町道城方	弥生・古代	包蔵地		
201-268	南新宮	蓮台寺町南新宮	弥生～中世	包蔵地		
201-272	松崎遺跡群	清水町松崎	弥生～平安	包蔵地	松崎甕棺遺跡・松崎中世遺跡・松崎菊山天神跡	

遺跡番号	遺跡名	所在地	時　代	種別	旧遺跡名	備　考
201-274	室園	清水町室園	縄文～中世	包蔵地		
201-277	小峰	黒髪町小峰	縄文～平安	包蔵地	金光山無相寺跡	
201-278	黒髪町遺跡群	黒髪町坪井	縄文～中世	包蔵地	黒髪町遺跡(済々黌高校敷地)・九州女学院遺跡 坪井古屋敷出土の甕棺	一帯に甕棺墓群
201-280	子飼	子飼町	縄文～中世	包蔵地		
201-281	大江白川	大江１丁目	縄文～平安	包蔵地	旧往生院跡・善行寺の板碑・放牛地蔵	甕棺
201-282	新屋敷	新屋敷町	弥生～中世	包蔵地		弥生環濠、弥生土器、輸入陶磁器
201-283	大江遺跡群	大江３丁目	縄文～明治	包蔵地	大江遺跡・大江青葉遺跡・大江東原遺跡 白川中学校校庭遺跡・渡鹿旧電電波高校遺跡 熊高敷地遺跡・熊高通り遺跡・杉ノ本遺跡・託麻郡家推定地・渡鹿廃寺・熊本英学校跡・建設会館遺跡　他	
201-287	本山城跡 (本庄城跡)	本山町城の本	弥生～中世	包蔵地		元弘年間に詫麻宗直
201-288	世安池田	世安町池田	弥生～中世	包蔵地		輸入陶磁器など
201-289	平田町	平田１丁目	弥生～平安	包蔵地		甕棺群
201-290	出水国府跡	九品寺、国府、国府本町	弥生～中世	包蔵地		
201-380	古護藤	八分字町	弥生～中世	包蔵地	須玖式甕棺	
201-381	白藤遺跡群	島町、白藤町　他	弥生～中世	包蔵地	倉小路箱式石棺・倉小路甕棺遺跡・屋敷遺跡 今村遺跡・刈草遺跡・倉町遺跡	白藤遺跡青銅器鋳型、 ミニチュア青銅矛
201-382	護藤	護藤町	古墳～中世	包蔵地	戸崎Ｂ(馬場)遺跡を含む	
201-383	中無田遺跡群	護藤町	弥生・中世	包蔵地	戸崎Ａ遺跡を含む	輸入陶磁器(青磁)多数
201-384	八ノ坪	護藤町	弥生・古墳	包蔵地		
201-389	近見	近見町	縄文～中世	包蔵地		
201-390	西無田	御幸西無田町	弥生～平安	包蔵地		甕棺、石包丁
201-394	良町二石	田迎町	弥生・古墳	包蔵地		弥生前期土器出土
201-395	南高江西馬出	南高江町	弥生～中世	包蔵地		
201-398	御幸木部遺跡群	御幸木部町	弥生～中世	包蔵地	御幸木部遺跡・木部箱式石棺・阿弥陀来迎図像・芥川守拙観音図像線刻板碑	地蔵文明７、阿弥陀天文２、観音寛政６
201-495	御幸笛田神社	御幸笛田町	弥生～中世	包蔵地		
201-496	良町	田迎町良町	弥生	包蔵地		
201-534	七軒町	七軒町	縄文～中世	包蔵地		
201-536	上河原	黒髪町	縄文～古代	包蔵地		
201-555	上の郷遺跡	島町	弥生～古代	包蔵地		甕棺墓12基

※　周辺主要遺跡分布図及び周辺遺跡地名表については、平成10年発行の「熊本県遺跡地図」(熊本県教育委員会)と同様の番号を付した。
市町村コードにあたる３桁の数字に対応する市町村は以下の通りである。　201…熊本市　341…城南町　342…富合町　442…嘉島町

第Ⅲ章　調査の概要

第１節　調査の方法

調査区は耕作地と宅地跡であり、土地の取得状況から、当初はⅠ・Ⅱ・Ⅲ区の３つの区に分けて調査を行う予定としたが、条件整備ができ、Ⅱ・Ⅲ区は同時期に調査を開始した。

実測図作成のために、国土座標に基づく点を基準に5m四方のグリッドを設定し、東西にA～H、南北に１～31の番号を振り分け、遺構の場所を示す基準とした。

調査Ⅰ区では、重機で50cm程度掘り下げ、耕作土と思われるⅠ層の暗褐色土のみを除去した。Ⅱ層の暗赤褐色土から遺物が多量に検出されたこと、古代以降の条里制に伴う遺構の検出ためである。手作業による清掃をし、遺構検出を行っていったが、後世の掘削により、古代以降の条里制に伴う遺構は確認できなかった。遺物を取り上げながら、手作業でⅡ層を掘り下げ、Ⅲ層に達したが、そこでも遺構は確認できなかった。

調査Ⅱ・Ⅲ区では、調査Ⅰ区での反省から、重機で80cm程度掘り下げ、Ⅰ・Ⅱ層を除去すると共に、両側に深い溝を切ることにした。手作業による清掃で、Ⅲ層の一部に古代の土坑やピットを検出できたが、その他の部分は遺構が確認できなかった。

Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ区とも遺物を取り上げながら、手作業により掘り下げを行っていったが、Ⅲ層・Ⅳ層共に黒褐色土であり、湧水があるために、Ⅳ層で遺構検出を行った。

遺構には、甕棺墓、竪穴住居跡、土坑、土壙墓、溝状遺構、ピットなどがあった。

甕棺墓は、遺構の平面形を確認し、半分を掘り下げ、土層の堆積状況を確認し、写真撮影をし、平面図の一部と土層断面図を作成した。次に、甕棺を出土させ、写真撮影と出土状況の実測を行った。その後、甕棺の上部を取り上げ、甕棺内部の土層と残存する人骨の写真撮影をし、実測を行った。甕棺の下部を実測後、甕棺を取り上げ、完掘させて、完掘写真を撮影し、平面図を完成させた。

竪穴住居跡は、清掃後、遺構のプラン、切り合い等を確認し、遺構の形に合わせて、縦及び横方向にベルトを設定し、発掘を進めた。ベルトで堆積土層を確認し、写真撮影を行い、平面の一部と土層断面図を作成した。ベルト撤去後、遺物の写真撮影と実測をし、遺物を取り上げ、炉跡と柱穴を確認して掘り下げて、平面図を完成させ、完掘写真を撮影した。

土坑や土壙墓も、竪穴住居跡とほぼ同じ調査を進め、遺物の取り上げ後、平面図を完成させ、完掘写真を撮影した。

溝状遺構では、清掃後、遺構の平面形を確認し、土層の堆積状況を確認するためにベルトを数カ所残し、発掘を進めた。その後に土層状況を確認し、写真撮影を行い、平面図の一部と土層断面図を作成した。ベルト撤去後、遺物の写真撮影と実測をし、取り上げて、平面図を完成させ、完掘写真を撮影した。

ピットは、遺構の平面形を確認し、半分を掘り下げ、土層状況を確認した後、完掘させた。写真撮影は、グリッドごとの完掘写真に収めた。

写真はモノクロとカラースライドの２種類を用いて、35mmまたは中版で撮影した。また、調査の最終段階では空中撮影を行った。

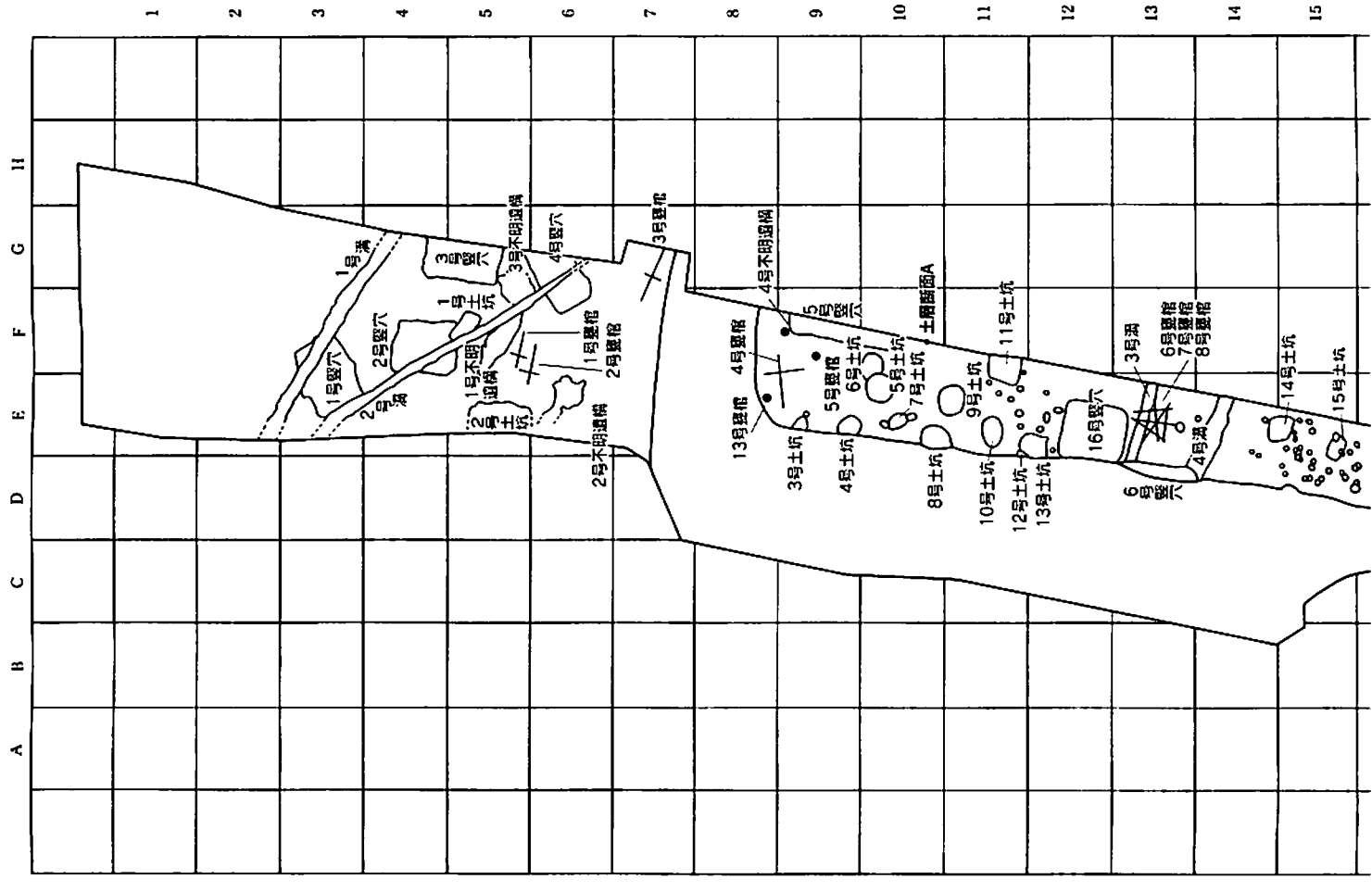
第２節　層位と包含層

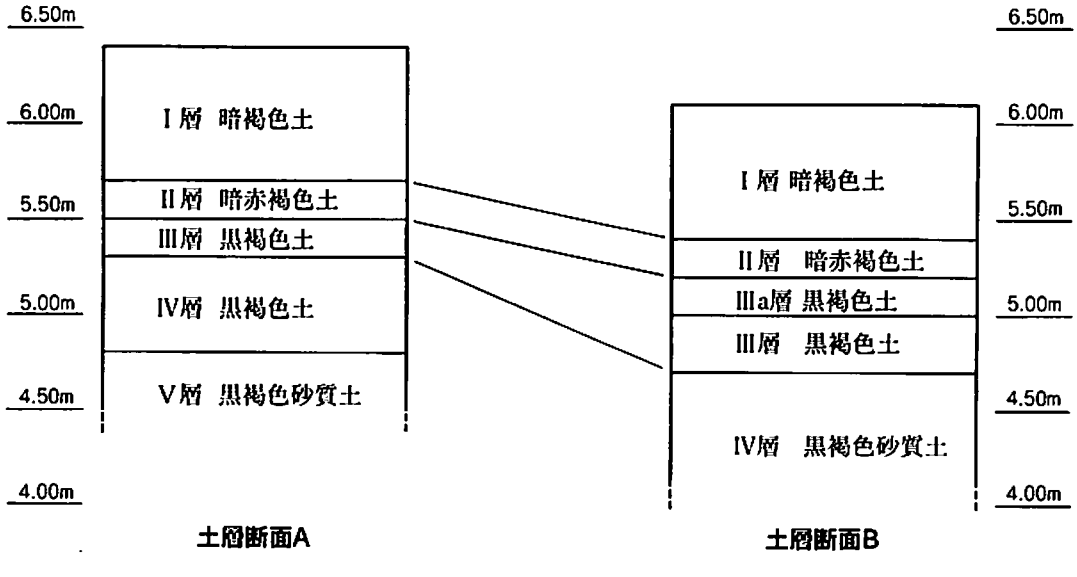
本遺跡の基本的な土層は以下のとおりである。

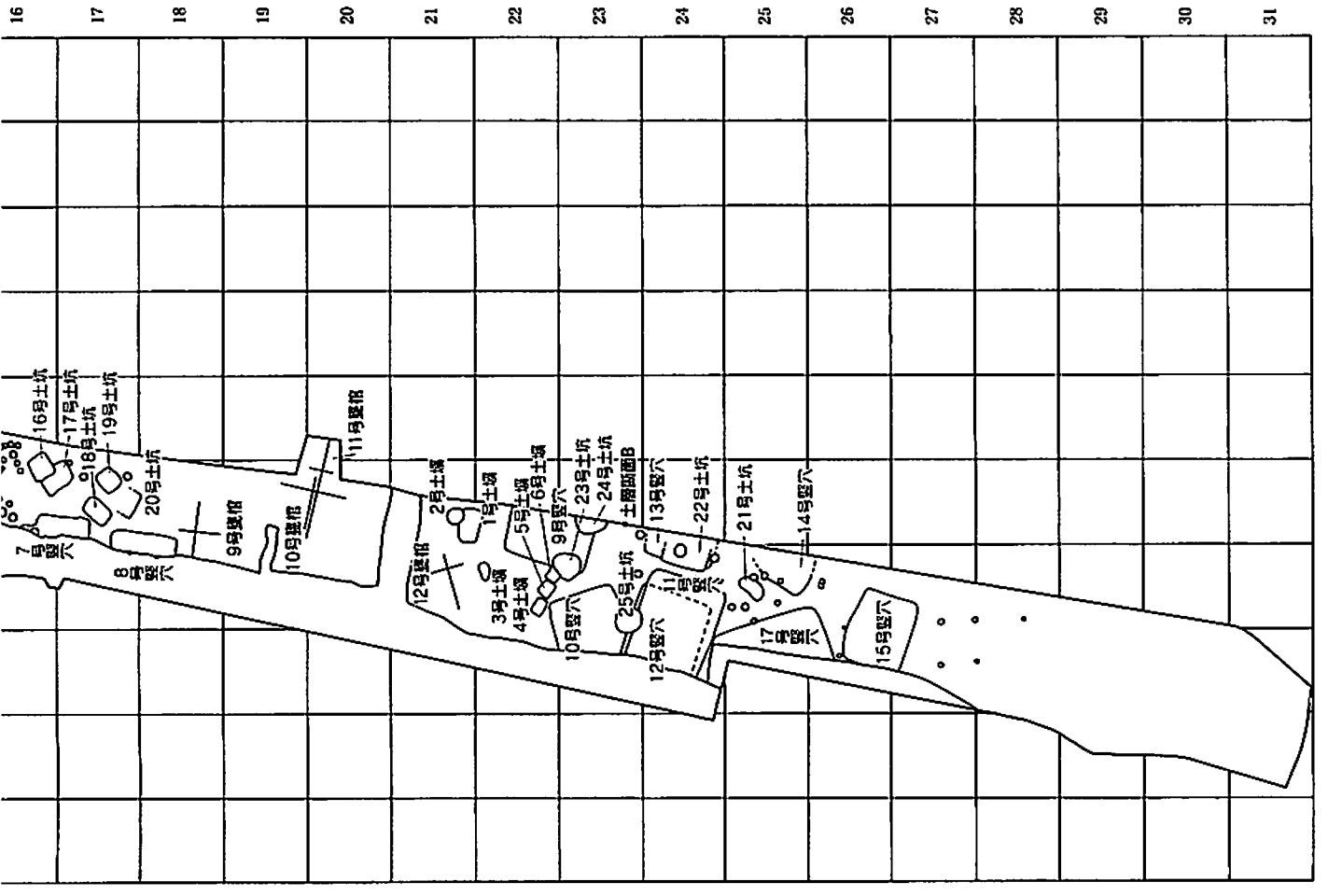
・　Ⅰ層…暗褐色土（10YR 3/4）しまりかなり強い。粘質やや強い。
　　表土及び耕作土。50 ～ 80cm 程度。
・　Ⅱ層…暗赤褐色土（5YR 3/2）しまり強い。粘質非常に弱い。
　　旧耕作土。20cm 程度。弥生時代と古代の遺物を含む。
・　Ⅲａ層…黒褐色土（10YR 3/3）しまりやや強い。粘質やや弱い。
　　20cm 程度。弥生時代と古代の遺物を含む。
　　調査区の南側に現れる。
・　Ⅲ層…黒褐色土（7.5YR 3/2）しまりやや弱い。粘質やや強い。
　　20 ～ 30cm 程度。弥生時代と古代の遺物を含む。
　　Ⅲａ層が出現する辺りに古代の遺構あり。
・　Ⅳ層…黒褐色土（7.5YR 2/2）しまりやや弱い。粘質やや強い。
　　50 ～ 60cm 程度。弥生時代の遺構あり。
・　Ⅴ層…黒褐色砂質土（7.5YR 3/2）しまり弱い。

調査区は南側に行くにつれ緩やかに傾斜しており、Ⅲａ層が出現する辺りから急激に下がり始める。

第 Ⅳ 章　調 査 の 結 果


1
2
3
4
5
6
7
8
9
10
11
12
13
14
15
H
G
F
E
D
C
B
A
1号溝
2号溝
3号溝
4号溝
1号竪穴
2号竪穴
3号竪穴
4号竪穴
5号竪穴
6号竪穴
1号土坑
2号土坑
3号土坑
4号土坑
5号土坑
6号土坑
7号土坑
8号土坑
9号土坑
10号土坑
11号土坑
12号土坑
13号土坑
14号土坑
15号土坑
1号不明遺構
2号不明遺構
3号不明遺構
4号不明遺構
1号墓壙
2号墓壙
3号墓壙
4号墓壙
5号墓壙
6号墓壙
7号墓壙
8号墓壙
13号墓壙
土層断面A


6.50m
6.00m
5.50m
5.00m
4.50m
4.00m
Ⅰ層 暗褐色土
Ⅱ層 暗赤褐色土
Ⅲ層 黒褐色土
Ⅳ層 黒褐色土
Ⅴ層 黒褐色砂質土
土層断面A
Ⅰ層 暗褐色土
Ⅱ層 暗赤褐色土
Ⅲa層 黒褐色土
Ⅲ層 黒褐色土
Ⅳ層 黒褐色砂質土
土層断面B

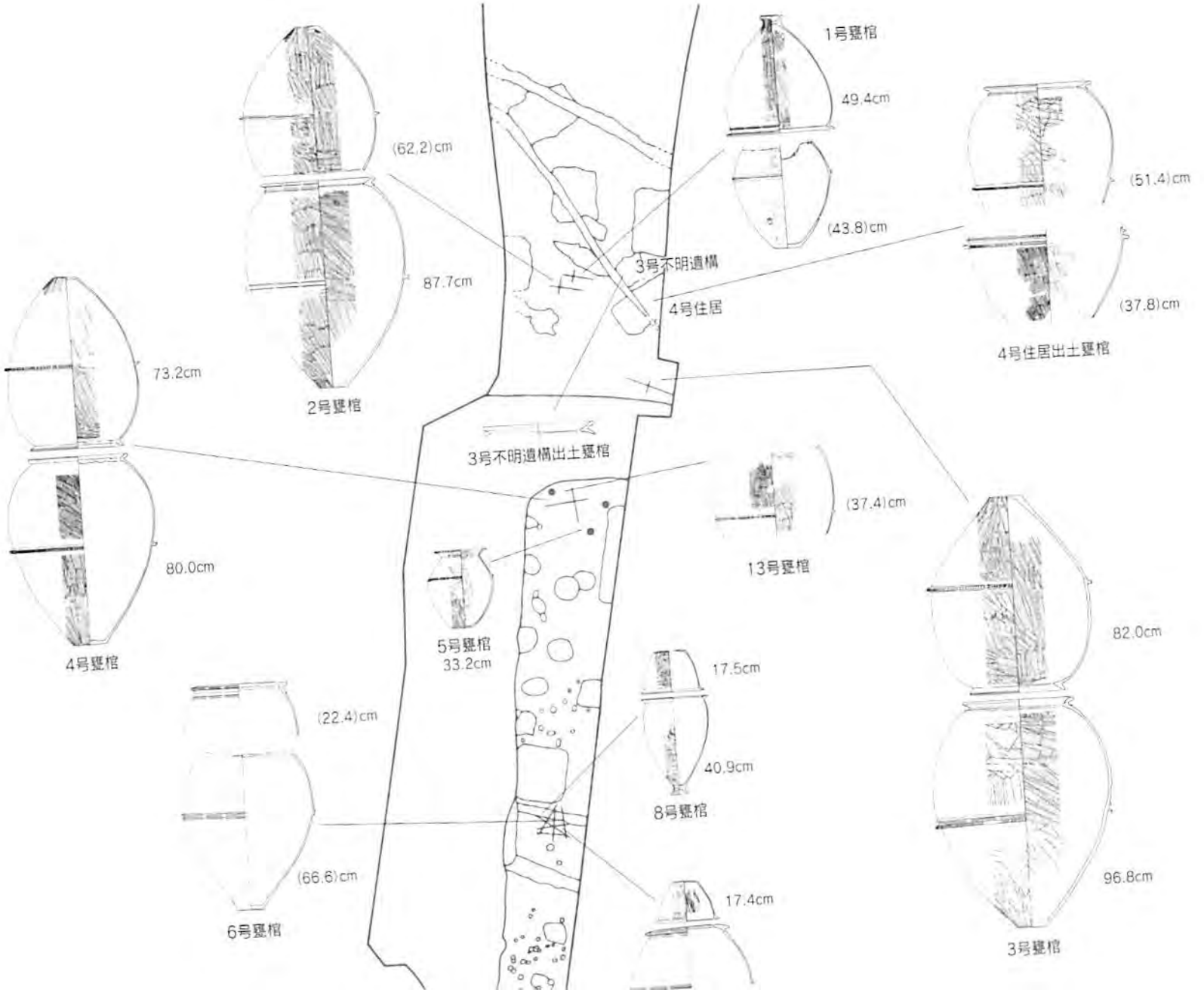


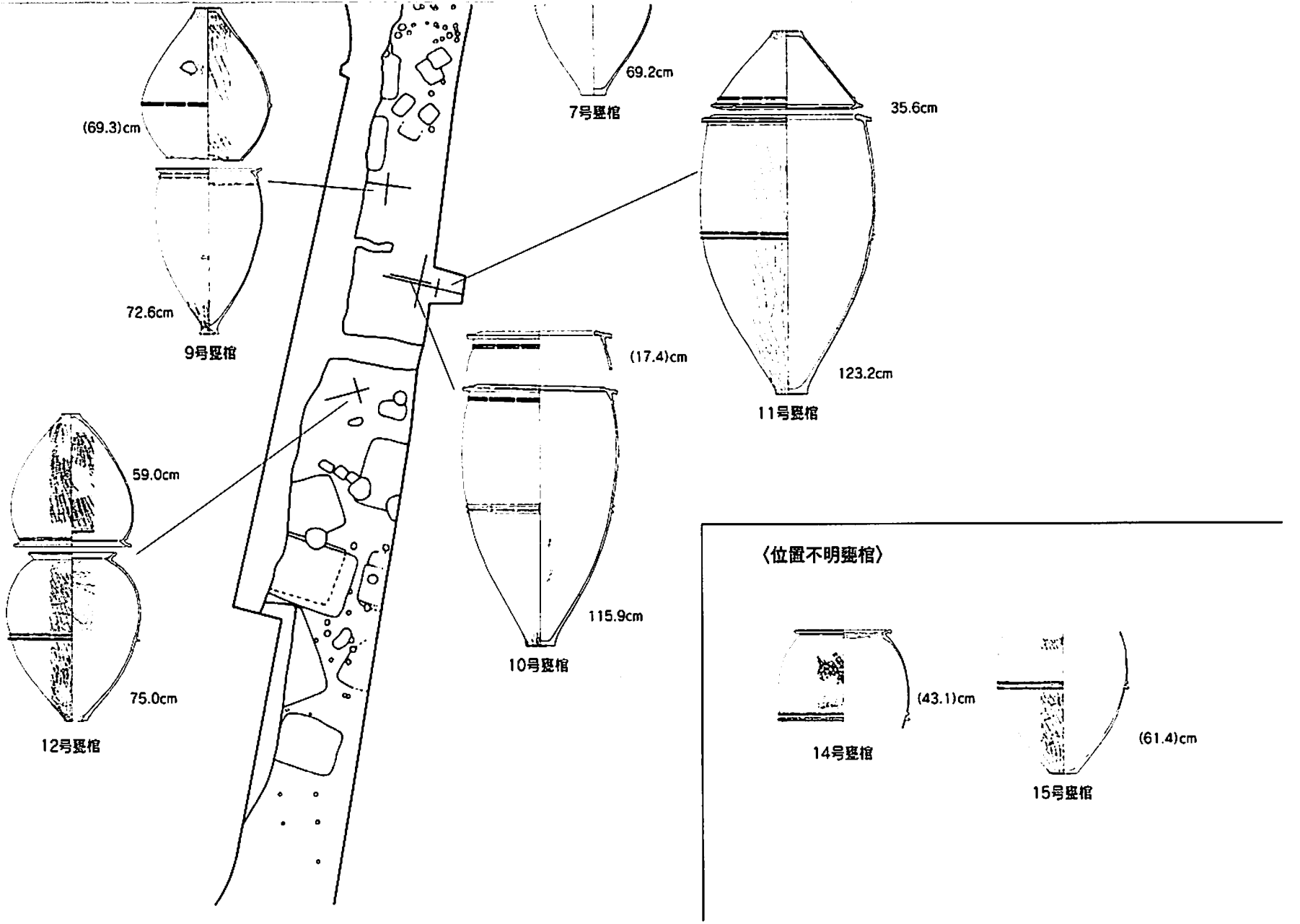
第３図　遺構配置図・土層図（S=1/400）

E～H-１～６…Ⅰ区

B～G-７～20…Ⅱ区

A～D-21～23…Ⅲ区


1号甕棺
49.4cm
(43.8)cm
(62.2)cm
87.7cm
2号甕棺
3号不明遺構
4号住居
(51.4)cm
(37.8)cm
4号住居出土甕棺
73.2cm
80.0cm
4号甕棺
3号不明遺構出土甕棺
(37.4)cm
13号甕棺
5号甕棺
33.2cm
17.5cm
40.9cm
8号甕棺
82.0cm
(22.4)cm
(66.6)cm
6号甕棺
17.4cm
96.8cm
3号甕棺


(69.3)cm
72.6cm
9号甕棺
69.2cm
7号甕棺
35.6cm
123.2cm
11号甕棺
(17.4)cm
115.9cm
10号甕棺
59.0cm
75.0cm
12号甕棺
〈位置不明甕棺〉
(43.1)cm
14号甕棺
(61.4)cm
15号甕棺

第4図　甕棺分布図

第IV章　調査の結果

第1節　はじめに

本調査区は、新幹線本線建設地であり、南北に150m程度、東西に幅12mと細長い範囲であった。調査区の北側15m程度は水害の影響で、南側20m程度は急激な落ち込みにより、遺構及び遺物等は確認できなかった。さらに、調査区の西側には、用水路と思われる近代の溝で切られていることもあり、東西方向に範囲がさらに狭くなり、住居跡等の正確な形状をつかむことが難しかった。

それ以上に調査を悩ませたのが、雨と湧水であった。第I章の第3節「調査の経過」にも書いたが、調査を行った平成15年は、5月から8月にかけて異常とも思えるほどの長雨が続いた。また、上ノ郷遺跡は白川左岸流域にあり、標高が5m程度にあるために、湧水の量が非常に多かった。水没、水抜きを繰り返す日が続き、調査を進めるために、仕方なく東西両側に水抜き溝を切ったが、それでも、遺構の中に水が湧き出すこともあった。そのために、床面の柱穴や硬化面等を正確に確認することが難しかった。

この調査が行われるまで、ここは宅地と畑地に利用されていた。昭和時代に重機で掘削されたと思われる爪痕が数多く残っており、残念ながら、平野条里に関する遺構は確認できなかった。

今回の調査で確認された遺構は、甕棺墓12基、竪穴住居跡17軒、土壙墓6基、土坑25基、溝状遺構4条、不明遺構4基、合計68基である。遺構検出面は、調査III区の一部で、III層に古代の土坑3基（23号土坑、24号土坑、25号土坑）を確認したのを除き、IV層で遺構を検出した。時期的には、弥生時代の遺構がほとんどであり、その形状と出土遺物から、古墳時代以降の竪穴住居跡は、16号竪穴住居跡、17号竪穴住居跡の2軒である。

上記の遺構の他にピットを多数検出したが、範囲が狭く、近代の掘削を受けているために、掘立柱建物跡に伴うと判断するピットは確認できなかった。また、出土遺物もほとんどなかったため、時期が特定されず、他の遺構との関連性を明確にできないと判断したので、ピットについては取り扱わないこととした。

第2節　甕棺墓と甕棺

(1) 甕棺墓

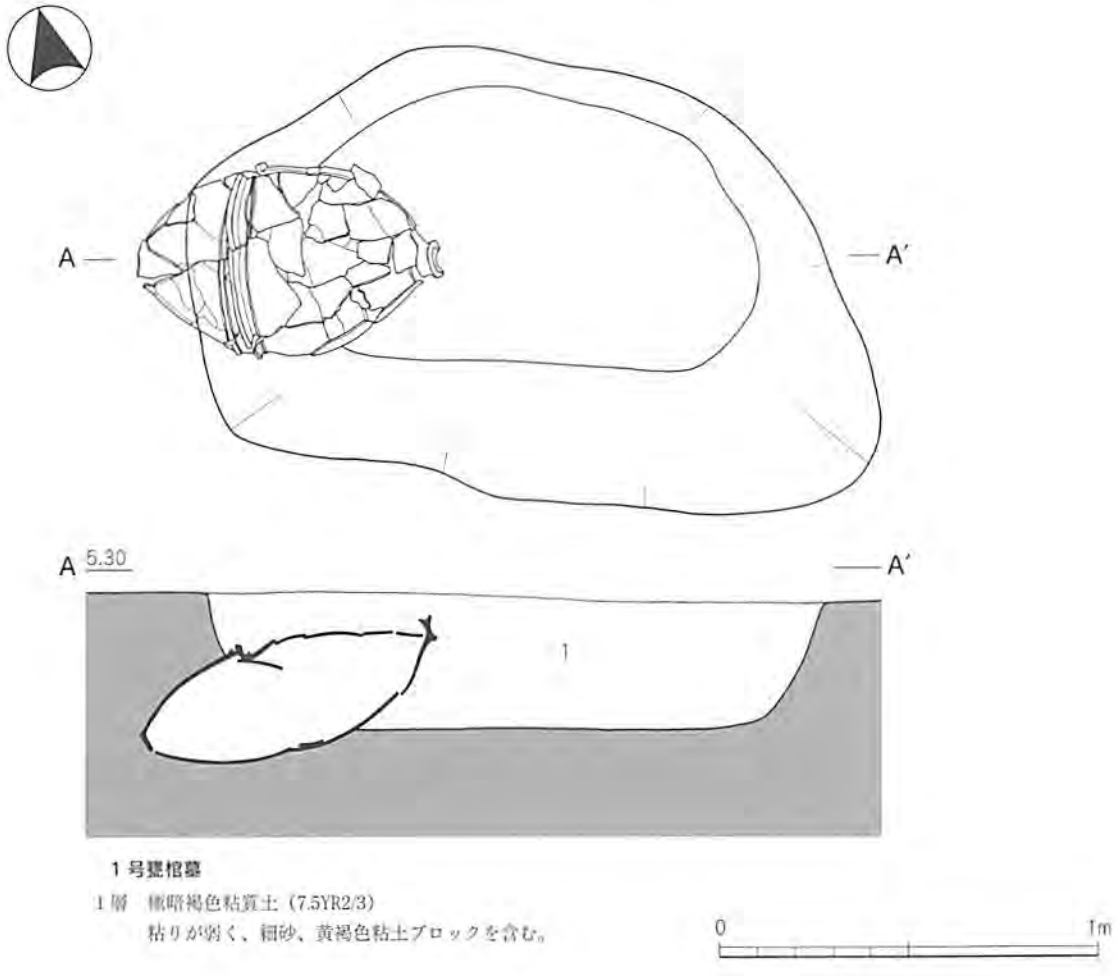
1号甕棺墓

I区のF-5グリッドに位置する。墓壙は長軸1.71m、短軸1.16mの不定形な楕円形をしており、墓壙深は35cmであった。さらに西側に横穴壙56cm、横穴深10cm程度の横穴を掘り、下甕を埋置してあった。埋置方位は、N-75°-Wであり、埋置角度は22°であった。西側の下甕が少し小さく、口縁部には打ち欠きがあり、東側の上甕が下甕を覆うように接していた。下甕から骨粉らしきものが出土している。副葬品は出土していない。

2号甕棺墓

I区のE・F-5・6グリッドに位置する。墓壙は長軸1.90m、短軸1.28mの不定形な隅丸長方形をしており、墓壙深は42cmであった。さらにやや西側に横穴壙170cm、横穴深40cmの横穴を階段状に掘り、甕を埋置してあった。埋置方位は、N-78°-Wであり、埋置角度は29°であった。東側の上甕がやや小さく、口縁部に打ち欠きがあり、西側の下甕が呑み込むように接していた。下甕から人骨が出土している。副葬品は出土していない。

1号甕棺墓のすぐ隣であり、甕棺の埋置方位がほぼ同じであることから、何らかの関係（例えば、親子などの関係）にあることも考えられる。



第５図　１号甕棺墓実測図

３号甕棺墓

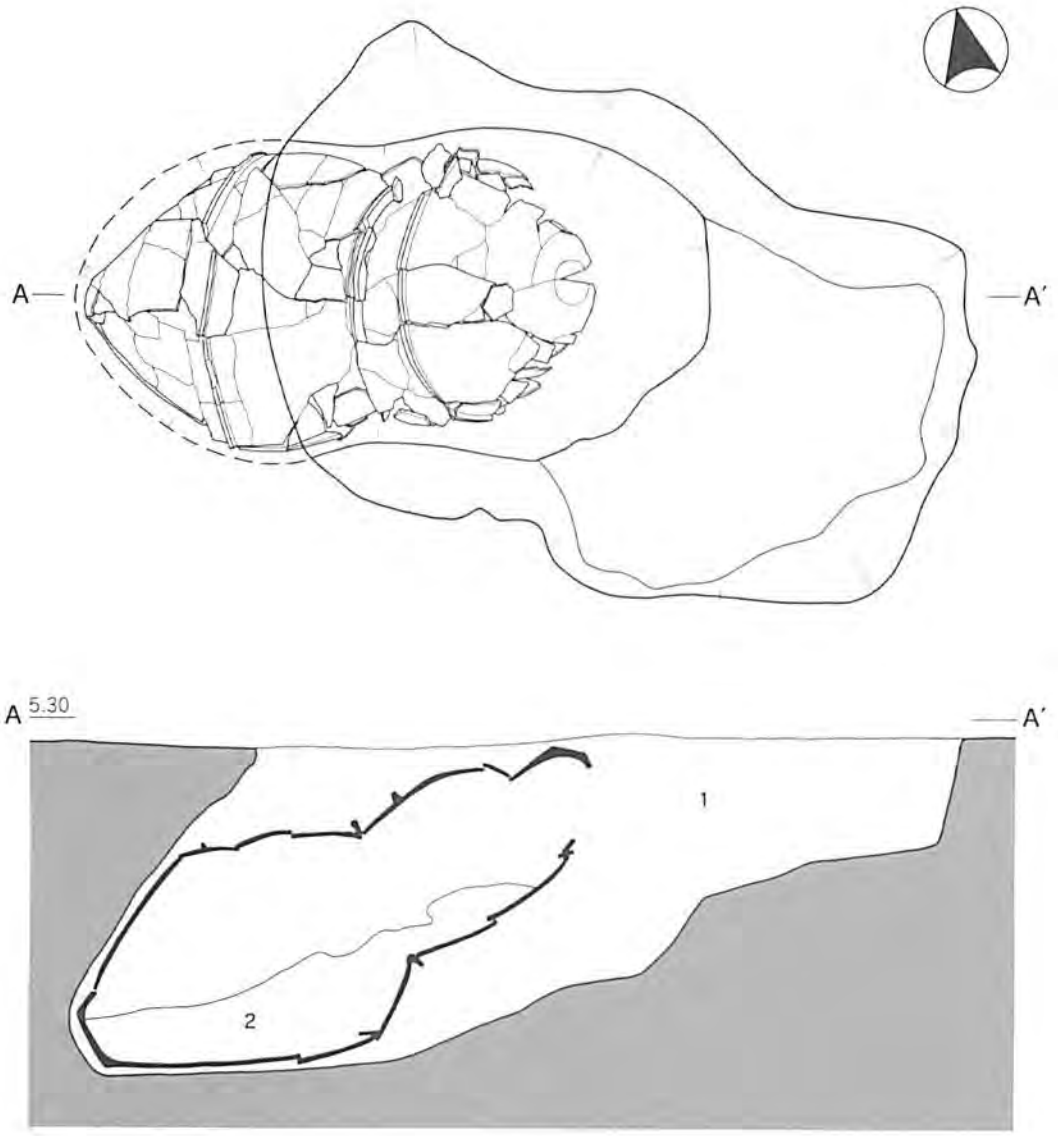
Ⅱ区のF･G-7グリッドに位置する。ここは、排水のための水抜き溝と調査区の西側を流れる近代溝が東へ大きく屈曲し重なる部分であり、常に湧水がある状況の中で、西側の甕棺を検出したため、墓壙の状況ははっきりしない。また、東側の甕棺は調査区ののり面から掘り出した。合口甕棺で目貼り粘土があり、西側の甕棺がやや小さい。埋置方位はN-67°-Wであり、ほぼ平行に埋置してあり、東側の甕から人骨が出土している。頭位は東であった。副葬品は出土していない。

４号甕棺墓

Ⅱ区のE･F-7･8グリッドに位置する。墓壙は長軸2.20m、短軸1.26mの隅丸長方形をしており、墓壙深は52cmであった。さらに東側に横穴壙149cm、横穴深16cm程度の横穴を掘り、甕棺が埋置してあった。埋置方位はN-83°-Eであり、ほぼ平行に埋設してあった。西側より東側の甕棺がやや大きく、合口甕棺と思われるが、土圧で口縁部付近が割れており、また、目貼りの粘土も確認できていない。東側の下甕から頭蓋が、西側の上甕からは四肢骨が出土している。頭位は東であった。副葬品は出土していない。

５号甕棺墓

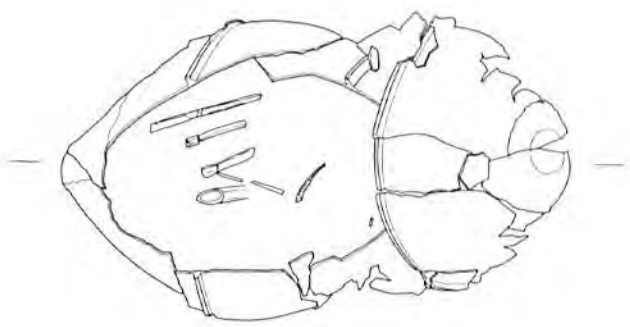
Ⅱ区のF-9グリッドに位置する。墓壙は確認できなかった。埋置方位はN-33°-Wであり、ほぼ平行に単棺の小型甕が埋置してあった。掘削時に中から骨粉らしきものが検出されたので、甕棺とした。副葬品は出土していない。



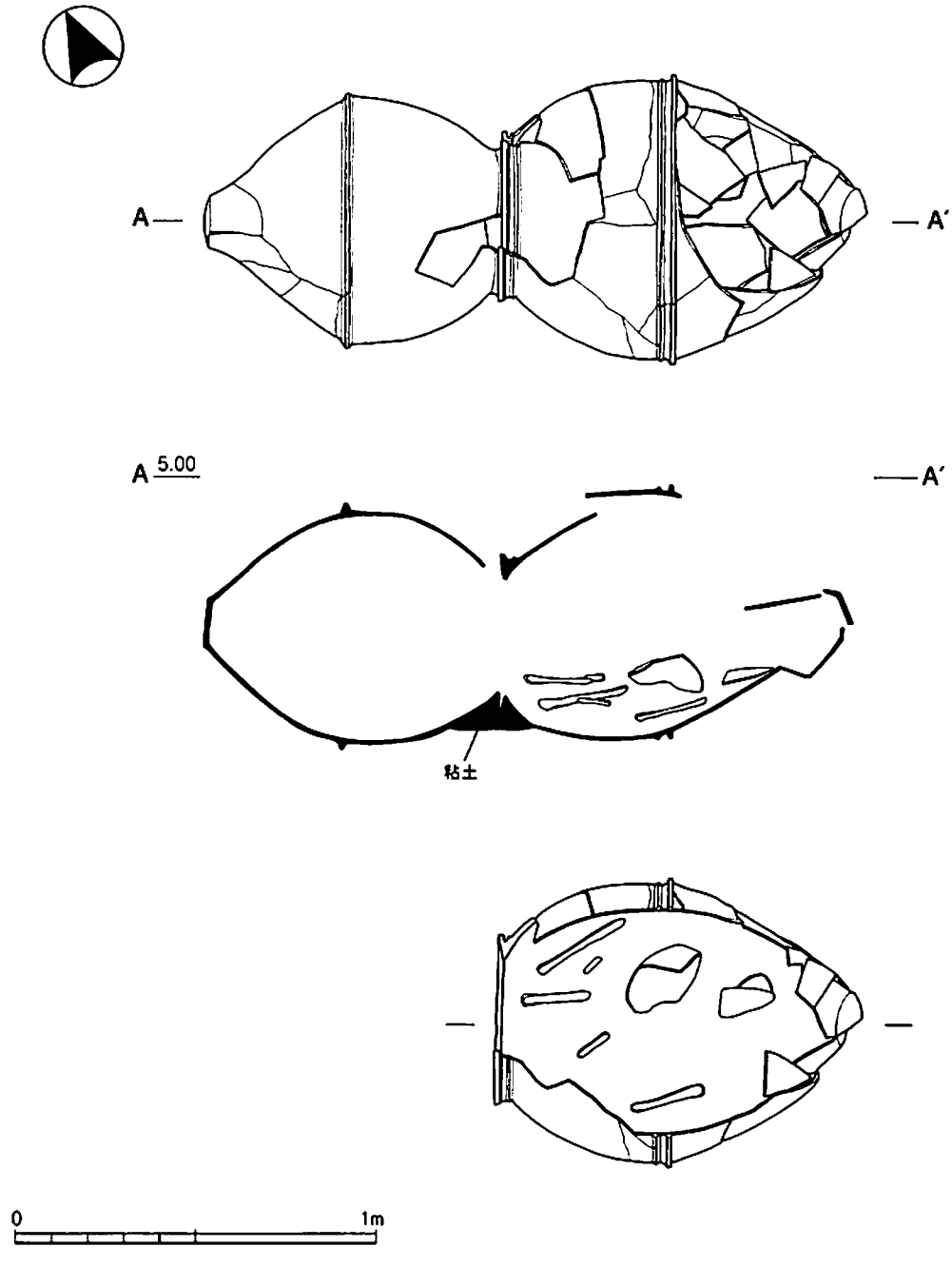
2号甕棺墓

1層　にぶい黄褐色土
Ⅳ層の土がやや混ざり更に粒子の細かな砂が入る。

2層　黒褐色土
少量、目の細かな砂粒子も含まれるが基本的に粘質土でややしまる。埋葬時の土と考えられ人骨片も出土。



第６図　２号甕棺墓実測図



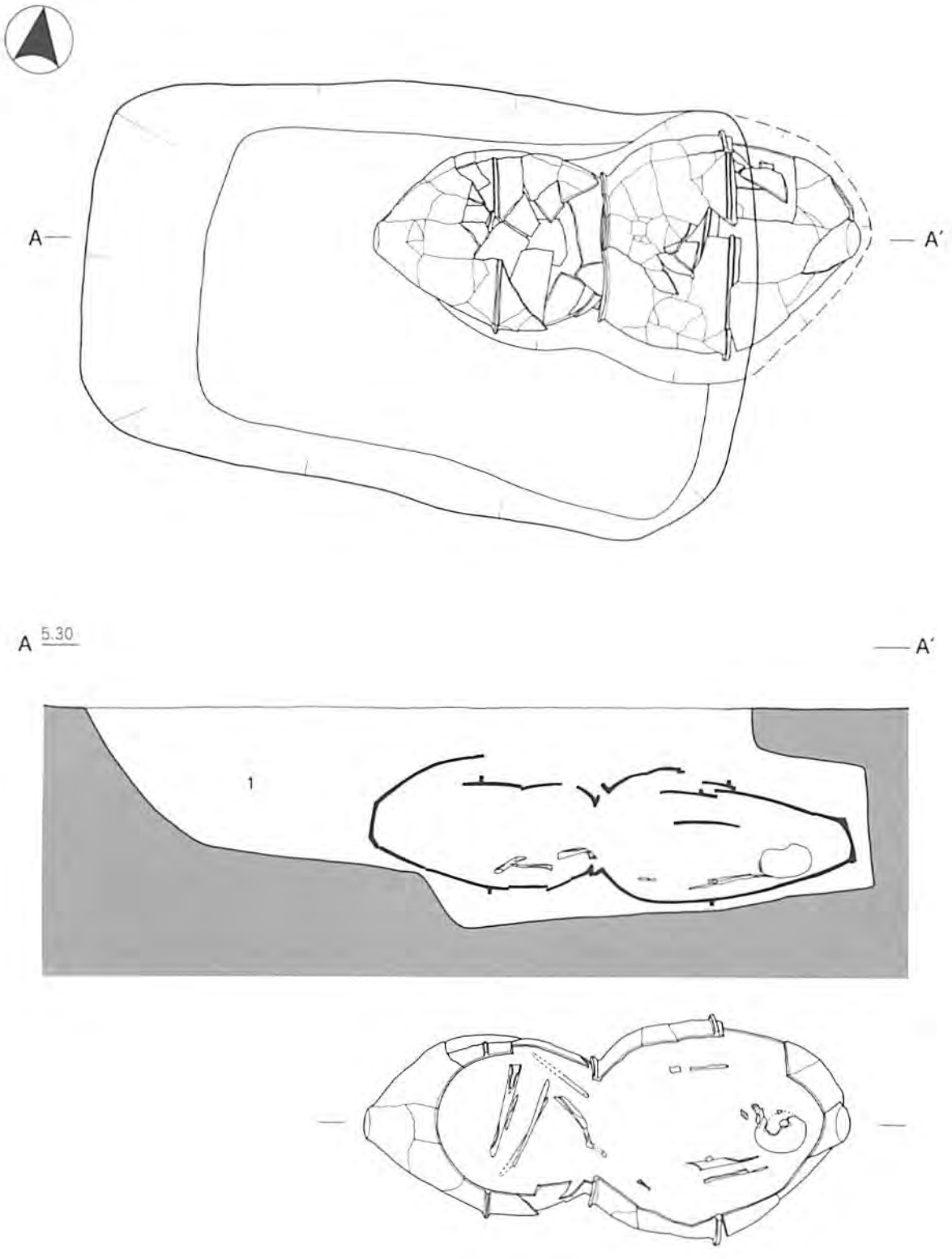
第７図　３号甕棺墓実測図

６号甕棺墓

Ⅱ区のE-13グリッドに位置する。墓壙は、７号甕棺墓と１つに掘られたと思われ、長軸約1.7mと短軸約1.1mのやや不定形な隅丸長方形をしており、墓壙深は約25cm程度と推定される。６号甕棺墓は、その墓壙の南西側に横穴壙96cm、横穴深31cm程度の横穴を掘り、甕棺が埋置してあった。近代の掘削により、下甕のみ検出した。埋置方位はN-84°-Wであり、７号甕棺墓と同じ方位であり、埋置角度は44°であった。下甕の中から人骨が出土している。副葬品は出土していない。

７号甕棺墓

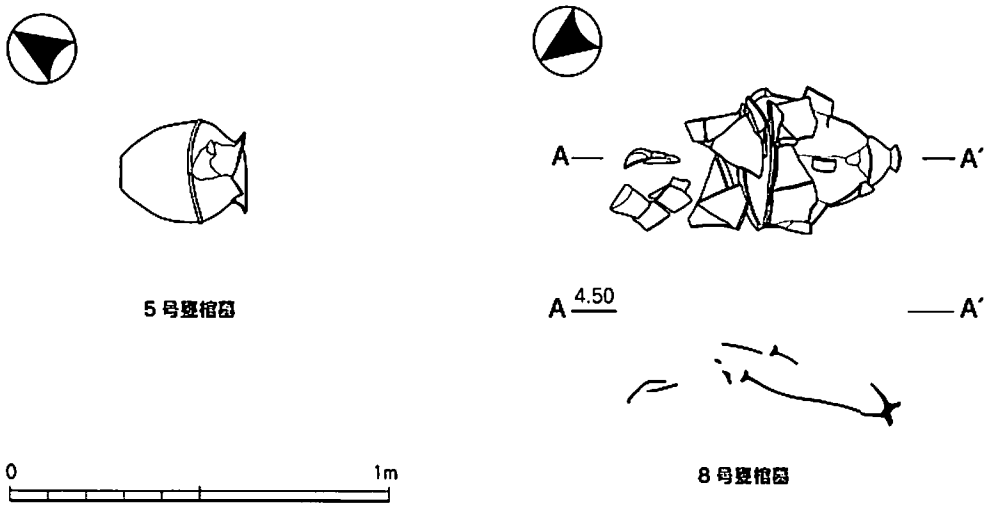
Ⅱ区のE-13グリッドに位置する。墓壙は、６号甕棺墓と１つに掘られたと思われ、その墓域の西隅に横穴壙94cm、横穴深38cm程度の横穴を掘り、甕棺が埋置してあった。埋置方位は６号甕棺墓と同じ



4号甕棺墓

1層　暗褐色土（7.5YR3/3）
砂質土と粘質土が混在。色調にもばらつきがある。比率は砂質が若干多い。しまりはない。

第8図　4号甕棺墓実測図



第９図　５号・８号甕棺墓実測図

N-84°-W であり、埋置角度は 47° であった。下甕は６号甕棺墓とほぼ同じ大きさ（70cm 程度）の甕棺が使用されていたが、上甕の代わりに、小型の鉢が蓋として使用され、口を合わせるように接していた。目貼りの粘土等は確認されていない。下甕からは骨粉が出土している。副葬品は出土していない。

墓壙が同じであり、埋置方位も同じことから、６号と７号甕棺墓は何らかの関係（例えば、兄弟などの関係）にあることも考えられる。

８号甕棺墓

II 区の F-13 グリッドに位置する。甕棺の破片が大量に出土していたが、原位置を保っていなかったので、詳細な墓壙の状況、甕棺の埋置の方位や角度、副葬品の出土等は確認できていない。

６号と７号甕棺墓の近くにあるため、８号甕棺墓も何らかの関係があることが考えられる。

９号甕棺墓

II 区の D-18 グリッドに位置する。墓壙は、長軸 1.88m、短軸 1.31m の隅丸長方形をしており、墓壙深は 29cm であった。その西隅に横穴壙 155cm、横穴深 22cm 程度の横穴を掘り、甕棺を埋置してあった。埋置方位は、N-83°-W であり、埋葬角度 11° であった。東側の上甕は口縁部に打ち欠きがあり、下甕が呑み込むように接していた。上甕からは四肢骨の一部が、下甕からは頭蓋骨が出土している。頭位は西であった。副葬品は出土していない。

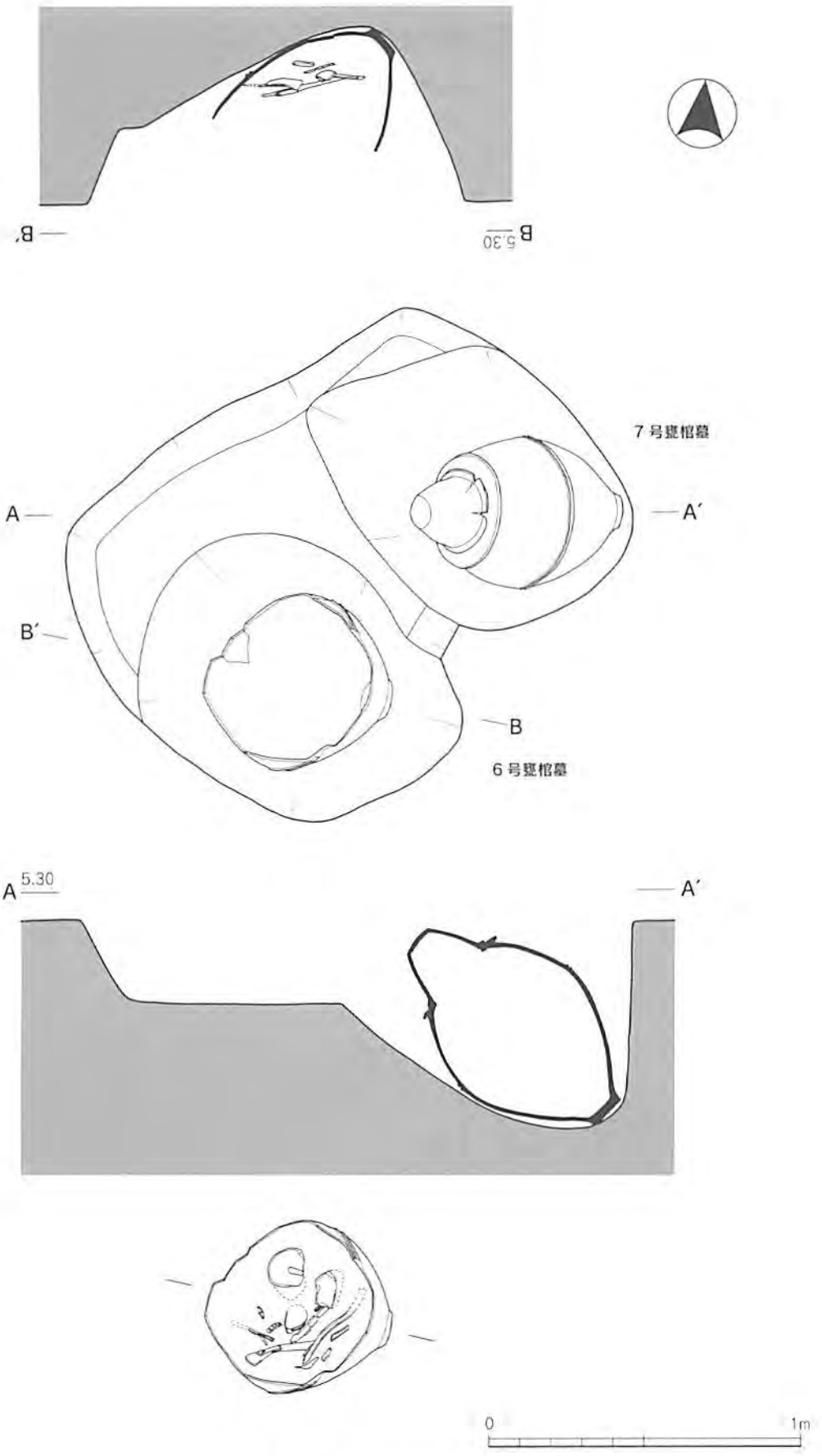
10 号甕棺墓

II 区の D-19・20 グリッドに位置する。墓壙は長軸 2.17m、短軸 1.58m の少し不定形な隅丸長方形をしており、墓壙深は 49cm であった。さらに西側に横穴壙 152cm、横穴深 13cm 程度の横穴を掘り、ほぼ平行に甕を埋置してあった。上甕の代わりに、西側には巨石が蓋として使用してあった。埋置方位は、N-76°-W であり、その中から人骨が出土している。副葬品は出土していない。

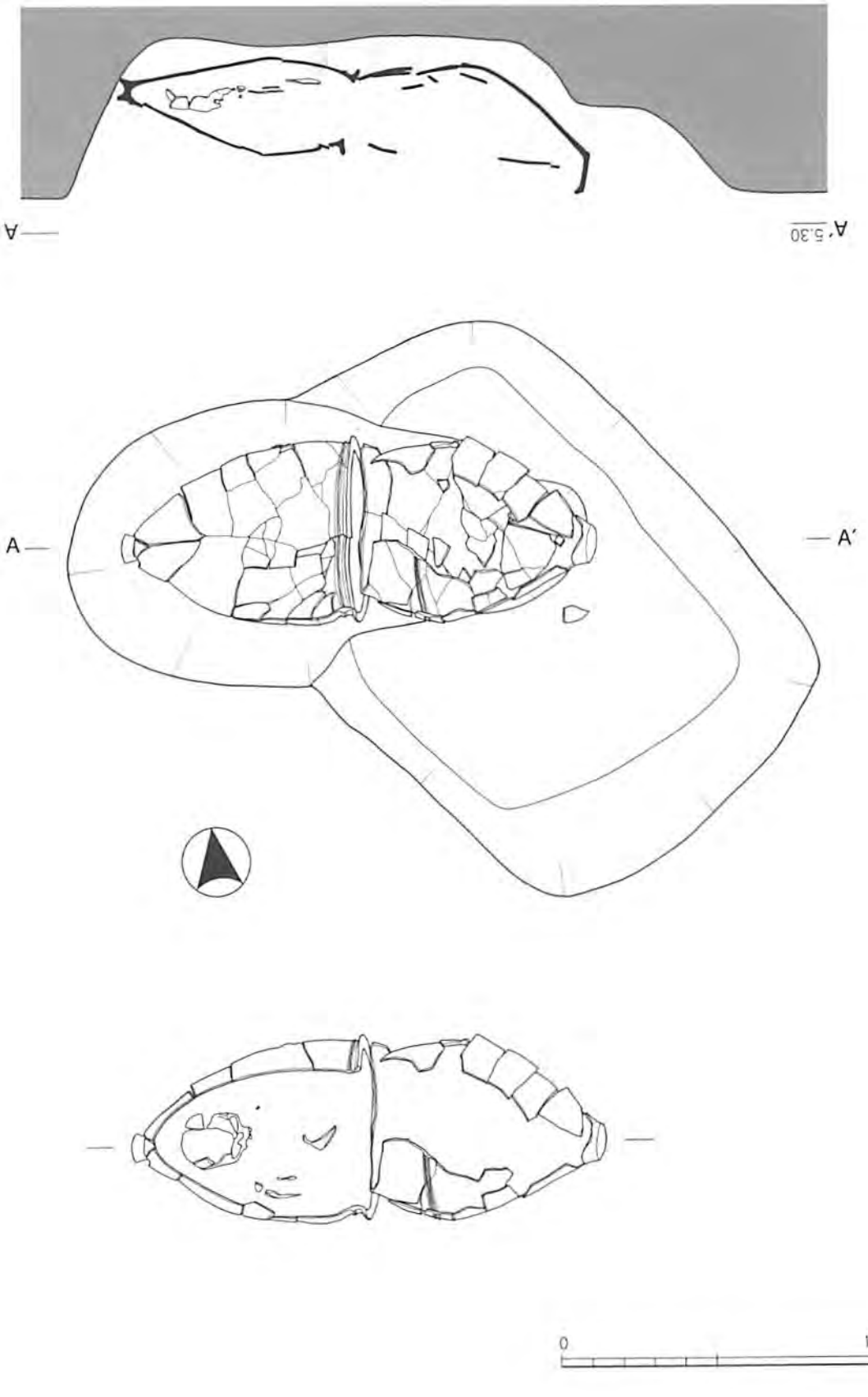
遺構が水抜き溝にかかっていたため、その溝から甕棺と思われる土器が大量に出土している。

11 号甕棺墓

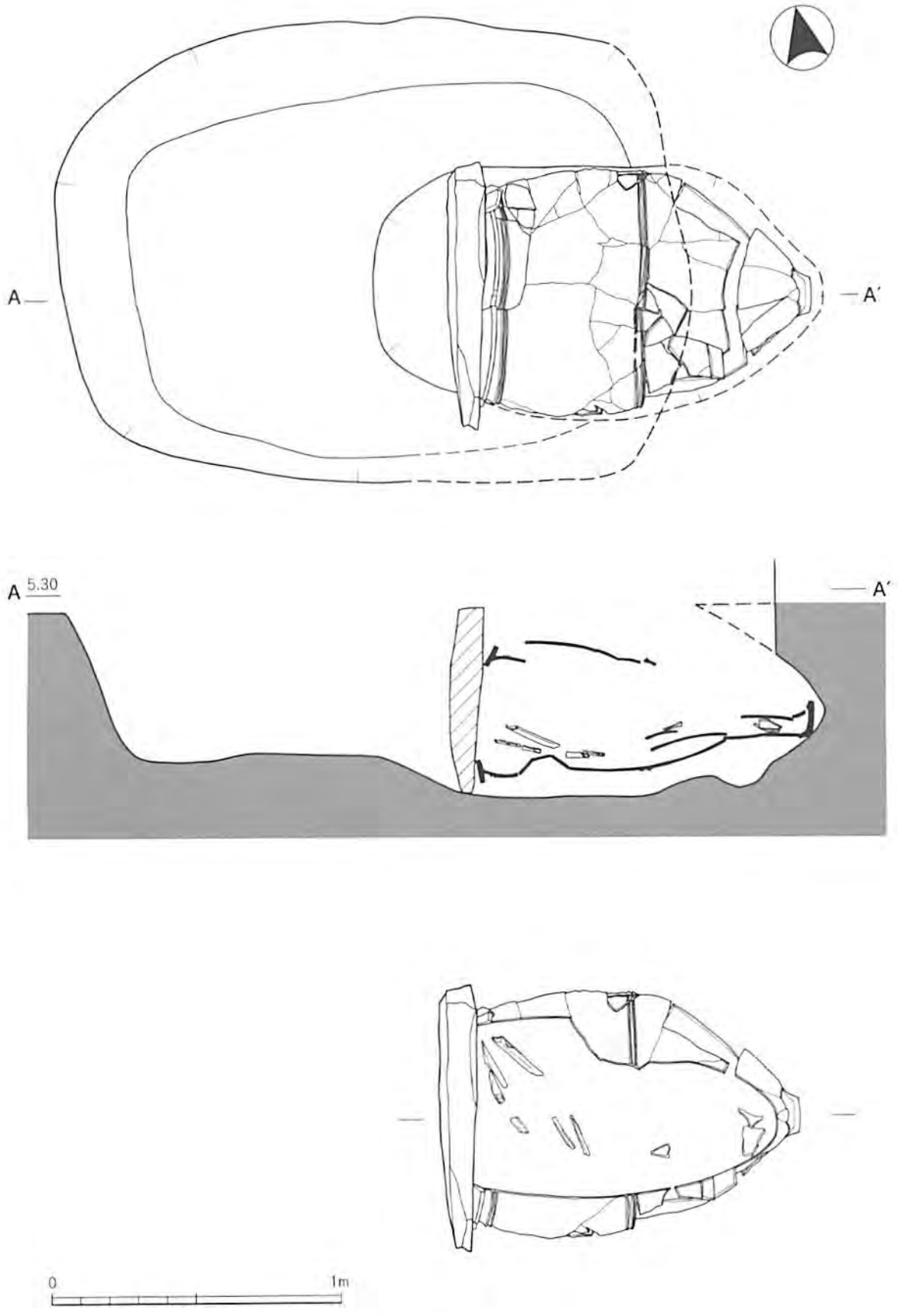
II 区の D・E-20 グリッドに位置する。調査区のり面から甕棺を検出したため、墓壙の状況は確認できなかった。埋置方位は、N-77°-W であり、ほぼ平行に埋葬してあった。上甕には鉢形土器が使用してあった。西側の下甕からは頭蓋骨等が出土している。頭位は西であった。副葬品は出土していない。



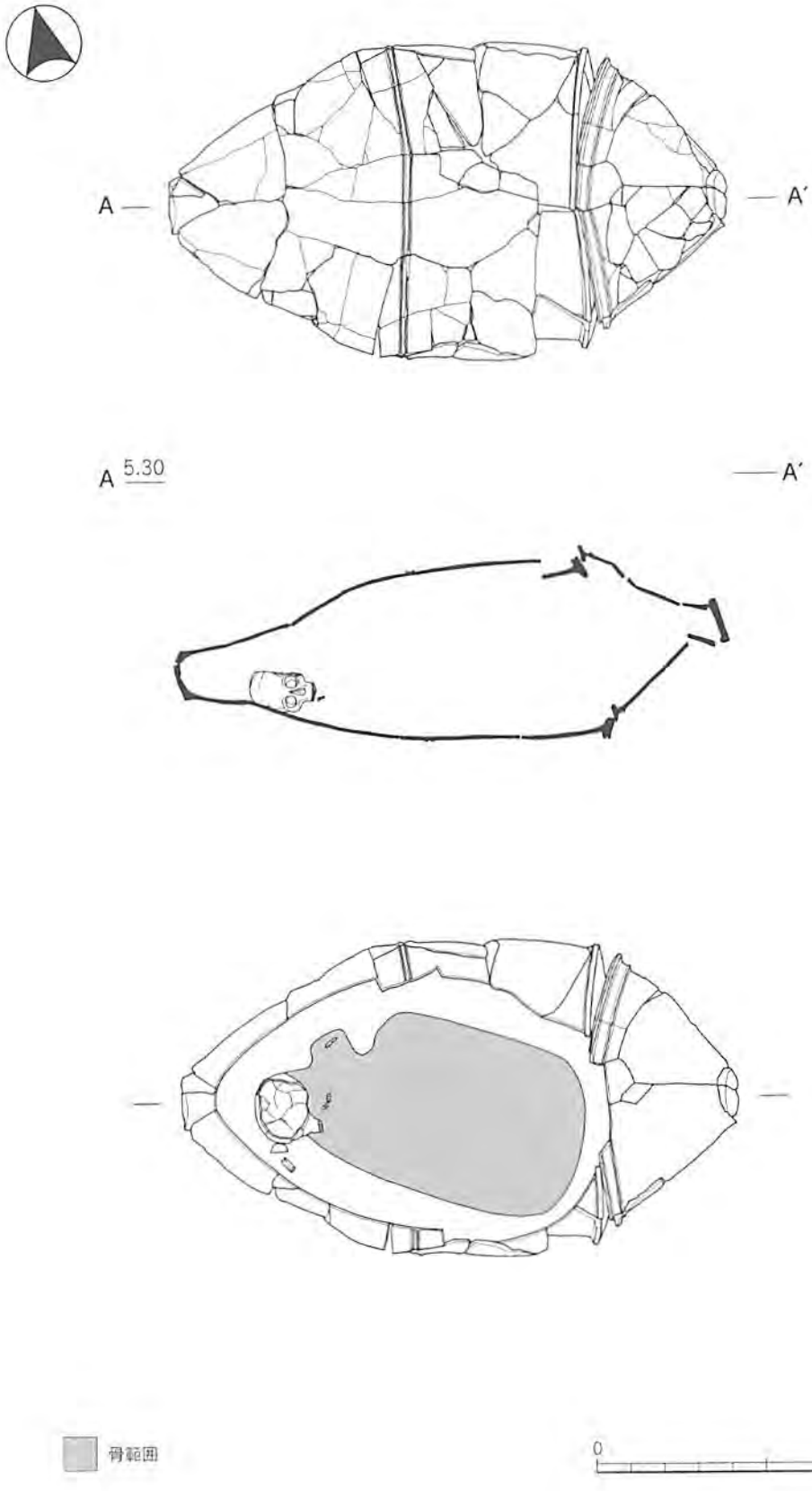
第10図　6号・7号甕棺墓実測図



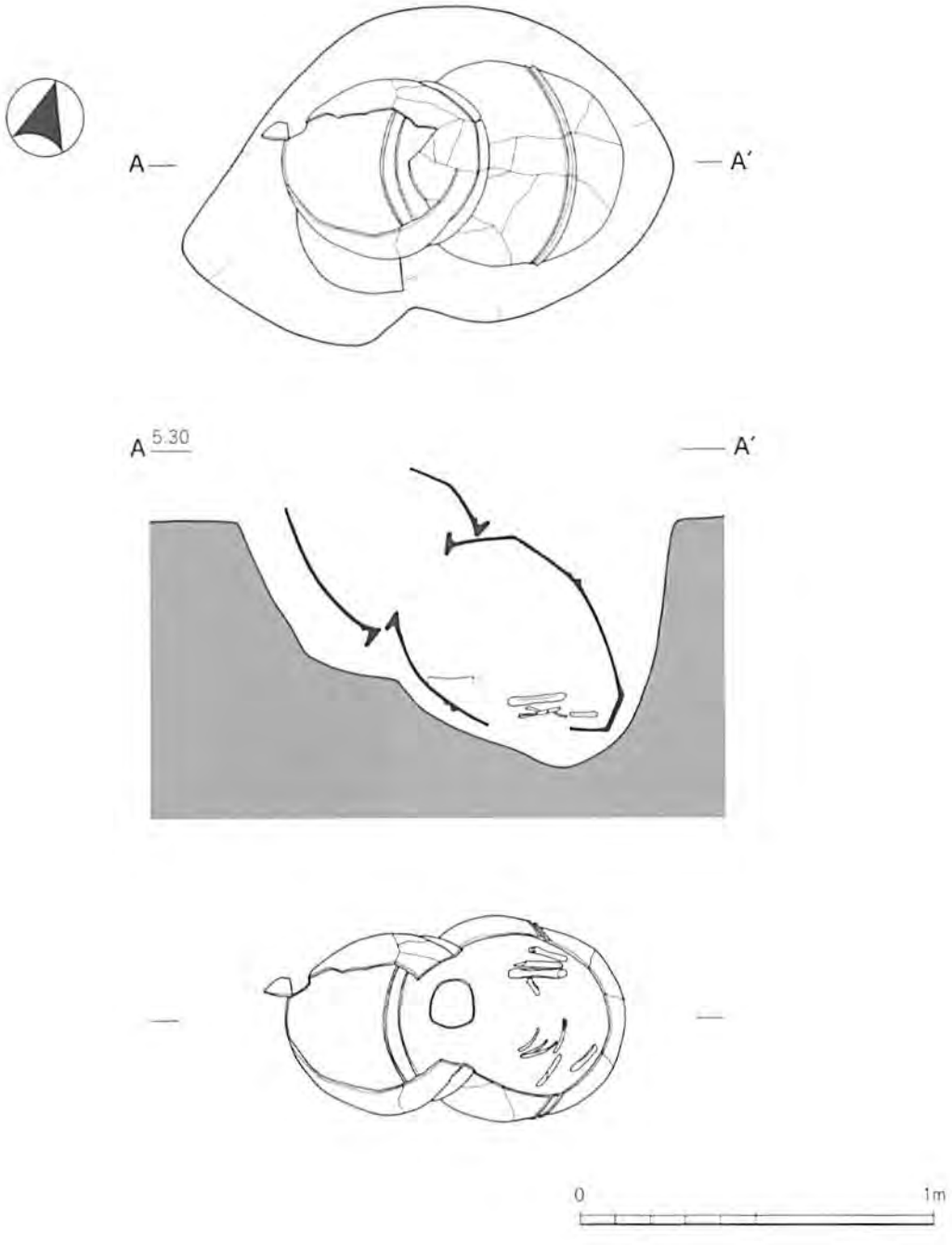
第11図　9号甕棺墓実測図



第12図　10号甕棺墓実測図



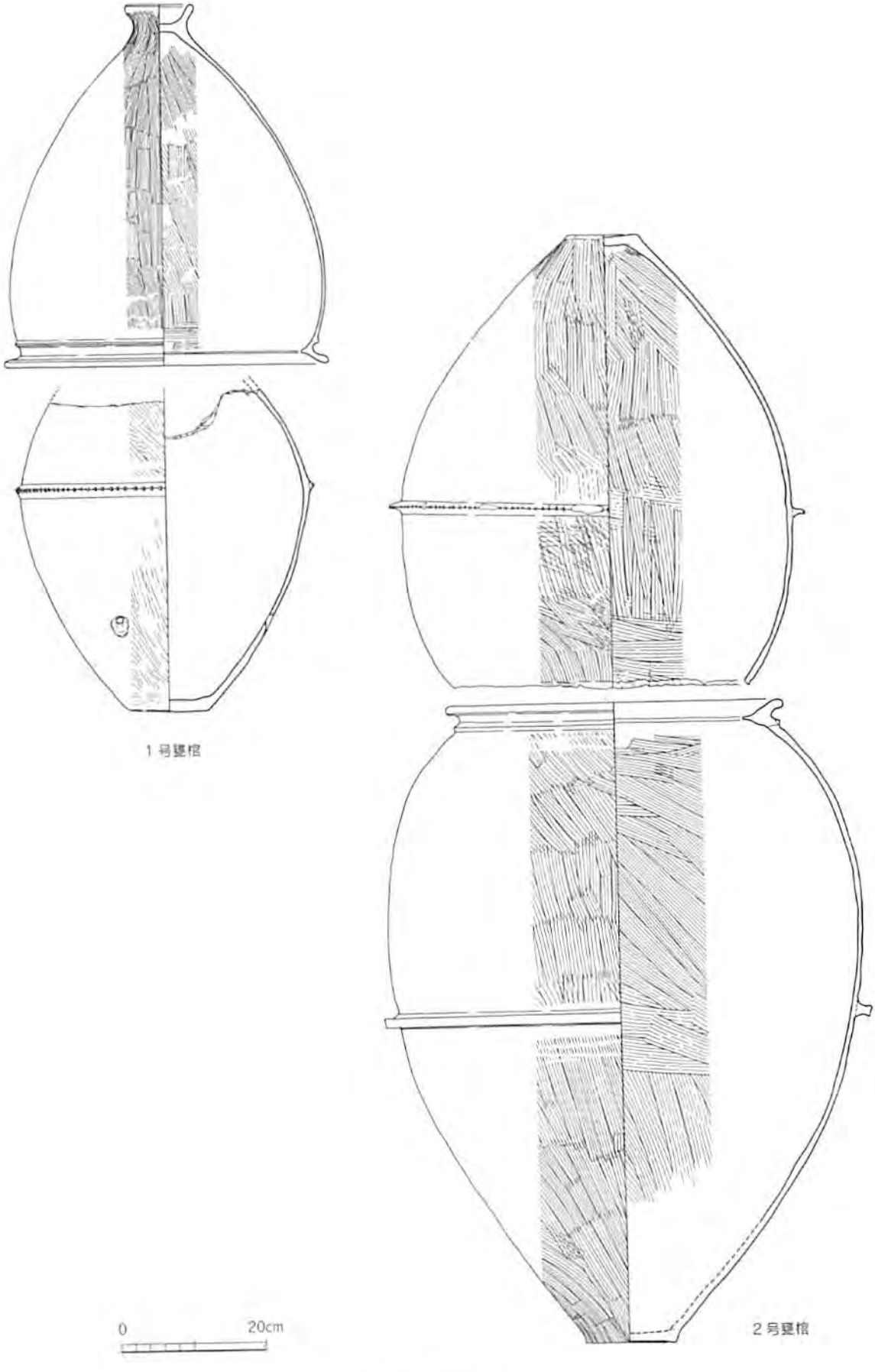
第 13 図　11 号甕棺墓実測図



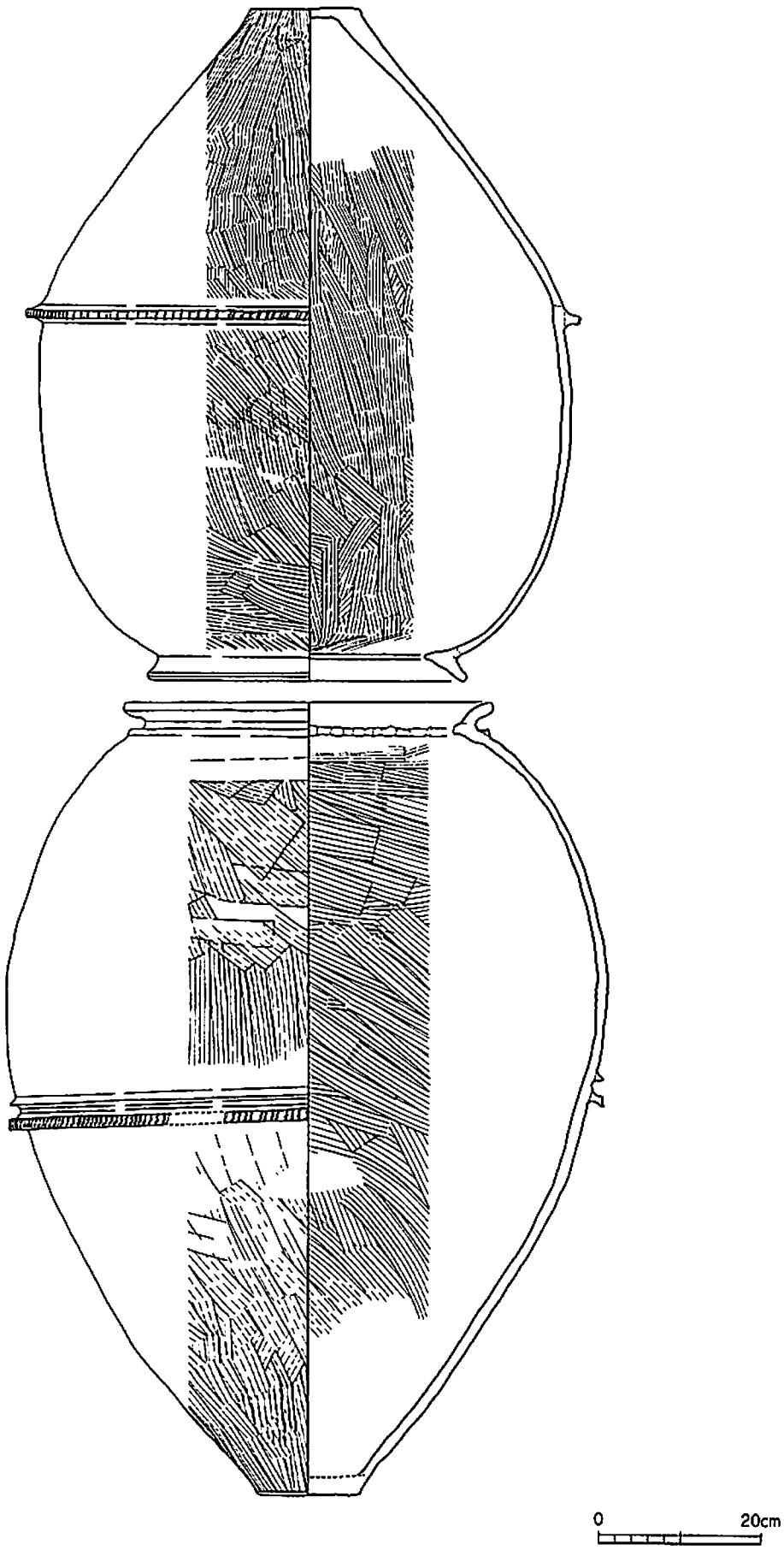
第 14 図　12 号甕棺墓実測図

12 号甕棺墓

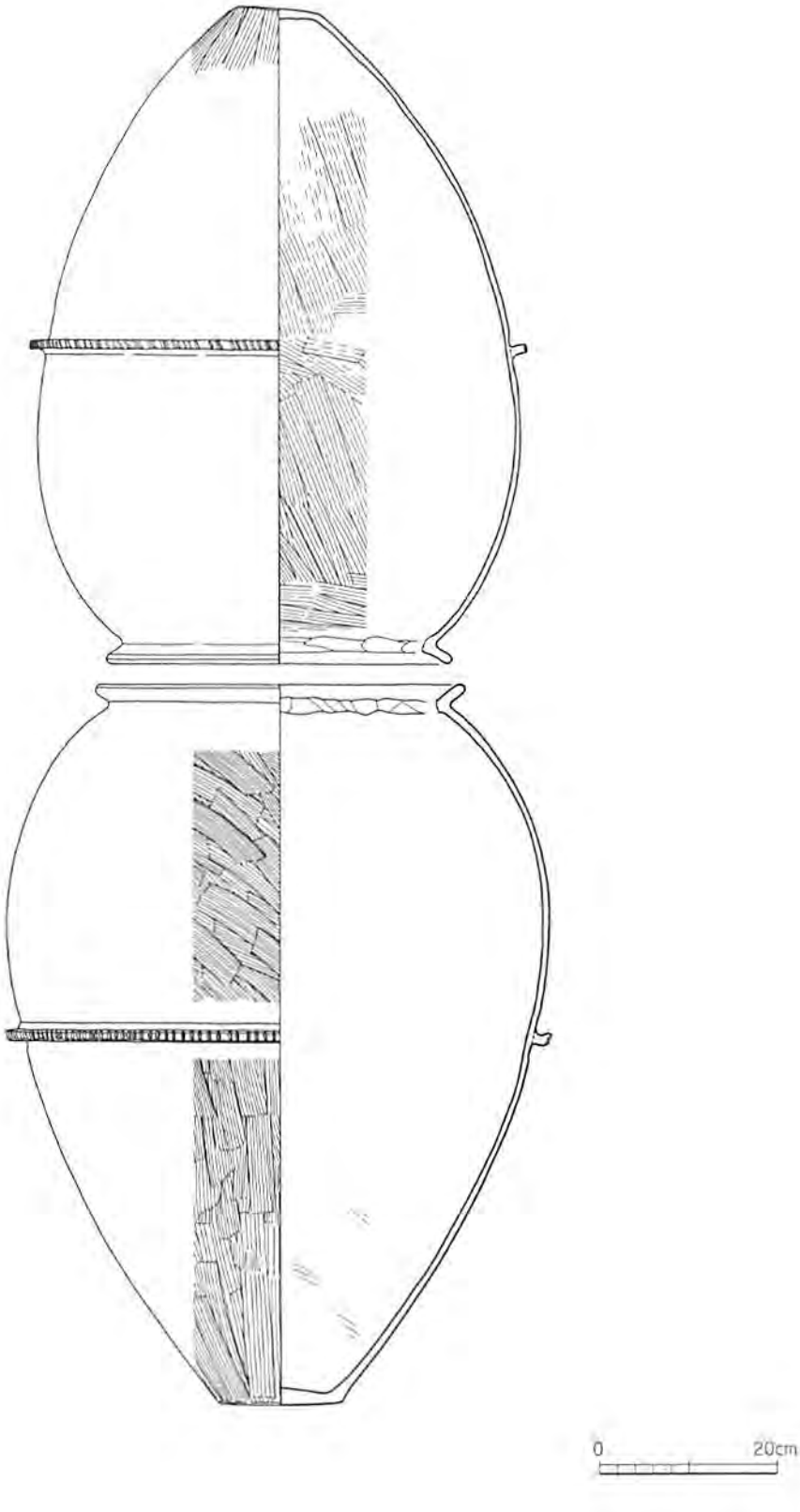
III 区のC-21 グリッドに位置する。上甕が半分程度掘削を受けた状態で出土していたので、墓壙の状況は確認できなかった。横穴は、西側に横穴壙 125cm、横穴深 68cm 程度の横穴が掘られ、甕棺を埋置したと推定される。埋置方位は、N-76°-E であり、埋葬角度約 52° であった。上甕が下甕の口を覆うような形で出土しているが、下甕の口縁部に打ち欠きの形跡はない。下甕に人骨が重なるような形で出土し、その状況から頭位は西であると推定されるが、他の甕棺では、下甕に頭を突っ込むように埋葬してあるのに、この甕棺のみ、下甕に足を突っ込むように埋葬されている。副葬品は出土していない。



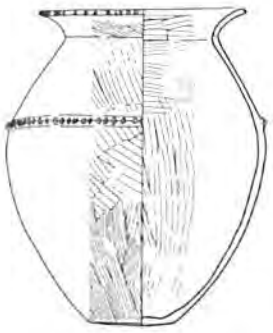
第15図　1号・2号甕棺



第16図　3号甕棺

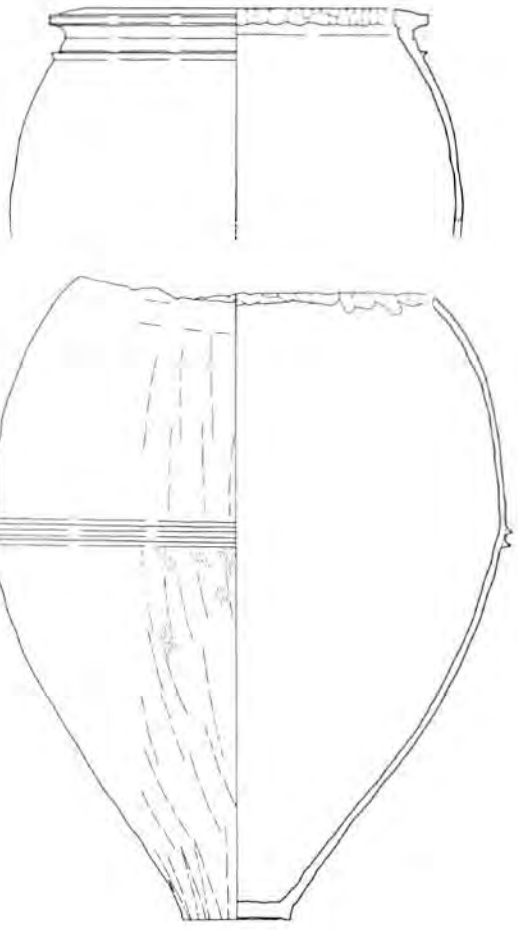


第17図　4号甕棺

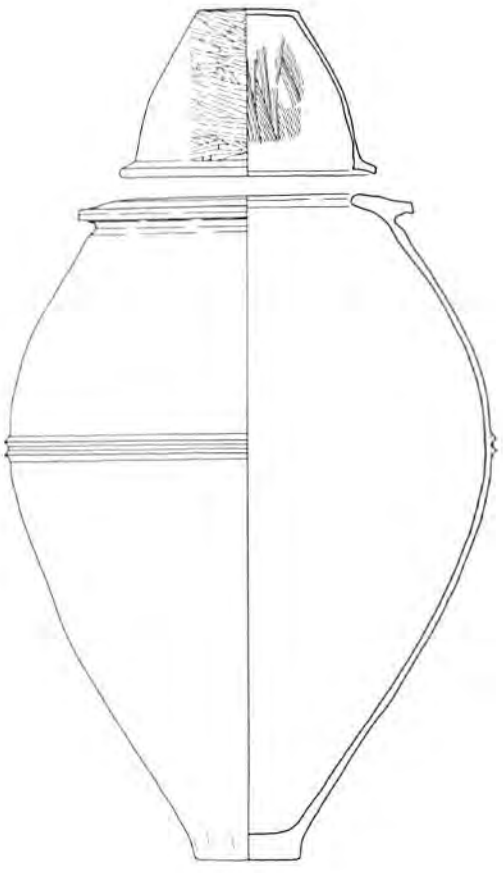


5号甕棺

8号甕棺

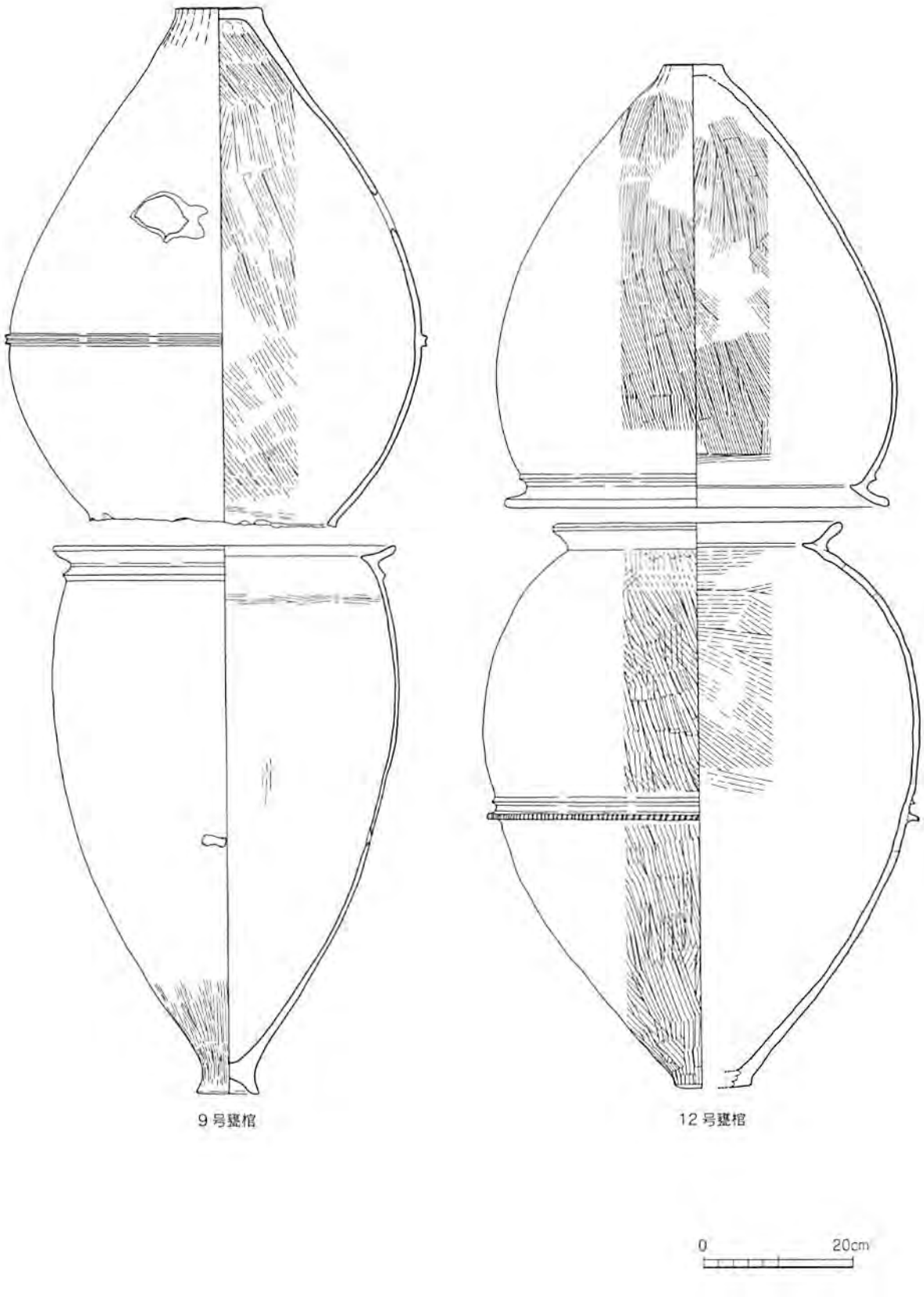


6号甕棺

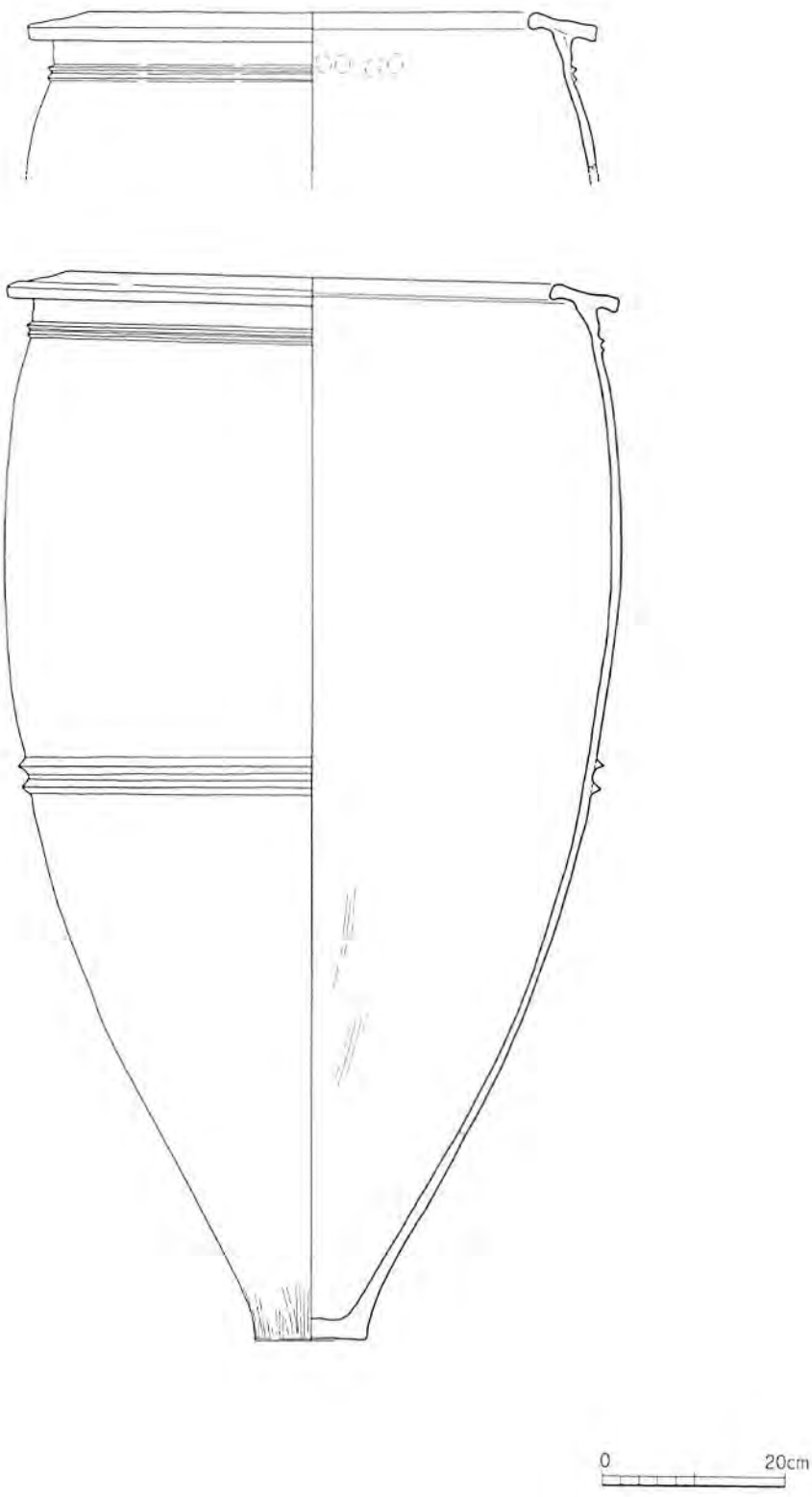


7号甕棺

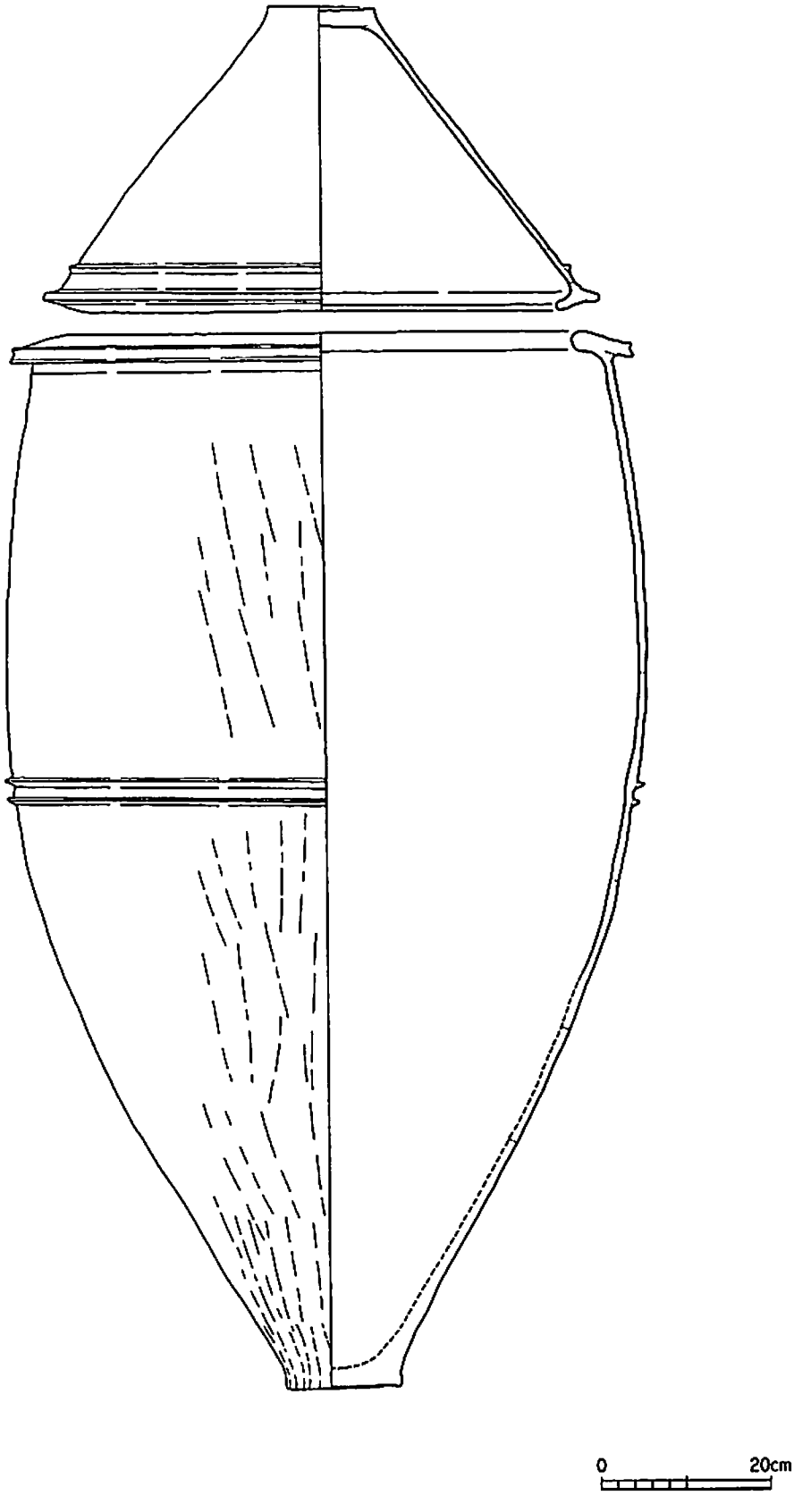
第18図　5号・6号・7号・8号甕棺



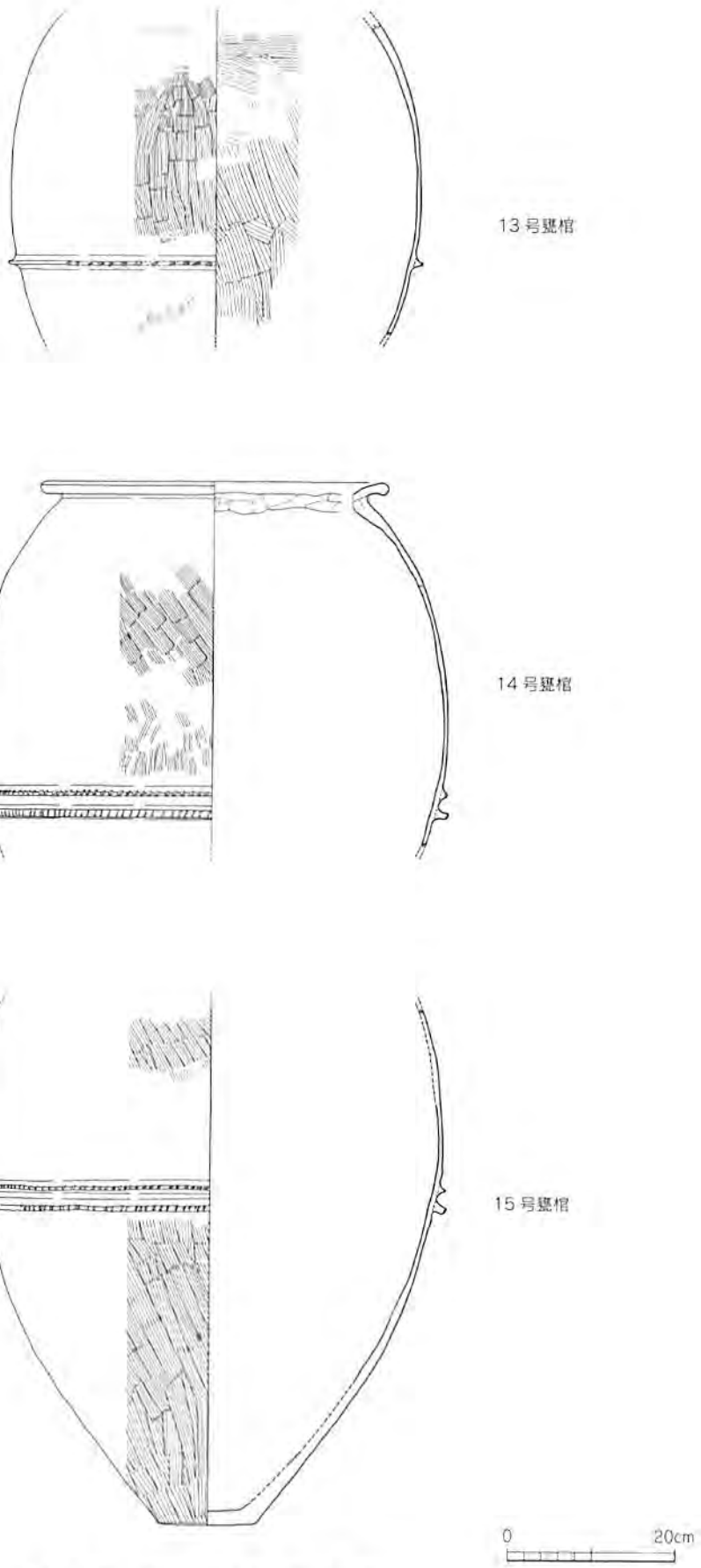
第19図　9号・12号甕棺



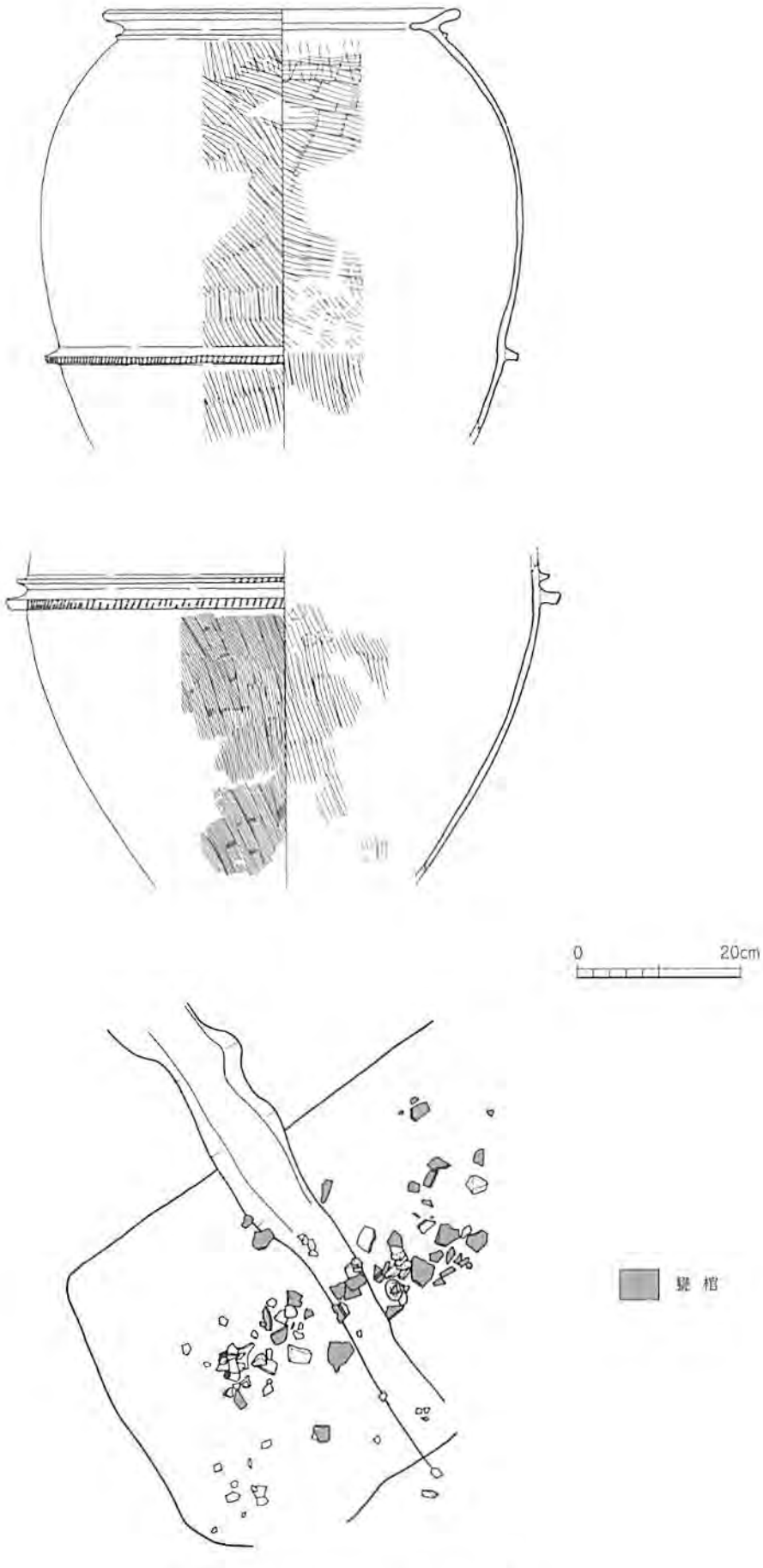
第20図　10号甕棺



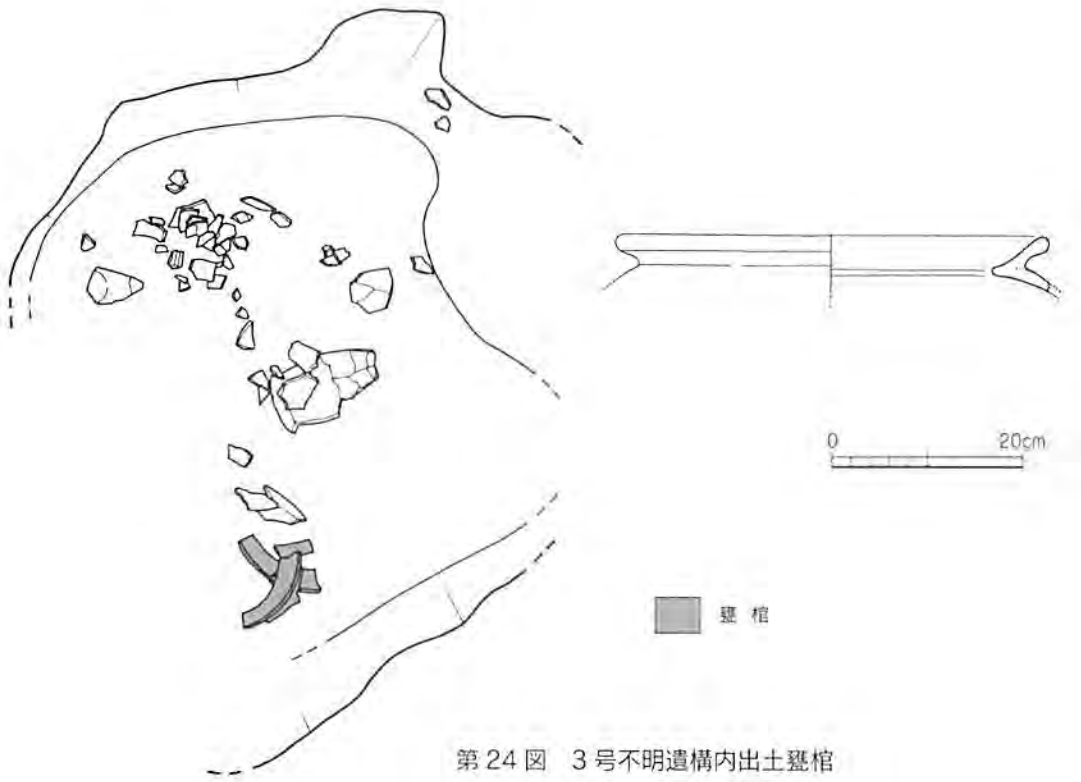
第21図　11号甕棺



第22図　13号・14号・15号甕棺



第 23 図　4 号竪穴住居跡内出土甕棺



第 24 図　3 号不明遺構内出土甕棺

(2) 甕棺

1 号甕棺

1 号甕棺は、西側の下甕の口縁部に打ち欠かれ、東側の上甕が下甕を覆うように接していた。

上甕は、「く」の字状に外反した口縁部を有し、口唇部は丸みをもって仕上げてある。頸部直下に断面三角形の突帯が 1 条ある。器高が 49.4cm、外口径は 44.8cm、胴部上部に最大径があり、43.5cm である。頸部は僅かに内傾し、胴部が僅かに張り、底部に向かい曲線を描きながら窄まるフォームとなっている。底径は 9.4cm であり、上げ底を呈し、外反している。形式的には黒髪式に相当する。内外面共にハケ目調整が施され、口縁は横ナデ調整、底部はナデ調整が施されている。外面の胴部ほぼ中央に黒斑がある。

下甕は、打ち欠きのため、口縁部の詳細は分からない。打ち欠きの内径は約 29.0cm である。胴部上部に最大径があり、41.4cm である。そこに断面三角形の刻み目突帯が 1 条ある。胴部下部に内面からの穿孔がある。頸部は鋭く内傾し、胴部は張りをもち、底部に向かい曲線を描きながら窄まるフォームとなっている。底径は 11.0cm であり、やや厚みを帯び、平坦な形状に仕上げてある。形式的には黒髪式に相当する。外面はハケ目調整、内面はナデ調整、底部もナデ調整が施されている。

2 号甕棺

2 号甕棺は、東側の上甕の口縁部に打ち欠きがあり、西側の下甕が呑み込むように接していた。

上甕は、打ち欠きのため、口縁部の詳細は分からない。打ち欠きの内径は約 40.0cm である。胴部の中央に最大径があり、57.9cm である。そこに断面三角形の刻み目突帯が 1 条ある。頸部は内傾し、胴部は大きな張りをもち、底部に向かい曲線を描きながら窄まるフォームとなっている。底径は 9.8cm であり、平坦な形状に仕上げてある。内外面共にハケ目調整、外面の胴部上部と底部に工具ナデ調整とナデ調整が施されている。外面の胴部下部に黒斑がある。

下甕は、「く」の字状に外反した口縁部を有し、口唇部は丸みをもって仕上げてある。頸部直下に断面三角形の突帯が 1 条ある。器高が 87.7cm、外口径は 47.0cm、胴部上部に最大径があり、68.1cm である。

胴部の中央に断面方形の刻み目突帯が1条ある。頸部は内傾し、胴部は大きな張りをもち、底部に向かい曲線を描きながら窄まるフォームとなっている。底径は12.7cmであり、平坦な形状に仕上げてある。内外面共にハケ目調整が施され、口縁部は横ナデ調整、底部はナデ調整が施されている。外面の胴部上部に黒斑がある。

3号甕棺

3号甕棺は、合口甕棺で目貼り粘土が確認されており、ほぼ平行に埋置してあったが、大きさや人骨の出土の状況から、西側が上甕、東側が下甕であったと判断した。

上甕と考えられる西側の甕棺は、「く」の字状に外反した口縁部を有し、口唇部は丸みをもって仕上げてある。器高が82.0cm、外口径は40.1cm、胴部上部に最大径があり、69.2cmである。胴部下部に断面方形の刻み目突帯が1条ある。頸部は内傾し、胴部は大きな張りをもち、突帯部分から底部に向かいほぼ直線的に窄まるフォームとなっている。底径は13.8cmで、平坦な形状に仕上げてある。内外面共にハケ目調整が施され、口縁部は横ナデ調整、底部は内外面ともナデ調整が施されている。外面の胴部ほぼ中央に黒斑がある。

下甕は、「く」の字状に外反した口縁部を有し、口唇部は丸みをもって仕上げてある。合口であるが、口径を合わせるために、「く」の字状の口縁部の内側を全周打ち欠いてあった。頸部直下に断面三角形の突帯が1条ある。器高が96.8cm、外口径は46.2cm、胴部上部に最大径があり、74.7cmである。胴部の中央に断面三角形の突帯が1条と断面方形の刻み目突帯が1条ある。頸部は鋭く内傾し、胴部は大きな張りをもち、突帯部から底部に向かい緩やかな曲線を描いて窄まるフォームとなっている。底径は12.8cmで、やや厚みをもち、平坦な形状に仕上げてある。外面はハケ目調整と工具ナデが、内面はハケ目調整が施され、口縁部は横ナデ調整が施されている。外面の胴部中央から下部に黒斑がある。

4号甕棺

4号甕棺は、目貼りの粘土が確認されていないが、外口径がほぼ同じ大きさから合口甕棺と思われる。人骨の出土状況から、西側が上甕、東側が下甕であったと判断した。

上甕と考えられる西側の甕棺は、「く」の字状に外反した口縁部を有し、口唇部は丸みをもって仕上げてある。合口であるが、口径を合わせるために、「く」の字状の口縁部の内側を全周打ち欠いてあり、その内径は32.0cm程度である。器高が73.2cm、外口径は39.4cm、胴部上部に最大径があり、56.5cmである。胴部の中央に断面方形の刻み目突帯が1条ある。頸部は内傾し、胴部はやや張りをもち、突帯部分から底部に向かいやや曲線を描いて窄まるフォームとなっている。底径は9.4cmで、平坦な形状に仕上げてある。外面はナデ調整、底部にはハケ目調整が施されている。内面はハケ目調整が施され、口縁部は横ナデ調整が施されている。外面の胴部上部に黒斑がある。

下甕は、「く」の字状に外反した口縁部を有し、口唇部は丸みをもって仕上げてある。上甕同様、「く」の字状の口縁部の内側を全周打ち欠いてあり、打ち欠き内径は35.0cm程度である。器高が80.0cm、外口径は42.1cm、胴部上部に最大径があり、61.6cmである。胴部の中央に断面方形の刻み目突帯が1条ある。頸部は内傾し、胴部はやや張りをもち、突帯部から底部に向かい曲線を描いて窄まるフォームであり、上甕によく似ている。底径は14.0cmとやや大きく、平坦な形状に仕上げてある。外面はハケ目調整、内面はナデ調整、口縁は横ナデ調整が施されている。外面の胴部上部に黒斑がある。

5号甕棺

5号甕棺は、単棺の小型甕である。「く」の字状に外反した口縁部を有し、口唇部に刻み目がある。器高が33.2cm、外口径は21.8cm、胴部上部に最大径があり、27.5cmである。胴部上部に断面三角形の刻み目突帯が1条ある。頸部は内傾し、口縁部で広がり、胴部から底部に向かい曲線を描いて窄まるフォー

ムとなっている。底径は8.9cmで、平坦な形状に仕上げてある。内外面共にハケ目調整、口縁部は横ナデ調整が施されている。外面の胴部中央に黒斑がある。

6号甕棺

6号甕棺は、近代の掘削により、遺構が確認されたとき、下甕のみであった。

下甕は、打ち欠きのため、口縁部の詳細は分からない。胴部上部に最大径があり、56.2cmである。そこに断面三角形の突帯が2条ある。頸部は内傾し、胴部はやや張りをもち、底部に向かい曲線を描きながら窄まるフォームとなっている。底径は11.4cmであり、やや厚みがあり、平坦な形状に仕上げてある。内面はナデ調整、外面は工具ナデ、横ナデ調整が施されている。外面の胴部上部に黒斑がある。

出土遺物から甕棺の口縁部と胴部の一部が接合された。正確に判断できないが、上甕の一部と考えられる。口縁部の内側が全周打ち欠きのため正確に分からないが、平坦面がやや外傾した「T」字状の口縁部を有し、口唇部が方形に仕上げてある。頸部直下に断面三角形の突帯が1条ある。外口径は40.0cm、胴部の最大径は約47.8cm、頸部はやや内傾していると考えられる。内外面共にナデ調整、口縁部は横ナデが施されている。外面の胴部上部に黒斑がある。

7号甕棺

7号甕棺は、6号甕棺の北側に並んだ形で検出されており、上甕の代わりに、小型の鉢が蓋として使用され、口を合わせるように接している。

上甕の代わりの鉢は、口縁部が「く」の字状に外反しており、外口径27.1cm、器高17.4cmである。底径は10.5cmで、平坦な形状に仕上げてある。外面はミガキ調整、内面はハケ目調整後ナデ調整、口縁部は横ナデが施されている。外面の胴部に黒斑がある。

下甕は、平坦面がやや外傾し内側に発達した「T」字状の口縁部を有し、口唇部が方形に仕上げてある。器高が69.2cm、外口径は35.4cm、胴部上部に最大径があり、52.0cmである。そこに断面三角形の突帯が2条ある。頸部は内傾し、胴部はやや張りをもち、底部に向かい曲線を描きながら窄まるフォームで、6号甕棺の下甕と似ている。底径は11.0cmであり、厚みがあり、平坦な形状に仕上げてある。形式的には須玖式に相当する。内外面共にナデ調整、口縁部は横ナデ調整が施されている。外面の胴部ほぼ中央に黒斑がある。

8号甕棺

8号甕棺は、原位置を保っていなかったが、遺物を接合した結果、甕棺と判断した。

上甕の代わりの鉢は、口縁部が僅かに「く」の字状に外反し、外口径26.6cm、器高17.5cmである。底径は13.4cmで、平坦な形状に仕上げてある。外面は工具ナデ調整後にミガキ調整が、内面はナデ調整、口縁部は横ナデが施されている。外面の胴部に黒斑がある。

下甕は、平坦面が僅かに外反する逆「L」字状の口縁部を有し、口縁部は丸みをもって仕上げてある。器高が40.9cm、外口径は27.8cm、胴部上部に最大径があり、26.9cmである。頸部はほんの僅かに内傾し、全体的に「V」字状に近いフォームとなっている。底径は7.6cmであり、やや厚みがあり、上げ底を呈し、外反している。形式的には黒髪式に相当する。外面はハケ目、底部はナデ調整、内面はナデ調整、口縁部は横ナデ調整が施され、内面底部には指頭圧痕が確認されている。外面に煤が付着しており、日常の煮炊き用として使用されていた可能性が高い。

9号甕棺

9号甕棺は、東側が上甕で、口縁部に打ち欠きがあり、西側の下甕が呑み込むように接していた。

上甕は、打ち欠きのため、口縁部の詳細については分からない。打ち欠きの内径は約31cmである。胴部上部に最大径があり、57.0cmである。そこに断面「M」形の突帯が1条ある。頸部は鋭く内傾し、

胴部が張りをもち、底部に向かい曲線を描きながら窄まるフォームとなっている。底径は 11.6cm であり、平坦な形状に仕上げてある。胴部下部に外側からの穿孔がある。外面は横ナデ調整とナデ調整、内面はハケ目調整後ナデ調整が施されている。形式的には須玖式に相当する。外面の胴部下部に黒斑がある。

下甕は、「く」の字状に外反した口縁部を有し、口唇部は丸みをもって仕上げてある。頸部直下に断面三角形の突帯が 1 条ある。器高が 72.6cm、外口径は 46.2cm、胴部上部に最大径があり、46.7cm である。頸部はほんの僅かに内傾し、全体的に「V」字状に近いフォームとなっている。底径は 8.5cm で、やや厚みがあり、上げ底を呈し、外反している。胴部下部に外側からの打撃による穿孔がある。内外面共にナデ調整、内面胴部上部と外面胴部下部にはハケ目調整、口縁部には横ナデ調整が施されている。形式的には黒髪式に相当する。外面の胴部上部に黒斑がある。

10 号甕棺

10 号甕棺は、上甕の代わりに巨石が蓋として使用してあった。

下甕は、平坦面がやや外傾し、発達した「T」字状の口縁部を有し、口唇部が方形に仕上げてある。頸部直下に断面三角形の突帯が 2 条ある。器高が 115.9cm、外口径は 67.6cm、胴部上部に最大径があり、68.1cm である。胴部の中央に断面三角形の突帯が 2 条ある。頸部はほんの僅かに内傾し、全体的に「V」字状に近いフォームとなっている。底径は 12.5cm であり、やや厚みがあり、平坦な形状に仕上げてある。形式的には須玖式に相当する。内外面共にハケ目調整後ナデ調整、口縁部は横ナデ調整が施されている。外面の胴部ほぼ中央に 2 つ黒斑がある。

遺構が水抜き溝にかかっており、その溝から土器が大量に出土した。接合により、甕の口縁部と分かった。平坦面がやや外傾し、発達した「T」字状の口縁部を有し、口唇部が方形に仕上げてある。頸部直下に断面「M」形の突帯が 1 条ある。外口径は 63.2cm と推定される。内外面共にナデ調整、口縁部は横ナデ調整が施されている。口縁部は下甕と似ている。

11 号甕棺

11 号甕棺は、上甕には鉢形土器が使用され、下甕は今回の調査の中で最も大型の甕であった。

上甕の鉢形土器は、平坦面がやや外傾し、発達した「T」字状の口縁部を有し、口唇部がやや丸みをもって仕上げてある。頸部に断面三角形の突帯が 1 条ある。頸部から底部に向けて直線的なフォームとなっている。器高が 35.6cm、外口径は 66.2cm である。底径は 12.8cm で、厚みを帯び、僅かに上げ底を呈し、外反している。形式的には須玖式に相当する。内外面共にナデ調整、外面底部に工具ナデ調整が施されている。外面の胴部に黒斑がある。

下甕は、平坦面がやや外傾し、発達した「T」字状の口縁部を有し、口唇部が方形に仕上げてある。器高が 123.2cm、外口径は 74.3cm、胴部上部に最大径があり、76.4cm である。胴部の中央に断面三角形の突帯が 2 条ある。頸部は僅かに内傾し、全体的に「V」字状に近いフォームとなっている。底径は 13.8cm とやや大きく、やや厚みを帯び、平坦な形状に仕上げてある。形式的には須玖式に相当する。外面は工具ナデ調整が、内面はナデ調整、口縁部は横ナデ調整が施されている。

12 号甕棺

12 号甕棺は、上甕が下甕の口を覆うような形で出土している。

上甕は、「く」の字状に外反した口縁部を有し、口唇部は丸みをもって仕上げてある。頸部に断面三角形の突帯が 1 条ある。器高が 59.0cm、外口径は 51.8cm、胴部上部に最大径があり、53.9cm である。頸部は内傾し、胴部は張りをもち、底部に向かい曲線を描きながら窄まるフォームとなっている。底径は 7.8cm であり、平坦な形状に仕上げてある。内外面共にハケ目調整、口縁は横ナデ調整が施されている。形式的には須玖式に相当する。外面の胴部下部に黒斑がある。

下甕は、「く」の字状に外反した口縁部を有し、口唇部は丸みをもって仕上げてある。器高が75.0cm、外口径は39.2cm、胴部上部に最大径があり、59.2cmである。胴部の中央に断面三角形の突帯が1条、断面方形の刻み目突帯が1条ある。頸部は鋭く内傾し、胴部は大きく張りをもち、突帯部から底部に向かい曲線を描きながら窄まるフォームとなっている。底径は10.4cmであり、平坦な形状に仕上げてある。内外面共にハケ目調整、口縁部は横ナデ調整が施されている。外面の胴部上部に黒斑がある。

この他にも、遺物を接合した結果、甕の一部が出土していることが分かった。

13号甕棺（位置不明）

4号甕棺墓の近く、II区のE-7グリッドで、近代の掘削により原位置を保っていない土器を多量に取り上げた。復元により、甕の胴部ということが分かった。断面三角形の刻み目突帯が1条あり、胴部の最大径は50.1cmと推定される。内外面共にハケ目調整が施されている。外面の胴部に黒斑がある。

14号甕棺（位置不明）

4号甕棺墓の近く、II区のF-7グリッドののり面で、近代の掘削により原位置を保っていない土器を多量に取り上げた。復元により、甕の口縁部から胴部であることが分かった。「く」の字状に外反した口縁部を有し、口唇部は丸みをもって仕上げてあり、内端を全周打ち欠いてあった。外口径は42.4cm、胴部の最大径は57.4cmと推定される。胴部に断面三角形の刻み目突帯が1条、断面方形の刻み目突帯が1条ある。外面はハケ目調整後ナデ調整、内面はナデ調整、口縁部も横ナデ調整が施されている。外面の胴部に黒斑がある。

15号甕棺（位置不明）

II区のF-9グリッドののり面で、近代の掘削により原位置を保っていない土器を多量に取り上げた。復元により、甕の胴部から底部であることが分かった。胴部の最大径は57.6cmと推定される。胴部に断面三角形の刻み目突帯が1条、断面方形の刻み目突帯が1条ある。突帯部分から底部に向けて緩やかな曲線を描いて窄まるフォームをしている。底径は12.0cmで、平坦な形状に仕上げてある。外面はハケ目調整後ナデ調整と横ナデ調整、内面はナデ調整が施されている。外面の胴部下部に黒斑がある。

4号竪穴住居跡出土甕棺

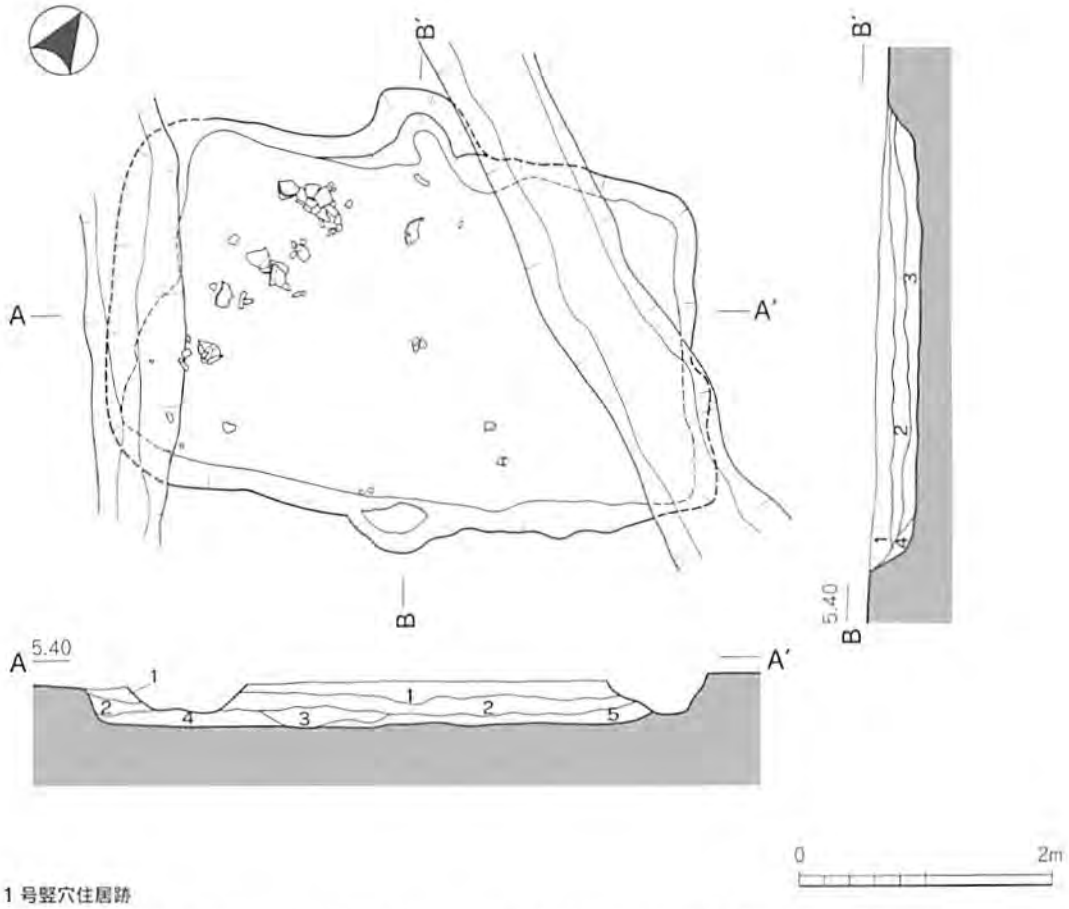
4号竪穴住居跡は、調査I区のF･G-6グリッドに位置する。2号溝に切られており、また、湧水量が多いため、東に水抜き溝を切っているところである。そこから2基の甕棺が出土している。

1基は、口縁部から胴部にかけての土器片が出土している。「く」の字状に外反した口縁部を有し、口唇部は丸みをもって仕上げてある。頸部直下に断面三角形の突帯が1条ある。外口径は44.8cm、胴部上部に最大径があり、60.0cmと推定される。胴部下部に断面方形の刻み目突帯が1条ある。頸部は内傾し、胴部は大きく張りをもったフォームと考えられる。内外面共にハケ目調整後横ナデ調整が施されている。外面の胴部上部に黒斑がある。

もう一基は、胴部下部が出土している。胴部に断面三角形の突帯が1条、断面方形の刻み目突帯が1条ある。その周囲径は69.1cmと推定される。内外面共にハケ目調整が施されている。外面の胴部に赤彩がある。

3号不明遺構出土甕棺

I区のF･G-5グリッドに位置する。4号竪穴住居跡同様、2号溝に切られ、湧水量が多いために、東側に水抜き溝を切ったところである。多量に取り上げた土器の中から接合により、甕の口縁部が出土している。「く」の字状に外反した口縁部を有し、口唇部は丸みをもって仕上げてある。頸部直下に断面三角形の突帯が1条ある。外口径は45.4cmと推定される。口縁部に横ナデ、ナデ調整が施されている。外面に黒斑がある。



1号竪穴住居跡

1層	極暗褐色粘質土 (7.5YR2/3)	粘性があり細砂含む。全体的にボソボソしており黒色粒子多く含む。
2層	暗褐色粘質土 (7.5YR2/3)	粘性があり細砂含む。ボソボソしている。
3層	暗褐色粘質土 (7.5YR3/4)	黄褐色粘土粒混入。ボソボソしており水分を多く含む。
4層	暗褐色粘質土 (7.5YR3/3)	細砂と水分を多く含む。粘性弱く黒褐色粒子を多く含む。
5層	暗褐色粘質土 (7.5YR3/3)	粘性があり細砂を含む。ボソボソしている。

第25図　1号竪穴住居跡実測図

第3節　その他の遺構

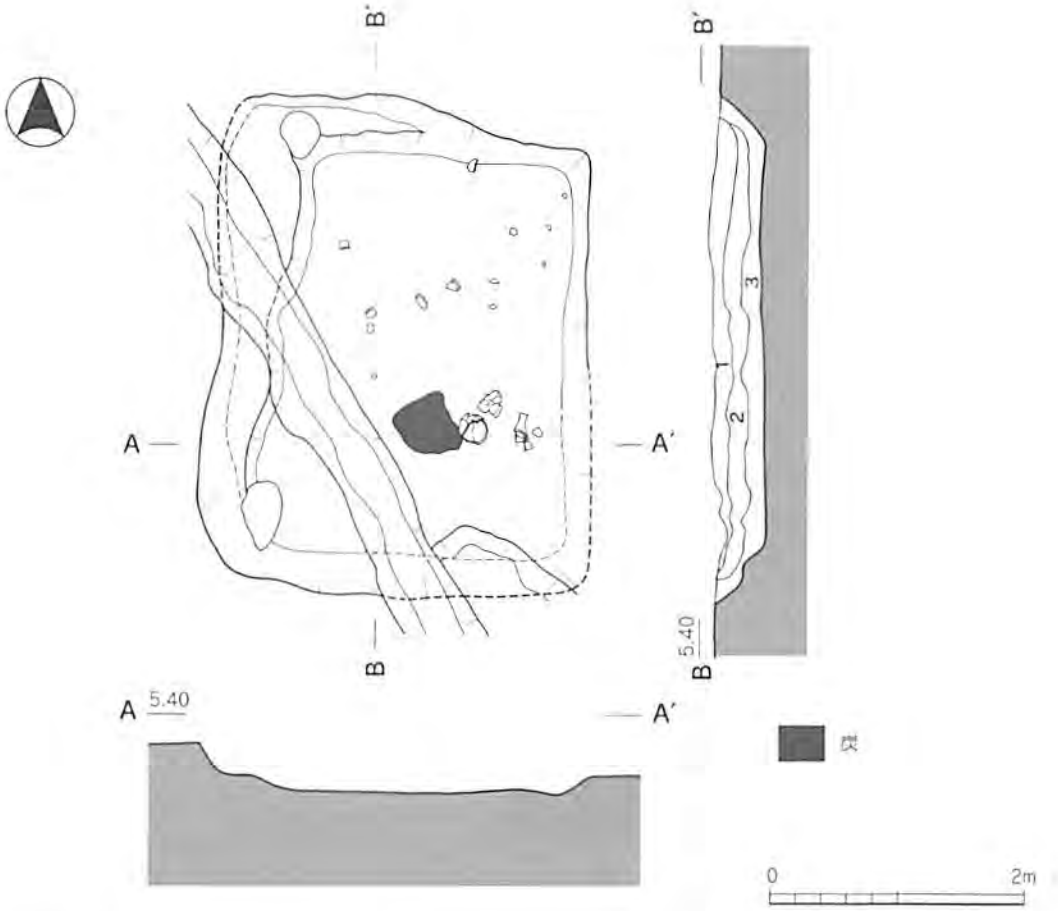
(1) 竪穴住居跡

1号竪穴住居跡

I区のE･F-3グリッドに位置する。長軸4.90m、短軸3.63mのやや不定形な長方形を呈している。主軸方位がN-31°-Wであり、壁高約33cmであった。湧水のため、柱穴、炉跡、貯蔵穴等は確認できていない。2本の溝状遺構(1号溝と2号溝)に切られている。長軸側に2つのピットがあるが、この住居に伴うものではないと思われる。弥生土器の台付甕などが出土している。

2号竪穴住居跡

I区のE･F-4グリッドに位置する。長軸3.91m、短軸3.02mの長方形を呈している。主軸方位は東西軸に沿っており、壁高は約24cmであった。1号竪穴住居跡同様、湧水のために、柱穴、貯蔵穴は確認できていない。中心部やや南側に多量の炭が出土しており、そこが炉跡であった可能性はある。1号溝に切られている。弥生時代の黒髪式土器の鉢などが出土している。



2 号竪穴住居跡

1 層　暗褐色粘質土（7.5YR3/4）　粘性・しまりともにやや強め。
2 層　暗褐色粘質土（7.5YR3/3）　粘性・しまりともやや弱め。砂質を若干含む。
3 層　黒褐色粘質土（7.5YR2/2）　粘性・しまりが弱い。砂質を多く含む

第 26 図　2 号竪穴住居跡実測図

3 号竪穴住居跡

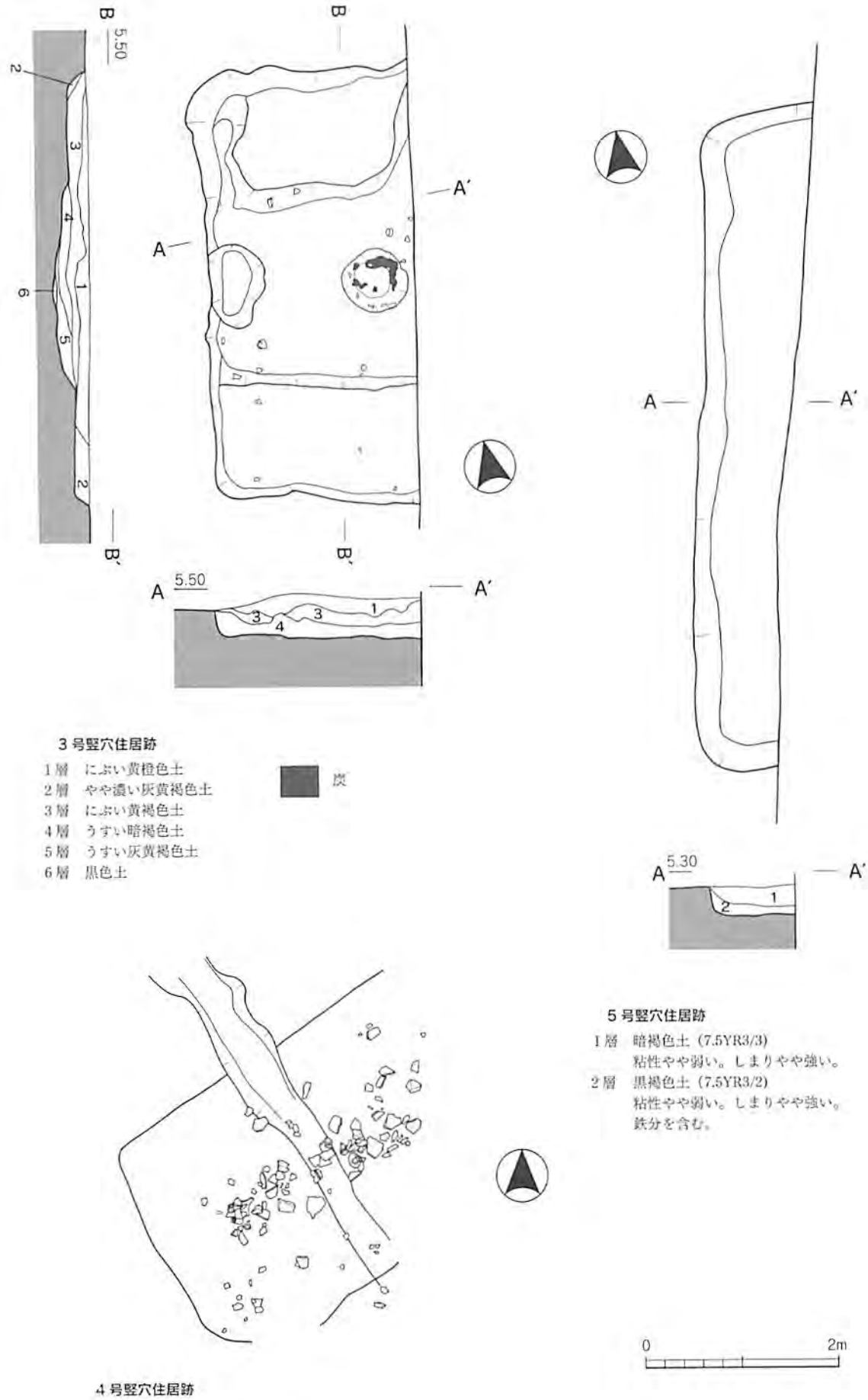
I 区のG-4・5 グリッドに位置する。東側が調査区外のため、形状は正確に確認できていないが、長軸 4.45m、主軸方位が N-85°-W の長方形を呈していたと推定される。南北両側が 20cm 程度ベット状に高くなっている。湧水のためにはっきりとした確認はできていないが、中央に炉跡と思われる炭が出土し、西側に貯蔵穴らしきもの（深さ約 25cm）がある。柱穴は確認できなかった。壁高は約 26cm である。

4 号竪穴住居跡

I 区のF・G-6 グリッドに位置する。3 号竪穴住居跡同様、東側が調査区外のため、形状は正確に確認できていないが、短軸 2.59m、主軸方位が N-59°-W の長方形を呈していたと推定される。2 号溝に切られており、特に湧水の量が多かったために、柱穴、貯蔵穴、炉跡、床面等は確認できなかった。弥生時代のコップ型土器などが出土している。

5 号竪穴住居跡

II 区の F-9・10 グリッドに位置する。東側が調査区外のため、形状は正確に確認できていないが、長軸 6.74m、主軸方位が N-11°-W の長方形または方形を呈していたと推定される。柱穴、炉跡、貯蔵穴等は確認できていない。壁高は約 21cm である。弥生土器の鉢が出土している。



3号竪穴住居跡

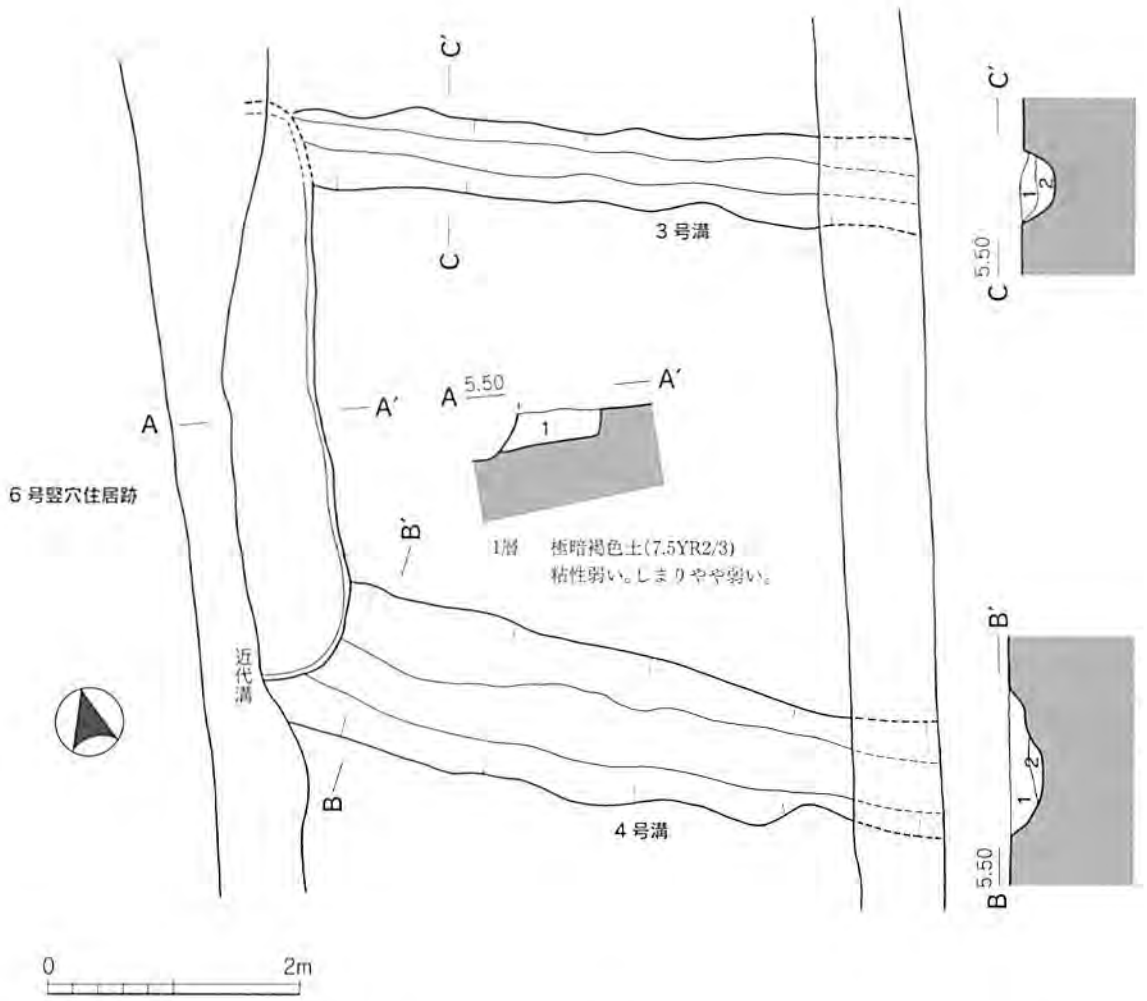
1層　にぶい黄橙色土
2層　やや濃い灰黄褐色土
3層　にぶい黄褐色土
4層　うすい暗褐色土
5層　うすい灰黄褐色土
6層　黒色土

4号竪穴住居跡

5号竪穴住居跡

1層　暗褐色土（7.5YR3/3）
　　粘性やや弱い。しまりやや強い。
2層　黒褐色土（7.5YR3/2）
　　粘性やや弱い。しまりやや強い。
　　鉄分を含む。

第27図　3号・4号・5号竪穴住居跡実測図



3号溝
1層　褐色土（7.5YR4/3）　やや粘性があり、ややしまりがある。
2層　暗褐色土（7.5YR3/4）　やや粘性があり、しまりが弱い。

4号溝
1層　褐灰色土（7.5YR4/1）　やや粘性があり、しまりがある。遺物を含む。
2層　褐色土（7.5YR3/4）　粘性・しまりがある。

第28図　6号竪穴住居跡、3号・4号溝実測図

6号竪穴住居跡

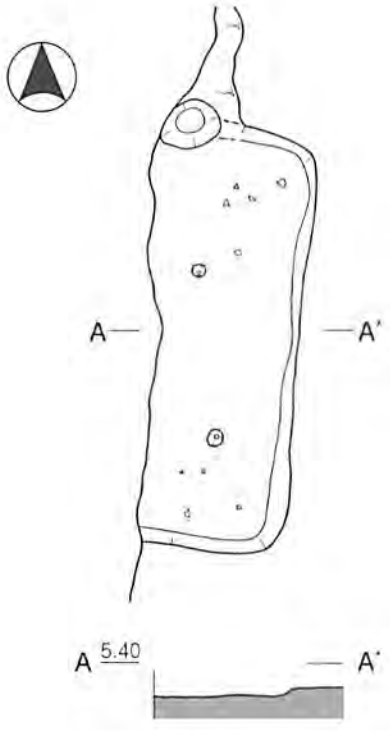
II区のD-13グリッドに位置する。近代溝に切られているため、形状は正確に確認できていないが、長軸4.48m、主軸方位がN-8°-Eの方形または長方形を呈していたと推定される。柱穴、炉跡、貯蔵穴等は確認できていない。2本の溝状遺構（3号溝と4号溝）を切っている。壁高は約37cmである。弥生土器の台付甕などが出土している。

7号竪穴住居跡

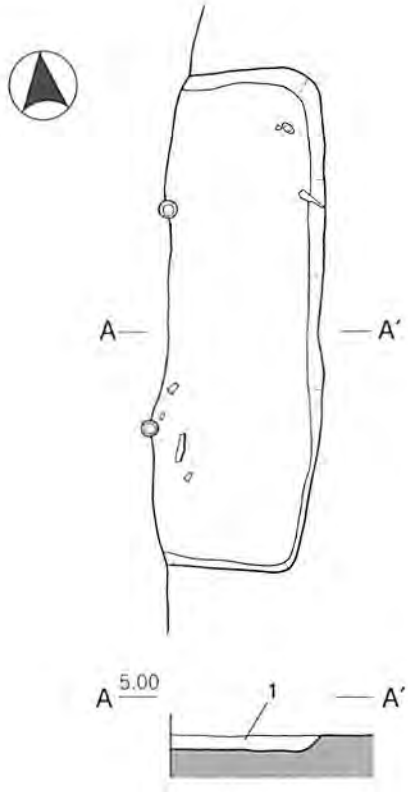
II区の南西側D-16・17グリッドに位置する。6号竪穴住居跡同様、近代溝に切られているため、形状は正確に確認できていないが、長軸3.35m、主軸方位がN-5°-Wの長方形または方形を呈していたと推定される。柱穴、貯蔵穴等は確認できていない。壁高は約12cmである。

8号竪穴住居跡

II区のC・D-17・18グリッドに位置する。6号竪穴住居跡や7号竪穴住居跡同様、近代溝に切られているため、形状は正確に確認できていないが、長軸3.91m、主軸方位がN-6°-Eで、4本柱の長方形または方形を呈していたと推定される。貯蔵穴、硬化面は確認できていない。ピットが2つあるが、その大きさから住居の柱穴とはなり得ず、この遺構に伴うものではないと判断した。壁高は約10cmである。人

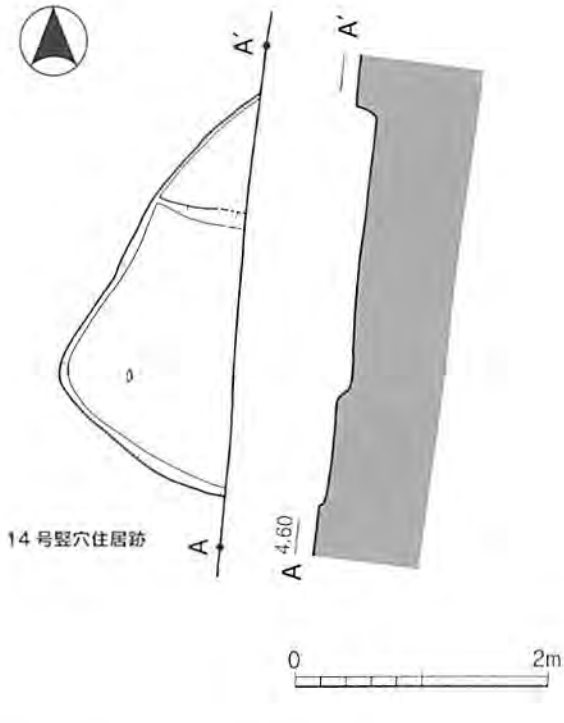


7 号竪穴住居跡

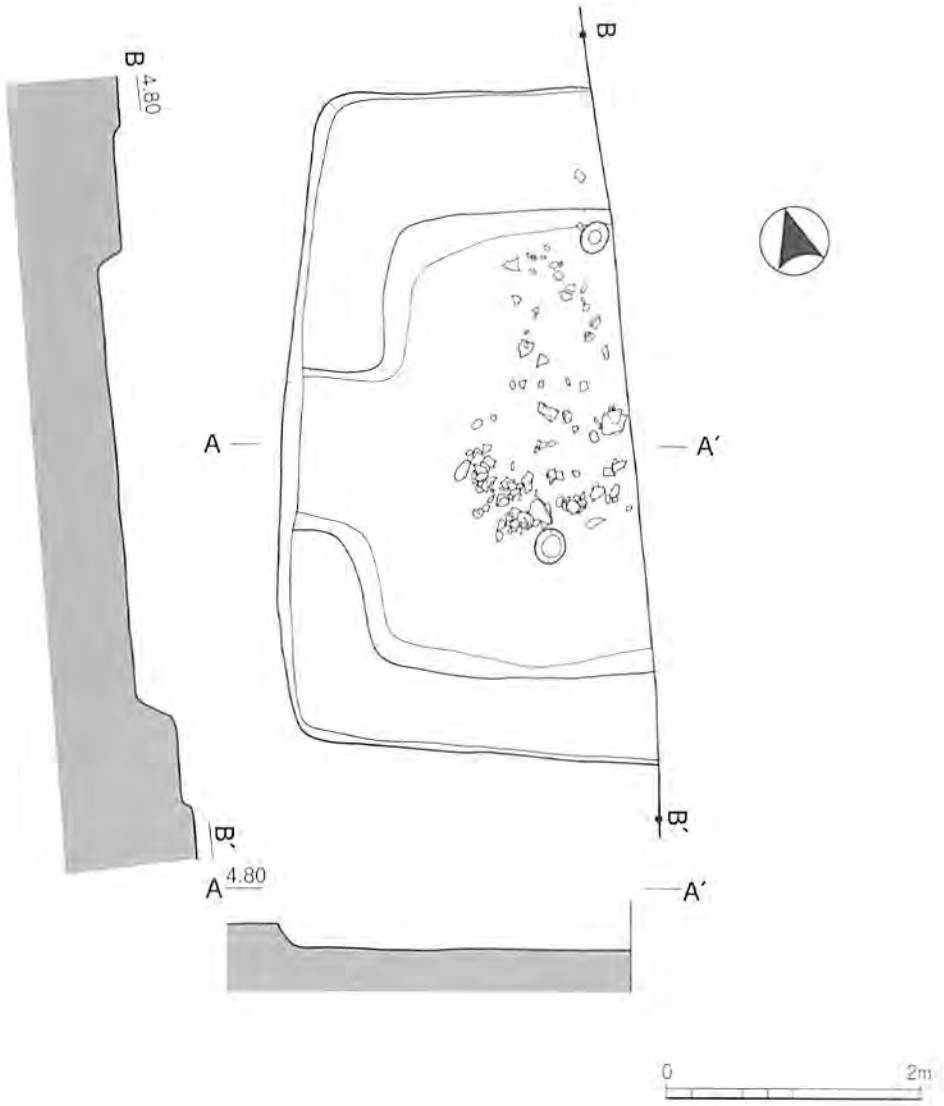


8 号竪穴住居跡

1 層　黒暗褐色土（7.5YR3/2）
粘性やや強い。しまりやや弱い。遺物を少量含む。



第 29 図　7号・8 号・13 号・14 号竪穴住居跡、22 号土坑実測図



第 30 図　9号竪穴住居跡実測図

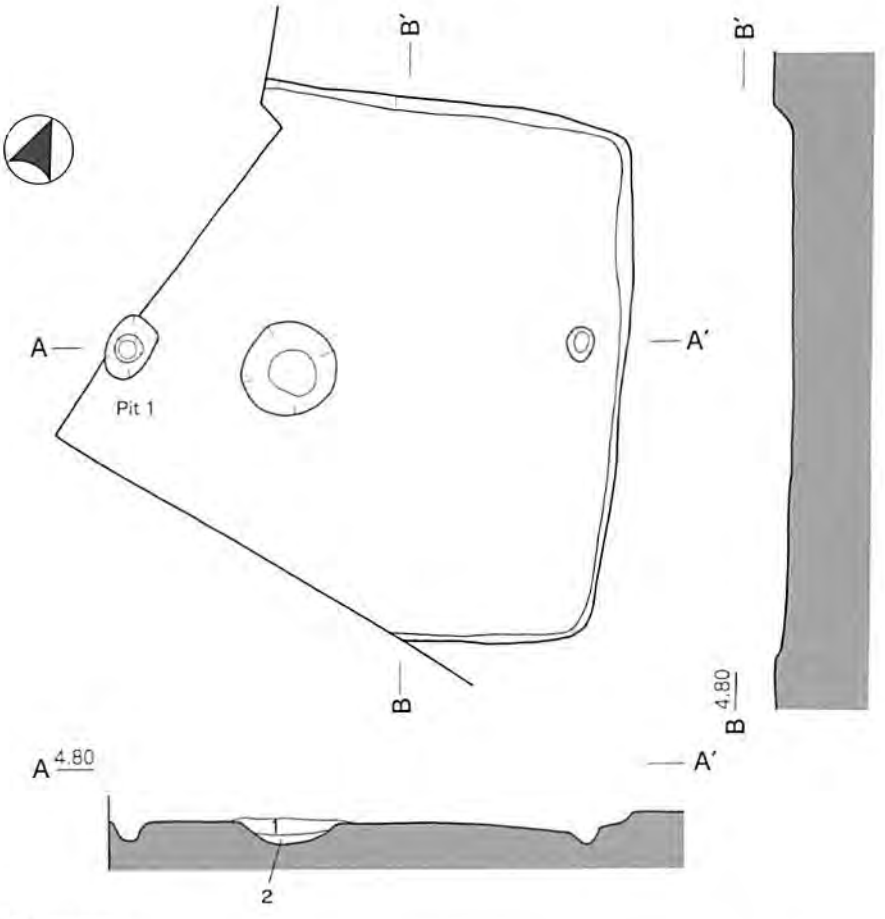
骨（四肢骨片）や弥生土器の小型杯が出土している。

9 号竪穴住居跡

III 区のC･D-22･23 グリッドに位置する。東側が調査区外のため、形状は正確に確認できていないが、長軸 5.21m、主軸方位が N-75°-W の長方形または方形を呈していたと推定される。北側と南側に約 20cm ベット状の高まりが確認されている。柱穴は 2 本確認されており、深さは約 20cm 程度であった。湧水のため、炉跡、貯蔵穴等は確認できなかった。壁高は約 31cm である。人骨（大腿骨の一部）や弥生土器の壺などとともに磨製石斧が出土している。

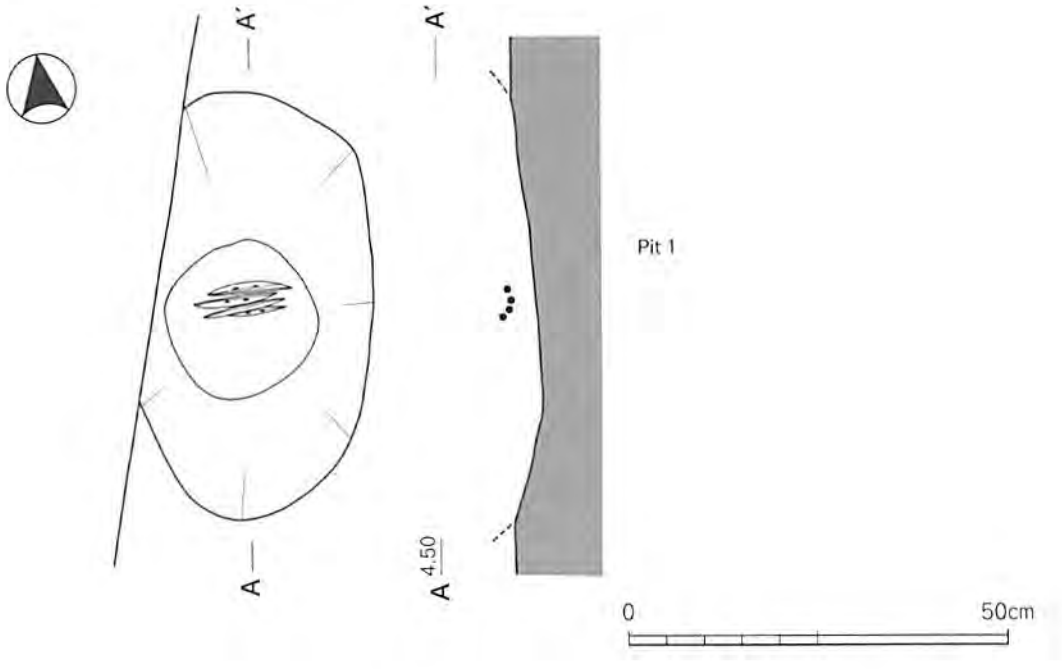
10 号竪穴住居跡

III 区のB･C-22･23に位置する。近代溝に西側が切られているため、形状は正確に確認できていないが、短軸 4.26m、主軸方位がN-23°-Wの長方形を呈していたと推定される。貯蔵穴は確認されていないが、中央に炉跡、東側と西側に柱穴がある。西側に柱穴からは、石包丁が 4 個出土した。壁高は約 8cm で、柱穴の深さは約 11cm である。

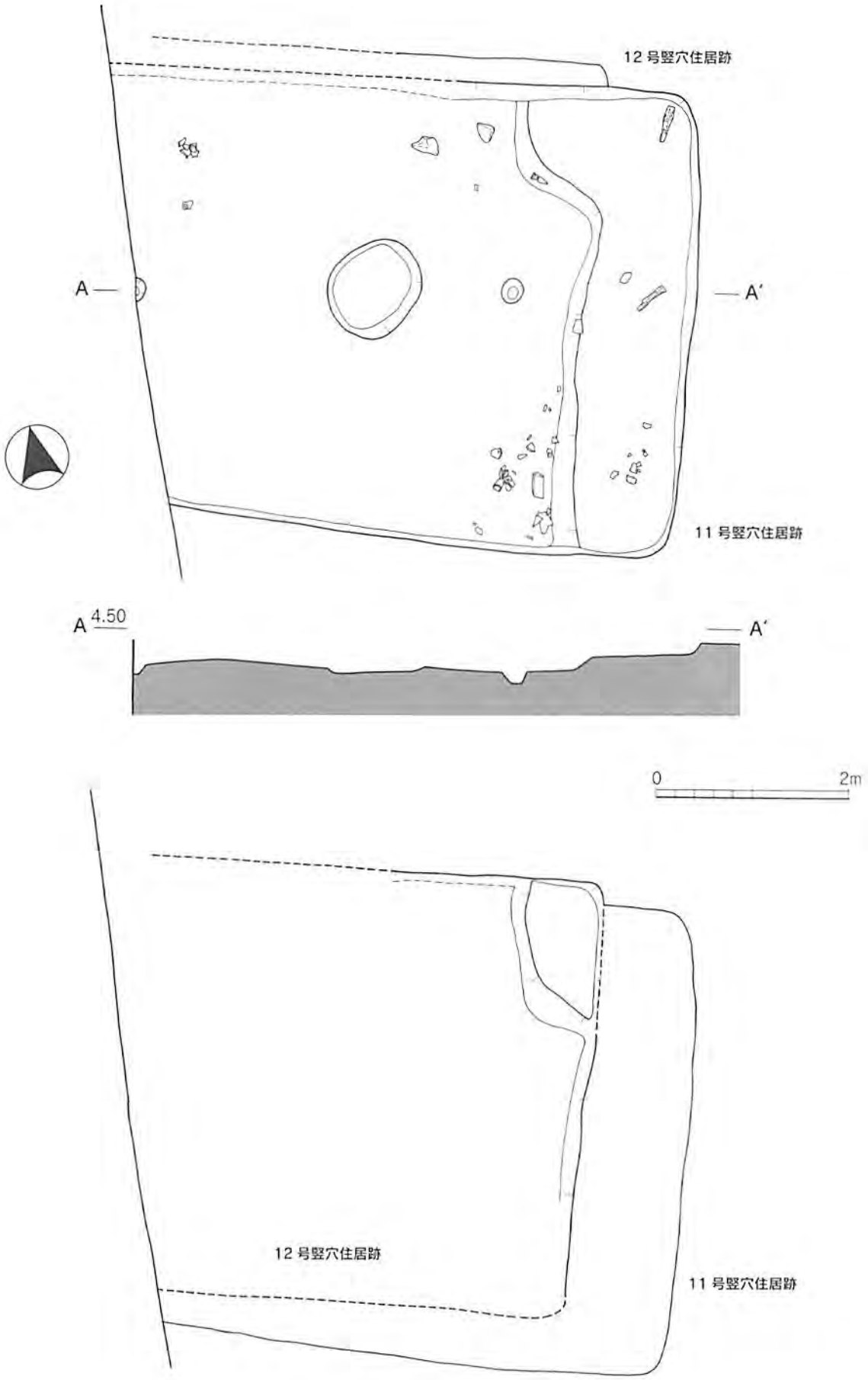


10 号竪穴住居跡

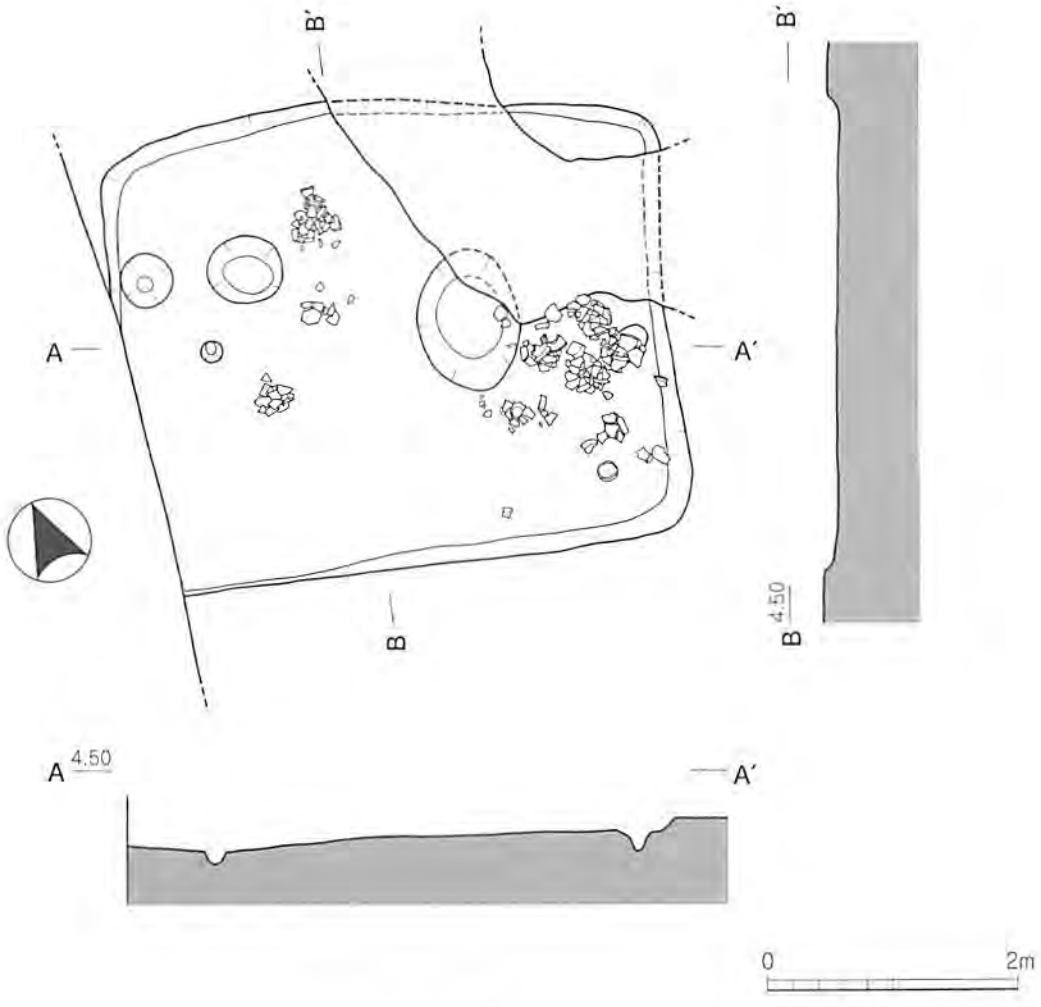
1層　灰オリーブ色土（5YR4/2）　粘性・しまり弱め、砂質多く含む。
　　多量の焼土含む。
2層　黒色土（10YR7/1）　しまり弱い。炭化物あり。



第 31 図　10 号竪穴住居跡・10 号竪穴住居跡内 Pit 遺物出土状況実測図



第 32 図　11 号・12 号竪穴住居跡実測図



第 33 図　15 号竪穴住居跡実測図

11 号竪穴住居跡

III 区の B･C-23･24 グリッドに位置する。西側が調査区外のため、形状は正確に確認できていないが、短軸 4.76m、主軸方位が N-22°-E の長方形を呈していたと推定される。中央に炉跡と東側に約 10cm 程度ベッド状の高まりが確認されている。柱穴が東側にあり、2 本柱だった可能性が高い。壁高は約 34cm で、柱穴の深さは約 10cm である。弥生土器が多量に出土しており、人骨（大腿骨）、磨製石鏃も出土している。

12 号竪穴住居跡

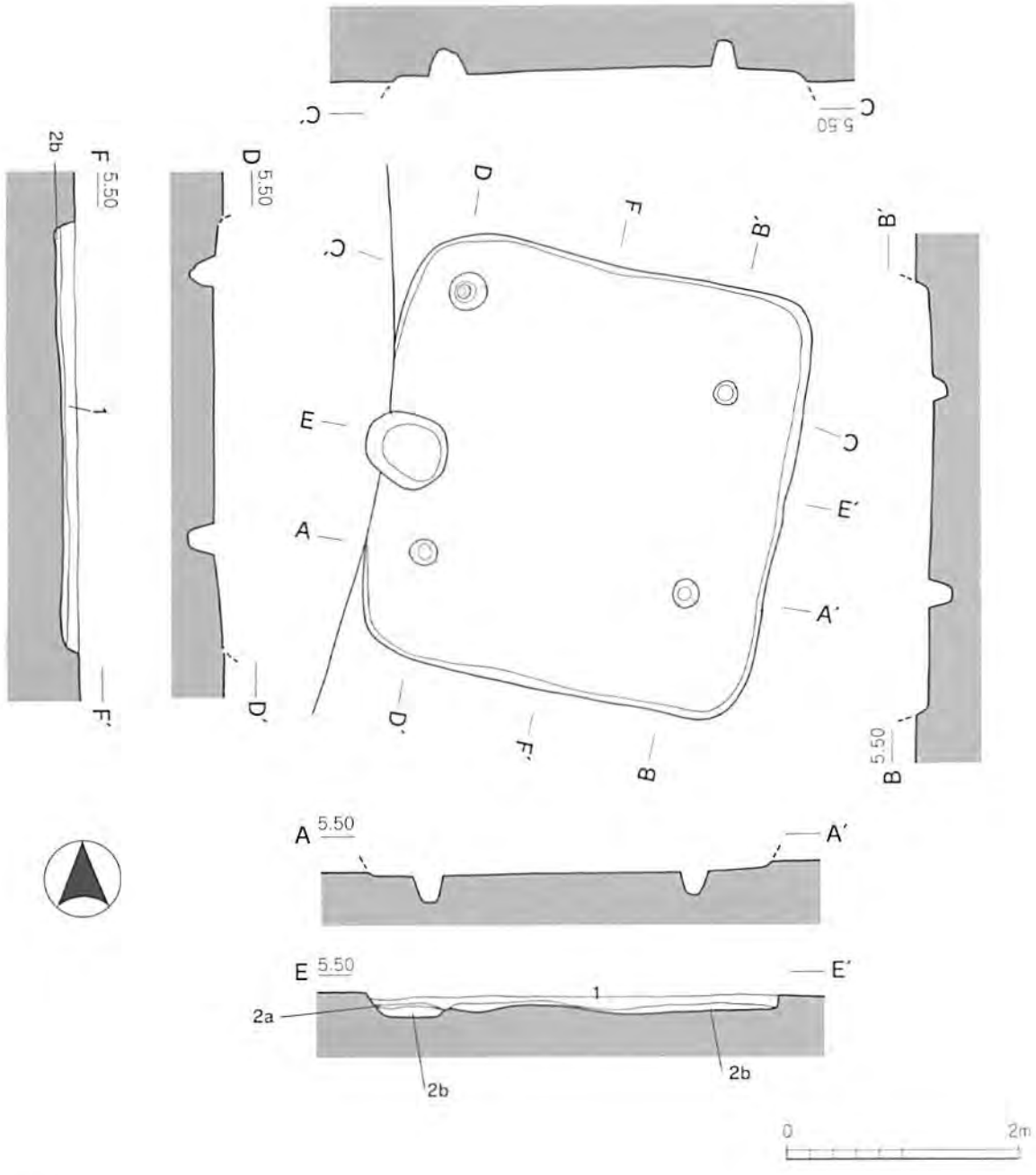
11 号竪穴住居跡に切られているため、正確な形状、柱穴、炉跡等は確認できなかった。掘削当初は 11 号竪穴住居跡に建て替えられたと考えていたが、12 号竪穴住居跡からは弥生時代中期と思われる鉢の口縁部が出土しており、11 号竪穴住居跡の出土遺物（弥生時代後期の土器が中心）とは時期差があり、建て替えの可能性はほとんどないことが分かった。

13 号竪穴住居跡

III 区の C･D-25 グリッドに位置する。東側が調査区外のため、形状は正確に確認できていないが、長軸 4.15m の長方形または方形を呈していたと推定される。柱穴、貯蔵穴、炉跡等は確認できなかった。わずかだが、北側にベッド状の高まりが確認されている。弥生土器の甕の底部が出土している。

14 号竪穴住居跡

III 区の C･D-25 グリッドに位置する。東側が調査区外のため、形状は正確に確認できなかった。北側



16 号竪穴住居跡

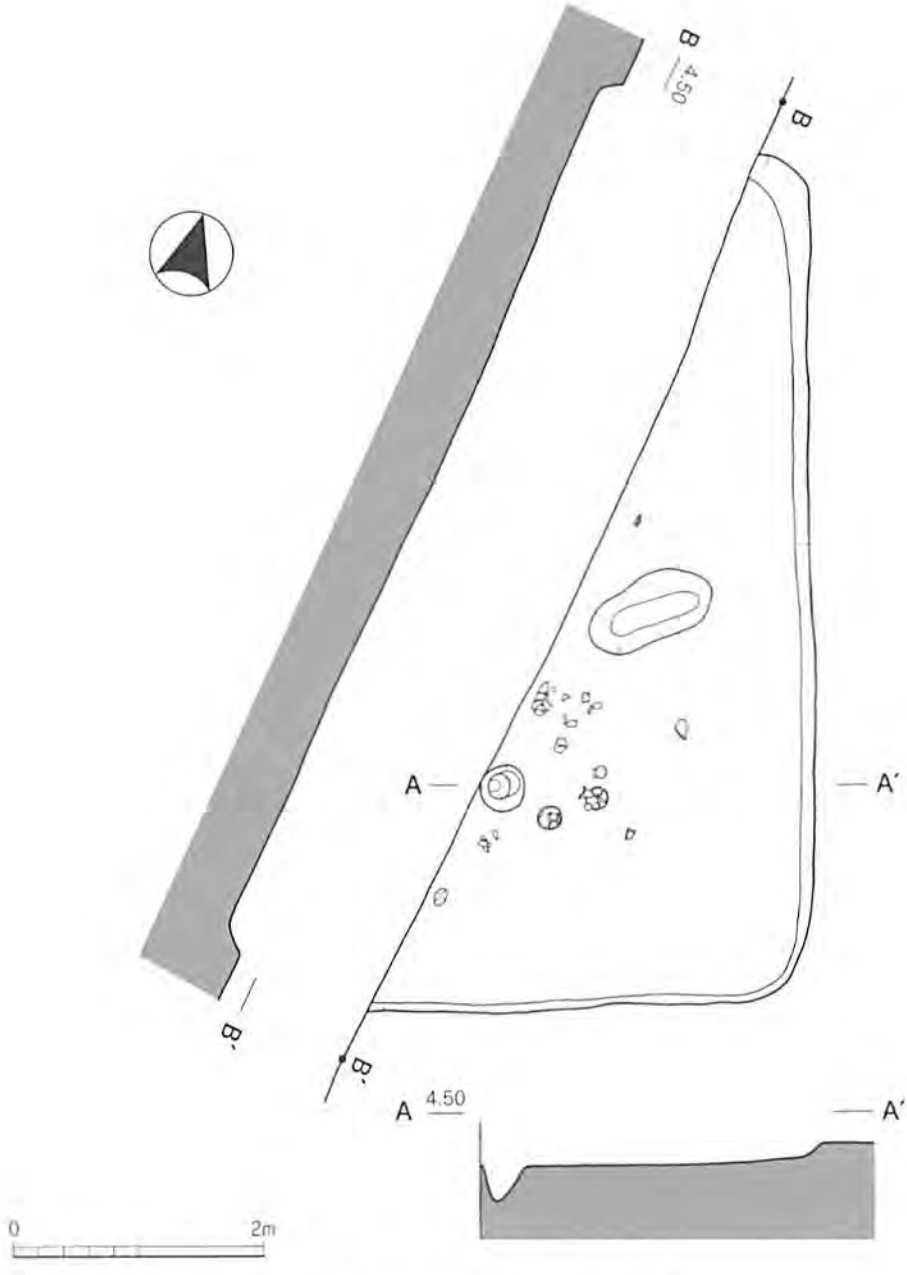
1 層　暗褐色粘質土(7.5YR3/4)　　ややしまりあり。
2a 層　にぶい赤褐色粘質土(5YR4/4)　しまりなし。多量の焼土・炭化物を含む。
2b 層　黒褐色粘質土(7.5YR3/4)　　しまりやや強い。炭化物を多く含む。

第 34 図　16 号竪穴住居跡実測図

にベッド状の高まりが確認されている。壁高は約 20cm である。

15 号竪穴住居跡

III 区の B･C-26･27 グリッドに位置する。長軸 4.48m、短軸 3.72m、主軸方位が N-17°-E の長方形を呈しており、湧水のため、貯蔵穴、炉跡等は確認されていない。柱穴は東西にあり、2 本柱だった。他にある 3 つの柱穴はこの住居に伴っていないようである。壁高は約 8cm で、柱穴の深さは約 10cm である。弥生土器の台付甕などが出土している。



第 35 図　17 号竪穴住居跡実測図

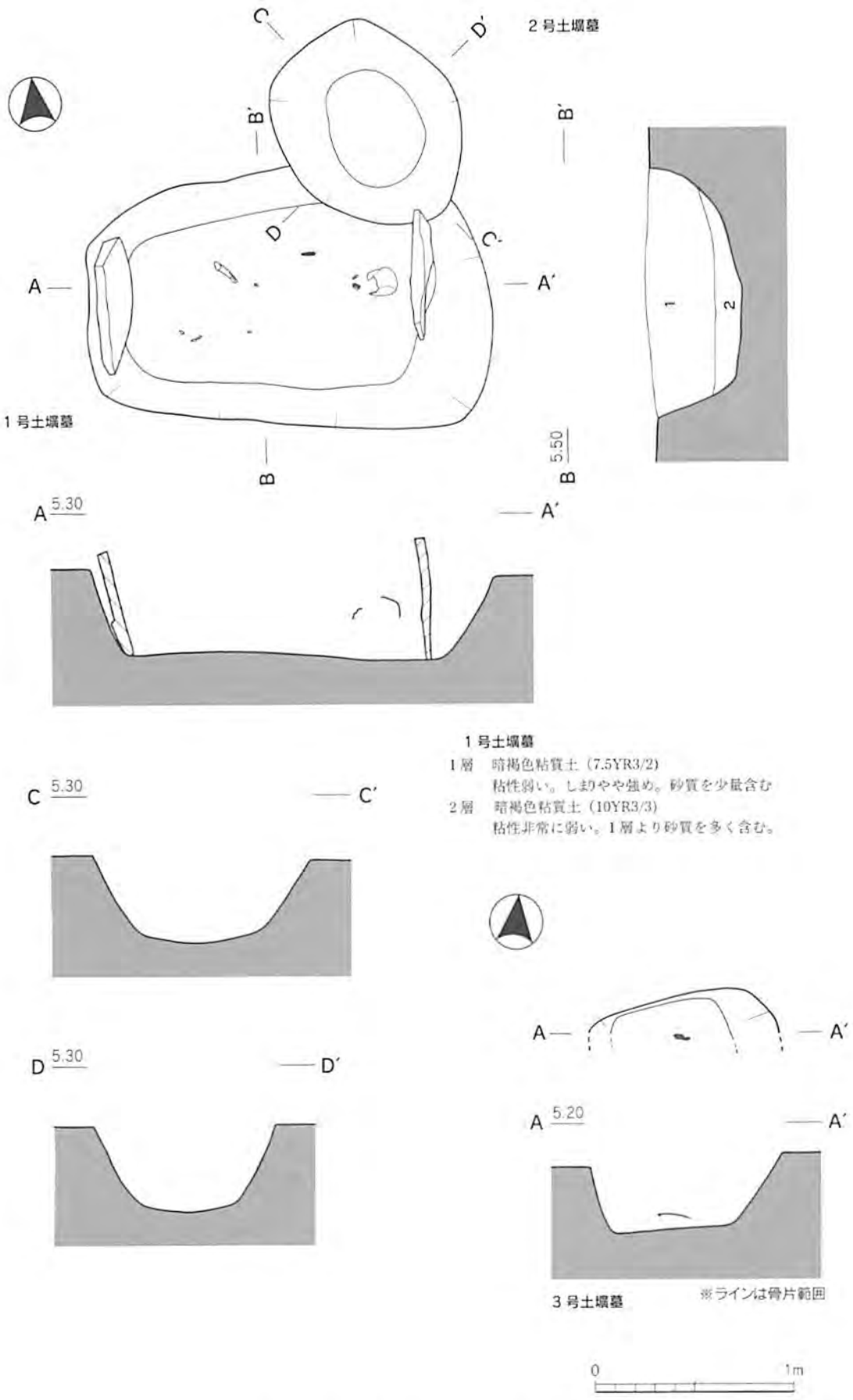
16 号竪穴住居跡と 17 号竪穴住居跡は、その形状または出土遺物から、古代の竪穴住居跡と判断した。

16 号竪穴住居跡

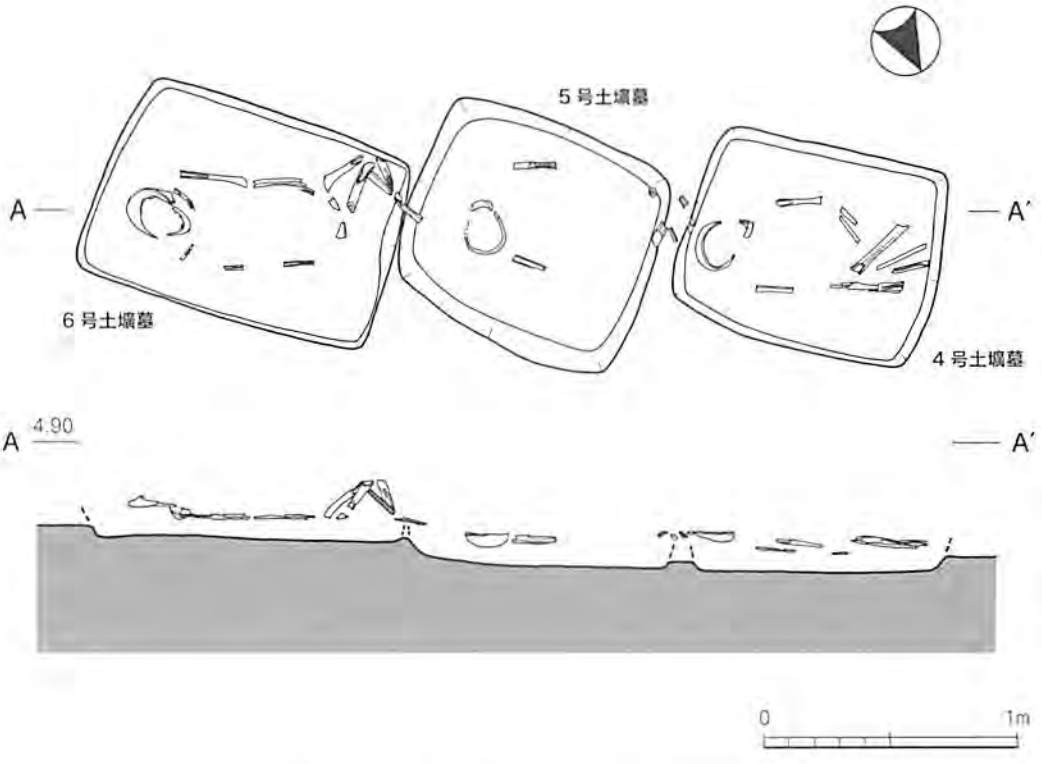
II 区の D･E-12･13 グリッドに位置する。一辺約 3.75m、主軸方位が N-80°-W、4 本柱の方形を呈していたと推定される。近代溝に切られているため、正確に確認できていないが、壁際に赤い焼土が出土していることから、西側に竈があったと思われる。出土遺物は古代の須恵器の杯が出土している。壁高は約 10cm で、柱穴の深さは約 20cm である。

17 号竪穴住居跡

III 区の B･C-22-24 グリッドに位置する。西側が調査区外のため、形状は正確に確認できていないが、長軸 6.64m、主軸方位が N-71°-E の長方形を呈していたと推定される。湧水のため、貯蔵穴、炉跡等は確認できなかったが、南側に柱穴が 1 つ確認されている。壁高は約 11cm で、柱穴の深さは約 25cm である。古代の土師器などが出土している。



第36図　1号・2号・3号土壙墓実測図



第37図　4号・5号・6号土壙墓実測図

(2) 土壙墓

1号土壙墓

III区のD-21グリッドに位置する。墓壙は、長軸2.05m、短軸1.24m、主軸方位N-82°-Wの不定型な楕円形を呈している。墓壙深は約49cmであり、東西に巨石が埋置してあった。頭蓋と大腿骨の一部が出土しており、頭位は東側であった。

2号土壙墓

III区のD-21グリッドに位置する。墓壙は長軸1.09m、短軸0.91m、主軸方位N-33°-Wのやや不定型な円形を呈している。墓壙深は約28cmである。骨粉が出土している。

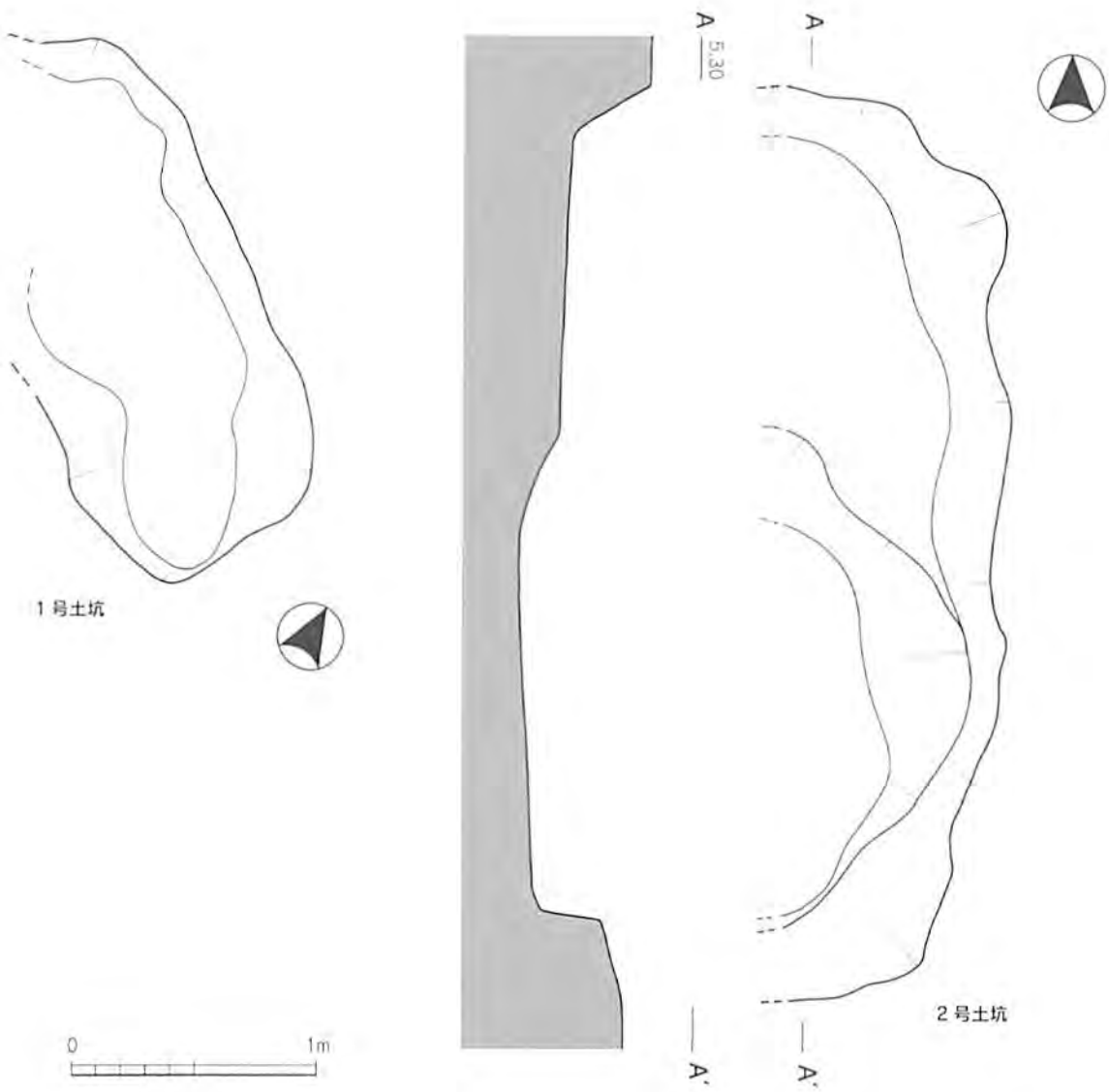
3号土壙墓

III区のC-22グリッドに位置する。この辺りから南側に緩やかに地表面が傾斜するので、重機及び人力で掘削を行うことにしたが、その作業中にこの遺構を検出したので、南側は掘削されていた。墓壙の正確な形状は分からないが、長軸0.96mの長方形と推定される。墓壙深は約34cmであった。顎骨等が出土している。

4号から6号土壙墓は、湧水があり、人骨を検出するまで、土壙墓の存在が認識できなかった。III区のC-22グリッドに位置する。人骨は3体が少し重なり合うように縦に並んでおり、頭位は3体とも東であった。墓壙の大きさや人骨の埋葬状況などから判断して、同じ時期に同じ土壙墓に埋葬された可能性が高い。

4号土壙墓

墓壙は、長軸1.19m、短軸0.84m、主軸方位N-45°-Eの長方形を呈している。



第38図　1号・2号土坑実測図

5号土壙墓

墓壙は、長軸1.00m、短軸0.89m、主軸方位N-42°-Eの長方形を呈している。

6号土壙墓

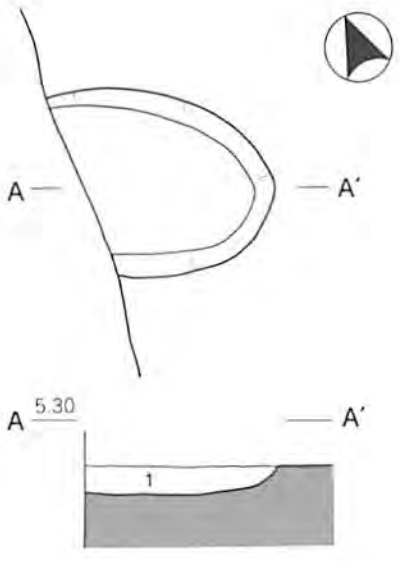
墓壙は、長軸1.01m、短軸0.81m、主軸方位N-50°-Eの長方形を呈している。6号土壙墓の人骨の腹部から磨製石鏃が出土している。位置関係から、体内にあったものと想定され、副葬品とは考えられず、射こまれた可能性もある。

(3) 土坑

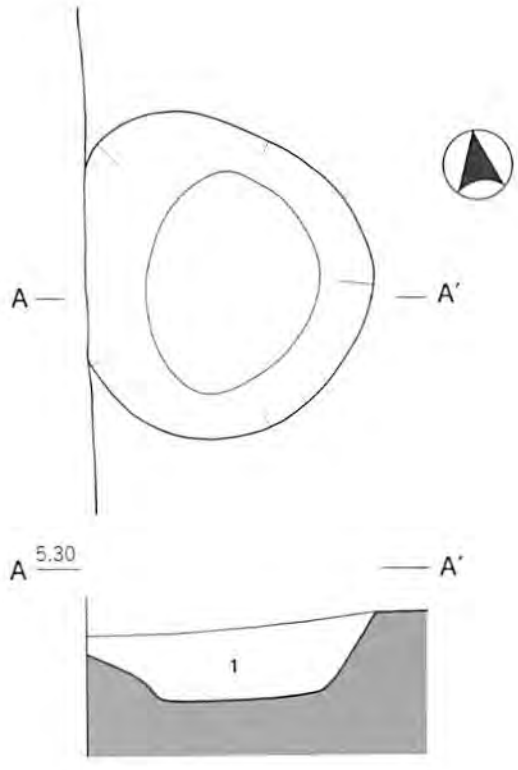
土坑の多くが、甕棺墓の近く位置すること、底面にフラットな面をもつこと、また、中には、骨片や歯が出土したものもあることから、土壙墓だった可能性がある。ただし、住居跡から骨片や歯が出土した例もあり、土壙墓と判断できる明確な理由（頭蓋骨等の人骨が出土した等）がない場合は土坑とした。

1号土坑

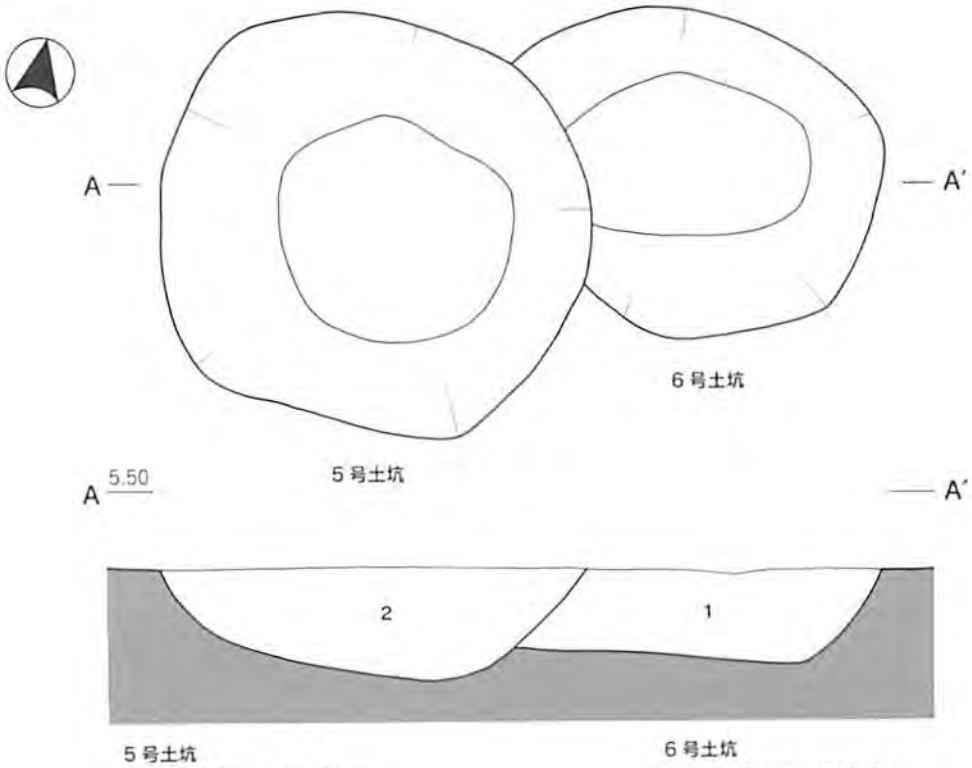
1区のF-5グリッドに位置する。2号溝に切られているため、形状は正確に確認できていないが、長軸2.35m、短軸約1.00mのほぼ長方形を呈している。出土遺物がないが、2号溝に切られ、2号竪穴住居跡



3号土坑
1層　極暗褐色粘質土（7.5YR2/3）
粘性・しまりやや弱め。砂質あり。



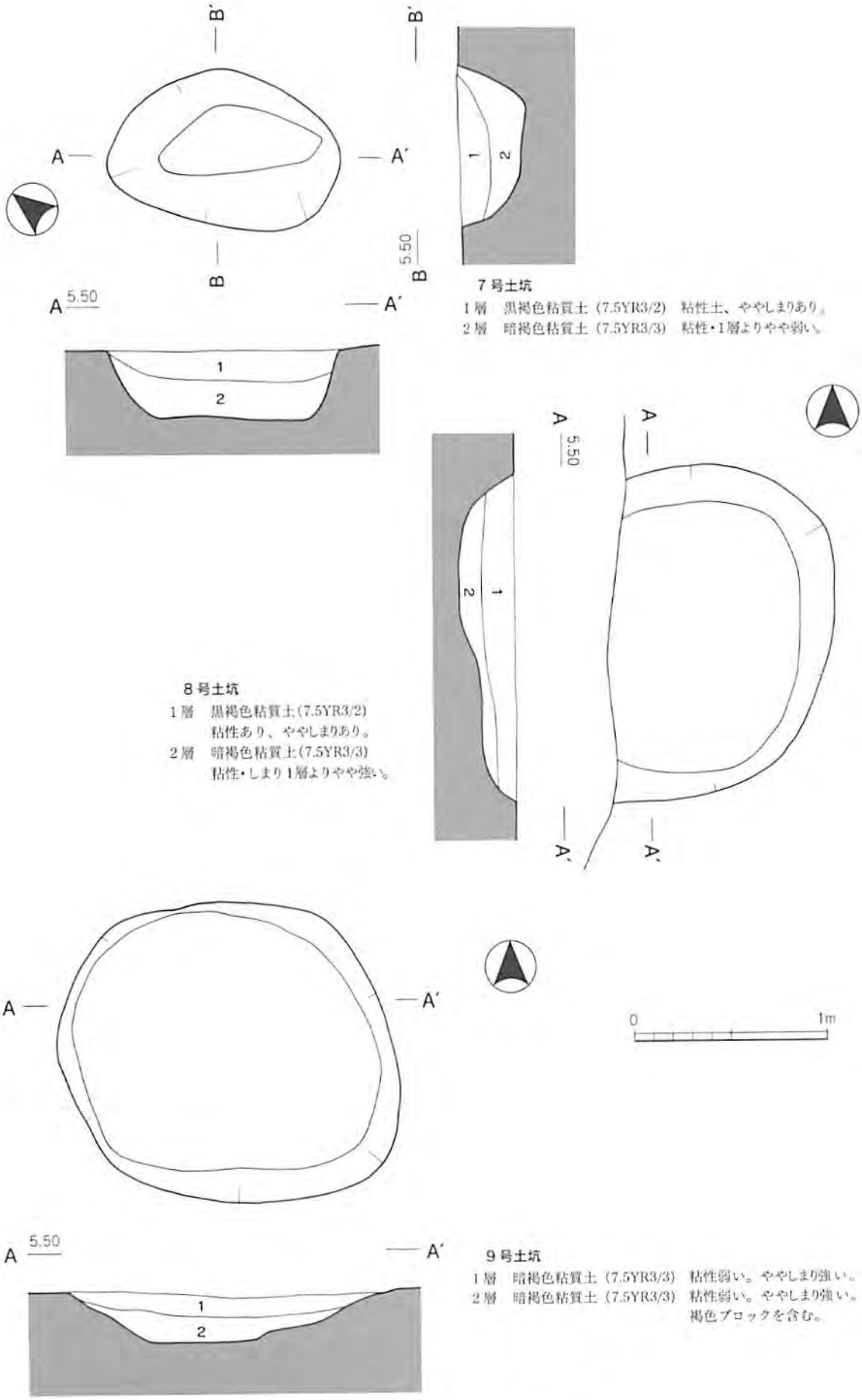
4号土坑
1層　極暗褐色粘質土（7.5YR2/3）
粘性・しまり弱い。砂質あり。



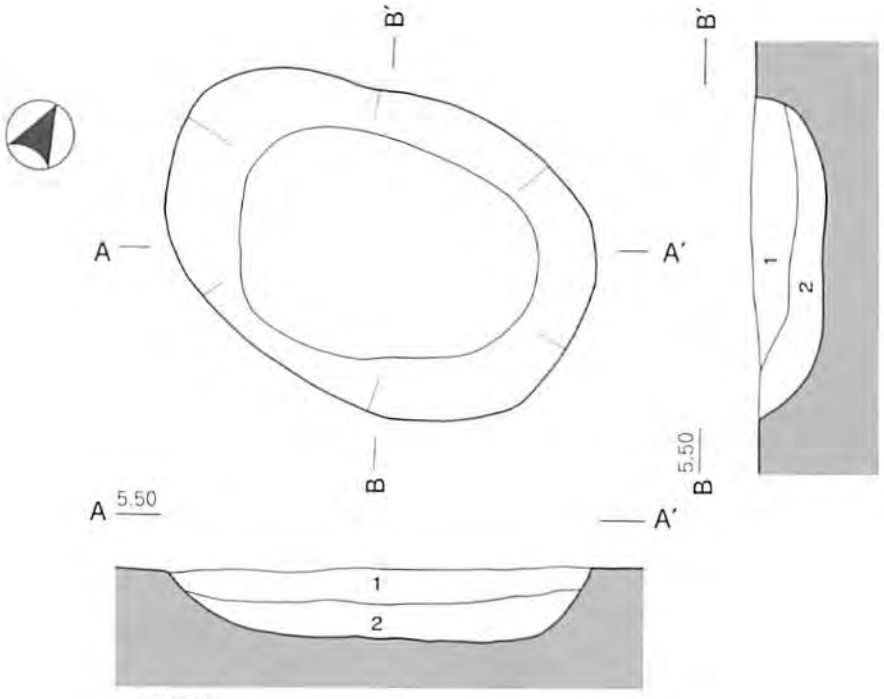
5号土坑
2層　暗褐色粘質土(7.5YR3/3)
粘性・しまりやや弱い。

6号土坑
1層　暗褐色粘質土(7.5YR3/3)
粘性・しまりやや弱い。

第39図　3号・4号・5号・6号土坑実測図

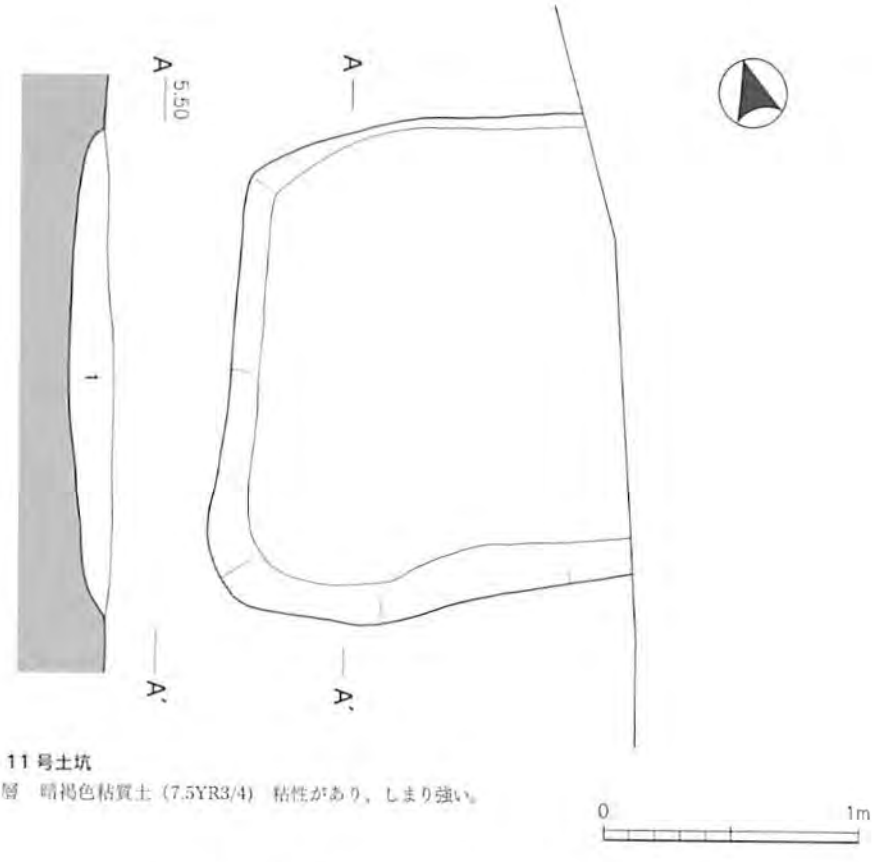


第40図　7号・8号・9号土坑実測図



10号土坑

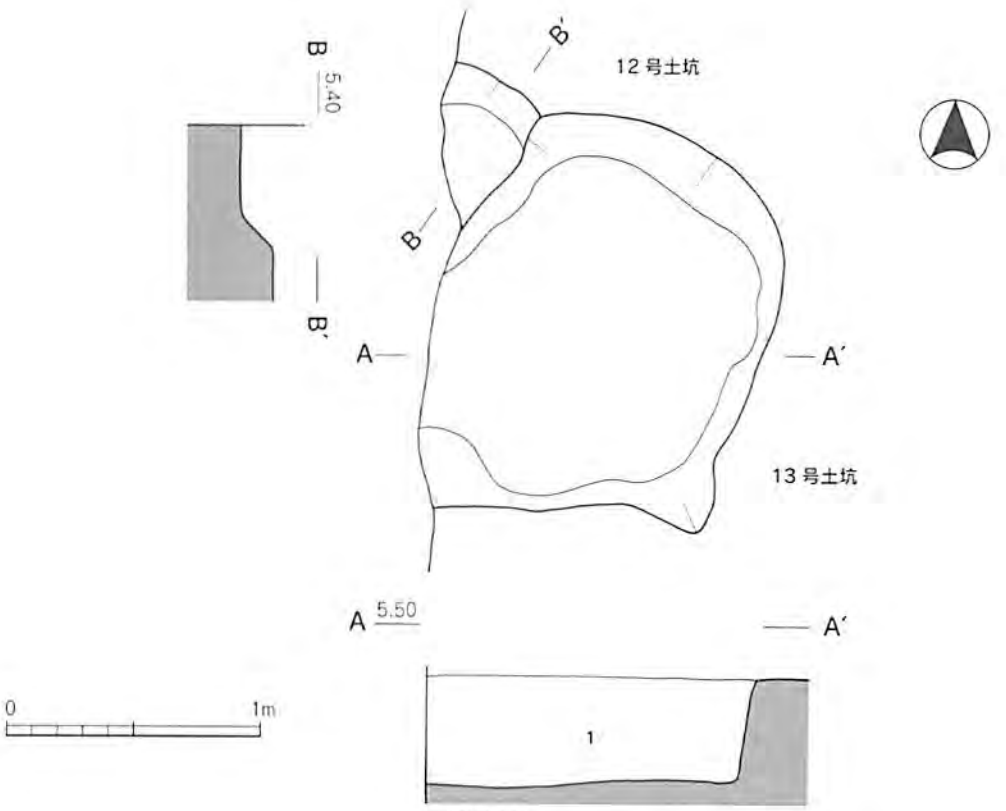
1層　暗褐色粘質土（7.5YR3/3）　粘性があり、固くしまる。
2層　暗褐色粘質土（7.5YR3/4）　粘性があり、ややしまる。



11号土坑

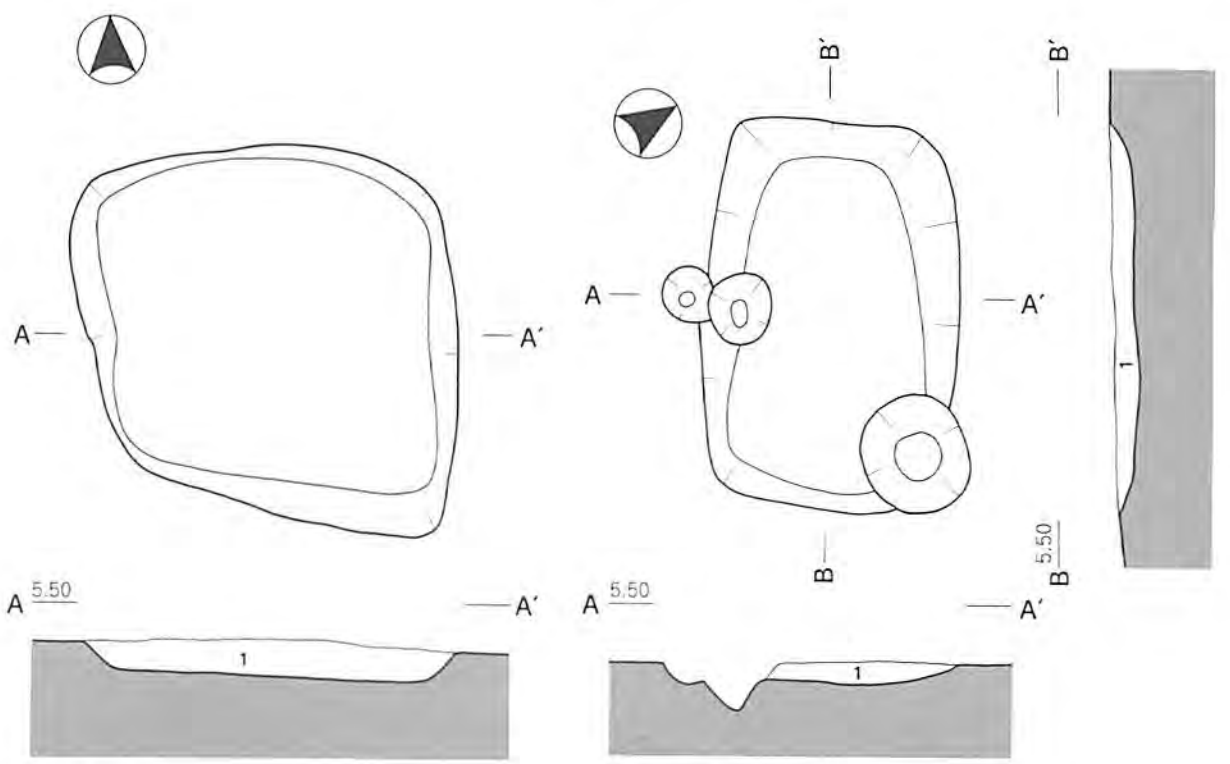
1層　暗褐色粘質土（7.5YR3/4）　粘性があり、しまり強い。

第41図　10号・11号土坑実測図



13 号土坑

1 層　暗褐色粘質土（7.5YR3/3）
　　粘性があり、比較的よくしまる。



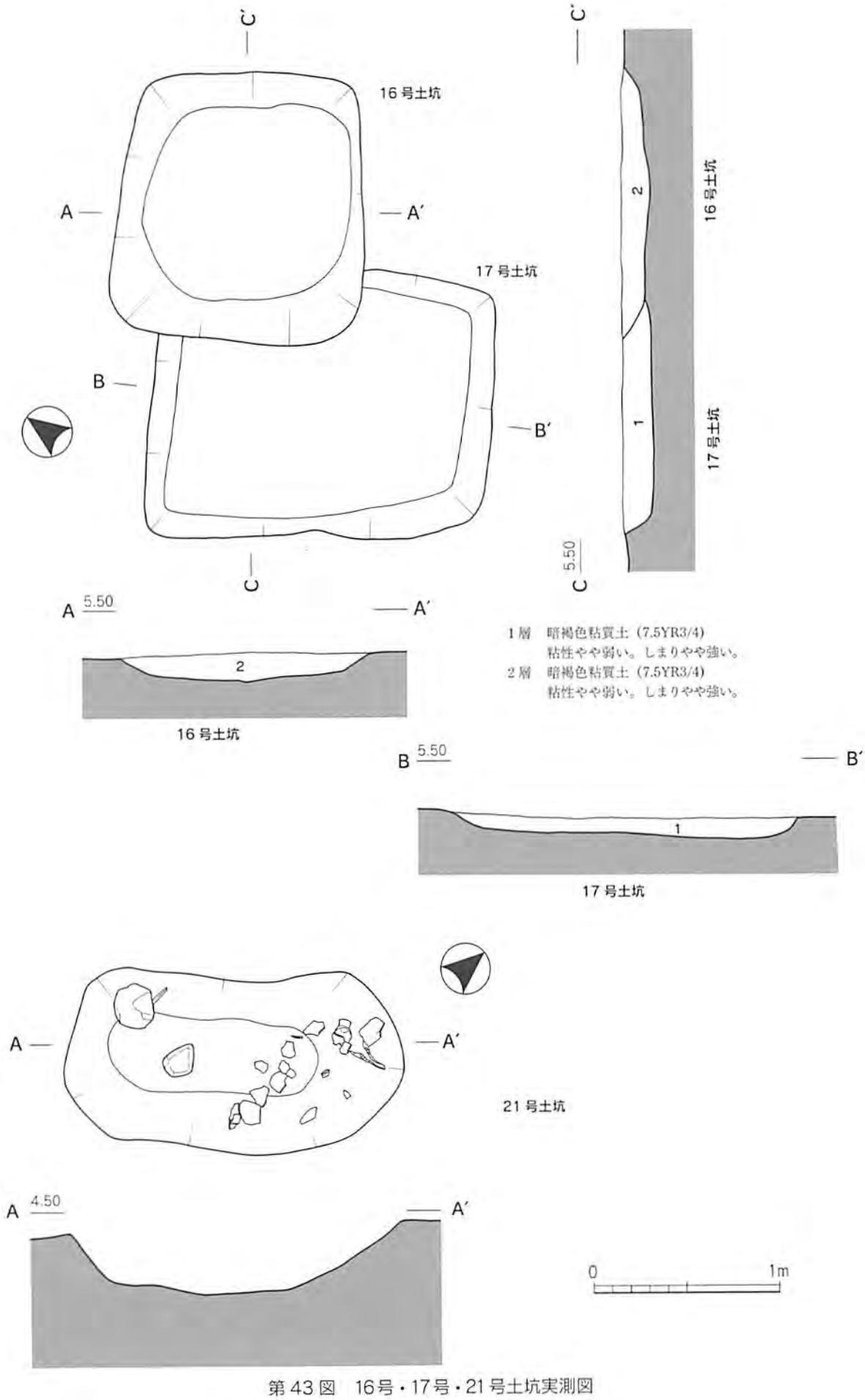
14 号土坑

1 層　暗褐色粘質土（7.5YR3/3）
　　粘性やや弱い。しまりやや強い。

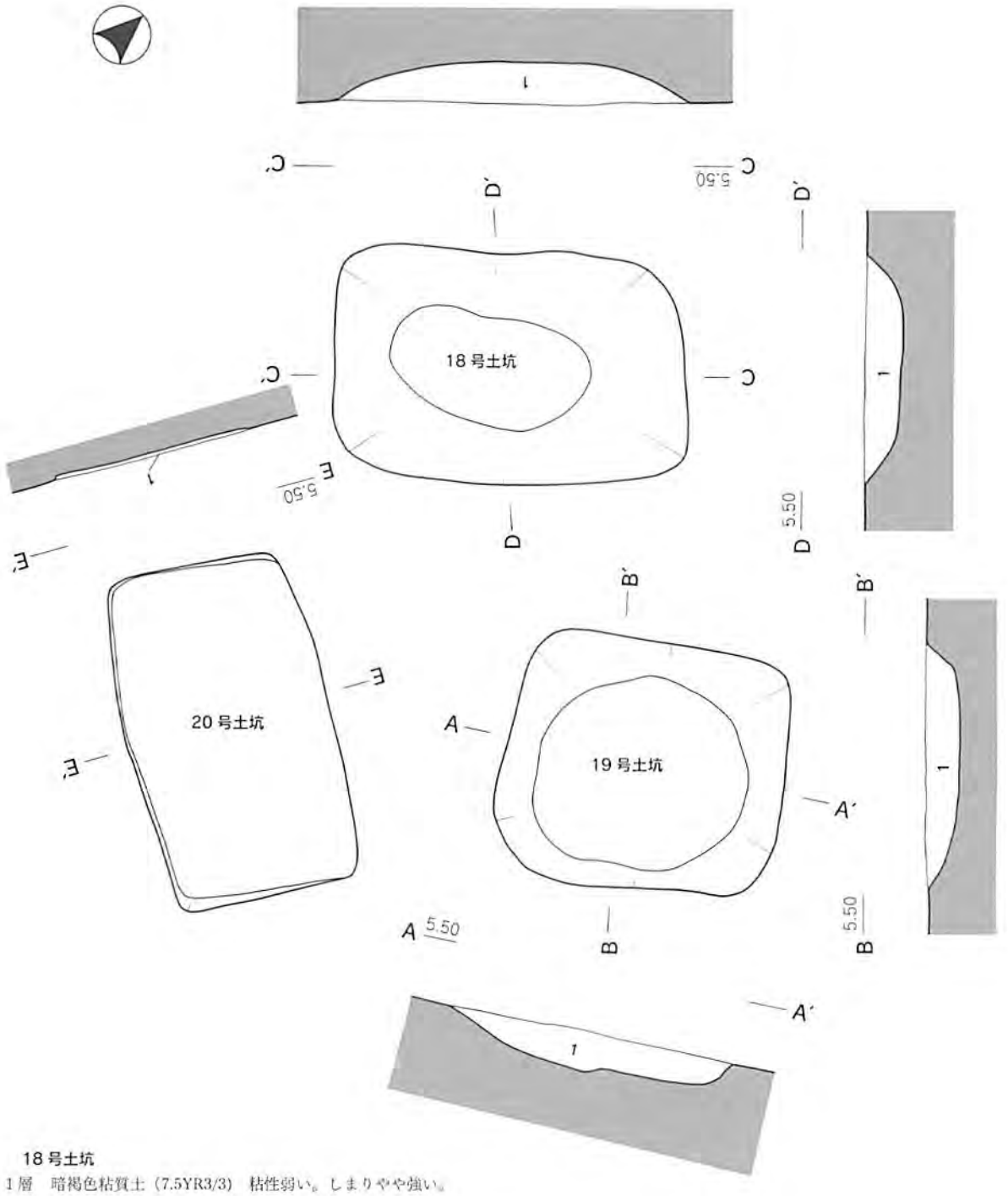
15 号土坑

1 層　暗褐色粘質土（7.5YR3/3）
　　粘性弱い。しまりやや弱い。

第 42 図　12号・13号・14号・15号土坑実測図



第43図　16号・17号・21号土坑実測図



18 号土坑

1 層　暗褐色粘質土（7.5YR3/3）　粘性弱い。しまりやや強い。

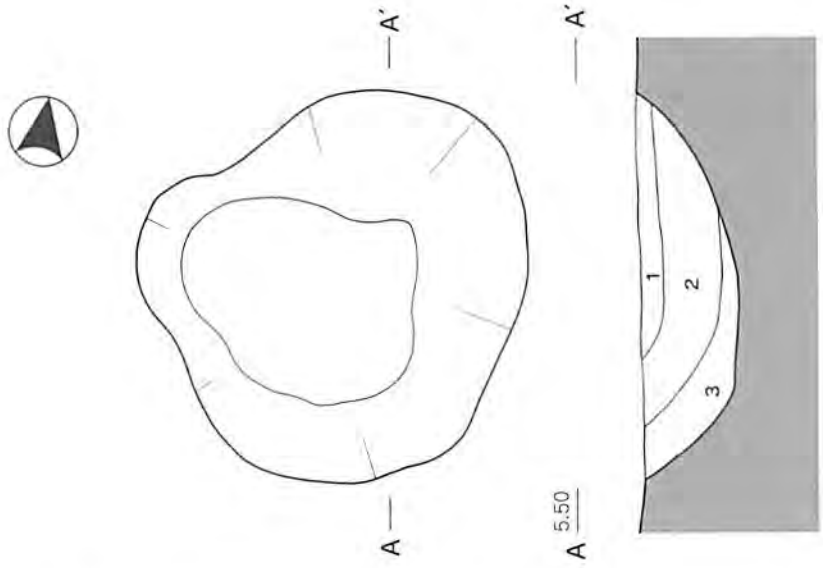
19 号土坑

1 層　暗褐色粘質土（7.5YR3/3）　粘性弱い。しまりやや弱い。砂混入

20 号土坑

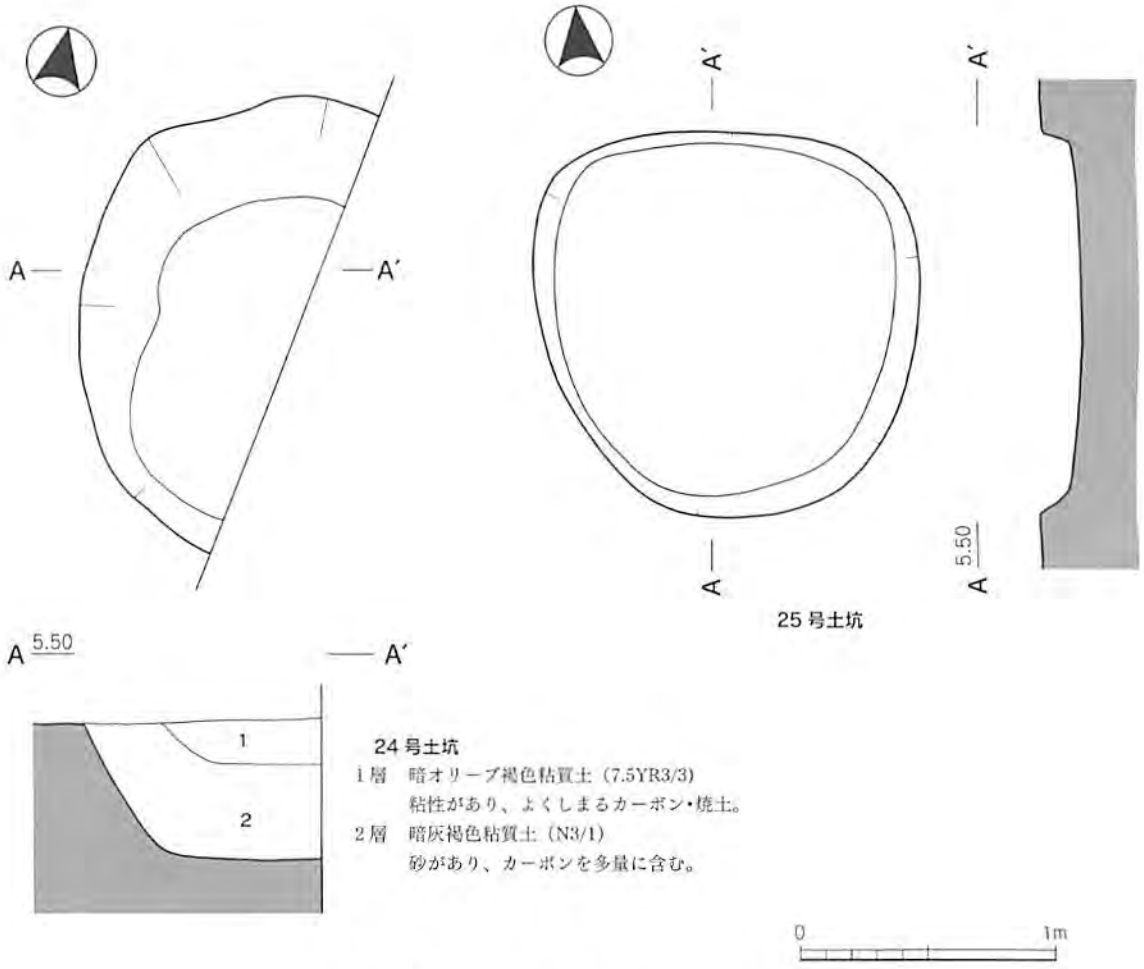
1 層　暗褐色粘質土（7.5YR3/4）　粘性弱い。しまりやや弱い。

第 44 図　18号・19号・20 号土坑実測図



23 号土坑

1 層　黒褐色粘質土（2.5YR3/2）固くしまる。カーボンを多く含む。
2 層　黒褐色粘質土（10YR3/3）粘性があり、砂質を少し含む。
3 層　黒褐色粘質土（7.5YR3/2）粘性があり、しまり弱い。2 層に比べ砂質多い。



25 号土坑

24 号土坑

1 層　暗オリーブ褐色粘質土（7.5YR3/3）
　　粘性があり、よくしまるカーボン・焼土。
2 層　暗灰褐色粘質土（N3/1）
　　砂があり、カーボンを多量に含む。

0　1m

第 45 図　23号・24号・25号土坑実測図

を切っている関係から、弥生時代と判断した。

2号土坑

I区のE-5グリッドに位置する。西側に水抜き溝を切ったため、正確な形状は確認できていないが、長軸3.68mのやや不定形な長方形又は方形呈をしている。深さは約50cmであり、底面は2段にフラットな面をもっている。その大きさから竪穴住居跡だった可能性もあるが、壁面のラインが直線になっていないと判断したため、土坑とした。弥生土器片が出土している。

3号土坑

II区のE-9グリッドに位置する。西側を近代溝に切られているため、形状は正確に確認できていないが、短軸0.73m、主軸方位がN-66°-Wの楕円形を呈している。深さは約11cmであり、底面はフラットな面をもつ。骨粉等は確認されていないので土坑としたが、近くに4号甕棺墓があることから、土壙墓だった可能性もある。

4号土坑

II区のE-9グリッドに位置する。4号土坑同様に西側をわずかに近代溝に切られているため、形状は正確に確認できていないが、長軸1.24m、主軸方位がN-14°-Eのほぼ円形を呈している。深さは約28cmであり、底面は楕円状にほぼフラットな面をもっている。こちらも3号土坑と同様の理由で、土壙墓だった可能性もある。

5号土坑

II区のE-10グリッドに位置する。長軸1.74m、短軸1.58m、主軸方位がN-87°-Wのほぼ隅丸方形を呈している。深さは約46cmであり、底面は少し東側に傾斜している。6号土坑を切っている。

6号土坑

II区のE･F-10グリッドに位置する。7号土坑に切られているため、形状は正確に確認できていないが、短軸1.29m、主軸方位がN-78°-Eの楕円形を呈している。深さは約38cmであり、底面にフラットな面がある。

7号土坑

II区のE-10グリッドに位置する。長軸1.21m、短軸0.81m、主軸方位がN-39°-Wのやや不定形な楕円形を呈している。深さは約36cmあり、底面にほぼフラットな面がある。

8号土坑

II区のE-10･11グリッドに位置する。西側を近代溝に切られているため、形状は正確に確認できていないが、長軸1.71m、主軸方位がN-3°-Eのやや不定形な隅丸方形を呈している。深さは約29cmであり、底面に2段のほぼフラットな面がある。骨片と歯が出土しており、土壙墓だった可能性もある。

9号土坑

II区のE-10･11グリッドに位置する。長軸1.78m、短軸1.54m、主軸方位がN-56°-Wのやや不定形な円形を呈している。深さは約26cmであり、底面はほぼフラットに近い状態であった。

10号土坑

II区のE-11グリッドに位置する。長軸1.69m、短軸1.26m、主軸方位がN-56°-Eのやや不定形な楕円形をしている。深さは約30cmであり、底面にほぼフラットな面がある。歯が出土しており、土壙墓だった可能性もある。

11号土坑

II区のE-10･11グリッドに位置する。東側が調査区外のため、形状は正確に確認できていないが、長軸1.92m、主軸方位がN-11°-Eのやや不定形な方形又は長方形を呈している。深さは約15cmであり、底面にはほぼフラットな面がある。

12 号土坑

II 区のD･E･11 グリッドに位置する。西側を近代溝に、東側を 14 号土坑に切られているため、形状は正確に確認できなかった。ピットと考えるには大きすぎるために土坑とした。

13 号土坑

II 区のE･11･12 グリッドに位置する。西側を近代溝に切られているために、形状は正確に確認できていないが、長軸 1.54m、主軸方位は南北軸のやや不定形な方形を呈している。深さは約 42cm であり、底面にほぼフラットな面がある。歯が出土しており、土壙墓だった可能性もある。

14 号土坑

II 区の E･14･15 グリッドに位置する。長軸 1.48m、短軸 1.46m、主軸方位が N･87°･W のやや不定形な隅丸方形を呈している。深さは約 15cm であり、底面にはほぼフラットな面がある。

15 号土坑

II 区の D･E･15グリッドに位置する。長軸 1.52m、短軸 1.00m、主軸方位が N･59°･W の隅丸長方形を呈している。深さは約 10cm であり、底面はほぼフラットに近い状態であった。3 つのピットはこの遺構に伴うものではない。

16 号土坑

II 区の D･E･16 グリッドに位置する。長軸 1.45m、短軸 1.33m、主軸方位が N･55°･E のほぼ方形を呈している。深さは約 16cm であり、底面にはほぼフラットな面がある。17 号土坑を切っている。

17 号土坑

II区のD･16･17グリッドに位置する。16号土坑に切られているため、形状は正確には確認できていないが、長軸1.86m、短軸1.42m、主軸方位がN･27°･Wのほぼ長方形を呈している。深さは約17cmであり、底面にはほぼフラットな面がある。

18 号土坑

II 区の D･17 グリッドに位置する。長軸 1.66m、短軸 1.08m、主軸方位が N･42°･E のやや不定形な長方形をしている。深さは約 19cm であり、底面にはほぼフラットな面がある。

19 号土坑

II 区の D･E･17 グリッドに位置する。長軸 1.32m、短軸 1.16m、主軸方位が N･53°･E のほぼ方形を呈している。深さは約 19cm であり、底面にはほぼフラットな面がある。

20 号土坑

II 区の D･17 グリッドに位置する。上部をかなり掘削した状態で遺構を検出したので、形状は正確に確認できていないが、長軸 1.58m、主軸方位がN･65°･Wの長方形又は方形と推定される。深さは約 34cm であり、底面はほぼフラットな状態であった。歯が出土しており、土壙墓だった可能性もある。

21 号土坑

III 区の C･25 グリッドに位置する。長軸 1.85m、短軸 0.92m、主軸方位が N･41°･E のやや不定形な楕円形を呈している。深さは約 34cm であった。弥生土器の台付甕の破片が出土している。

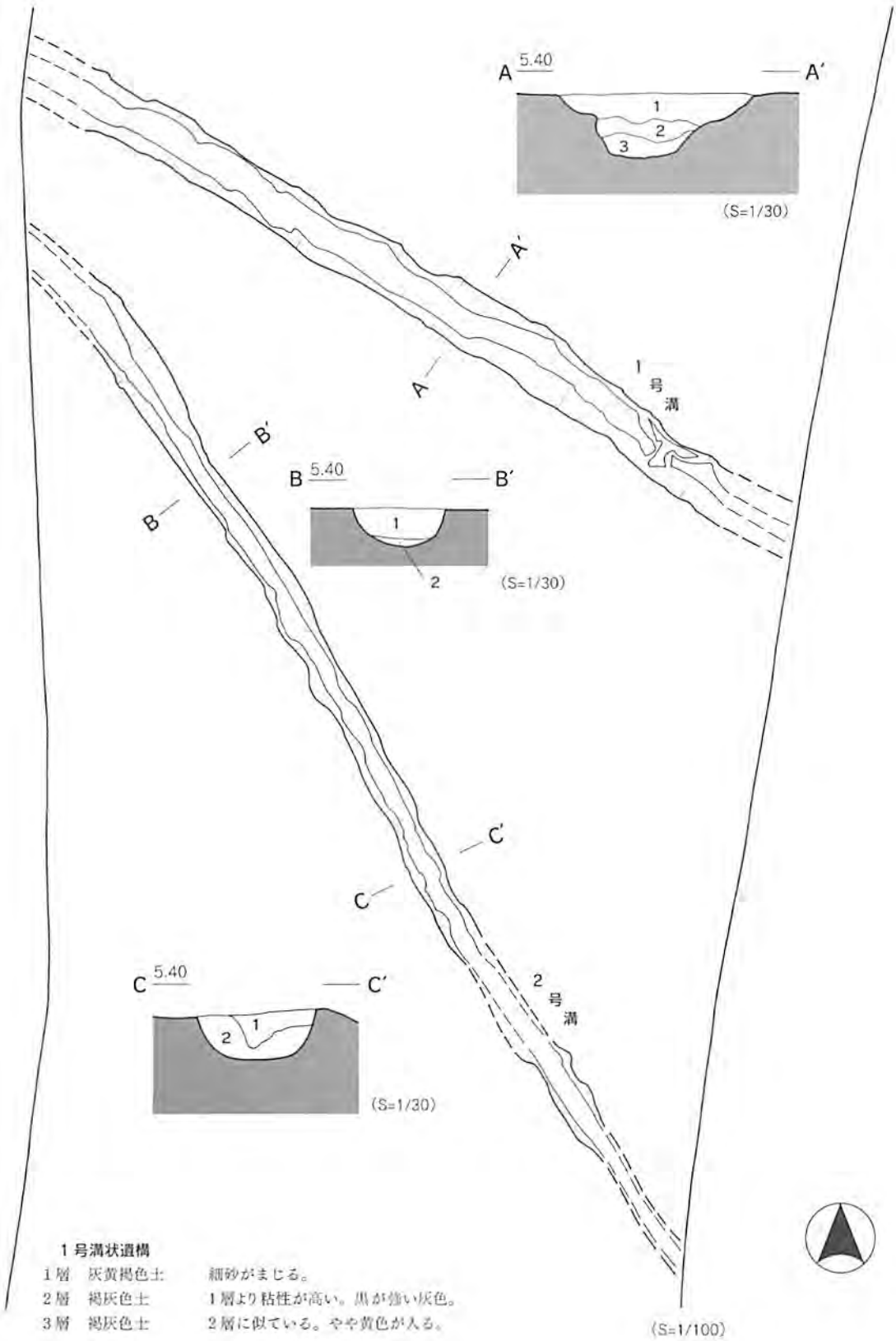
22 号土坑

III 区の C･D･25 グリッドに位置する。当初、14 号竪穴住居跡としてプランを立てて掘削していたため、形状等は確認できていないが、長軸約 2.75m の長方形と推定される。その他の情報は不明である。

23号~25 号土坑は III 層で遺構を検出しており、出土遺物から時代を古代と判断した。

23 号土坑

III 区の C･22･23 グリッドに位置する。長軸 1.62m、短軸 1.51m、主軸方位が N･19°･E の不定形な円形を



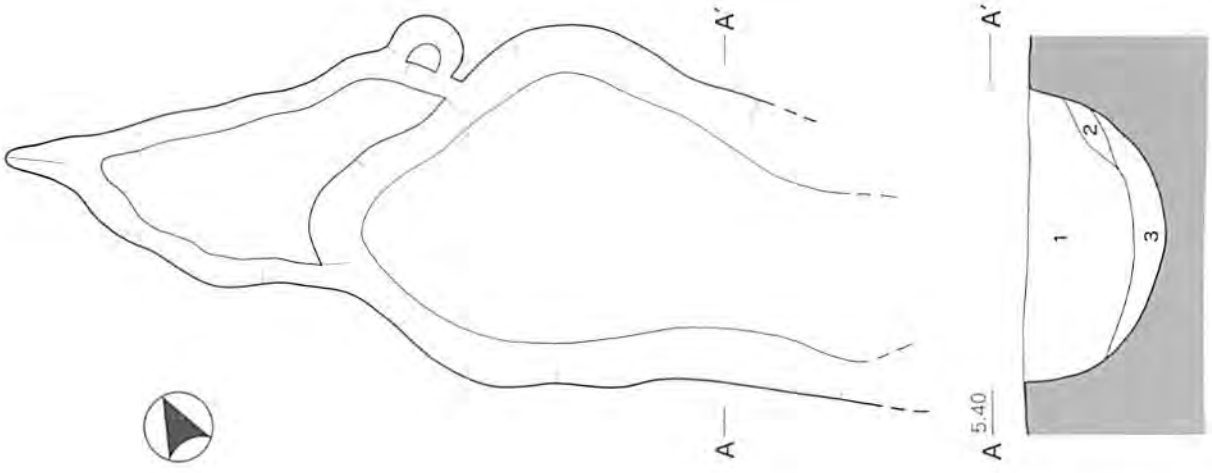
1号溝状遺構

1層	灰黄褐色土	細砂がまじる。
2層	褐灰色土	1層より粘性が高い。黒が強い灰色。
3層	褐灰色土	2層に似ている。やや黄色が入る。

2号溝状遺構

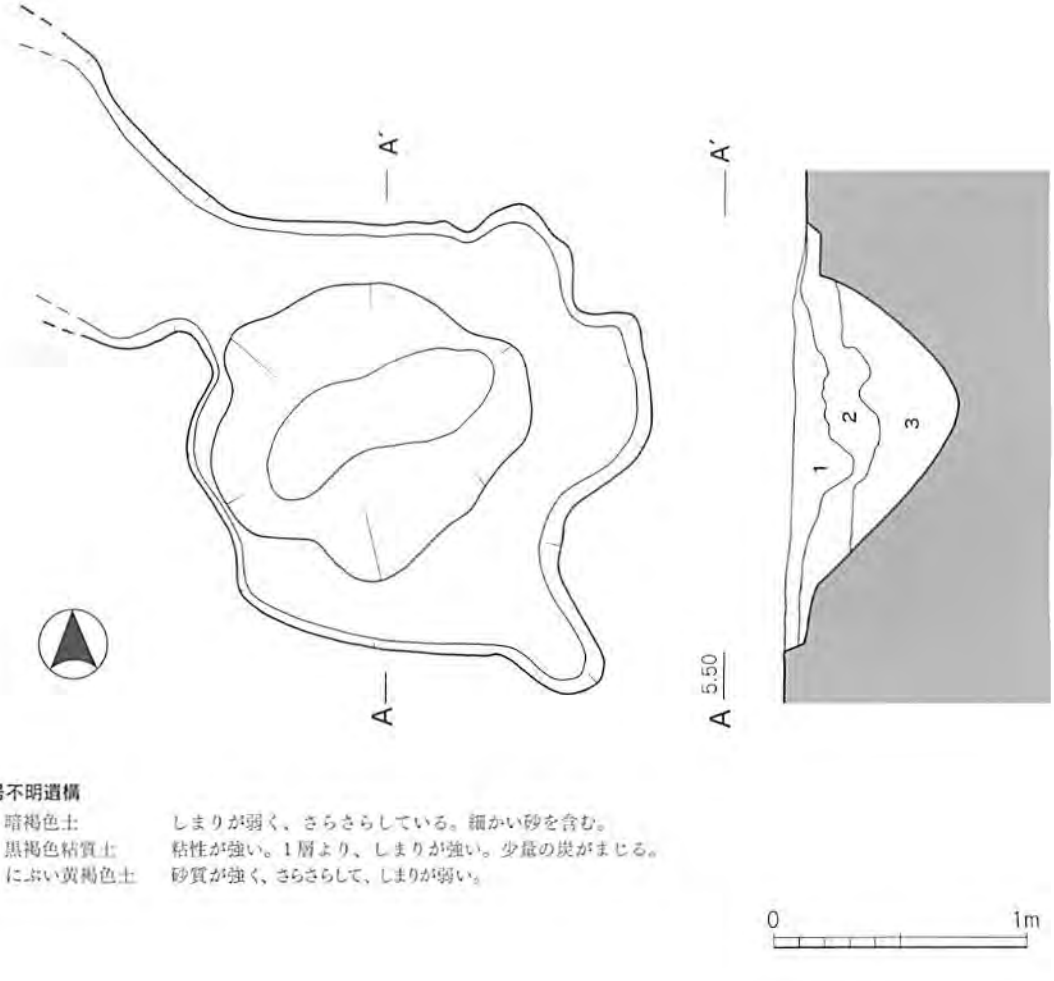
1層	黒褐色粘質土	細砂を含みボソボソしている。
2層	暗褐色粘質土	1層より粘性強い。黄色が少しまじる。

第46図　1号・2号溝実測図



1号不明遺構

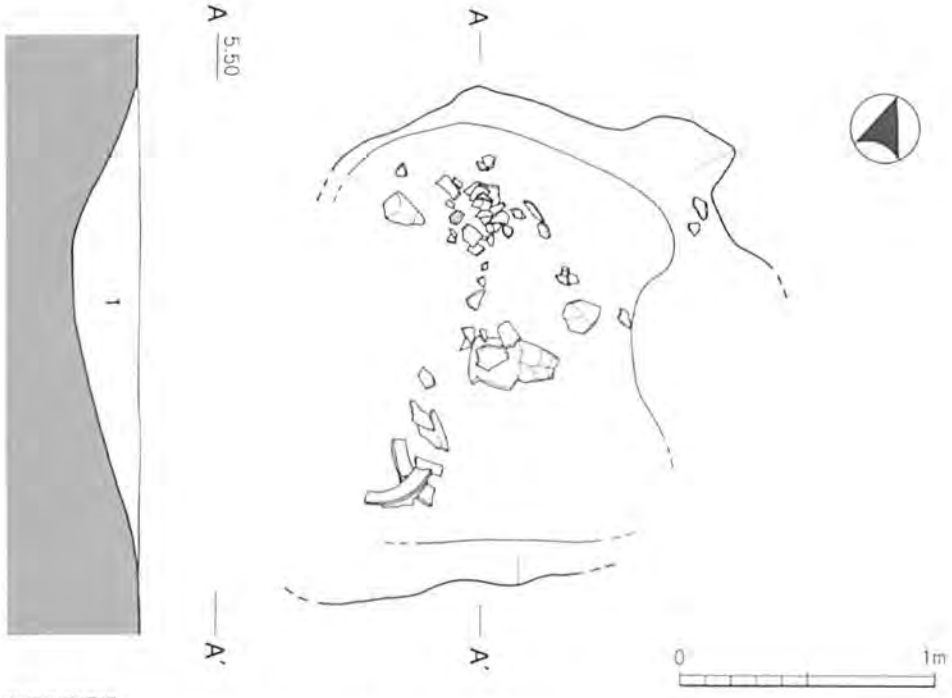
1層　極褐色粘質土（7.5YR2/3）　粘性がある。細かい砂を含みボソボソしている。黒色粒子を多く含む。
2層　暗褐色粘質土（7.5YR3/3）　全体的にボソボソしている。黄褐色粘土ブロックを含む。
3層　暗褐色粘質土（7.5YR3/3）　全体的にボソボソしている。2層よりも砂粒を多く含む。



2号不明遺構

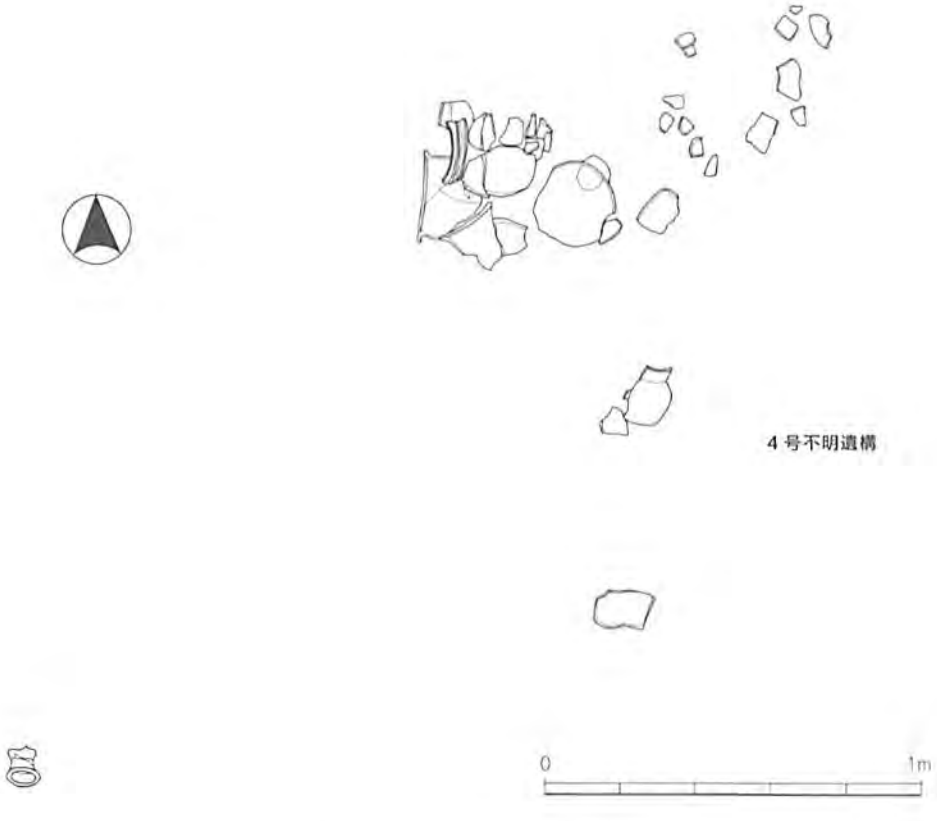
1層　暗褐色土　　しまりが弱く、さらさらしている。細かい砂を含む。
2層　黒褐色粘質土　　粘性が強い。1層より、しまりが強い。少量の炭がまじる。
3層　にぶい黄褐色土　　砂質が強く、さらさらして、しまりが弱い。

第47図　1号・2号不明遺構実測図



3号不明遺構

1層　黒褐色粘質土(7.5YR3/2)　粘性やや弱め。しまりはやや強い。



第48図　3号・4号不明遺構実測図

呈している。深さは約 40cm であった。土師器が出土しており、炭もあったことから、古代のゴミ坑だった可能性がある。

24 号土坑

III 区の C-22・23 グリッドに位置する。長軸 1.84m、主軸方位が N-7°-E のほぼ円形を呈している。深さは約 56cm であった。23 号土坑同様、土師器が出土しており、炭もあったことから、古代のゴミ坑だった可能性がある。

25 号土坑

III 区の C-22・23 グリッドに位置する。長軸 1.62m、短軸 1.51m、主軸方位が N-85°-W のほぼ円形を呈している。深さは約 15cm であった。

(4) 溝状遺構

1 号溝

I 区の E~G2-4 グリッドに位置する。幅が約 0.95m、深さ約 100cm、主軸方位 N-58°-W、長さが約 14.5m であった。1 号竪穴住居跡を切っている。弥生土器の壺の破片などが出土している。

2 号溝

I 区の E~G-3~6 グリッドに位置する。幅 0.45~0.55m、深さ 60~70cm、主軸方位が N-32°-W であり、長さが約 19.5m であった。1 号・2 号・4 号竪穴住居跡、1 号・2 号土坑、1 号不明遺構を切っている。弥生土器の高杯の脚部片などが出土している。

3 号溝

II 区の D・E-13 グリッドに位置する。幅約 0.60m、深さ 25cm、主軸方位が N-65°-W であり、長さが約 5.00m であった。7 号竪穴住居跡に切られている。弥生土器の鉢の破片などが出土している。

4 号溝

II 区の D・E-13・14 グリッドに位置する。幅約 1.12m、深さ 27cm、主軸方位が N-72°-W であり、長さが約 4.90m であった。7 号竪穴住居跡に切られている。弥生土器の破片とともに磨製石鏃が出土している。

(5) 不明遺構

1 号不明遺構

I 区の E・F-5 グリッドに位置する。長軸が 3.4m 以上あり、短軸 1.15m、深さ 54cm、主軸方位 N-57°-W で、西側が鋭角な三角形、東側が少し不定型な楕円形を呈している。東側が 2 号溝に切られている。土坑が 2 つあり、楕円状の土坑が三角形の土坑を切っているとも考えられるが、立ち上がり等が明確に確認できなかったし、出土遺物もないため、不明遺構とした。

2 号不明遺構

I 区の E-6 グリッドに位置する。長軸が 3.2m 以上あり、短軸 1.47m、深さ 64cm、主軸方位 N-42°-W で、東側が不定形な円形、西側が溝状になり、調査区外に出ている。土坑と溝状遺構がつながっているとも考えられるが、立ち上がり等が明確に確認できなかったし、出土遺物もないため、不明遺構とした。

3 号不明遺構

I 区の F・G-5 グリッドに位置する。掘削時は長軸 1.93m、深さ 40cm のやや不定形な方形又は長方形のプランを立て掘削を行ったが、湧水量がかなり多く、東側に水抜き溝を切り、西側は 2 号溝に切られて

いるため、形状は正確に確認できなかった。また、弥生土器の壺や甕の破片の中に、縄文土器の浅鉢の破片も出土しており、時代も確認できないことから、不明遺構とした。

4号不明遺構

II区のF-9グリッドから、赤色の土器を多量に取り上げた。接合により弥生土器の赤色の甕と分かった。原位置を保っていなかったので、不明遺構とした。

第４節　遺物

（１）竪穴住居跡出土遺物

＜１号竪穴住居跡出土遺物＞

1　弥生土器の鉢の口縁部から胴部片である。内外面共にハケ目調整後ナデ調整が施され、内面の一部に指頭圧痕がある。復元による口径は 11.8cm で、残存器高は 6.9cm である。

2　弥生土器の鉢の口縁部から胴部片である。外面はハケ目調整後ナデ調整、内面はナデ調整が施され、一部に指頭圧痕がある。復元による口径は 11.9cm で、残存器高は 7.2cm である。

3　弥生土器の壺の口縁部である。上端が尖る断面三角形の複合口縁を有する。内外面共にナデ調整が施され、内面が剥離している。復元による口径は 15.8cm で、残存器高は 3.3cm である。

4　弥生土器の壺の頸部から胴部片である。外面はハケ目調整後ナデ調整が施され、頸部には櫛描平行文と櫛描流水文がある。内面はハケ目調整後ナデ調整が施されている。残存器高は 8.3cm である。

5　弥生土器の台付甕であり、脚部が一部破損している。「く」の字状に外反した口縁部を有し、口唇部は方形に仕上げてある。外面はタタキ調整後ハケ目調整、内面はハケ目調整後ナデ調整が施されている。口縁部は内外面共にハケ目調整が施されている。口径は 19.7cm で、胴部最大径は 21.4cm、残存器高は 34.3cm である。

6　弥生土器の台付甕であり、脚部が一部破損している。土器片の一部は 1 号溝より出土している。「く」の字状に外反した口縁部を有し、口唇部は方形に仕上げてある。外面はタタキ調整後ハケ目調整、内面はハケ目調整が施され、一部に指頭圧痕がある。口縁部は内外面共にハケ目調整が施されている。外面に焼成時の黒斑がある。口径は 14.4cm で、5 に比べると口が狭く、胴部最大径は 19.7cm、残存器高は 30.9cm である。

＜２号竪穴住居跡出土遺物＞

7　弥生時代の黒髪式土器の鉢の口縁から底部片である。「く」の字状に外反した口縁部を有し、口唇部は丸みをもって仕上げてある。内外面共にハケ目調整後ナデ調整が施され、内面の一部に指頭圧痕がある。口縁部に小さな穿孔がある。復元による口径は 16.7cm で、残存器高は 18.0cm、胴部最大径は 20.0cm である。外面と口縁部に赤彩がある。

8　弥生土器の鉢の胴部から底部である。内外面共にハケ目調整後ナデ調整が施されている。胴部に内面からの穿孔がある。底径は 6.4cm で、残存器高は 22.4cm で、胴部最大径は 23.9cm である。

9　弥生土器の高杯の杯部片である。外面は粗いハケ目調整後ナデ調整、内面は粗いミガキ調整が施され、暗文がある。残存器高は 5.7cm である。

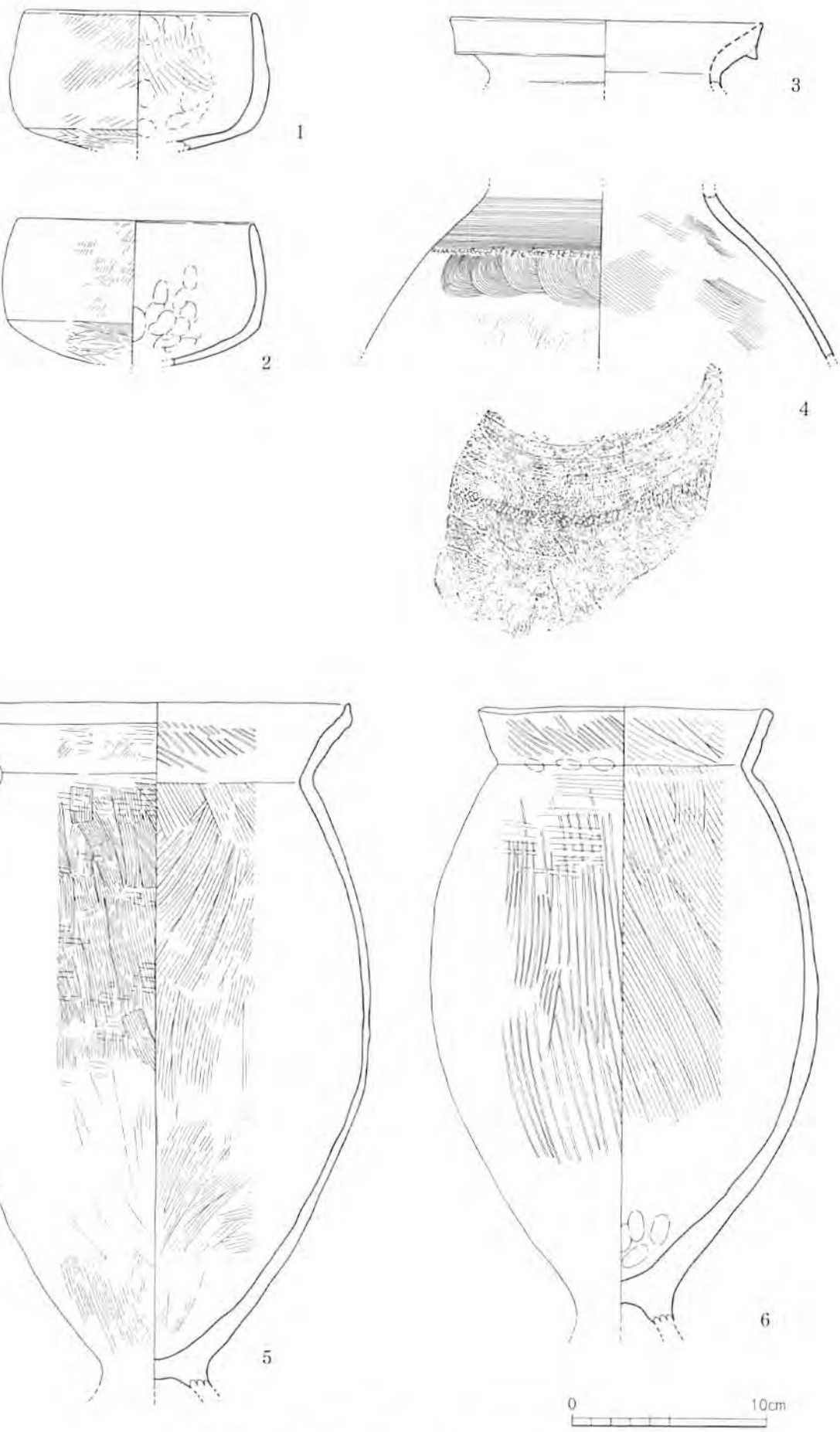
10　弥生土器の高杯の脚部である。内外面共にハケ目調整後ナデ調整が施され、脚部内面上部に絞り痕がある。底径は 17.1cm で、残存器高は 21.0cm である。

＜５号竪穴住居跡出土遺物＞

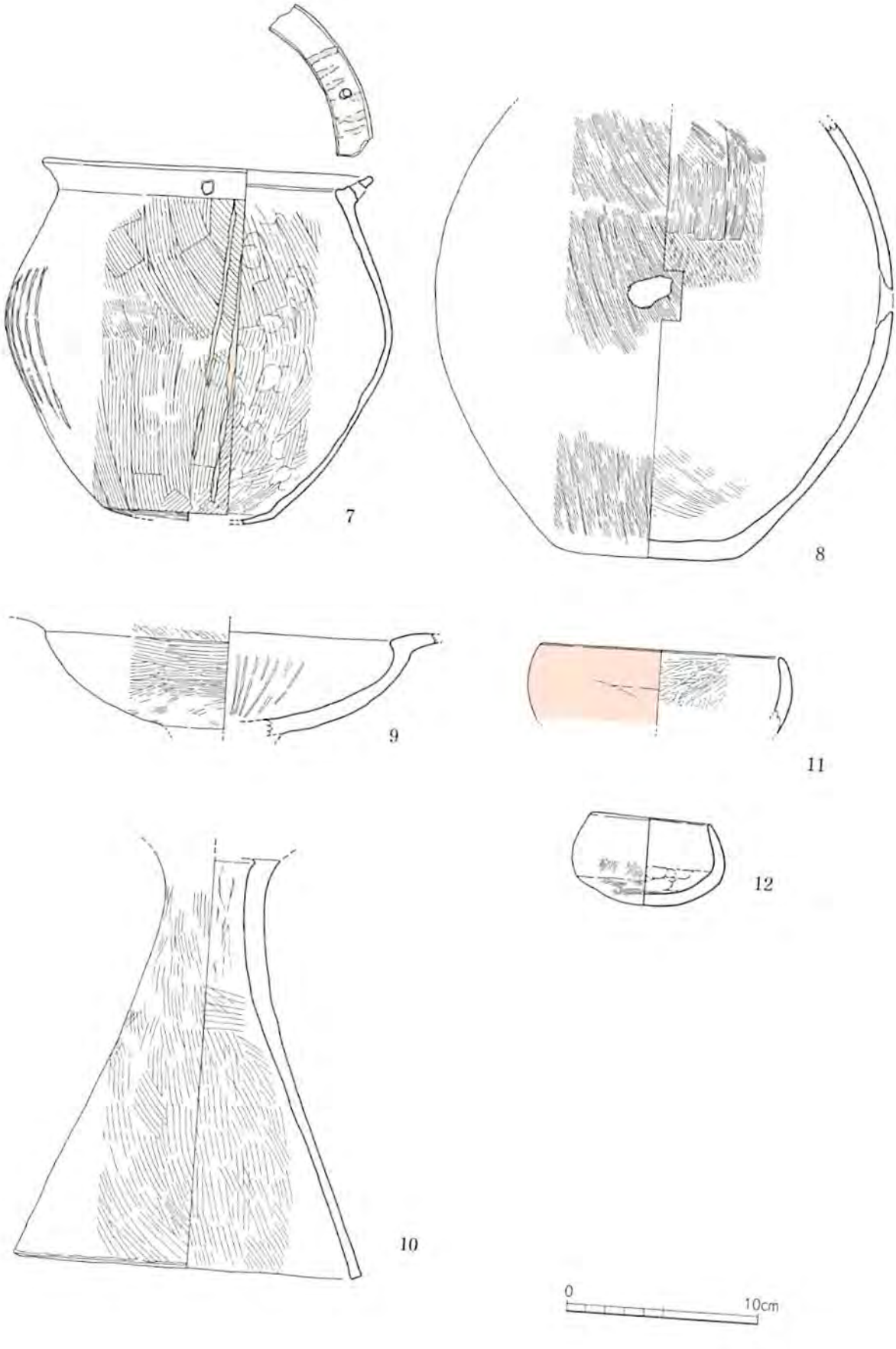
11　弥生土器の鉢の口縁部から胴部片である。外面はナデ調整、内面はミガキ調整が施されている。復元による口径は 12.2cm で、残存器高は 3.9cm である。赤色土器である。

＜８号竪穴住居跡出土遺物＞

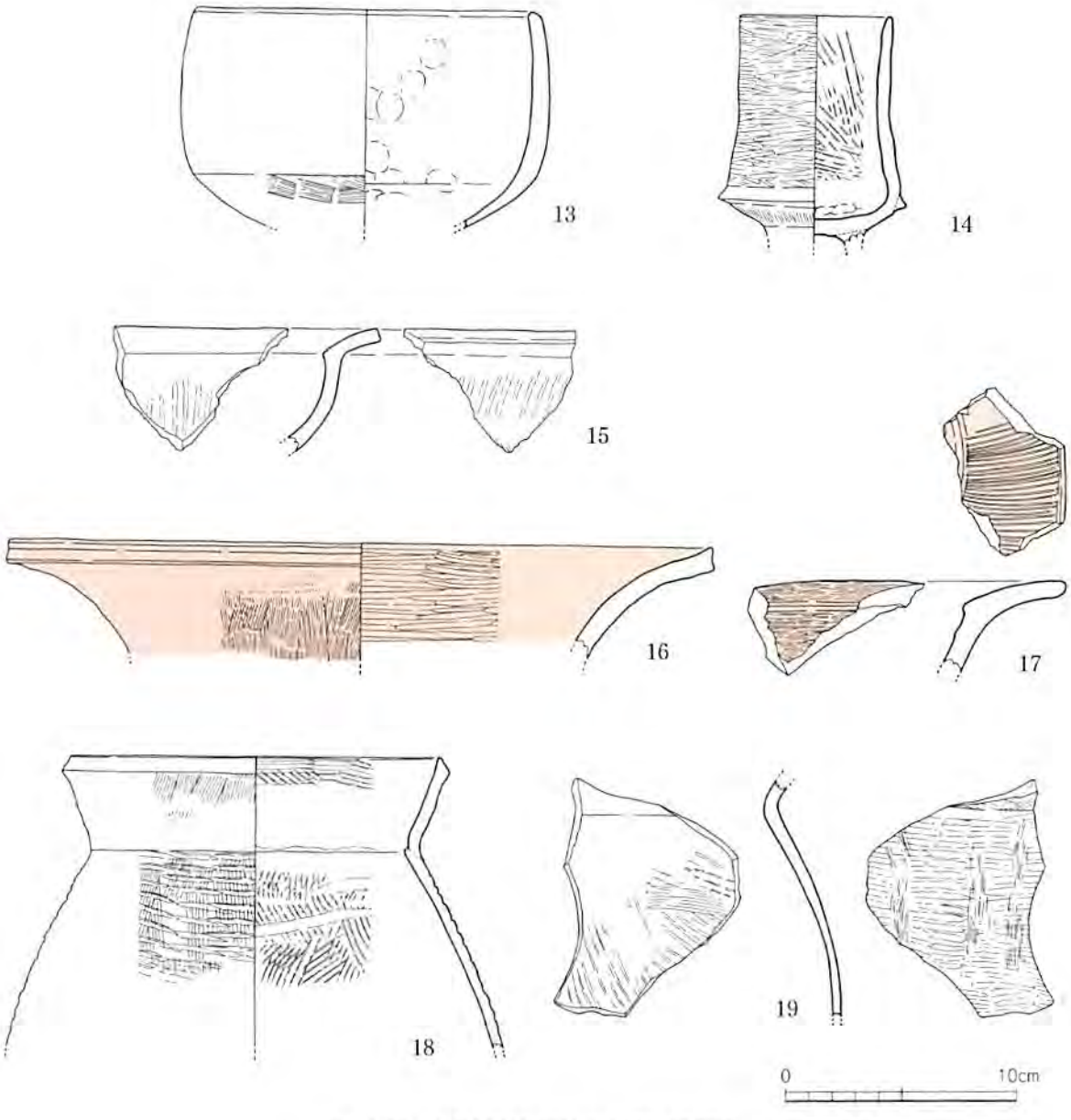
12　弥生土器の小型鉢である。外面はハケ目調整後ナデ調整が施され、内面に指頭圧痕がある。口径は 6.1cm で、器高は 4.5cm である。



第 49 図　1 号竪穴住居跡出土遺物実測図



第50図　2号・5号・8号竪穴住居跡出土遺物実測図



第51図　4号竪穴住居跡出土遺物実測図

＜4号竪穴住居跡出土遺物＞

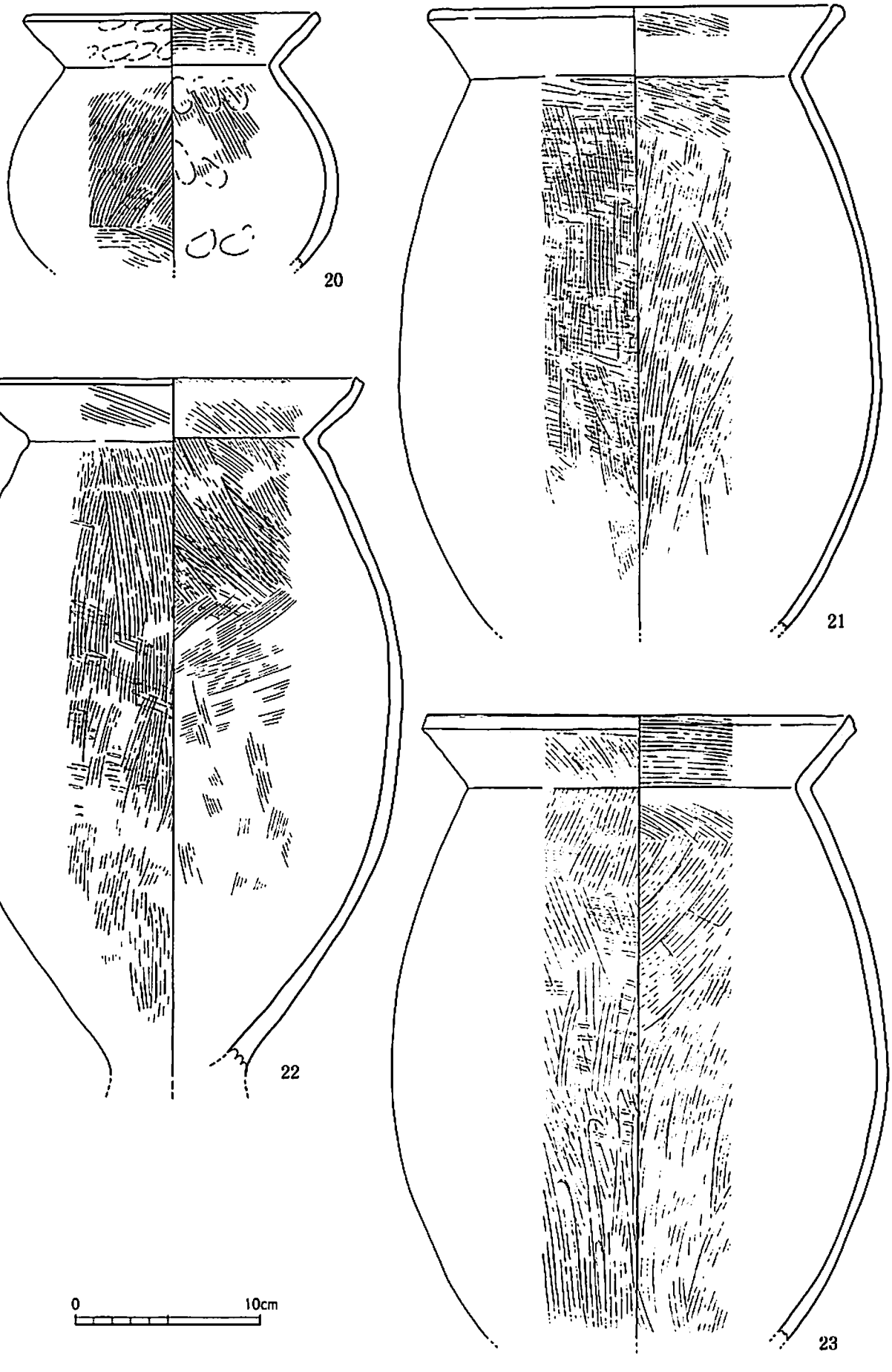
13　弥生土器の鉢の口縁部から胴部片である。外面胴部はナデ調整、底部はハケ目調整後ナデ調整、内面はナデ調整が施され、内面の一部に指頭圧痕がある。復元による口径は14.4cmで、胴部最大径は15.9cm、残存器高は9.2cmである。

14　弥生時代のコップ型土器である。外面はミガキ調整と一部にハケ目調整、内面はハケ目調整後ナデ調整が施されている。胴部下部に三角形の突帯が1条貼り付けてある。口径は6.2cmで、胴部径は8.0cm、残存器高9.7cmである。

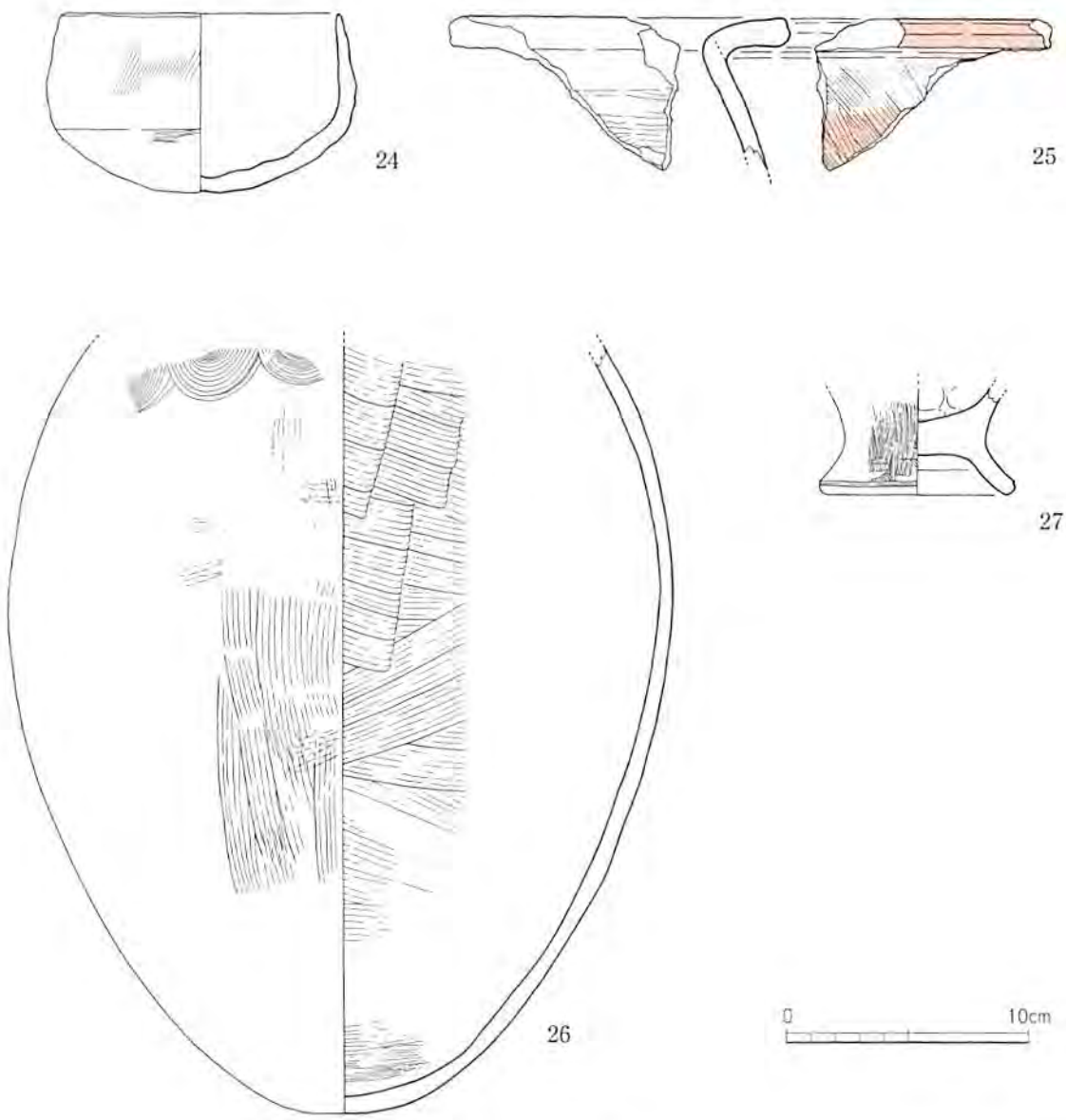
15　弥生土器の鉢の口縁部から胴部片である。外面は櫛状工具による調整、内面はミガキ調整、口縁部は横ナデ調整が施されている。残存器高は5.2cmである。

16　弥生土器の高杯の杯部片である。外面はハケ目調整後ナデ調整、内面はミガキ調整が施されている。復元による口径は30.2cmで、残存器高は4.8cmである。赤色土器である。

17　弥生土器の高杯の杯部片である。赤色土器で、内面と口縁部にミガキ調整が施してあり、内面に暗文がある。残存器高は4.0cmである。



第52図　6号竪穴住居跡出土遺物実測図



第53図　9号竪穴住居跡出土遺物実測図

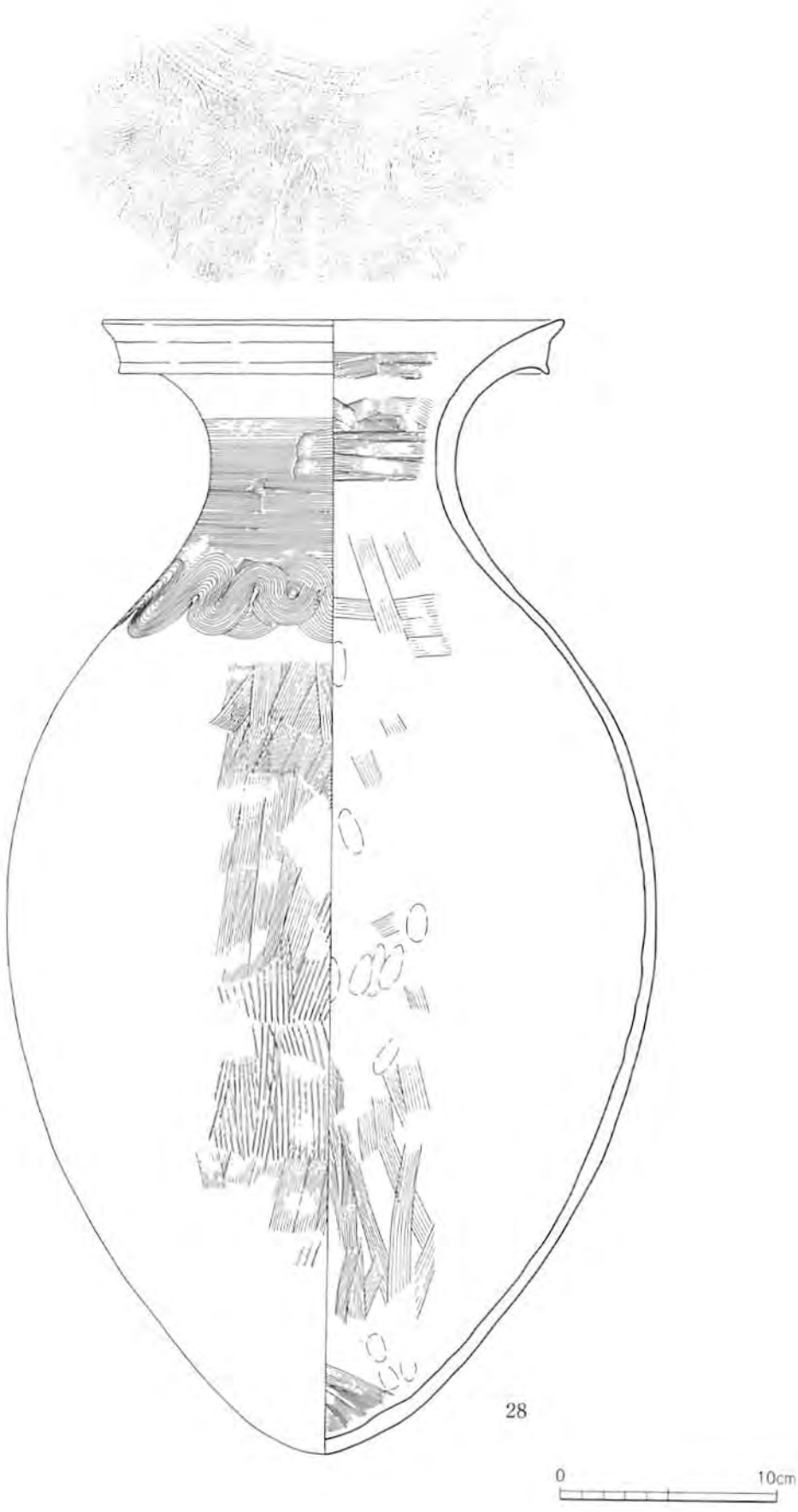
18　弥生時代の甕の口縁部から胴部片である。「く」の字状に外反した口縁部を有し、口唇部は方形に仕上げてある。外面はタタキ調整後ハケ目調整、内面はハケ目調整後ナデ調整が施されている。復元による口径は15.8cmで、残存器高は12.2cmである。

19　18と同じ形式の甕の胴部片である。外面はタタキ調整後ハケ目調整、内面はハケ目調整後ナデ調整が施されている。残存器高は10.1cmである。

＜6号竪穴住居跡出土遺物＞

20　弥生土器の鉢の口縁部から胴部片である。「く」の字状に外反した口縁部を有し、口唇部はやや丸みをもって仕上げてある。内外面共にハケ目調整後ナデ調整が施され、内面と口縁部に指頭圧痕がある。復元による口径は15.5cmで、胴部最大径は17.8cmで残存器高は13.6cmである。

21　弥生土器の甕の口縁部から胴部片である。「く」の字状に外反した口縁部を有し、口唇部は方形に仕上げてある。外面はタタキ調整後ハケ目調整、内面はハケ目調整後ナデ調整が施され、指頭圧痕がある。口径は21.5cmで、胴部最大径はほぼ中央にあると推定され25.9cmで、残存器高は32.9cmである。



第54図　9号竪穴住居跡出土遺物実測図

22　弥生土器の台付甕であり、口縁部と脚部が一部破損している。「く」の字状に外反した口縁部を有し、口唇部は方形に仕上げてある。外面はタタキ調整後ハケ目調整、内面はハケ目調整後ナデ調整、口縁部の内外にもハケ目調整が施されている。復元による口径は 19.8cm で、胴部最大径はほぼ中央にあり 24.2cm で、残存器高は 37.3cm である。

23　弥生土器の甕の口縁部から胴部片である。「く」の字状に外反した口縁部を有し、口唇部は方形に仕上げてある。外面はタタキ調整後ハケ目調整、内面はハケ目調整後ナデ調整が施され、内面に指頭圧痕がある。口縁部の内外面にもハケ目調整が施されている。口径は 22.4cm で、胴部の最大径はほぼ中央にあり 26.8cm で、残存器高は 33.5cm ある。

＜９号竪穴住居跡出土遺物＞

24　弥生土器の鉢の口縁部から底部片である。外面はハケ目調整後ナデ調整、内面はナデ調整、口縁部には横ナデ調整が施されている。復元による口径は 11.4cm で、器高は 7.2cm である。

25　弥生土器の甕の口縁部から胴部片である。「く」の字状に僅かに外反した口縁部を有し、口唇部は方形に仕上げてある。口縁部は横ナデ調整、内外面共にハケ目調整が施されている。残存器高は 6.2cm である。赤色土器だったと思われ、口唇部と胴部に赤彩がある。

26　弥生土器の壺の胴部から底部である。内外面共にハケ目調整後ナデ調整が施され、外面胴部の上部に櫛描円文または櫛描流水文がある。復元による胴部最大径は 27.7cm のやや丸底と推定され、残存器高は 31.1cm である。

27　弥生土器の甕の底部である。外面共にハケ目調整後ナデ調整、内面はナデ調整が施され、指頭圧痕がある。底径は 7.5cm であり、上げ底を呈している。残存器高は 4.4cm である。

28　弥生時代の壺である。口縁部は頸部から大きく外反し、上端と下端を尖らせた断面三角形の複合口縁を有し、横ナデ調整が施されている。内外面共にハケ目調整後ナデ調整が施され、外面頸部には櫛描平行文と櫛描流水文があり、内面の一部に指頭圧痕がある。口径は 21.4cm で、器高は 51.2cm、胴部最大径は 30.0cm で、尖底である

＜11 号竪穴住居跡出土遺物＞

29　弥生土器の鉢の口縁部から底部片である。外面の胴部はナデ調整、底部はハケ目調整、内面はナデ調整が施され、内面の一部に指頭圧痕がある。復元による口径は 9.0cm で、器高は 5.7cm である。

30　弥生土器の鉢の口縁部から底部片である。29、31、32 に比べると胴部の張りがなく、口縁部から底部に向かいほぼ直線的に窄まるフォームをしている。内外面共にハケ目調整後ナデ調整が施されている。復元による口径は 12.6cm で、底径は平で 4.6cm、器高は 6.9cm である。

31　弥生土器の鉢の口縁部から底部片である。外面胴部は粗いハケ目調整後ナデ調整、底部はタタキ調整後ナデ調整が施され、内面はハケ目調整後ナデ調整が施され、一部に指頭圧痕がある。復元による口径は 13.5cm で、残存器高は 8.4cm、丸底と推定される。

32　弥生の鉢の口縁部から底部片である。外面はハケ目調整後ナデ調整が施され、部分的にナデ消しがある。内面はナデ調整が施され、一部に指頭圧痕がある。口径は 13.1cm で、残存器高は 10.0cm、胴部最大径は 15.6cm、丸底である。

33　弥生土器の鉢の口縁部から底部片である。頸部がくびれ口縁が広がり、口径が 10.0cm、胴部最大径は 13.0cm とやや胴部が張るフォームをしている。外面は回転ナデ調整とハケ目調整、底部はハケ目調整が施され、内面はナデ調整が施され、一部に指頭圧痕がある。残存器高は 8.6cm である。

34　弥生土器の鉢の頸部から胴部片である。頸部がくびれ口縁が広がり、口径と胴部径がほぼ同じ大きさのフォームになると思われる。内外面共に粗いハケ目調整後ナデ調整が施されている。残存器高は11.2cmである。

35　弥生土器の鉢の口縁部から胴部片である。35～39は頸部がくびれ口縁が広がり、口径より胴部最大径が小さいフォームをしている。外面はハケ目調整後ナデ調整、内面は削り後ナデ調整が施されている。復元による口径は17.6cmで、残存器高は7.2cmである。

36　弥生土器の鉢の口縁部から底部片である。外面はハケ目調整後ナデ調整、内面はナデ調整が施され、底部に指頭圧痕がある。口径は18.5cmで、残存器高は9.4cm、丸底と推定される。

37　弥生土器の鉢である。外面はハケ目調整後ナデ調整、内面はナデ調整が施され、指頭圧痕があり、一部削りもある。復元による口径は19.6cmで、残存器高は10.1cm、復元により丸底と推定される。

38　弥生土器の鉢の口縁部から底部片である。外面はハケ目調整後ナデ調整、内面はナデ調整が施され、指頭圧痕があり、籾痕が1箇所ある。復元による口径は18.7cmで、残存器高は9.4cm、復元により丸底と推定される。

39　弥生土器の鉢である。外面はハケ目調整後ナデ調整、内面はナデ調整が施され、指頭圧痕がある。口径は21.5cmで、器高は10.4cm、丸底である。

40　弥生土器の高杯の杯部片である。外面はハケ目調整後ナデ調整が施され、口縁部と内面に暗文がある。復元による杯部径は33.9cmで、残存器高は5.8cmである。

41　弥生土器の壺の口縁部から頸部片である。頸部から外反し、上端と下端をやや丸みをもって仕上げた断面三角形をした複合口縁を有する。外面は横ナデ調整、内面はハケ目調整後ナデ調整、頸部には板状工具による削り調整が施されている。口径は16.2cmで、残存器高は5.2cmである。

42　弥生時代の壺の口縁部から胴部片である。口縁部は頸部から外反し、上端と下端を少し尖らせ断面三角形をした複合口縁を有し、横ナデ調整が施されている。内外面共にハケ目調整後ナデ調整が施されており、外面の頸部には櫛描平行文と櫛描流水文がある。復元による口径は18.0cmで、残存器高は13.3cmである。

43　弥生土器の甕の口縁部から胴部片である。「く」の字状に外反した口縁部を有し、口唇部は方形に仕上げてある。口縁は横ナデ調整、内外面共にハケ目調整後ナデ調整が施されている。残存器高は12.0cmである。

44　弥生土器の甕の口縁部と胴部片である。「く」の字状に外反した口縁部を有し、口唇部は方形に仕上げてある。外面はタタキ調整後ハケ目調整、内面はハケ目調整後ナデ調整が施され、一部に指頭圧痕がある。口径は21.8cmで、残存器高は16.8cmである。

45　弥生土器の甕の口縁部から胴部片である。「く」の字状に外反した口縁部を有し、口唇部は方形に仕上げてある。口縁部は内外面共にハケ目調整、外面はタタキ調整後ハケ目調整、内面はハケ目調整後ナデ調整が施され、一部に指頭圧痕がある。口径は20.5cmで、残存器高は24.3cm、胴部最大径は22.8cmである。

46　弥生土器の台付甕の口縁部から脚部片である。「く」の字状に外反した口縁部を有し、口唇部は方形に仕上げてある。口縁部は内外面共にハケ目調整、外面はタタキ調整後ハケ目調整、内面はハケ目調整が施され、一部に指頭圧痕がある。復元による口径は21.2cmで、残存器高は42.2cm、胴部最大径は25.7cmである。

47　弥生土器の台付甕の口縁部から脚部片である。「く」の字状に外反した口縁部を有し、口唇部は方

形に仕上げてある。口縁部は内外面共にハケ目調整、外面はタタキ調整後ハケ目調整、内面はハケ目調整後ナデ調整が施され、一部に指頭圧痕がある。口径は 19.6cm で、残存器高は 37.3cm、胴部最大径は 24.1cm である。

48　弥生土器の台付甕の胴部から脚部片である。内外面共にハケ目調整後ナデ調整が施され、内面の胴部と脚部の一部に指頭圧痕がある。底径は 11.2cm で、上げ底を呈し外反している。残存器高は 33.4cm、胴部最大径は 20.1cm である。

49　弥生土器の台付甕の胴部から脚部片である。内外面共にハケ目調整後ナデ調整が施されている。底径は 14.4cm で、上げ底を呈し外反している。残存器高は 18.7cm である。

50　弥生土器の台付甕の脚部片である。内外面共にハケ目調整後ナデ調整が施されている。底径は 14.6cm で、上げ底を呈し外反している。残存器高は 12.7cm である。

51　弥生土器の台付甕の胴部から脚部片である。内外面共にハケ目調整後ナデ調整が施され、内面に指頭圧痕がある。底径は 13.9cm で、上げ底を呈し外反している。残存器高は 20.7cm である。

52　弥生土器の台付甕の脚部片である。内外面共に粗いハケ目調整後ナデ調整が施され、内面に指頭圧痕がある。底径は 13.4cm で、上げ底を呈し外反している。残存器高は 10.8cm である。

53　弥生土器の台付甕の脚部片である。内外面共にハケ目調整後ナデ調整が施され外面はタタキ調整が施されている。底径は 16.5cm で、上げ底を呈し外反している。残存器高は 11.5cm である。

＜12 号竪穴住居跡出土遺物＞

54　弥生土器の鉢の口縁部片である。内外面共にナデ調整が施され、口縁部に穿孔がある。復元による口径は 14.6cm で、残存器高は 3.4cm である。

＜13 号竪穴住居跡出土遺物＞

55　弥生土器の甕の底部片である。外面はハケ目調整後ナデ調整、内面はナデ調整が施され、指頭圧痕がある。底径は 8.8cm で、上げ底を呈し外反している。残存器高は 7.0cm である。

＜15 号竪穴住居跡出土遺物＞

56　弥生土器の小型鉢の口縁部から胴部片である。外面はハケ目後ナデ調整、内面は指押さえ後ハケ目調整が施されている。復元による口径は 8.8cm で、残存器高は 5.0cm である。

57　弥生土器の鉢である。外面はハケ目後ナデ調整、内面はナデ調整が施され、一部に指頭圧痕がある。口径は 9.3cm で、残存器高は 5.8cm、胴部最大径は 11.0cm で丸底である。

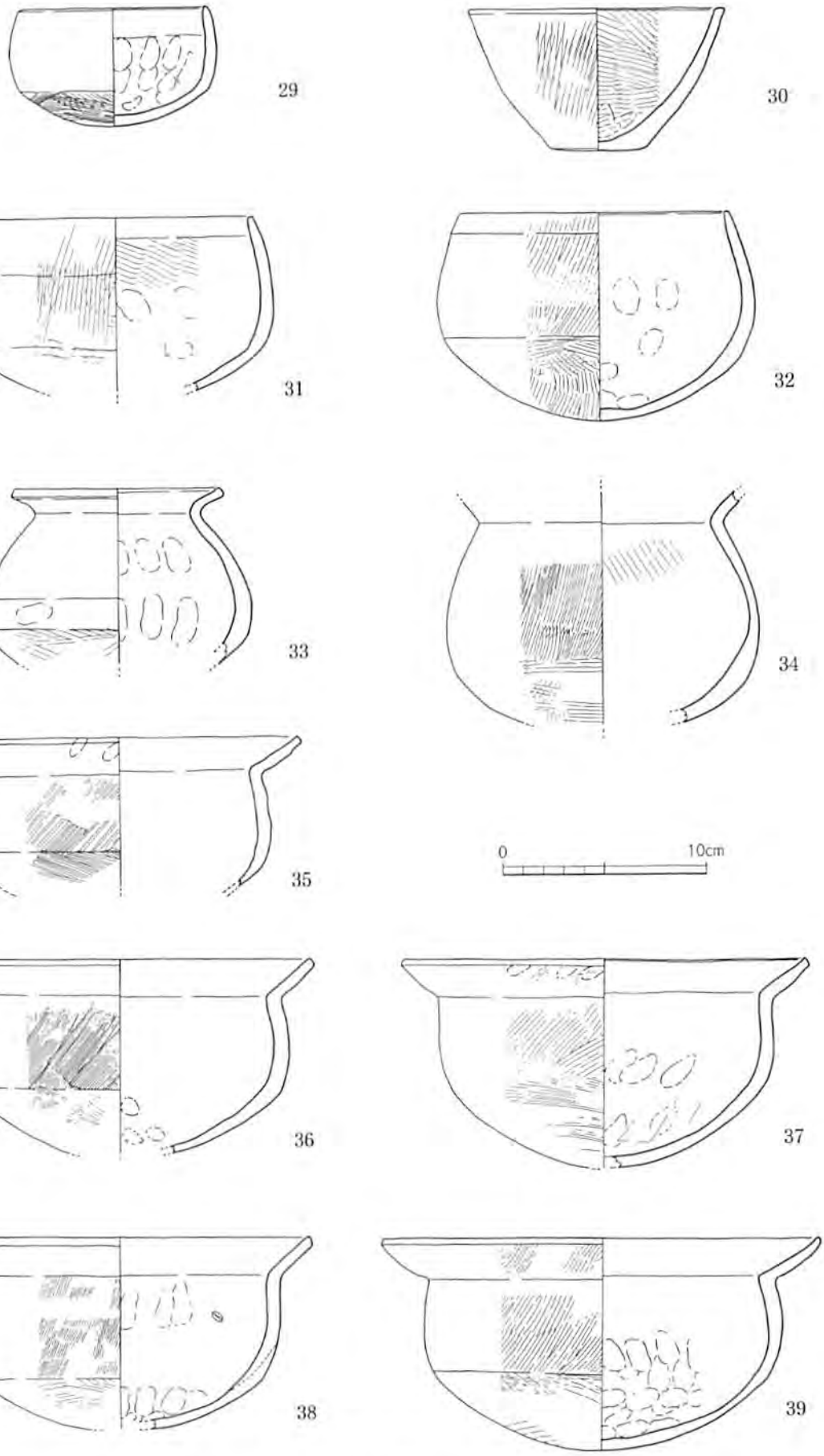
58　弥生土器の鉢である。外面はハケ目後ナデ調整、内面はナデ調整が施され、一部に指頭圧痕がある。口径は 13.5cm で、残存器高は 10.4cm、胴部最大径は 16.0cm で丸底である。

59　弥生土器の鉢である。頸部がくびれ口縁が広がり、口径より胴部径が小さいフォームをしている。口縁部外面に指頭圧痕があり、外面はハケ目後ナデ調整、内面はナデ調整が施され、一部削りがある。復元による口径は 19.9cm で、残存器高は 9.1cm で丸底である。

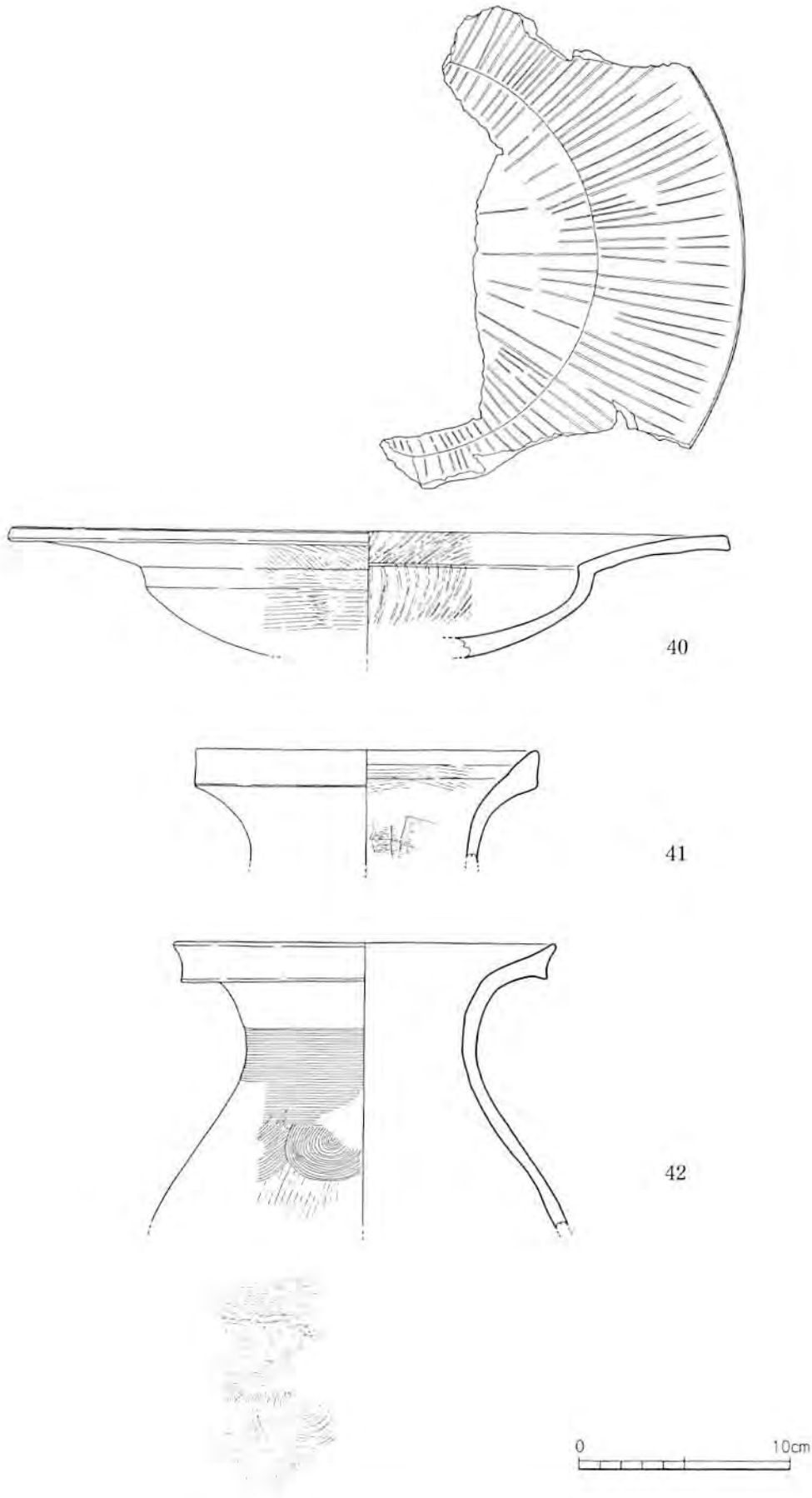
60　弥生土器の高杯の杯部片である。外面は粗いハケ目後ナデ調整、内面はミガキ調整が施され、口縁部と内面の一部に暗文がある。復元による杯部径は 33.3cm で、残存器高は 6.6cm である。

61　弥生土器の甕であり、口縁部が破損している。内外面共にハケ目後ナデ調整が施されている。残存器高は 31.0cm で、胴部最大径は 21.4cm である。

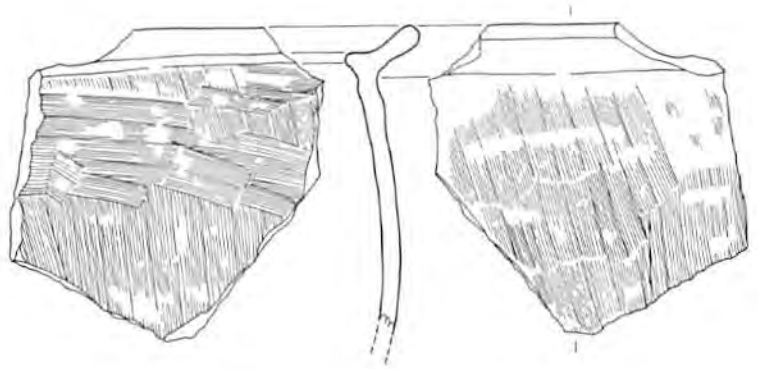
62　弥生土器の甕の口縁部から胴部片である。「く」の字状に外反した口縁部を有し、口唇部は方形に



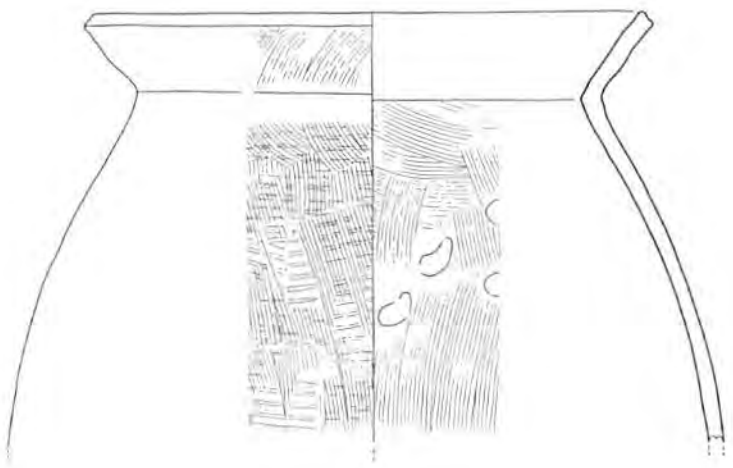
第 55 図　11 号竪穴住居跡出土遺物実測図



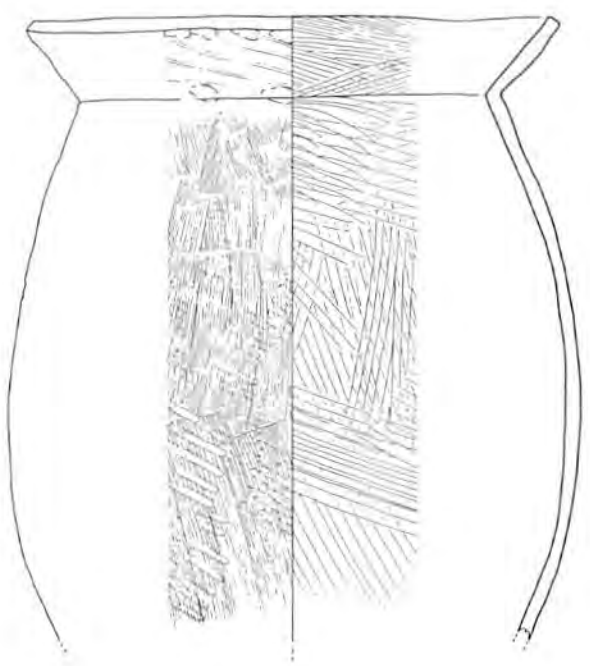
第 56 図　11 号竪穴住居跡出土遺物実測図



43

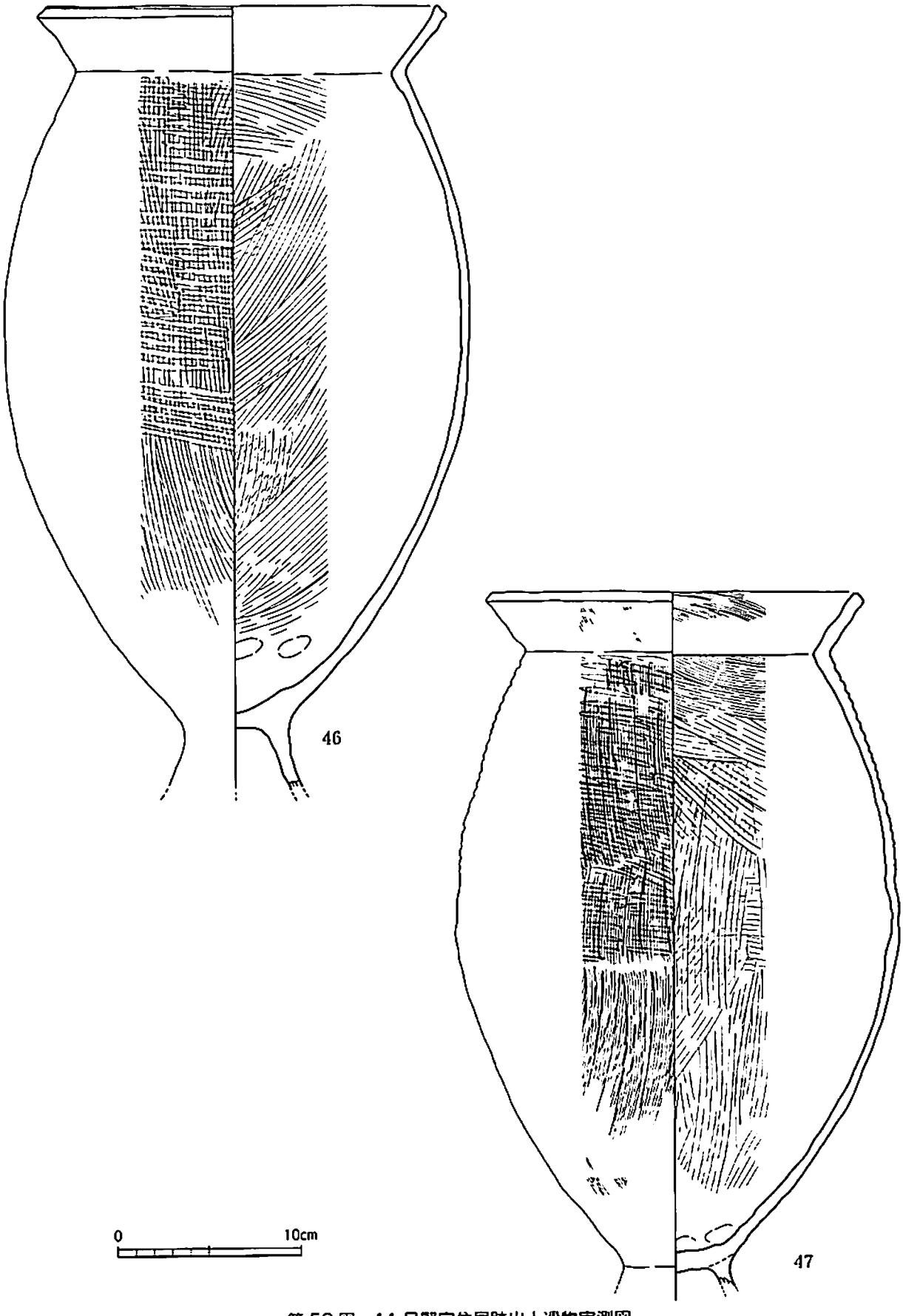


44

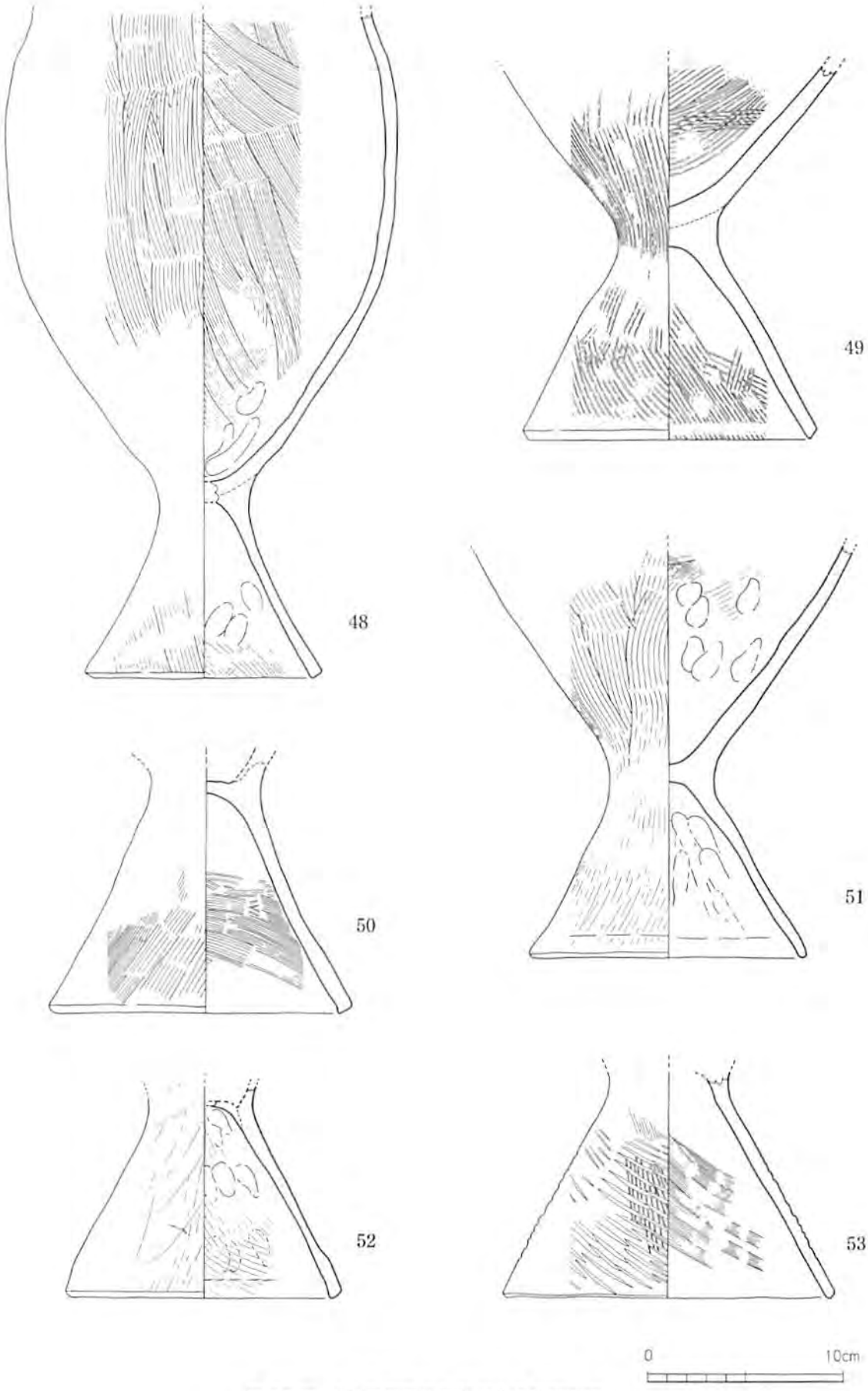


45

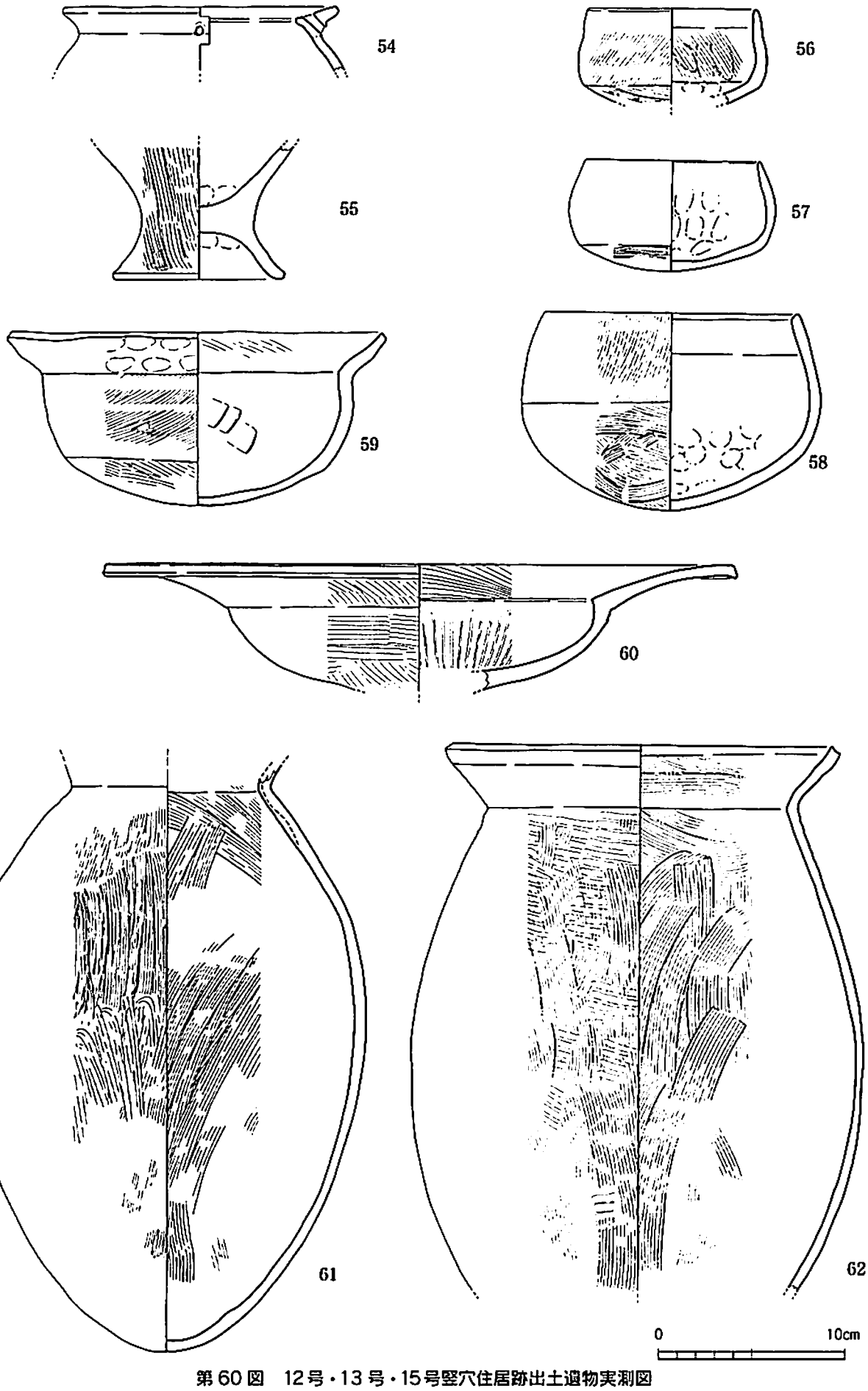
第57図　11号竪穴住居跡出土遺物実測図



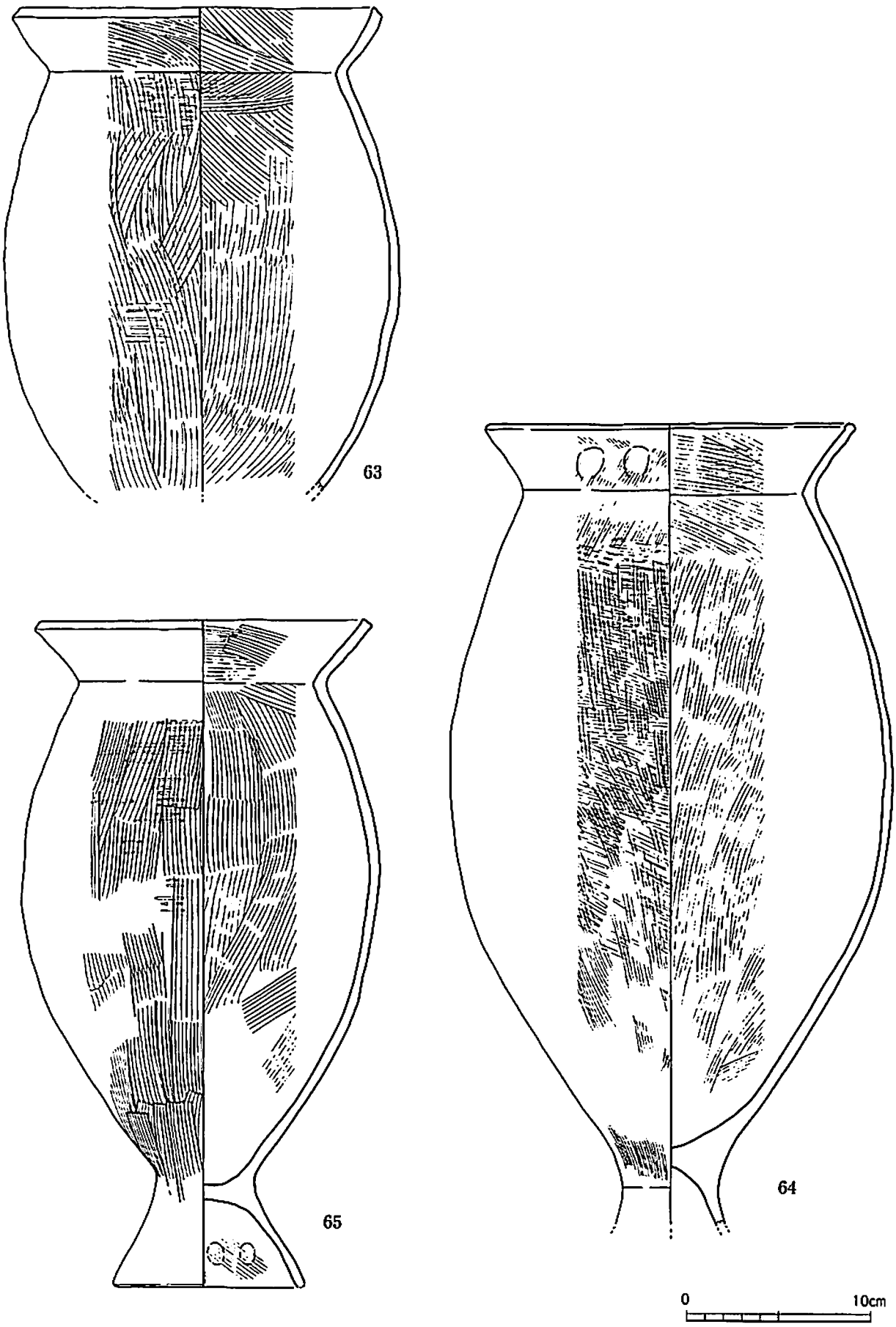
第58図　11号竪穴住居跡出土遺物実測図



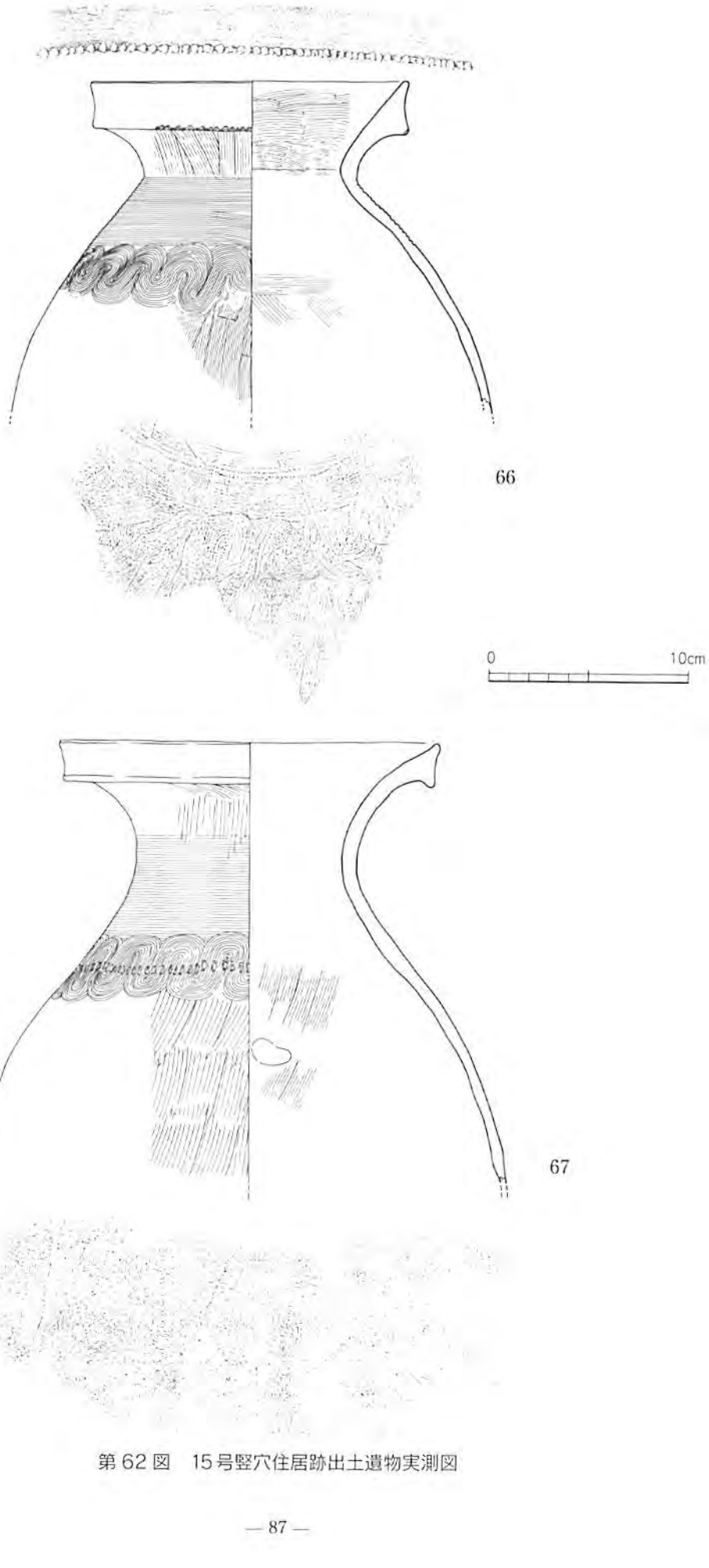
第 59 図　11 号竪穴住居跡出土遺物実測図



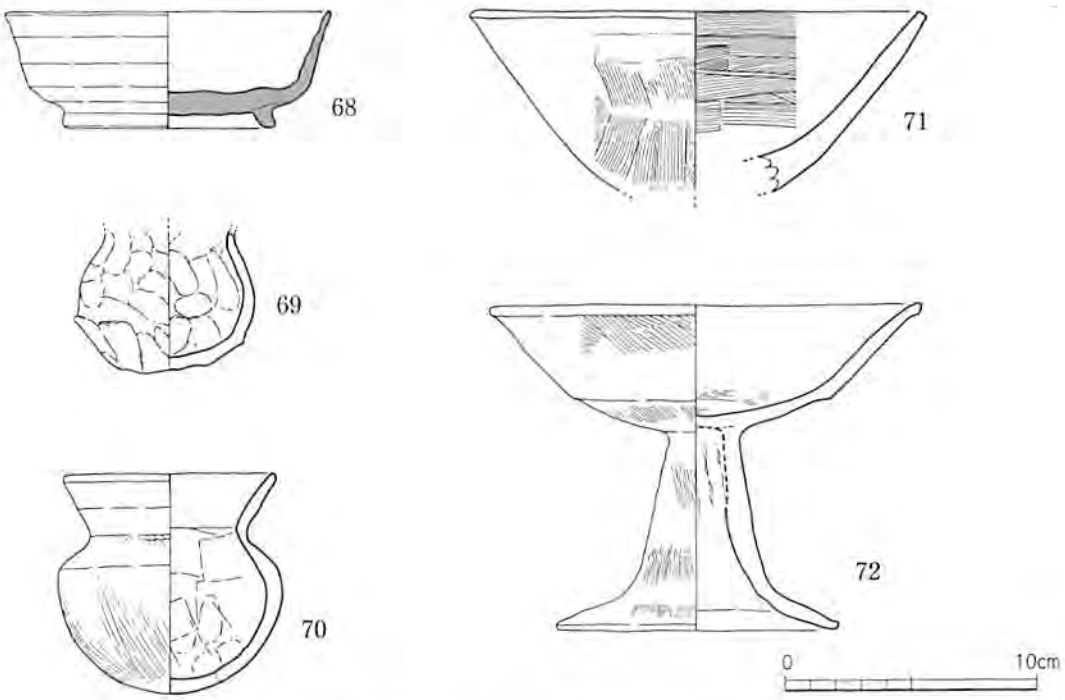
第60図　12号・13号・15号竪穴住居跡出土遺物実測図



第61図　15号竪穴住居跡出土遺物実測図



第 62 図　15 号竪穴住居跡出土遺物実測図



第 63 図　16 号・17 号竪穴住居跡出土遺物実測図

仕上げてある。外面はタタキ調整後ナデ調整、内面はハケ目調整後ナデ調整が施されている。口径は 20.3cm で、残存器高は 28.8cm、胴部最大径は 24.2cm である。

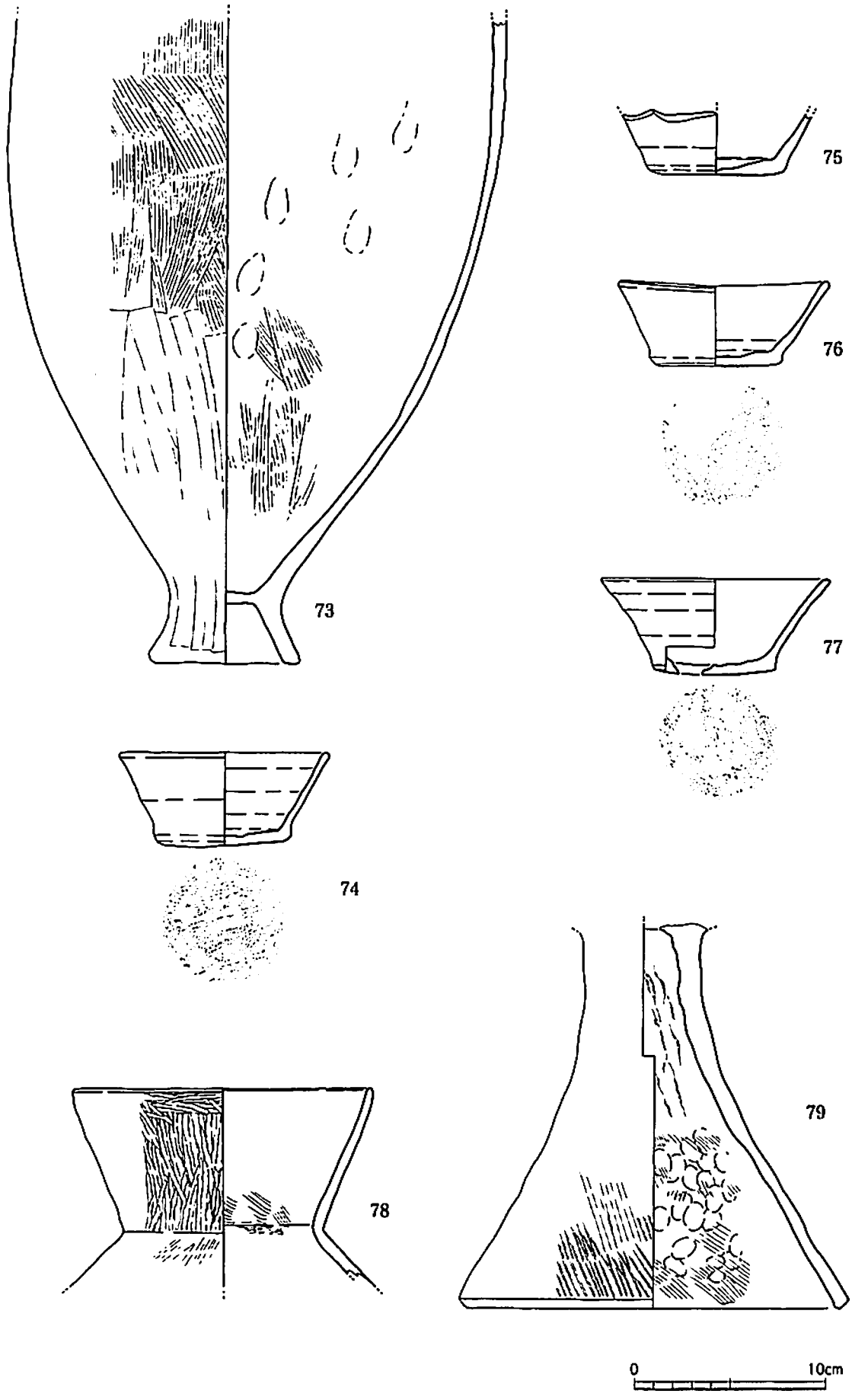
63　弥生土器の甕の口縁から胴部片である。「く」の字状に外反した口縁部を有し、口唇部は方形に仕上げてある。内外面共にハケ目調整後ナデ調整が施されている。復元による口径は 19.1cm で、残存器高は 25.8cm。胴部最大径は 21.5cm である。

64　弥生土器の台付甕の口縁部から胴部片である。「く」の字状に外反した口縁部を有し、口唇部は方形に仕上げてある。外面はタタキ調整後ハケ目調整、内面はハケ目調整後ナデ調整が施され、口縁部外面に指頭圧痕がある。復元による口径は 19.2cm で、底部は上げ底を呈し外反している。残存器高は 42.9cm、胴部最大径は 24.0cm である。

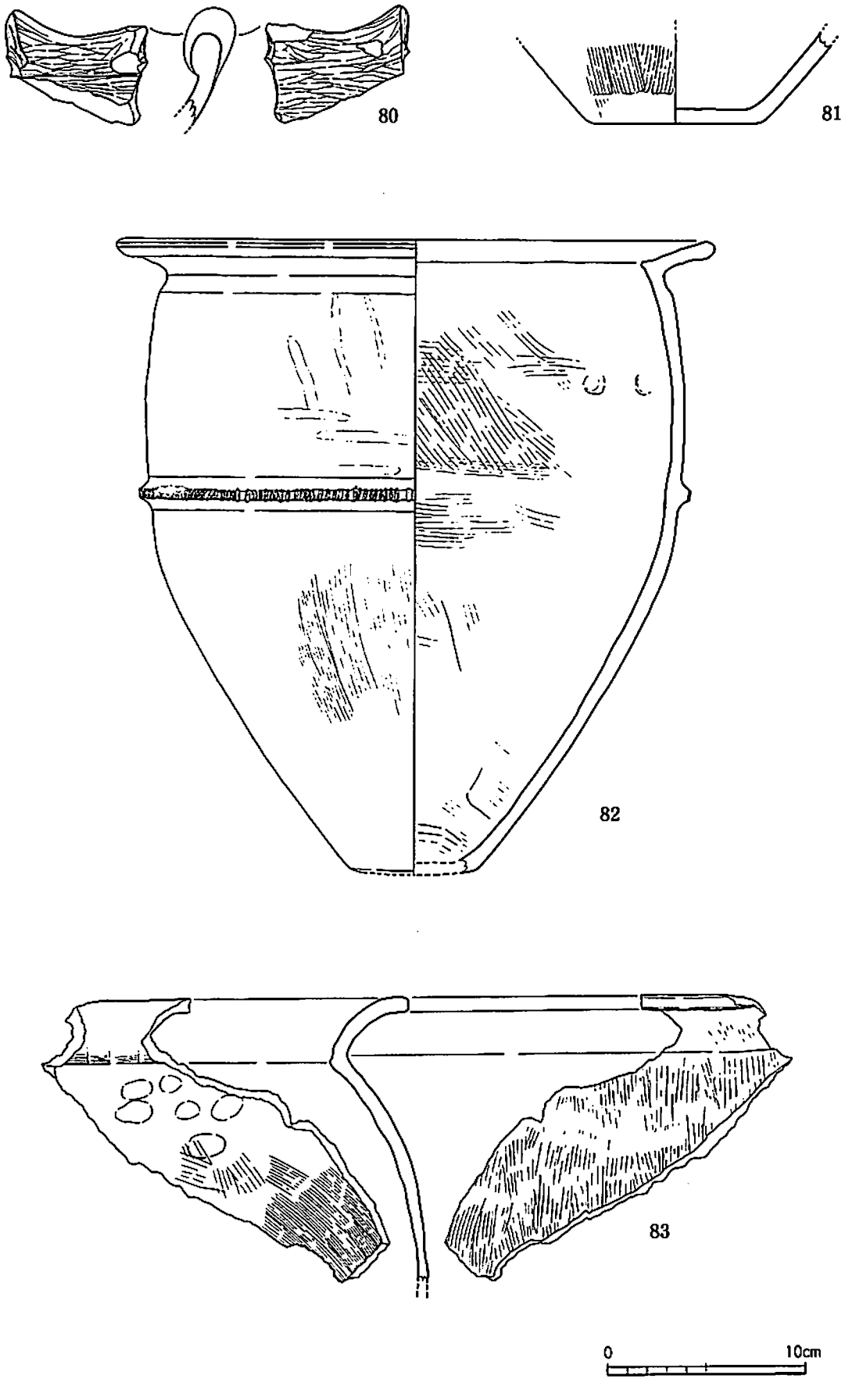
65　弥生土器の台付甕である。「く」の字状に外反した口縁部を有し、口唇部は方形に仕上げてある。外面はタタキ調整後ハケ目調整、内面はハケ目調整後ナデ調整が施され、口縁部外面に指頭圧痕がある。口径は 17.5cm で、復元による底径は 9.8cm、上げ底を呈し、外反している。器高は 35.8cm、胴部最大径は 19.3cm である。

66　弥生時代の壺の口縁部から胴部片である。口縁部は頸部から「く」の字状に外反し、上端と下端をつまみ上げ、下端には刻み目を施した断面三角形をした複合口縁を有する。内外面共にハケ目調整後ナデ調整が施され、頸部外面に櫛描平行文と櫛描流水文がある。口径は 15.9cm で残存器高は 16.5cm である。

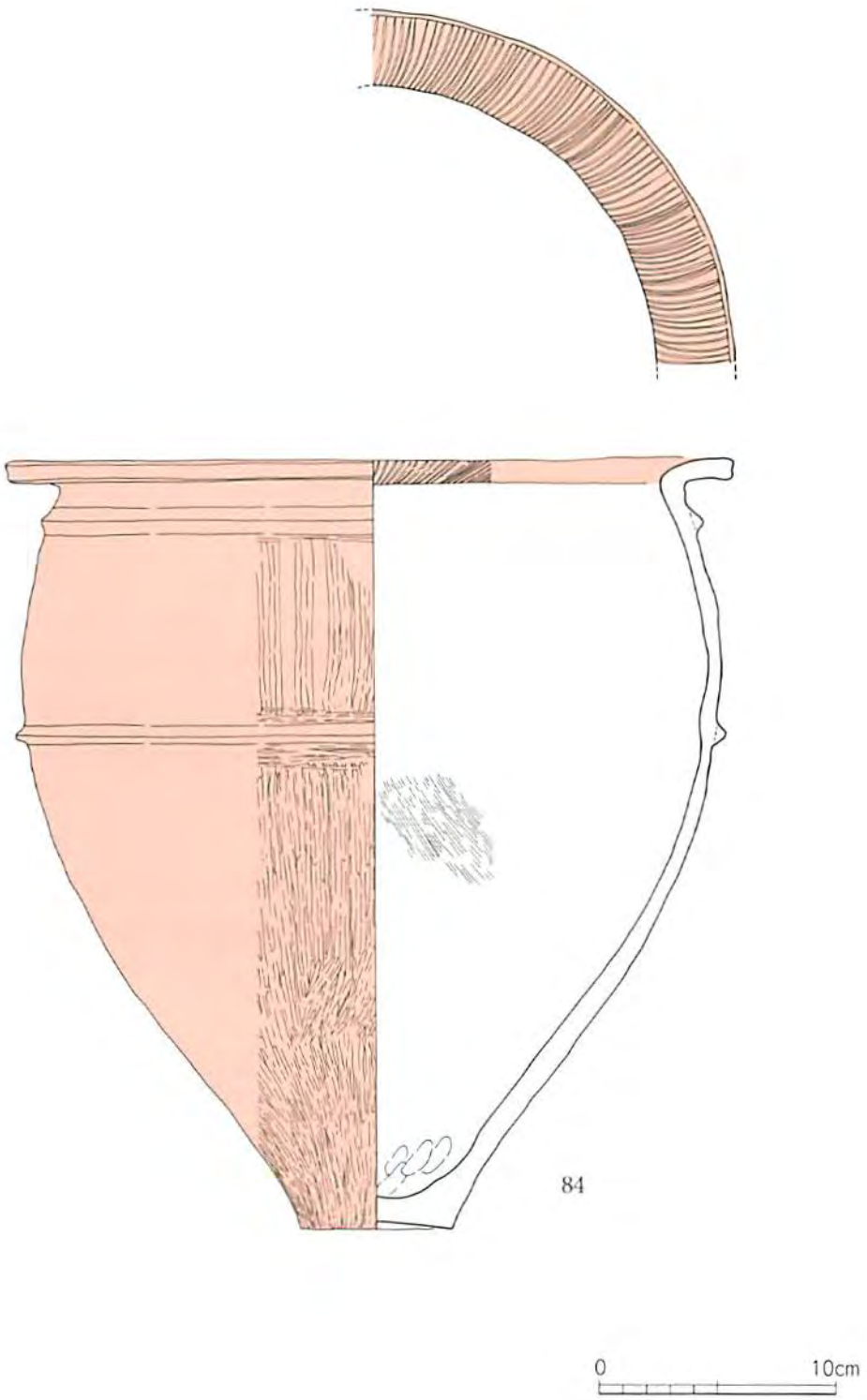
67　弥生時代の壺の口縁部から胴部片である。口縁部は頸部から「く」の字状に外反し、上端と下端をつまみ上げた断面三角形をした複合口縁を有する。内外面ともにハケ目後ナデ調整が施され、頸部外面に櫛描平行文と櫛描流水文がある。内面の一部に指頭圧痕がある。口径は 19.1cm で、残存器高は 21.8cm である。



第64図　21号・23号・24号土坑、1号・2号溝出土遺物実測図



第65図　3号不明遺構出土遺物実測図



第 66 図　4 号不明遺構出土遺物実測図

＜16号竪穴住居跡出土遺物＞

68　古代の須恵器の椀である。口縁部から胴部にかけての一部と底部が出土している。内外面共に回転ナデ調整が施され、輪高台が貼り付けられている。復元による口径は12.6cmで、高台径は8.1cm、高台高は1.0cm、残存器高は4.5cmである。

＜17号竪穴住居跡出土遺物＞

69　手づくねの胴部から底部片であり、時代は古代である。全体的に指による押さえがある。残存器高は5.5cmである

70　古代の土師器の小型丸底壺である。頸部がくびれ口縁が広がり、口径と胴部最大径がほぼ同じフォームをしている。外面はハケ目調整後ナデ調整、内面は削り後ナデ調整が施されている。口径は8.2cmで、残存器高は8.8cm、底部には穿孔がある。

71　古代の土師器の鉢であり、底部に打ち欠きがある。内外面共にハケ目調整後ナデ調整が施されている。口径は17.6cmで、残存器高は7.0cmである。

72　古代の土師器の高杯である。内外面共にハケ目調整後ナデ調整が施され、脚部内面に絞り痕がある。杯部径は16.8cmで、底径は10.7cm、残存器高は12.7cmである。

（2）土坑出土遺物

＜21号土坑出土遺物＞

73　弥生土器の台付甕の胴部から脚部片である。外面はハケ目調整後ナデ調整で、胴部下部から脚部にかけてはヘラ状工具によるナデ調整が施されている。内面はハケ目調整後ナデ調整が施され、一部に指頭圧痕がある。底径は7.3cmで、上げ底を呈し外反している。残存器高は32.9cmである

＜23号土坑出土遺物＞

74　土師器の杯であり、時代は古代である。内外面共に回転ナデ調整、底部は回転ヘラ切りが施され、板状圧痕がある。復元による口径は10.6cmで、底径は6.0cm、器高は4.8cmである。

＜24号土坑出土遺物＞

75　土師器の杯の胴部から底部片であり、時代は古代である。内外面共に回転ナデ調整が施されている。口縁部は打ち欠きと思われる。底径は5.6cmで、残存器高は3.3cmである。

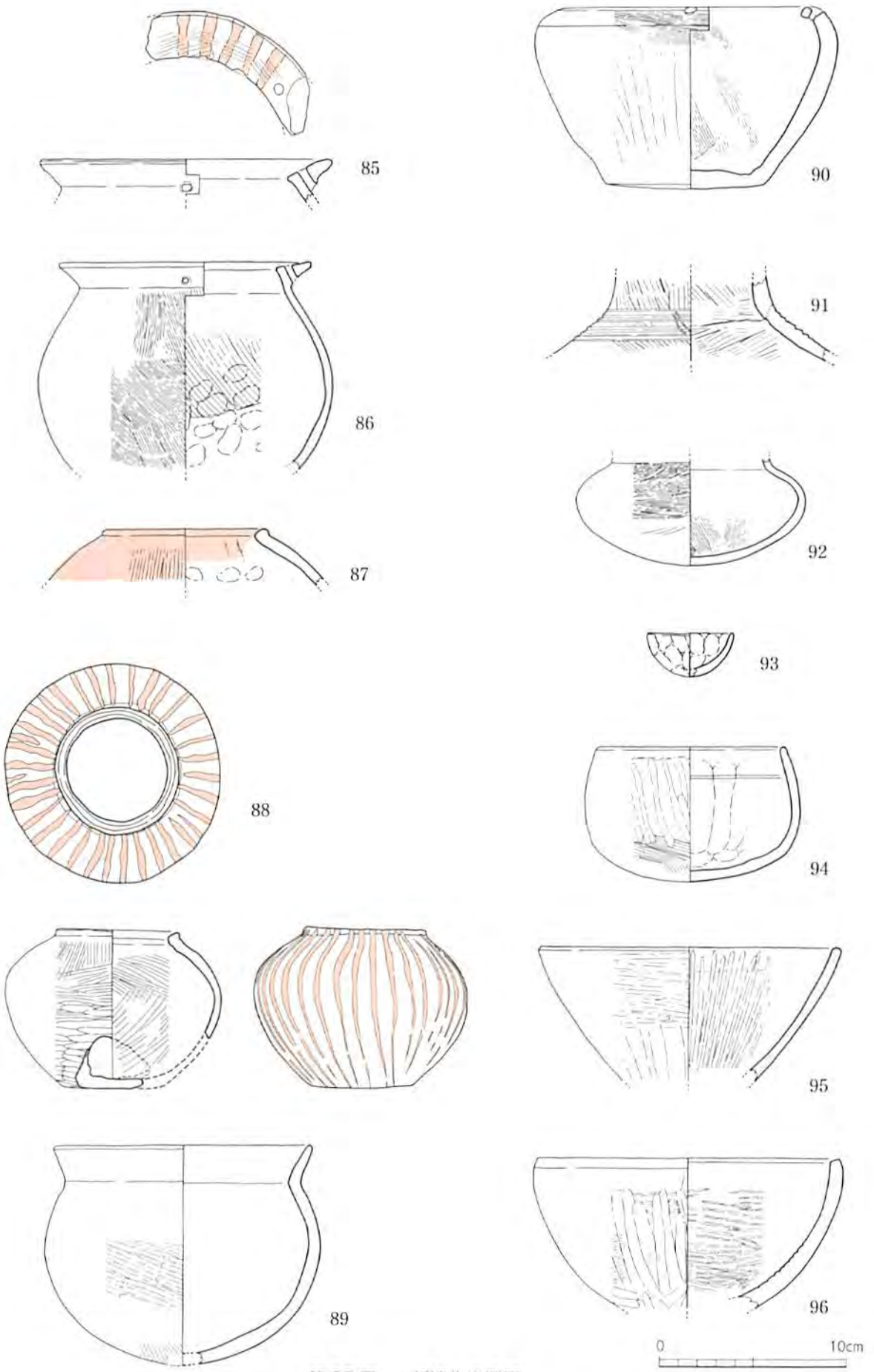
76　土師器の杯であり、時代は古代である。内外面共に回転ナデ調整が施されている。復元による口径は10.5cmで、底径は5.2cm、器高は4.4cmである。

77　土師器の杯であり、時代は古代である。内外面共に回転ナデ調整、底部は回転ヘラ切りが施されている。底部に焼成後穿孔がある。復元による口径は11.7cmで、底径は6.2cm、器高は4.9cmである。

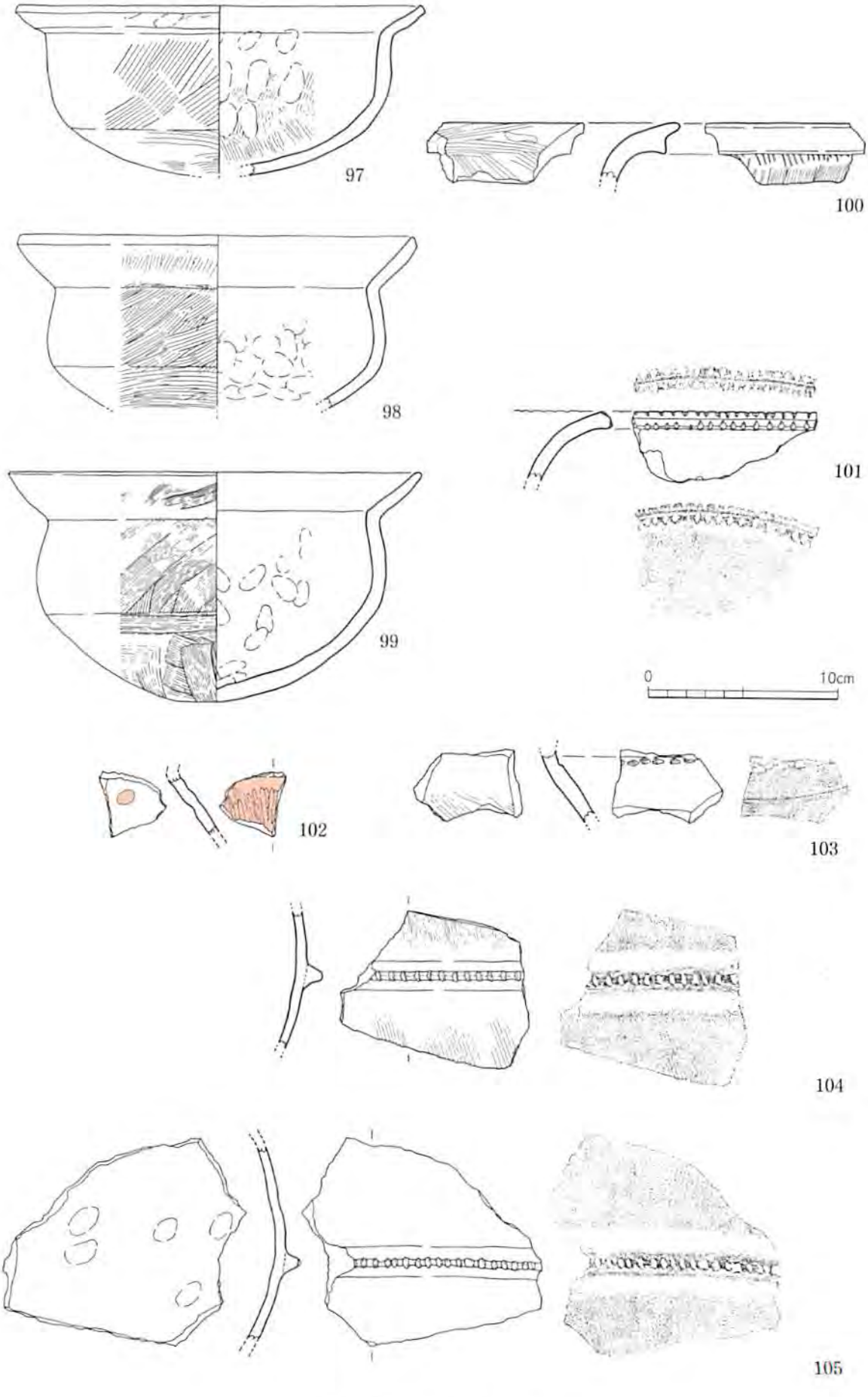
（3）溝状遺構出土遺物

＜1号溝出土遺物＞

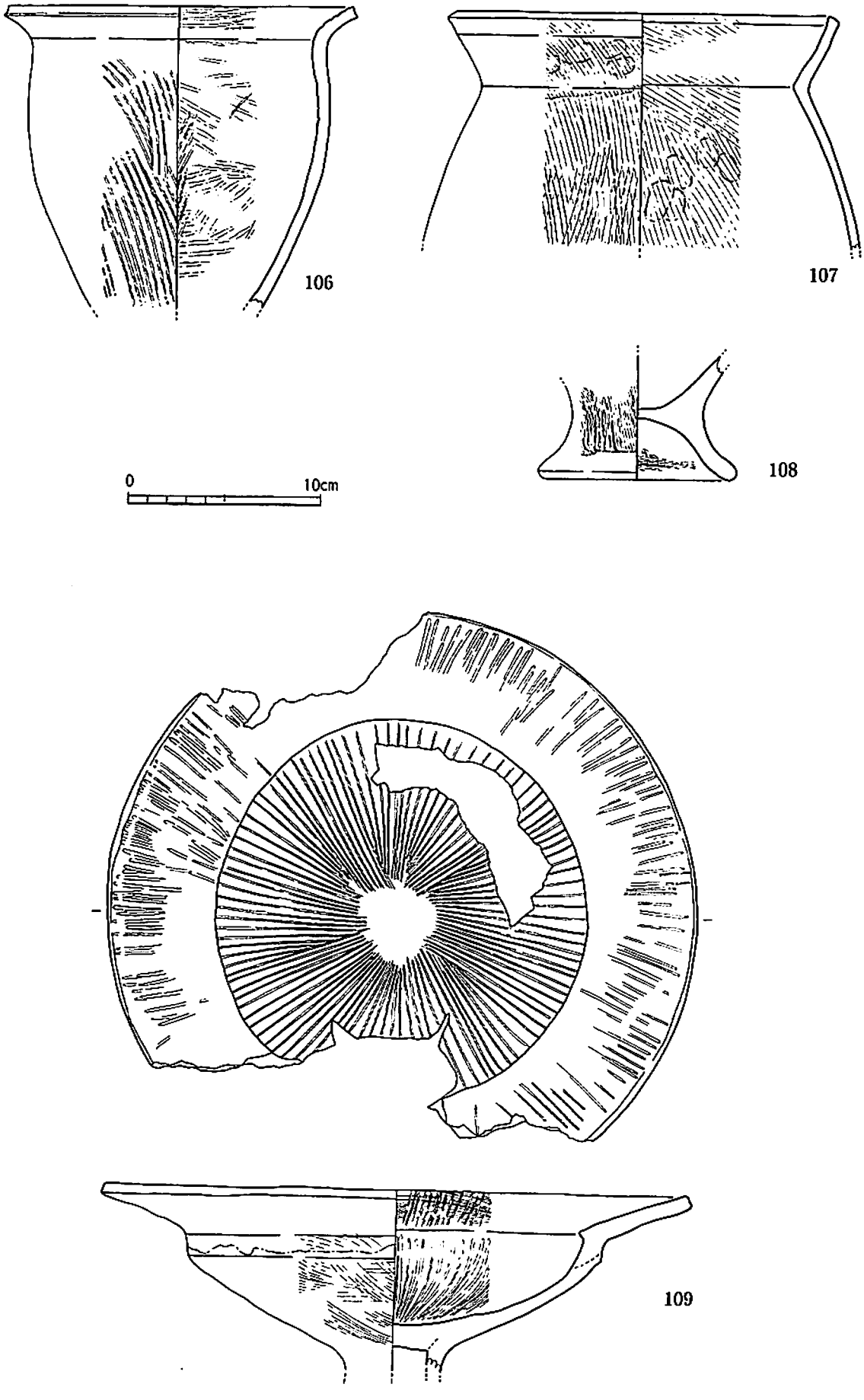
78　弥生土器の壺の口縁部から頸部片である。外面頸部から口縁にかけてミガキ調整、胴部はハケ目調整後ナデ調整、内面頸部にはハケ目調整後ナデ調整が施されている。復元による口径は15.4cmで、残存器高は10.2cmである。



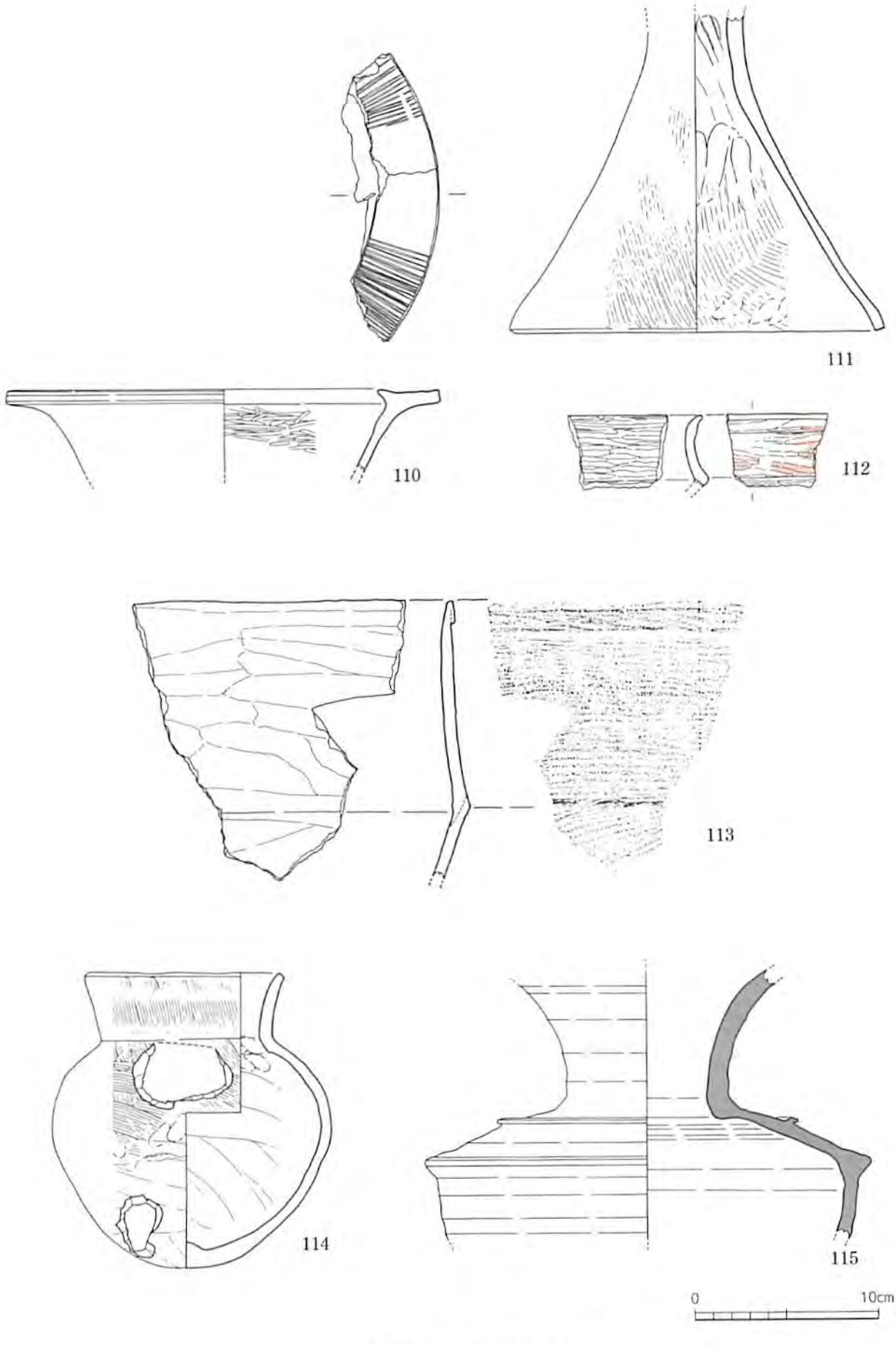
第 67 図　一括遺物実測図



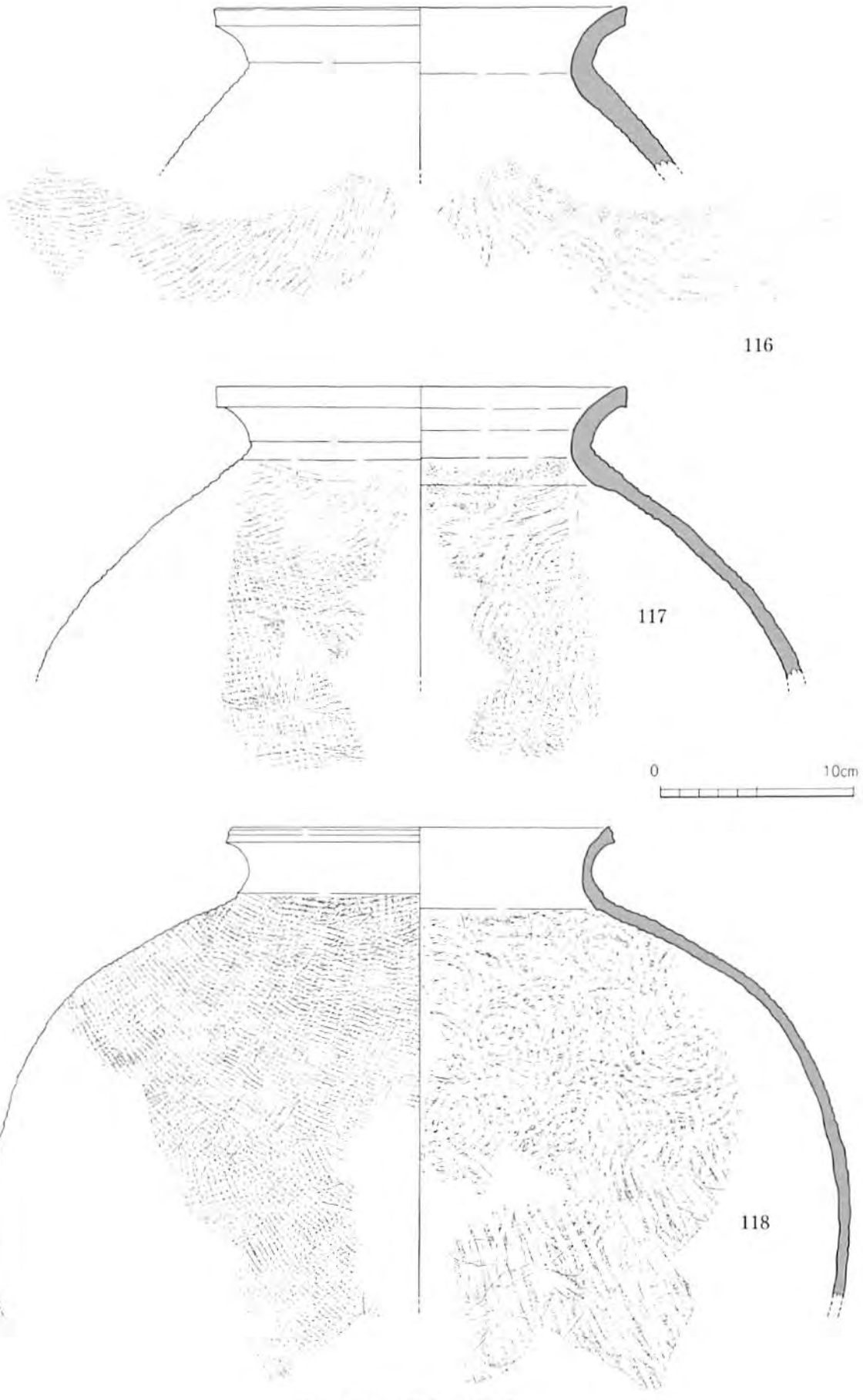
第 68 図　一括遺物実測図



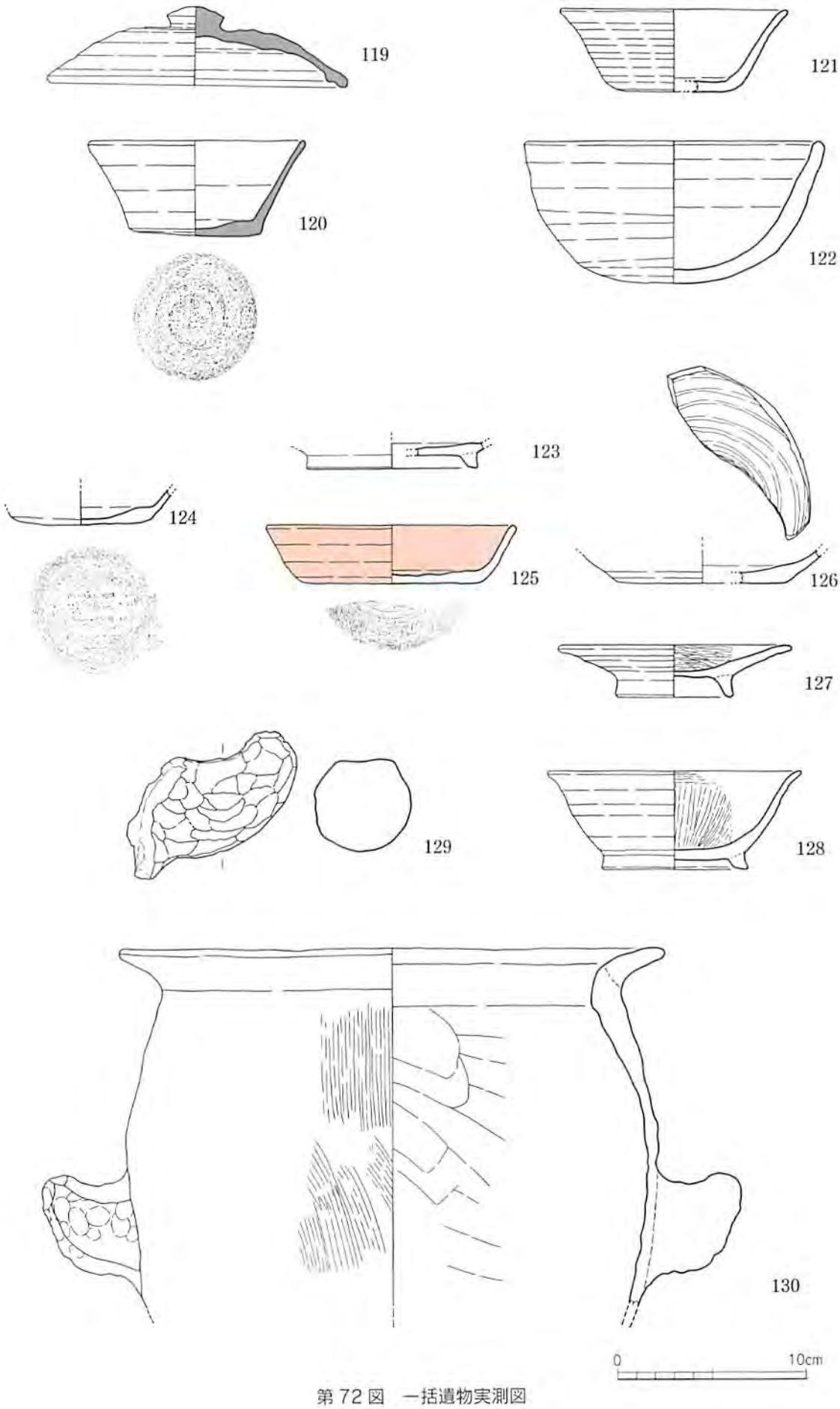
第69図　一括遺物実測図



第 70 図　一括遺物実測図



第 71 図　一括遺物実測図



第 72 図　一括遺物実測図

＜２号溝出土遺物＞

79　弥生土器の高杯の脚部である。内外面共にハケ目調整後ナデ調整が施され、内面には絞り痕があり、一部に指頭圧痕がある。底径は 19.3cm で、残存器高は 19.6cm である。

（４）不明遺構出土遺物

＜３号不明遺構出土遺物＞

80　縄文土器の浅鉢の口縁部片で、波状の突帯を有する。黒色磨研土器で内外面ともにミガキ調整が施されている。残存器高は 3.8cm である。

81　弥生土器で、壺または甕の底部である。外面と底部はハケ目調整後ナデ調整、内面はナデ調整が施されている。平底で、復元による底径は 8.5cm である。残存器高は 4.5cm である。底部に一部黒斑がある。

82　弥生土器の甕である。「く」の字状に外反した口縁部を有し、口唇部は丸みをもって仕上げてある。胴部の中央に断面方形の刻み目突帯が１条ある。頸部は僅かに内傾し、突帯部分から底部に向かいやや曲線を描いて窄まるフォームとなっている。復元による口径は 29.4cm、残存器高は 31.4cm、復元による胴部最大径は 28.0cm である。底径は 4.8cm で、平坦な形状に仕上げてある。外面は刻み目突帯より上部がミガキ調整、下部はハケ目調整後ナデ調整、内面はハケ目調整後ナデ調整が施されている。

83　弥生土器の壺の口縁部から胴部片である。「く」の字の外反した口縁部を有し、口唇部が平坦になっている。口縁部は横ナデ調整、内外面共にハケ目調整が施され、内面に指頭圧痕がある。残存器高は 14.3cm である

＜４号不明遺構出土遺物＞

84　弥生土器の甕で、赤色土器である。平坦面が僅かに外反する逆「Ｌ」字状の口縁部を有し、口縁部は方形に仕上げてある。口径は 30.2cm で、器高は 31.9cm である。頸部直下に断面三角形の突帯が１条、胴部上部に断面三角形の突帯が１条ある。頸部はほんの僅かに内傾し、胴部にある突帯部分に最大径がある。底径は 6.4cm であり、やや厚みがあり、僅かに上げ底を呈している。外面は全体的にミガキ調整、内面はハケ目調整後ナデ調整が施され、口縁内面に暗文がある。

（５）その他の遺物

＜弥生時代＞

85　G-23･24 グリッドから出土した弥生土器の鉢の口縁部片である。内外面共に横ナデ調整、口縁内面にはハケ目調整が施され、口縁部に穿孔と赤彩がある。復元による口径は 15.1cm で、残存器高は 2.3cm である。

86　E･F-9･10 グリッドから出土した弥生土器の鉢の口縁部から胴部片である。内外面共にハケ目調整後ナデ調整が施され、内面には指頭圧痕があり、口縁部に穿孔がある。復元による口径は 13.1cm で、残存器高は 10.8cm、胴部最大径は 15.6cm である。

87　C~F-21･22 グリッドから出土した弥生土器の無頸壺の口縁部から胴部片である。外面はハケ目調整後ナデ調整、内面はナデ調整が施され、指頭圧痕と絞り痕がある。復元による口径は 8.4cm で、残存器高は 3.0cm である。赤色土器である。

88　弥生土器の無頸壺であり、出土位置は不明である。外面胴部上部はハケ目調整後ナデ調整、下部はミガキ調整、内面はハケ目調整後ナデ調整が施されている。胴部から底部にかけて穿孔がある。口径は 6.4cm で、底径は 5.3cm、器高は 8.4cm、胴部最大径は 11.3cm である。外面と口縁部に赤彩がある。

89　F-9・10 グリッドから出土した弥生土器の鉢である。外面はタタキ調整後ナデ調整、内面は削り後ナデ調整が施されている。復元による口径は 13.5cm で、残存器高は 11.6cm、復元による胴部最大径は 14.6cm であり、頸部がくびれ口縁が広がり、口径より僅かに胴部最大径が大きいフォームになっている。

90　弥生土器の鉢であり、出土位置は不明である。外面は板状工具によるミガキ調整、内面はハケ目調整後ナデ調整、口唇部はハケ目調整が施されている。口縁部が内側に屈曲し、その四方向に穿孔がある。口径は 12.6cm で、底径は 8.3cm、器高は 9.5cm、胴部最大径は 16.0cm である。煤が付着している。

91　E・F-17・18 グリッドから出土した弥生土器の壺の頸部片である。内外面共にハケ目調整が施され、外面には沈線が 6 本ある。残存器高は 4.5cm である。

92　E・G-2 グリッドから出土した弥生土器の小型鉢の頸部から底部片である。外面胴部上部はハケ目調整後ミガキ調整、下部はナデ調整、内面底部には多方向にハケ目調整が施されている。残存器高は 5.6cm で、復元による胴部最大径は 12.1cm である

93　F-9 グリッドから出土した弥生土器の小鉢（ミニチュア）の口縁部から底部片である。全体的に指による押さえがある手づくねである。復元による口径は 4.4cm で、器高は 2.3cm である。

94　C~F-21・22 グリッドから出土した弥生土器の鉢である。外面はハケ目調整とミガキ調整、内面は指ナデ調整が施されている。復元による口径は 9.7cm で、器高は 7.1cm、胴部最大径は 11.4cm である。

95　G-9・10 グリッドから出土した弥生土器の鉢の口縁部から胴部片である。外面はヘラミガキ調整、内面はナデ調整が施され、暗文がある。復元による口径は 15.6cm で、残存器高は 7.0cm である。

96　E・F-27・28 グリッドから出土した弥生土器の鉢の口縁部から胴部片である。口縁には横ナデ調整、内外面共にハケ目調整ナデ調整が施され、外面には板状工具による削り調整が縦方向にある。復元による口径は 16.0cm で、残存器高は 7.9cm である。

97　E・F-5・6 グリッドから出土した弥生土器の鉢の口縁部から底部片である。頸部から口縁部が大きく外反し、口縁部は方形に仕上げてある。外面はハケ目調整後ナデ調整、内面はナデ調整、口縁部は横ナデ調整が施され、内面に指頭圧痕がある。復元による口径は 20.6cm で、残存器高は 8.9cm、丸底と推定される。97～99 は口径より胴部最大径が小さいフォームをしている。

98　F-9・10 グリッドから出土した弥生土器の鉢の口縁部から胴部片である。内外面共にハケ目調整後ナデ調整が施され、内面には指頭圧痕がある。復元による口径は 21.4cm で、残存器高が 8.8cm、丸底と推定される。

99　C・D-25・26 グリッドから出土した弥生土器の鉢である。頸部から口縁部が大きく外反し、口縁部は丸みをもって仕上げてある。外面はハケ目調整後ナデ調整、内面はナデ調整が施され、指頭圧痕がある。口径は 21.5cm、器高は 11.9cm、丸底である。

100　E・F-11・12 グリッドから出土した弥生土器の壺の口縁部片である。口縁部は頸部から「く」の字状に外反していると推定され、上端と下端をつまみ上げた断面三角形をした複合口縁を有する。内外面共にハケ目調整、口縁は横ナデ調整が施されている。残存器高は 3.1cm である。

101　C~F-21・22 グリッドから出土した弥生土器の壺の口縁部片である。口縁部は頸部から「く」の字状に外反していると推定され、口唇部に 2 段の刻み目がある。内外面共にナデ調整が施されている。残存器高は 3.7cm である

102　E・F-17・18 グリッドから出土した赤色土器の頸部片である。外面はヘラミガキ調整、内面はナデ調整が施されている。残存器高は 3.3cm である。

103　E・F-3・4 グリッドから出土した弥生土器の甕の頸部と推定される。内外面共にナデ調整、内面の一部にハケ目調整が施され、頸部には連続文がある。残存器高は 3.8cm である。

104　C･D-23･24 グリッドから出土した弥生土器の甕の胴部片である。外面はハケ目調整後ナデ調整、内面はナデ調整が施され、外面胴部に断面方形の刻み目突帯が 1 条ある。残存器高は 8.2cm である。

105　E･F-21･22 グリッドから出土した弥生土器の甕の胴部片である。内外面共にナデ調整が施され、内面に指頭圧痕があり、外面胴部に断面方形の刻み目突帯が 1 条ある。残存器高は 10.9cm である。

106　E･F-27･28 グリッドから出土した弥生土器の鉢の口縁部から胴部片である。頸部から口縁部が大きく外反し、口縁部は方形に仕上げてある。内外面共に粗いハケ目調整後ナデ調整が施されている。復元による口径は 18.0cm で、残存器高は 15.4cm である。

107　弥生時代の甕の口縁部から胴部片で、出土位置は不明である。内外面共にハケ目調整後ナデ調整が施され、口縁部と内面に指頭圧痕がある。口径は 19.5cm で、残存器高が 11.9cm である。外面に黒斑がある。

108　C~F-17･18 グリッドから出土した弥生土器の甕の脚部である。底径は 9.4cm で、上げ底を呈し外反している。外面はハケ目調整後ナデ調整、内面はナデ調整が施されている。残存器高は 6.4cm である。

109　C･D-25･26 グリッドから出土した弥生土器の高杯の杯部である。外面はハケ目調整後ナデ調整、口縁部と内面に暗文がある。杯部径は 30.3cm で、残存器高は 9.4cm である。

110　E･F-19･20 グリッドから出土した弥生土器の高杯の杯部である。平坦面が僅かに外反し外側に発達した「T」字状の口縁部を有し、口唇部は方形に仕上げてある。外面はナデ調整、内面はミガキ調整が施され、杯部に線刻がある。復元による杯部径は 23.4cm で、残存器高は 4.5cm である。

111　C･D-25･26 グリッドから出土した弥生土器の高杯の脚部である。外面はタタキ調整後ナデ調整、内面はハケ目調整後ナデ調整が施され、絞り痕がある。底径は 19.8cm、残存器高は 17.2cm である。

＜弥生時代以外＞

112　E～G グリッドから出土した縄文土器の浅鉢の口縁部片である。内外面共にミガキ調整が施され、外面には赤色顔料塗布がある。残存器高は 4.0cm である。

113　C~F-11~14 グリッドから出土した縄文土器の深鉢の口縁部から胴部片である。外面は貝殻条痕があり、内面はヘラ削り調整が施されている。残存器高は 15.1cm である。

114　土師器の壺で、古墳時代（5 世紀後半）である。出土位置は不明である。頸部から僅かに外反する口縁部を有し、口唇部は方形に仕上げてある。外面胴部上部はハケ目調整後ナデ調整、下部はナデ調整、内面は削り後ナデ調整が施されている。胴部には上部と下部に 2 箇所穿孔がある。口径は 10.4cm で、器高は 16.0cm、胴部最大径は 15.3cm、丸底である。

115　E･F-17･18 グリッドから出土した須恵器の長頸壺の頸部から胴部片で、時代は古代である。内外面共に回転ナデ調整が施されている。残存器高は 14.6cm、復元により胴部最大径は 24.6cm である。頸部と胴部には全体的に自然釉がかかる。

116　C･D-23･24 グリッドから出土した須恵器の甕の口縁部から胴部片であり、時代は古代である。頸部がくびれ、「く」の字状に外反した口縁部を有し、口唇部は方形に仕上げてある。胴部が張りをもつフォームで、口縁部は横ナデ調整、外面は格子目タタキ調整後ナデ調整が施され、内面は同心円文の当て具痕がある。復元による口径は 21.2cm で、残存器高は 8.4cm である。

117　C･D-23･24 グリッドから出土した須恵器の甕の口縁部から胴部片であり、時代は古代である。頸部がくびれ、「く」の字状に外反した口縁部を有し、口唇部は方形に仕上げてある。胴部は大きな張りをもつと思われる。口縁部は横ナデ調整、外面は格子目タタキ調整後ナデ調整が施され、内面は同心円文の当て具痕がある。復元による口径は 21.2cm で、残存器高は 14.9cm である。116 と同一のものであ

る可能性が高い。

118　C・D-24 グリッドに出土した須恵器の甕の口縁部から胴部片で、時代は古代である。頸部がくびれ、「く」の字状に僅かに外反した口縁部を有し、口唇部は方形に仕上げてある。胴部は大きな張りをもつと思われる。口縁部は横ナデ調整、外面は格子目タタキ調整後ナデ調整、内面は同心円文の当て具痕がある。復元による口径は 19.8cm で、残存器高は 25.0cm である。

119　C・D-25・26 グリッドから出土した須恵器の蓋であり、時代は古代である。外面は回転ヘラ削り調整後ナデ調整、内面は回転ナデ調整が施され、宝珠つまみがついている。口径は 15.4cm で、器高は 4.1cm である。

120　C・D-23・24 グリッドから出土した須恵器の杯であり、時代は古代である。内外面共に回転ナデ調整、底部は回転ヘラ削り調整が施されている。口径は 11.2cm で、底径は 6.7cm、器高は 5.0cm、平底である。

121　C・D-25・26 グリッドから出土した土師器の杯の口縁部から底部片であり、時代は古代である。内外面共に回転ナデ調整が施され、底部は回転ヘラ切りがなされ、板目圧痕がある。復元による口径は 12.0cm で、底径は 5.0cm、器高は 4.3cm で、平底と推定される。

122　C・D-25・26 グリッドより出土した土師器の鉢であり、時代は古代である。内外面共に回転ナデ調整、底部は回転ヘラ削りが施されている。口径は 15.4cm で、器高は 7.4cm、丸底である。

123　E・F-3・4 グリッドから出土した土師器の椀の底部片で、貼り付け高台であり、時代は古代である。内面はナデ調整、底部は回転ヘラ削り調整が施され、板目圧痕がある。高台径は 9.0cm、高台高は 0.7cm、残存器高は 1.3cm である。

124　C・D-21・22 グリッドから出土した土師器の杯の底部で、時代は古代である。内外面共に回転ナデ調整が施され、底部には板状圧痕がある。底径は 4.7cm で、残存器高は 1.8cm、平底である。赤色土器である。

125　E・F-3・4 グリッドから出土した土師器の杯の口縁部から底部片で、時代は古代である。内外面ともに回転ナデ調整、底部には回転ヘラ削りが施されている。復元による口径は 13.1cm で、底径は 4.7cm で平底である。器高は 3.0cm で、赤色土器である。

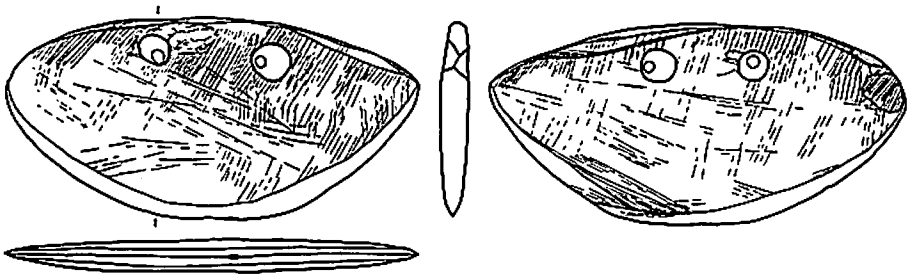
126　C・D-25・26 グリッドから出土した古代の鉢の底部片である。内外面共に回転ナデ調整、底部は回転ヘラ削り調整が施され、暗文がある。復元による底径は 8.8cm で、平底と推定される。残存器高は 1.8cm である。

127　C・D-29・30 グリッドから出土した内黒土器の台付小皿の口縁部から底部片で、時代は中世である。外面は回転ナデ調整、内面はミガキ調整が施されている。復元による口径は 11.4cm で、高台径は 5.9cm、高台高は 0.9cm、器高は 2.7cm である。

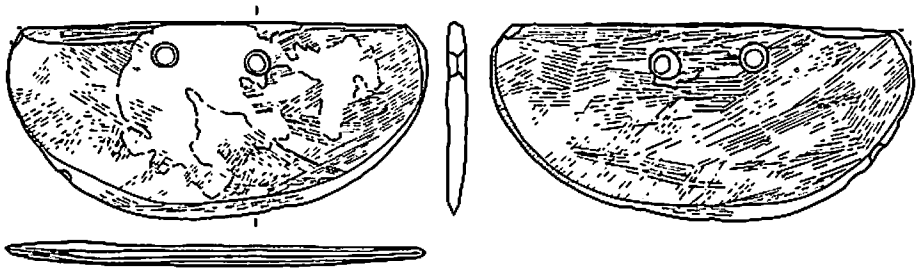
128　E・F-17・18 グリッドから出土した内黒土器の椀の口縁部から底部片で、時代は中世である。外面は回転ナデ調整、内面はミガキ調整が施され、暗文があり、底部は回転ヘラ切りが施されている。復元による口径は 13.2cm で、高台径は 7.4cm、高台高は 0.7cm、器高は 5.1cm である。

129　E・F-17・18 グリッドから出土した土師器の甑の把手である。全体的に指押さえが施されている。残存器高は 7.7cm である。

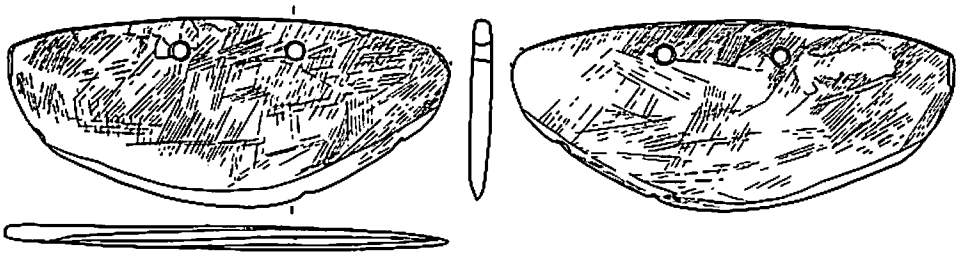
130　甑の口縁部から胴部部分であり、出土位置は不明である。「く」の字状に外反した口縁部を有し、口唇部は丸みをもって仕上げてある。僅かに頸部がくびれ、胴部にかけて僅かな膨らみをもったフォームになっている。外面はハケ目調整後ナデ調整、内面はヘラ削り調整、口縁部は横ナデ調整が施されている。角形把手にはナデ調整が施され、指頭圧痕がある。復元による口径は 28.6cm で、残存器高は 18.7cm である。



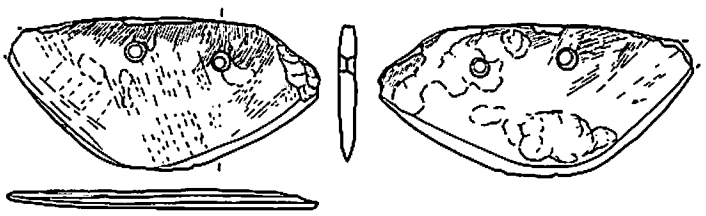
1



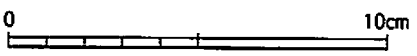
2



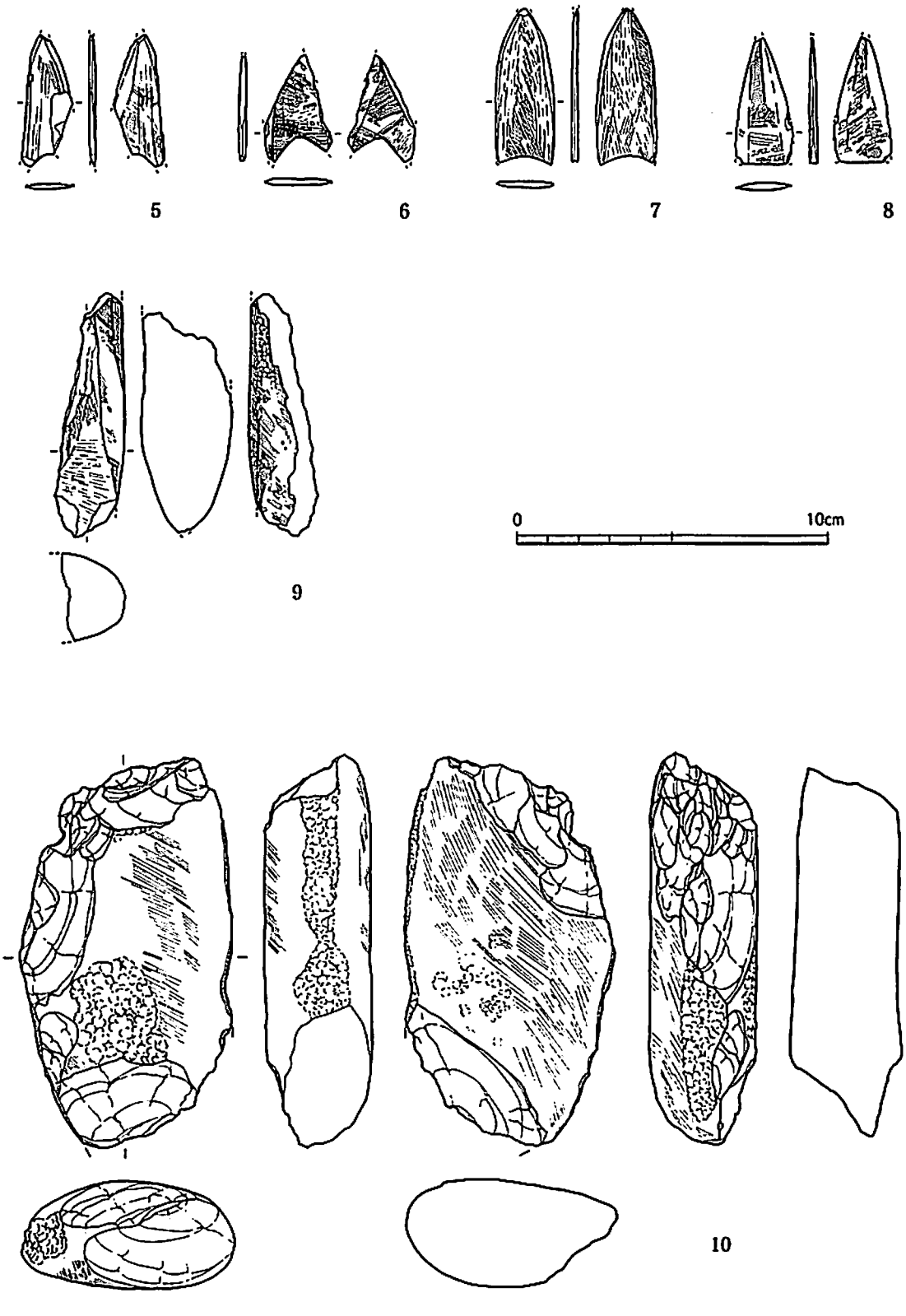
3



4



第 73 図　10 号竪穴住居跡内 Pit 出土石器実測図



第74図　9号・11号竪穴住居跡、4号溝、6号土壙墓出土石器実測図

(6) 石器

〈1〉石包丁

11号竪穴住居跡より出土した石包丁で、同じピットから4枚並んで出土した。4枚とも完形の半月形外弯刃である。北側から順に番号を付した。

1　縦5.2cm、横11.0cm、厚み0.8cm、重量53.2gを測る。

2　縦5.1cm、横11.1cm、厚み0.5cm、重量51.8gを測る。

3　縦4.9cm、横11.8cm、厚み0.5cm、重量47.2gを測る。

4　4枚のうちで一番小さく、縦3.9cm、横8.3cm、厚み0.5cm、重量20.0gを測る。

〈2〉石鏃

5　10号竪穴住居跡より出土した無茎の磨製石鏃で、一部破損しているため正確な形状は分からないが、二等辺三角形で無形の基部が僅かに内弯すると推定される。縦4.1cm、横1.7cm、厚み0.2cm、重さ1.6gを測る。

6　4号溝より出土した無茎の磨製石鏃で、一部破損しているために正確な形状は分からないが、基部が内弯する五角形の形状と推定される。縦3.9cm、横2.2cm、厚み0.2cm、重さ1.6gを測る。

7　6号土壙墓より出土した無茎の磨製石鏃で、基部が僅かに内弯し、両側が葉のように緩やかに曲線を描く形状である。縦5.0cm、横1.9cm、厚み0.2cm、重さ3.4gを測る。6号土壙墓からは人骨が出土しているが、その腹部あたりに位置しており、射抜かれた可能性もある。

8　B-12グリッドから出土した無茎の磨製石鏃で、二等辺三角形の形状である。縦4.0cm、横1.8cm、厚み0.2cm、重さ2.2gを測る。

〈3〉石斧

9　9号竪穴住居跡より出土した磨製石斧で、破損のため形状は正確でないが小型のものである。縦7.7cm、横2.3cm、厚み2.9cm、重さ62.2gを測る。縄文時代のものである。

10　E･F-5･6グリッドから出土している。両端が破損しているため、その形状は正確でなく、自然石の可能性も残るが、磨いた形跡があるので磨製石斧とした。縦12.3cm、横6.9cm、厚み3.5cm、重さ391.0gを測る。

第５節　まとめ

（１）弥生時代

弥生時代の遺構としては、甕棺墓12基、竪穴住居跡15軒、土壙墓６基、土坑22基、溝状遺構４条が確認された。

甕棺墓は、Ⅰ区で２基、Ⅱ区で９基、Ⅲ区で１基と、今回の調査区のほぼ全域で確認され、他にも甕棺と思われる土器片を多数取り上げている。土壙墓６基は、一番南側にある12号甕棺墓のある周辺で確認されている。つまり、この地域には弥生時代中期後半の墓群が存在していたということが言える。また、あくまでも私見であるが、土坑の多くは土壙墓だったと考えられる。その位置が甕棺墓の周辺及び甕棺墓の間にあること、底面にフラットな形状をもつこと、出土遺物がほとんどないこと、この３つの理由からである。

竪穴住居跡と溝状遺構については、その出土遺物から、２号と12号竪穴住居跡（弥生時代中期後半）を除いて、時代は弥生時代後期と考えられる。今回の調査では、湧水が多く、東側は調査区外で西側は近代溝に切られているいために、完形で掘削できたものが１軒もないので、判断材料に乏しいが、弥生時代後期には、この地に集落が存在していたのではないかと考えられる。

（２）古代　他

古代の遺構としては、竪穴住居跡２軒、土坑３基が確認された。遺構の数が少ないために、この地における古代の様子を窺い知ることはできない。ただ、調査区全体から、古代の遺物が検出されているので、古代においても、この近くに集落等が存在していた可能性はあるだろう。

縄文時代、古墳時代、中世の遺物が数点ずつ確認されているが、遺構に伴うものではなく、各時代について判断する材料とはなり得ない。また、今回の調査では、後世の掘削等により、確認できなかった条里跡についても、新たな発掘調査が行われた際に、新しい発見がなされることであろう。

（３）今後の課題として

今回の調査では、特に、甕棺についての考察を深めるべきであったが、担当者の力量不足もあり出来なかった。大型・中型・小型と様々の大きさで、器形から、いわゆる須玖式、黒髪式、立岩式と考えられるタイプの甕棺が、調査区で入り混じって出土している。５号甕棺を除き、東西方向に埋設してあったが、上甕が東というものもあれば、西というものもあり、一定はしていなかったし、人骨の頭位も一定ではなかった。また、埋設角度は、ほぼ平行なものと角度を付けたものに分かれている。ほぼ平行に埋設した甕棺では、頭を下甕に突っ込むように埋葬してある。以上のことから、ある一定の結論を導き出すことができなかった。今後、上ノ郷遺跡周辺で出土している（例えば、白藤遺跡群等の）甕棺との比較や検討を十分行い、諸先輩方の御指導・御助言をいただいたうえで、再び考察し直す必要があると思われる。

熊本市の南西部は現在も発展を続けている。むやみに遺跡が破壊される開発は阻止すべきではあるが、今後も都市整備計画により、上ノ郷遺跡の周辺で発掘調査が行われる可能性はあるだろう。その中で、また新たな事実関係が解明されるだろう。そのような事実関係とも照らし合わせた上で、この遺跡の性格等を再度問い直すときが来るのを期待している。

【参考文献】

緒方勉　「神水遺跡Ⅱ」 1986年　熊本県文化財調査報告第82集　熊本県教育委員会
濱田彰久 「庵ノ前遺跡Ⅲ」 1997年　熊本県文化財調査報告第160集　熊本県教育委員会
亀田学　「梅ノ木遺跡Ⅱ」 2001年　熊本県文化財調査報告第199集　熊本県教育委員会
横山邦継・下村智 「吉武遺跡群」 1988年
福岡市埋蔵文化財調査報告書第187集　福岡市教育委員会
二宮忠司・大庭友子・横山邦継・力武卓司 「吉武遺跡群XI」 1999年
福岡市埋蔵文化財調査報告書第600集　福岡市教育委員会
横山邦継・力武卓司 「吉武遺跡群XII」2000年
福岡市埋蔵文化財調査報告書第650集　福岡市教育委員会
松尾宏　「栗山遺跡」 1994年　甘木市文化財調査報告書第28集　甘木市教育委員会
進村真之 「大板井遺跡XII」 1998年　小郡市文化財調査報告書第127集　小郡市教育委員会
西田厳　「増田遺跡群Ⅳ」 2000年　佐賀市文化財調査報告書第111集　佐賀市教育委員会
林田和人・吉田麻子 「神水遺跡Ⅴ」 2003年
神水遺跡第13次・第23次・第25次調査区発掘調査報告書　熊本市教育委員会
舟山良一 「ヒケシマ遺跡」 2005年　大野城市文化財調査報告書第67集　大野城市教育委員会
森貞次郎博士古稀記念「古文化論集」上巻　1982年　森貞次郎博士古稀記念記念論文集発行会
「弥生人のタイムカプセル」 1998年　福岡市博物館
橋口達也 「甕棺と弥生時代年代論」 2005年　雄山閣

第Ⅴ章　熊本市上ノ郷遺跡出土の弥生人骨

土井ヶ浜遺跡人類学ミュージアム
館長　松下孝幸

熊本市上ノ郷遺跡（旧熊本平野条里跡）出土の弥生人骨

松下孝幸*

【キーワード】：熊本県、弥生人骨、甕棺墓、土壙墓、保存不良

はじめに

熊本市島町2丁目に所在する上ノ郷遺跡の発掘調査が九州新幹線建設工事に伴って2003年（平成15年）におこなわれ、甕棺墓や土壙墓から人骨が出土した。本遺跡の周辺には大量の大型甕棺が出土し人骨も検出された白藤遺跡や弥生前期末から中期に属する人骨が出土した八ノ坪遺跡が存在する。この地区一帯は水位が高く、遺構が検出されるとたちまち水が溜まり、発掘時には保存状態が良かった人骨も水没してしまい、保存状態が急速に悪くなり、骨の取り上げが困難になった。

熊本県でも福岡県や佐賀県と同じように弥生時代には甕棺も出土するが、人骨がある数まとまって出土することがなかったので、熊本地域での弥生人の特徴は明確になっていない。筆者が報告した例も、熊本市葉山遺跡（松下、1991a）と熊本市庵ノ前遺跡（松下、1997b）の2遺跡しかなかったが、1997年から98年にかけて、熊本市の南部に位置する白藤遺跡の発掘調査がおこなわれ、大型の甕棺から多数の弥生人骨が出土した。人骨の保存状態はよくなかったが、現場で観察したところ、高顔・高身長で四肢骨が屈強な形質的特徴が認められ、彼らが佐賀県や福岡県の甕棺から出土する弥生人と同じ特徴を持っていることがわかった。熊本市ではその他に万楽寺出口遺跡からも弥生人骨が出土しているが、この弥生人も北部九州の甕棺弥生人の特徴が濃厚であり、長嶺遺跡の甕棺出土人骨も北部九州系の弥生人骨であった（松下、2005）。

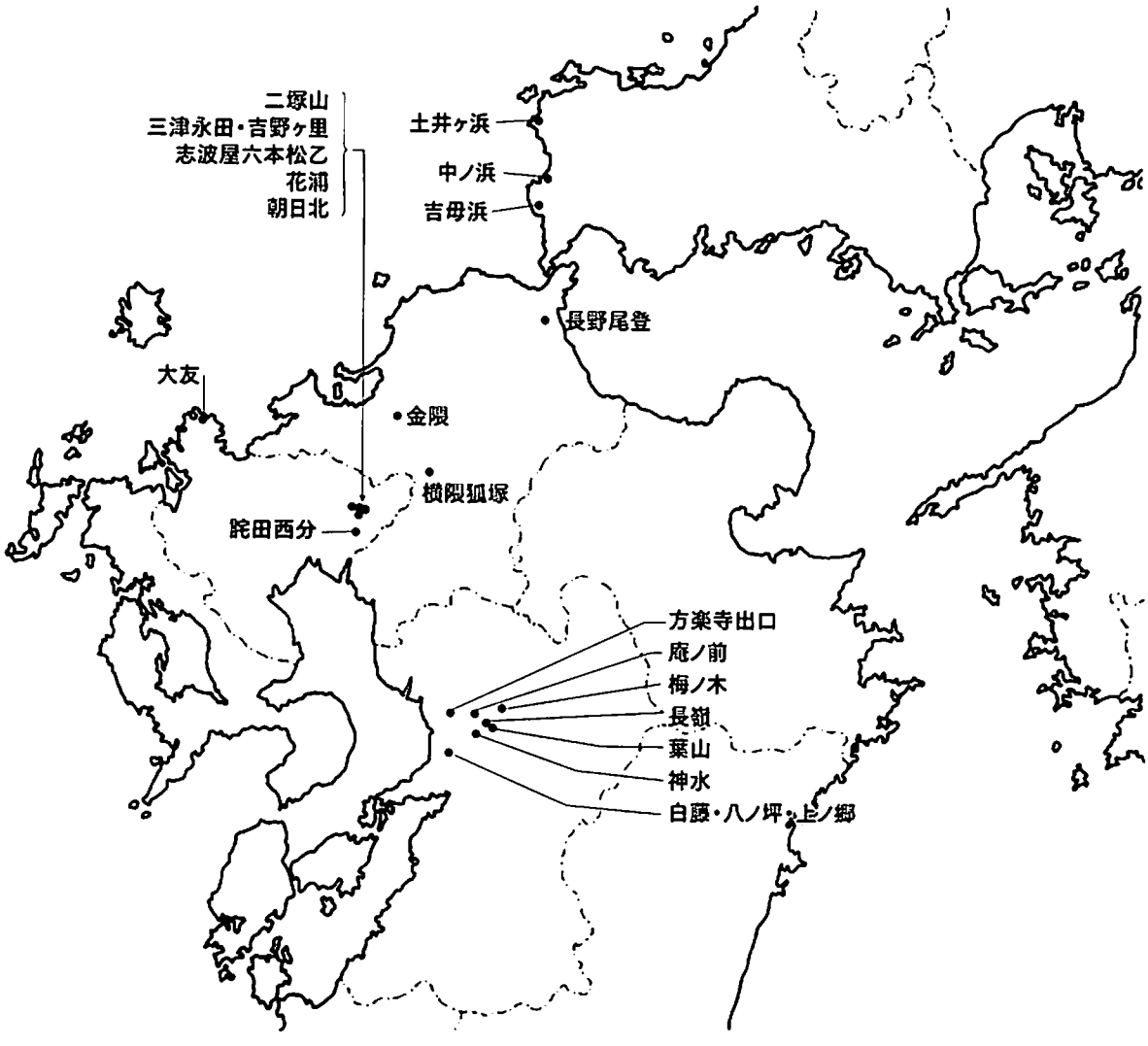
その他には、菊池郡菊陽町津久礼の梅ノ木遺跡からは12体の弥生人骨が出土しているが、保存状態は悪い。また熊本市の神水（くわみず）遺跡からも甕棺から弥生人骨が出土しており、そのうちの第20次調査区と第24次調査から出土した人骨については所見を書いたが、この出土人骨3体の保存状態も悪いものであった（松下、2004）。

2004年3月には熊本市八ノ坪遺跡から弥生時代前期末から中期初頭に属する人骨が26体出土したが、発掘調査時に水が湧き、人骨の保存状態がたちまち悪くなり、ほとんどが取り上げても、計測をおこなうことができなかった。なかには計測や観察ができたものも存在し、八ノ坪弥生人は頭型が短頭型で、高身長の弥生人でることがわかった。

本例も、白藤遺跡や八ノ坪遺跡と同じように水が湧くという悪条件であったために、保存状態は必ずしもよくなかったが、現場でできる限りの人類学的観察をおこない、取り上げができた人骨については計測をおこない、興味ある所見を得たので、報告しておきたい。

* Takayuki MATSUSHITA

The Doigahama Site Anthropological Museum〔土井ヶ浜遺跡・人類学ミュージアム〕



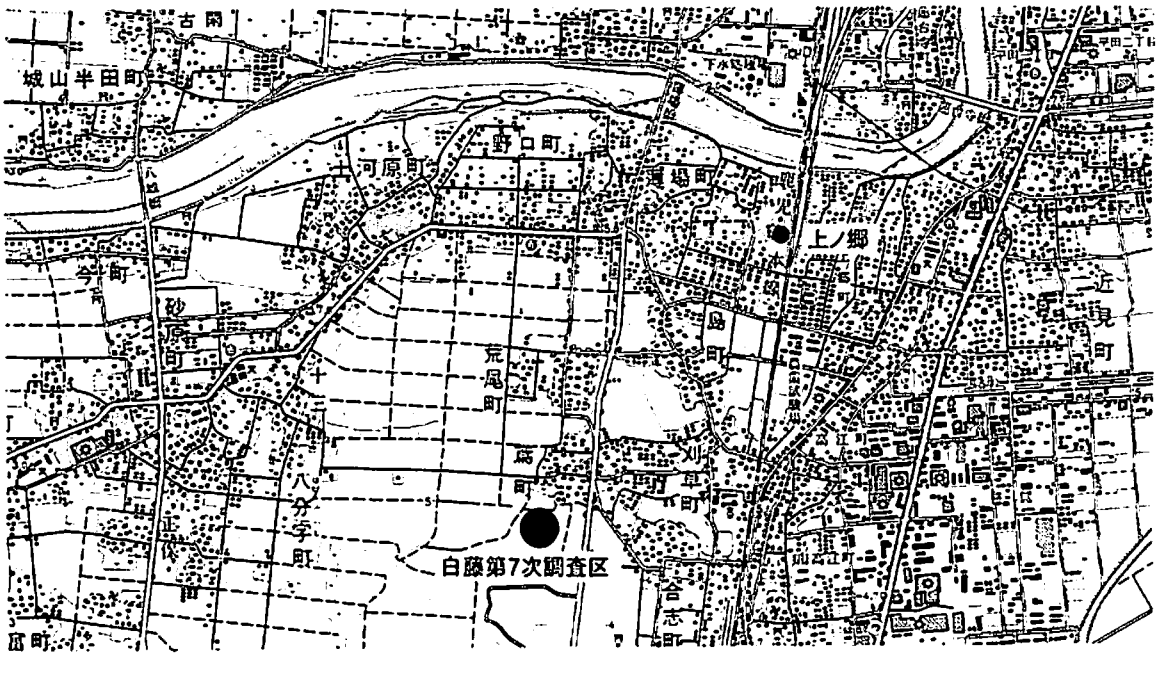


図 1　遺跡の位置（1/2500）(Fig.1 Location of the Kaminogou site, kumamoto city, kumamoto Prefecture)

資　料

今回の発掘調査では、20体の人骨が検出された。そのうち甕棺からは9体の人骨が出土した。20体のうち明確に幼小児骨と判断されるものは存在しなかった。しかし、歯冠の状態から、20歳直前の成年に属する被葬者と思われるものもあるが、確定できない。表1に示すとおり、男性骨は10体、女性骨は4体で、残りの6体は性別を推測することができなかった。なお、各人骨の性別、年齢は表2のとおりである。また、年齢区分を表3に示した。

表1　資料数（Table 1.Number of materials)

成　人			幼小児	合　計
男性	女性	不明		
10	4	6	0	20

この20体の人骨は、考古学的所見より、弥生時代中期後半に属する人骨である。

計測方法は、Martin-Saller(1957)によったが、脛骨の横径はオリビエの方法で計測した。人骨の発掘調査および人骨の実測は、筆者の他に当館の職員の磯部美枝子、松下玲子、松下真実がおこない、人骨の整理・復元・計測値の計算などは、磯部美枝子、松下玲子、中野江里子が担当した。

表3　年齢区分　(Table 3.Division of age)

	年齢区分	年　齢
未成人	乳児	1歳未満
	幼児	1歳～5歳（第一大臼歯萌出直前まで）
	小児	6歳～15歳（第一大臼歯萌出から第二大臼歯歯根完成まで）
	成年	16歳～20歳（蝶後頭軟骨結合癒合まで）
成人	壮年	21歳～39歳（40歳未満）
	熟年	40歳～59歳（60歳未満）
	老年	60歳以上

注）成年という用語については土井ヶ浜遺跡第14次発掘調査報告書(1996)を参照されたい。

所　見

4号・5号・6号土壙墓の人骨の残存部は図2に示すとおりである。また、各骨の計測値は文末に一括して掲げた。

10号土坑出土人骨（性別・年齢不明）

遊離歯冠3個が残存していたにすぎない。上顎右側第二大臼歯、下顎右側第二大臼歯および下顎左側第一大臼歯の歯冠である。咬耗度はBrocaの1度（咬耗がエナメル質のみ）である。性別、年齢はともに不明であるが、咬耗がかなり弱いことから、未成人の可能性もある。

2号甕棺墓出土人骨（男性・年齢不明）

埋葬施設は甕棺である。残存していたのは四肢骨であるが、保存状態はかなり悪い。同定ができた

のは大腿骨体、脛骨および腓骨のそれぞれ一部である。大腿骨体の径はやや大きく、腓骨体はそれほど太くはないが、滑は深そうである。性別は、大腿骨体の径が大きいことから男性と推定したが、年齢は不明である。

6号甕棺墓出土人骨（男性・年齢不明）

埋葬施設は甕棺である。残存していたのは、上顎骨、下顎骨、両側の上腕骨体、左右の尺骨と右側の橈骨、左右の大腿骨および右側腓骨であるが、計測ができたのは大腿骨のみである。

1. 歯

歯槽の状態と遊離歯は次のとおりである。

８ ⑦ ⑥ ５ ④ ③ ② ①	／／／／／／／／
８ ⑦ ６ ⑤ ④ ／ ／ ／	／／／／／６ ７ ／

〔●：歯槽閉鎖　○：歯槽開存　／：不明　▽：先天性欠損、番号は歯種〕

〔１：中切歯、２：側切歯、３：犬歯、４：第一小臼歯、５：第二小臼歯、６：第一大臼歯、７：第二大臼歯、８：第三大臼歯〕以下同じ

咬耗度はBrocaの２度（咬耗が部分的に象牙質まで及ぶ）である。

2. 大腿骨

右側は骨体が、左側は骨頭が残存していた。大腿骨体と骨頭の径は大きく、骨体上部は扁平である。

3. 性別・年齢

性別は、四肢骨の径が大きいことから、男性と推定したが、年齢は不明である。

7号甕棺墓出土人骨（女性・年齢不明）

埋葬施設は甕棺である。左側大腿骨体と遊離歯が残存していたにすぎない。

1. 歯

残存していた遊離歯は次のとおりである。

／／６／／／２／	／２ ３ ４ ５ ６／／
／７／５／／／／	／／／４／／７／

咬耗度はBrocaの１度（咬耗がエナメル質のみ）である。

2. 大腿骨

左側大腿骨体が残存していた。

計測値は、骨体中央矢状径が27mm(左)、横径は23mm(左)で、骨体中央断面示数は117.39(左)となり、粗線や骨体両側面の後方への発達は良好である。骨体中央周は81mm(左)で、骨体は細い。

3. 性別・年齢

性別は、大腿骨が細いことから、女性と推定したが、年齢は不明である。

10号甕棺墓出土人骨（男性・年齢不明）

埋葬施設は甕棺である。頭蓋片、左側寛骨、左右の大腿骨と右側脛骨のそれぞれ一部が残存していたにすぎない。上顎の小臼歯と大臼歯のそれぞれ歯冠も残存していたが、破損が著しい。咬耗度はBrocaの2度（咬耗が部分的に象牙質まで及ぶ）である。大腿骨も脛骨も計測はできないが、骨体はやや太い。

性別は四肢骨の径が大きいことから、男性と推定した。年齢は不明である。

12号甕棺墓出土人骨（女性・年齢不明）

埋葬施設は甕棺である。保存状態はかなり悪かった。検出状況では頭蓋と四肢骨を確認したが、取り上げることができなかった。遊離歯冠は次のとおりである。

８７６／４／／／	１／／／５／／／
／７６５４／／／	／／／４５／／／

咬耗度はBrocaの1度（咬耗がエナメル質のみ）である。

性別は、人骨検出時の観察によれば、四肢骨の径が小さかったので、女性と推定したが、年齢は不明である。

13号土坑出土人骨（性別・年齢不明）

下顎左側第二大臼歯冠が1個残存していたにすぎない。咬耗度はBrocaの1度（咬耗がエナメル質のみ）である。性別・年齢はともに不明である。

1号土壙墓出土人骨（男性・年齢不明）

埋葬施設は東西に巨石を埋置した土壙墓である。残存していたのは頭蓋のごく一部と大腿骨、遊離歯冠のみである。大腿骨は計測できないが径はやや大きい。歯冠は破片で同定できない。

性別は、大腿骨体の径がやや大きいことから、男性と推定したが、年齢は不明である。

4号甕棺墓出土人骨（男性・年齢不明）

埋葬施設は甕棺である。現場では頭蓋と四肢骨を検出できたが、ほとんど取り上げることができなかった。歯冠を同定することができた。残存歯冠は次のとおりである。

８７６５／３２１	／２３／／／７８
８７６５／／／／	／／／／／／／／／

咬耗度はBrocaの1度（咬耗がエナメル質のみ）である。

性別は、人骨検出時の観察によれば、四肢骨の径が大きかったので、男性と推定したが、年齢は不明である。

9号甕棺墓出土人骨（男性・壮年）

埋葬施設は甕棺である。頭蓋と四肢骨が残っていたが、四肢骨は痕跡程度である。脳頭蓋を復元す

ることができた。計測はできないが、径は大きく、骨壁も厚い。外後頭隆起の発達も良好である。三主縫合はともに内外両板はまだ開離している。頭型は、観察したところでは長頭型に傾いた中頭型と思われる。残存歯冠は次のとおりである。

／／／５／／／／／	／／／／５／／／
／７６５／／２／	／２／／／／／／

咬耗度は Broca の１～２度である。

性別は頭蓋の径が大きく、外後頭隆起の発達も良好であることから、男性と推定した。年齢は三主縫合の内外両板が開離していることから、壮年と思われる。

８号竪穴住居跡出土人骨（性別・年齢不明）

四肢骨片が残っていたにすぎない。性別・年齢はともに不明である。

３号甕棺墓出土人骨（性別・年齢不明）

埋葬施設は甕棺である。頭蓋片と大腿骨が残存していた。頭蓋壁はやや薄く、乳様突起も小さい。

残存歯冠は次のとおりである。

８／／５／／／／／	／／３／／／／８
／／／／／／／／／	／／３／５／７／

咬耗度は Broca の１～２度である。

右側大腿骨体が残存していたが、緻密質が剥落しており、計測できないが、径は大きくない。

性別、年齢ともに不明である。

９号竪穴住居跡出土人骨（女性・年齢不明）

住居跡から出土した人骨である。左側大腿骨の遠位部のみである。径は小さい。性別は左側大腿骨の遠位部の径が小さいことから、女性と推定したが、年齢は不明である。

11 号竪穴住居跡出土人骨（女性・年齢不明）

住居跡から検出された人骨である。残っていたのは左右の大腿骨体である。骨体は細く、粗線の発達は弱いが、骨体両側面の後方への発達は良好である。

計測値は、骨体中央矢状径が 27mm（右）、横径は 23mm（右）で、骨体中央断面示数は 117.39（右）となり、骨体両側面の後方への発達は良好である。骨体中央周は 80mm（右）で、骨体は細い。

性別は、大腿骨体の径が小さいことから、女性と推定した。年齢は不明である。

８号土坑出土人骨（性別・年齢不明）

遊離歯冠１個と骨片が残っていたにすぎない。残存歯冠は下顎左側第二大臼歯冠で、咬耗度は Broca の１度（咬耗がエナメル質のみ）である。性別、年齢はともに不明である。

6号土壙墓出土人骨（男性・年齢不明）

埋葬施設は土壙である。今回検出された人骨のなかでは最も保存状態がよかった人骨である。しかも仙骨前面の上から磨製石鏃1個が検出されたが、射込まれたかどうか、かなり微妙である。

1．頭蓋

脳頭蓋は復元することができなかったので、計測はできない。また、頭型は推測もできない。下顎骨は大きく、下顎枝は長い。

2．歯

歯槽の状態と残存歯は次のとおりである。

／／／／／3／1	1 2 3 4 5 6 7 8
8 ⑦ ⑥ 5 ④ 3 2 1	／／／／5 ❻ ❼ 8

咬耗度はBrocaの1～2度である。

3.四肢骨

(1) 上肢骨

鎖骨、上腕骨、橈骨、尺骨が残存していた。

①上腕骨

両側が残っていたが、計測ができたのは左側骨体のみである。計測値は、中央最大径が25mm(左)、中央最小径は17mm(左)で、骨体断面示数は68.00(左)となり、左側骨体には強い扁平性が認められる。骨体最小周は64mm(左)、中央周は69mm(左)で、骨体は大きい。

(2) 下肢骨

寛骨、大腿骨、脛骨および腓骨が残存していた。

①大腿骨

計測値は、骨体中央矢状径が29mm(右)、30mm(左)、横径は24mm(右)、24mm(左)で、骨体中央断面示数は120.83(右)、125.00(左)となり、粗線と骨体両側面の後方への発達はきわめて良好である。骨体中央周は84mm(右)、85mm(左)で、骨体はやや太い。また、上骨体断面示数は86.67(左)となり、骨体上部には扁平性は認められない。

②脛骨

左側骨体が残存していたが、変形が著しく計測できない。骨体の径は大きい。

4．性別・年齢

性別は、四肢骨の径がかなり大きいことから、男性と推定した。年齢は不明である。

5号土壙墓出土人骨（男性・年齢不明）

埋葬施設は土壙である。残存量は少ない。頭蓋、上腕骨、大腿骨を取り上げることができた。下顎骨の径はやや大きい。

下顎骨の歯槽部と遊離歯は次のとおりである。

／／／５４３２／	／／／４５６７／
／❼❻❺❹❸❷❶	❶❷❸❹❺❻❼／

咬耗度はBrocaの1～2度である。

左右の上腕骨体の一部が残存していた。計測はできないが、径は大きい。大腿骨は左右の骨体近位部が残っていた。計測はできないが、径は大きい。

性別は四肢骨の径が大きいことから、男性と推定したが、年齢は不明である。

4号土壙墓出土人骨（男性・年齢不明）

埋葬施設は土壙である。脳頭蓋も残っていたが、復元できなかった。下顎骨歯槽部と残存歯は次のとおりである。

／／／／／／／／	／／／／５／／／
／／／／／／／／	①②３④５❻❼／

咬耗度はBrocaの2度（咬耗が部分的に象牙質まで及ぶ）である。

四肢骨のうち計測ができたのは大腿骨のみであった。大腿骨の計測値は、骨体中央矢状径が29mm(左)、横径は28mm(左)で、骨体中央断面示数は103.57(左)となり、粗線と骨体両側面の後方への発達は良好である。骨体中央周は87mm(左)で、骨体は太い。また、上骨体断面示数は82.76(左)となり、骨体上部の扁平性は弱い。

性別は、大腿骨の径が大きいことから、男性と推定した。年齢は不明である。

11号甕棺墓出土人骨（男性・壮年）

埋葬施設は甕棺である。

1．頭蓋

脳頭蓋が残存していた。計測はできないが、頭蓋の径は大きい。また、眉上弓も隆起し、外後頭隆起の発達もきわめて良好である。観察できた矢状縫合と冠状縫合は内外両板とも開離している。また、下顎骨も大きい。

2．歯

歯槽の状態と残存歯は次のとおりである。

／／／／／／／／	①②③④⑤⑥／／
８／６⑤／／／／	／／／／／／／／

咬耗度はBrocaの2度（咬耗が部分的に象牙質まで及ぶ）である。

3．四肢骨

右側橈骨体、左側大腿骨、右側脛骨が残存していた。

(1) 大腿骨

左側骨体が残存していた。計測値は、骨体中央矢状径が30mm(左)、横径は24mm(左)で、骨体中央断面示数は125.00(左)となり、粗線と骨体両側面の後方への発達は良好である。骨体中央周は

87mm(左)で、骨体は太い。

4．性別・年齢

性別は、眉上弓が隆起し、外後頭隆起もよく発達していることから、男性と推定した。年齢は矢状縫合と冠状縫合の内外両板が開離していることから壮年と思われる。

3号土壙墓出土人骨(性別・年齢不明)

埋葬施設は土壙である。残存していたのは下顎骨の一部と遊離歯のみである。残存歯は次のとおりである。

／／／／／／／／	／／／／／6／8
／7／／4／／／	／／／／5／／／

咬耗度はBrocaの1～2度である。

性別、年齢ともに不明である。

考　察

男性の上腕骨と大腿骨について、熊本県内および周辺地域の資料と比較検討してみた。

1．上腕骨

表4は男性上腕骨の比較表である。本例の中央周は69mmで、この値は同じ熊本市内の葉山よりは大きいが、庵ノ前、長嶺とほとんど大差ない。また、周辺地域の弥生人と比較してみると、志波屋六本松乙、朝日北よりも大きく、金隈、横隈狐塚、二塚山、大友と大差ない。骨体最小周は64mmで、この値もやはり葉山よりは大きく、庵ノ前、長嶺とほとんど大差ない。また、三津よりは小さいが、朝日北、志波屋六本松乙よりは大きく、二塚山、横隈狐塚、金隈、土井ヶ浜に近い。骨体断面示数は68.00となり、表4では最小値となり、骨体の扁平性はかなり強い。

2．大腿骨

表5、6は男性大腿骨の比較表である。表5は熊本県内の資料を掲げ、表6には周辺地域の資料をあげた。まず、表5で骨体中央周をみてみると、3例の計測値がそれぞれ、85mm、87mm、87mmで、3例の平均値は86.33mmとなる。上ノ郷遺跡に近い八ノ坪遺跡の例では4例の計測ができた。計測値は、82mm、85mm、87mm、88mmとなり、変異がやや大きいが、左側3例の平均値は86.67mmで、この平均値は上ノ郷と大差ない。しかし、中央周は熊本平野北部に位置する長嶺、梅ノ木、万楽寺出口、庵ノ前よりは小さい。要するに大腿骨の大きさは地理的に近い八ノ坪に近い。

骨体中央断面示数は上ノ郷ではかなり大きな値を示すものが多く、平均値は117.86となり、縄文人にも匹敵するほどの値である。八ノ坪もやや大きな値を示すが、上ノ郷の値には及ばない。熊本平野北部の弥生人をみてみると、長嶺と万楽寺出口、庵ノ前はかなり大きな値になる。しかし、梅ノ木と葉山は100.00以下の小さな値を示しており、ややばらつきが目立つが、基本的には熊本平野北部の弥生人のうち、長嶺、万楽寺出口は北部九州の甕棺出土の弥生人の特徴を強く示している。

表6で周辺地域の資料と比較してみた。骨体中央周の平均値は二塚山、三津などの北部九州の甕棺

出土弥生人よりは小さく、土井ヶ浜にもっとも近い。骨体中央断面示数は上ノ郷の平均値が表6のいずれの資料よりも大きいことがわかる。

以上のことから、上ノ郷弥生人男性の大腿骨は、太さは土井ヶ浜弥生人なみで、骨体には柱状性を示すものが多く、骨体両側面は後方へかなり発達している大腿骨なのである。

要　約

熊本市島町2丁目にある上ノ郷遺跡の発掘調査が2003年(平成15年)におこなわれ、甕棺墓や土壙墓から人骨が出土した。遺跡周辺一帯は水位が高く、検出した人骨もたちまち水没してしまい、保存状態は悪く、骨の取り上げが困難であった。人類学的観察や計測をおこない、以下の結果を得た。

1. 今回の調査では大型甕棺や土壙墓から合計20体の人骨が検出された。20体の人骨のうち男性骨は10体、女性骨は4体で、性別不明は6体である。
2. この20体の人骨は、考古学的所見より、弥生時代中期後半に属する人骨である。
3. 保存状態が悪く、頭型や顔面の形態的特徴は明らかにすることができなかった。
4. 抜歯の有無も不明である。
5. 男性の上腕骨は太くて、扁平である。
6. 1体の人骨(6号土壙墓、男性)は腹部(仙骨前面)に磨製石鏃を伴って検出されたが、射込まれたかどうかはかなり微妙である。
7. 大腿骨は、男女とも北部九州の甕棺出土人骨ほど太くはないが、強い柱状性が認められる。
8. 熊本県では保存良好な弥生人骨が発掘されることが少なく、熊本県内の弥生人の全体像が明確になっていない。近年、熊本平野南部から多数の弥生人骨が出土するようになってきた。本遺跡では大型甕棺の他に土壙墓も存在し、両遺構から人骨が出土していることから、形質に差があるかどうかが注目されたが、保存状態が著しく悪く、形質の違いの有無を検証できなかった。皮肉なことに、甕棺墓よりも土壙墓から検出された人骨の方が保存状態はよかったが、それでも頭型や顔面の特徴は明らかにすることができなかった。特徴が明確になったのは男女の大腿骨である。北部九州の甕棺から出土する弥生人の特徴の一つは、大腿骨が太いことで、中央周の平均値は男性では90mmを超える。しかし、本遺跡の土壙墓から出土した3体の男性の大腿骨は北部九州の甕棺出土人骨ほど太いものではなかった。また、3体の土壙墓人骨は直線的に埋置されており、何らかの意図が感じられる。そのうちの1体では腹部から石鏃が検出された。石鏃は人骨には刺さっていなかったので、射込まれたかどうかは明確ではないが、石鏃の検出状況は、水平ではなく、切っ先がやや上を向いていたので、あるいは射込まれたかもしれない。

今回出土した弥生人骨の保存状態は悪かったが、上腕骨、大腿骨の計測が可能であり、熊本平野南部での弥生人に関する貴重な資料を得ることができた。

謝　辞

≪擱筆するにあたり、本研究と発表の機会を与えていただいた熊本県教育委員会文化課の皆様方に感謝致します。≫

《参考文献》

1. 金関丈夫・他、1954：長崎県平戸島獅子村根獅子免出土の人骨に就いて。人類学研究、第1巻第3～4号：178-226.
2. 金関丈夫・他、1960：山口県豊浦郡豊北町土井ケ浜遺跡出土の弥生式時代人頭骨について。人類学研究、7(附録)：1-36.
3. 金関丈夫、1966：弥生時代人。日本の考古学、河出書房、東京、：460-471.
4. MARTIN-SALLER, 1957：Lehrbuch der Anthropologie. Bd.1. Gustav Fischer Verlag, Stuttugart：429-597.
5. 松下孝幸、1979：二塚山遺跡出土の弥生時代人骨。二塚山(佐賀県文化財調査報告書46)：242-255.
6. 松下孝幸、1981a：宮の本遺跡出土の人骨。宮の本遺跡(佐世保市埋蔵文化財調査報告書)：93-109,114-118,145-146.
7. 松下孝幸、1981b：大友遺跡出土の弥生時代人骨。大友遺跡(佐賀県呼子町文化財調査報告書1)：223-253.
8. 松下孝幸・他、1983a：長崎県宇久松原遺跡出土の弥生時代人骨。長崎県埋蔵文化財調査集報VI(長崎県文化財調査報告66)：97-134.
9. 松下孝幸・他、1983b：山口県豊浦郡豊北町土井ヶ浜遺跡出土の人骨。土井ヶ浜遺跡第7次発掘調査概報(豊北町埋蔵文化財調査報告2)：19-30.
10. 松下孝幸、1983c：佐賀県鳥栖市安永田遺跡出土の弥生時代人骨。安永田遺跡(鳥栖市文化財調査報告書16)：92-111.
11. 松下孝幸・他、1985a：佐賀県鳥栖市域の弥生時代人骨。安永田遺跡－佐賀県鳥栖市に所在する安永田遺跡銅鐸鋳型出土地点の調査－(鳥栖市文化財調査報告書第25集)：550-570.
12. 松下孝幸、1985b：福岡県小郡市横隈狐塚遺跡出土の弥生時代人骨。横隈狐塚遺跡II下巻、(小郡市文化財調査報告書第27集)：1-46.
13. 松下孝幸・他、1986：大村市富の原遺跡出土の弥生時代人骨。富の原遺跡群確認調査概報V(大村市文化財調査報告第11集)：30-45.
14. 松下孝幸、1987：弥生人の地域性。〈シンポジウム〉西南日本人－文化と人の渡来をめぐって。季刊人類学18-4：219-232.
15. 松下孝幸・他、1988：長崎県壱岐・石田町大久保遺跡出土の弥生時代人骨。長崎県埋蔵文化財調査集報XI(長崎県文化財調査報告書第91集)：77-99.
16. 松下孝幸・他、1989：(弥生人の)地域差、弥生文化の研究、1．弥生人とその環境：65-75、雄山閣
17. 松下孝幸、1991a：熊本市葉山遺跡出土の弥生時代人骨。交流の考古学(肥後考古学第8号　三島格会長古稀記念)：287-312.
18. 松下孝幸・他、1991b：佐賀県神埼町志波屋六本松乙遺跡出土の弥生時代人骨。志波屋六本松乙遺跡(佐賀県文化財調査報告書第103集、九州横断自動車道関係埋蔵文化財発掘調査報告書13)：第4章：1-62.
19. 松下孝幸・他、1992：佐賀県神埼町朝日北遺跡出土の人骨。朝日北遺跡(九州横断自動車道関係埋蔵文化財発掘調査報告書(15))：418-504.
20. 松下孝幸、1994：「日本人と弥生人」、祥伝社。
21. 松下孝幸、1995a：山口県豊北町土井ヶ浜遺跡第13次発掘調査出土の人骨。土井ヶ浜遺跡第13次発掘調査報告書(山口県豊北町埋蔵文化財調査報告書第11集)：19-33.
22. 松下孝幸、1995b：長崎県壱岐原の辻遺跡出土の弥生時代人骨。原の辻遺跡(長崎県文化財調査報告書第124集)：209-220.
23. 松下孝幸、1996a：根獅子遺跡出土の弥生時代人骨。平戸市史 自然・考古編：405-441.

24. 松下孝幸、1996b：土井ヶ浜遺跡第14次発掘調査出土の中世・弥生時代人骨。
土井ヶ浜遺跡第14次発掘調査報告書（山口県豊北町埋蔵文化財調査報告書第12集）：付24-50.
25. 松下孝幸、1997a：土井ヶ浜遺跡第15次発掘調査出土の人骨。土井ヶ浜遺跡第15次発掘調査報告書
（山口県豊北町埋蔵文化財調査報告書第13集）：付1-5.
26. 松下孝幸、1997b：熊本市庫ノ前遺跡出土の弥生時代人骨。庫ノ前遺跡III（熊本県文化財調査報告第160集）：
142-172.
27. 松下孝幸、1998：土井ヶ浜遺跡第16次発掘調査出土の弥生時代・中世人骨。土井ヶ浜遺跡第16次発掘
調査報告書（山口県豊北町埋蔵文化財調査報告書第14集）：付1-39.
28. 松下孝幸、2004：熊本市神水遺跡第20・24次調査出土の弥生人骨。神水遺跡VI－第20次・第28次調査
区発掘調査報告書－（都市計画道路船場・神水線建設に伴う埋蔵文化財報告書5）：106-110.
29. 松下孝幸、2005：熊本市八ノ坪遺跡出土の弥生人骨。八ノ坪遺跡I（熊本市埋蔵文化財調査報告書）
30. 松下孝幸、2000：熊本市万楽寺出口遺跡出土の弥生時代人骨。万楽寺出口遺跡（熊本県文化財調査報告
書第185集）：147-155.
31. 松下孝幸、2001：熊本県菊陽町梅ノ木遺跡出土の弥生人骨。梅ノ木遺跡II 下巻（熊本県文化財調査報告
書第199集）：46-54.
32. 松下孝幸、熊本市長嶺遺跡出土の弥生人骨。（投稿中）
33. 内藤芳篤、1971：西北九州出土の弥生時代人骨。人類学雑誌、79：236-248.
34. 内藤芳篤・他、1975：対馬・住吉平貝塚出土の弥生時代人骨例。対馬の遺跡（長崎県文化財調査報告書
20）：139-147.
35. 中橋孝博・他、1985：金隈遺跡出土の弥生時代人骨。史跡金隈遺跡（福岡市埋蔵文化財調査報告書第123
集）：43-145.
36. 鈴木尚、1963：日本人の骨。岩波書店、東京。
37. 牛島陽一、1954：佐賀県東脊振村三津遺跡出土弥生式時代人骨の人類学的研究。人類学研究、1：
273-303.
38. 財津博之、1956：山口県土井ケ浜遺跡発掘弥生前期人骨の四肢長骨に就いて。人類学研究、3：320-349.

表２　出土人骨一覧（Table2. List of sketetons）

人骨番号	性別	年齢	埋葬施設	備　考
10号土坑出土人骨	不明	不明	土　坑	歯のみ
2号甕棺墓出土人骨	男性	不明	甕棺墓	
6号甕棺墓出土人骨	男性	不明	甕棺墓	
7号甕棺墓出土人骨	女性	不明	甕棺墓	
10号甕棺墓出土人骨	男性	不明	甕棺墓	
12号甕棺墓出土人骨	女性	不明	甕棺墓	骨片
13号土坑出土人骨	不明	不明	土　坑	歯のみ
1号土壙墓出土人骨	男性	不明	土壙墓（配石）	
4号甕棺墓出土人骨	男性	不明	甕棺墓	
9号甕棺墓出土人骨	男性	壮年	甕棺墓	
8号住居跡出土人骨	不明	不明	住居跡	骨片
3号甕棺墓出土人骨	不明	不明	甕棺墓	
9号住居跡出土人骨	女性	不明	住居跡	
11号住居跡出土人骨	女性	不明	住居跡	
8号土坑出土人骨	不明	不明	土　坑	骨片
6号土壙墓出土人骨	男性	不明	土壙墓	
5号土壙墓出土人骨	男性	不明	土壙墓	
4号土壙墓出土人骨	男性	不明	土壙墓	
11号甕棺墓出土人骨	男性	壮年	甕棺墓	
3号土壙墓出土人骨	不明	不明	土壙墓	

表４　上腕骨計測値（男性、右、㎜）(Table4. Comparison of measurements snd indices of male right humeri)

		上ノ郷 弥生人 熊本県	長嶺 弥生人 熊本県（松下）	爪ノ前 弥生人 熊本県（松下）	葦山 弥生人 熊本県（松下）	大友 弥生人 佐賀県（松下）		二塚山 弥生人 佐賀県（松下）		三津 弥生人 佐賀県（牛島）		志波屋六本松乙 弥生人 佐賀県（松下）		朝日北 弥生人 佐賀県（松下・他）		横隈狐塚 弥生人 福岡県（松下）		金隈 弥生人 福岡県（中橋・他）		土井ヶ浜 弥生人 山口県（財津）	
		6号土壙墓人骨	3号人骨	10号人骨	4号人骨	n	M	n	M	n	M	n	M	n	M	n	M	n	M	n	M
1.	上腕骨最大長	-	-	-	-	9	294.33	2	300.00	4	309.75		-	1	321	5	303.00	5	306.4	18	299.4
2.	上腕骨全長	-	-	-	-	8	291.75	2	296.50	4	305.00		-	1	317	5	294.80	5	303.2	17	295.2
5.	中央最大経	25 (左)	24	23	22	37	24.46	12	24.08	13	23.85	7	22.86	8	23.00	23	23.87	12	24.0	55	22.9
6.	中央最小径	17 (左)	19	18	16	37	17.97	12	17.92	13	18.12	7	16.71	8	17.25	23	18.17	12	17.8	55	16.4
7.	骨体最小周	64 (左)	65	65	57	37	64.57	9	65.89	13	67.15	3	62.33	7	61.57	22	63.32	15	65.3	56	64.7
7(a).	中央周	69 (左)	71	70	64	35	71.00	12	69.92		-	7	65.71	8	67.25	23	69.87	12	69.8		-
6/5	骨体断面示数	68.00 (左)	79.17	78.26	72.73	37	73.60	12	74.53	13	76.45	7	73.31	8	75.01	23	76.25	12	74.3	54	76.1
7/1	長厚示数	-	-	-	-	9	22.32	2	21.26	4	22.00		-	1	21.50	5	20.78	5	21.1	18	21.2

表５　大腿骨計測値（男性、右、㎜）(Table5. Comparison of measurements and indices of male right femora)

		上ノ郷 弥生人 熊本県	上ノ郷 弥生人 熊本県	上ノ郷 弥生人 熊本県	上ノ郷 弥生人 熊本県 平均		八ノ坪 弥生人 熊本県	八ノ坪 弥生人 熊本県	八ノ坪 弥生人 熊本県	八ノ坪 弥生人 熊本県	八ノ坪 弥生人 熊本県（松下）		長嶺 弥生人 熊本県（松下）	梅ノ木 弥生人 熊本県（松下）	万楽寺出口 弥生人 熊本県（松下）	爪ノ前 弥生人 熊本県（松下）	葦山 弥生人 熊本県（松下）
		6号土壙墓	4号土壙墓	11号甕棺	n	M	ST-089	ST-128	ST-144	ST-150	n	M	3号人骨	1135	1号人骨	10号人骨	4号人骨
1.	最大長	-	-	-	-		-	-	430 (左)	-	1	430 (左)	-	-	-	-	422
2.	自然位全長	-	-	-	-		-	-	426 (左)	-	1	426 (左)	-	-	-	-	-
6.	骨体中央矢状径	30 (左)	29 (左)	30 (左)	3	29.67 (左)	29 (左)	28 (左)	28 (左)	26	3	28.33 (左)	32	25	34	30	26
7.	骨体中央横径	24 (左)	28 (左)	24 (左)	3	25.33 (左)	26 (左)	26 (左)	27 (左)	26	3	26.33 (左)	27	32	28	26	29
8.	骨体中央周	85 (左)	87 (左)	87 (左)	3	86.33 (左)	87 (左)	85 (左)	88 (左)	82	3	86.67 (左)	96	89	97	88	85
9.	骨体上横径	30 (左)	29 (左)	-	2	29.50 (左)	-	31 (左)	-	-	1	31 (左)	32	33	31	30	30
10.	骨体上矢状径	26 (左)	24 (左)	-	2	25.00 (左)	-	25 (左)	-	-	1	25 (左)	27	24	32	27	25
8/2.	長厚示数	-	-	-	-		-	-	20.66 (左)	-	1	20.66 (左)	-	-	-	-	-
6/7	骨体中央断面示数	125.00 (左)	103.57 (左)	125.00 (左)	3	117.86 (左)	111.54 (左)	107.69 (左)	103.70 (左)	100.00	3	107.64 (左)	118.52	78.13	121.43	115.38	89.66
10/9	上骨体断面示数	86.67 (左)	82.76 (左)	-	2	84.72 (左)	-	80.65 (左)	-	-	1	80.65 (左)	84.38	72.73	103.23	90.00	83.33

表６　大腿骨計測値（男性、右、㎜）(Table6. Comparison of measurements and indices of male right femora)

		上ノ郷 弥生人 熊本県 平均		八ノ坪 弥生人 熊本県 平均		大友 弥生人 佐賀県（松下）		二塚山 弥生人 佐賀県（松下）		三津 弥生人 佐賀県（牛島）		志波屋六本松乙 弥生人 佐賀県（松下・他）		朝日北 弥生人 佐賀県（松下・他）		横隈狐塚 弥生人 福岡県（松下）		金隈 弥生人 福岡県（中橋・他）		土井ヶ浜 弥生人 山口県（財津）	
		n	M	n	M	n	M	n	M	n	M	n	M	n	M	n	M	n	M	n	M
1.	最大長		-	1	430 (左)	15	413.60	7	441.29	7	429.14	1	420 (左)	4	441.25	8	431.38	7	428.0	12	431.5
2.	自然位全長		-	1	426 (左)	15	409.53	3	441.00	6	421.00		-		-	6	427.00	6	425.0	12	424.5
6.	骨体中央矢状径	3	29.67 (左)	3	28.33 (左)	41	28.85	25	30.40	13	29.86	12	27.75	12	29.33	23	29.96	31	30.1	56	28.6
7.	骨体中央横径	3	25.33 (左)	3	26.33 (左)	41	26.07	26	28.12	13	27.62	12	25.92	14	27.50	23	27.52	31	27.1	56	26.1
8.	骨体中央周	3	86.33 (左)	3	86.67 (左)	41	87.22	25	91.84	13	91.00	12	85.08	12	90.00	23	90.44	31	90.3	56	86.6
9.	骨体上横径	2	29.50 (左)	1	31 (左)	42	30.62	22	32.23	14	32.11	9	29.67	11	31.73	24	31.75	26	32.5	53	31.8
10.	骨体上矢状径	2	25.00 (左)	1	25 (左)	42	24.83	21	26.62	14	28.50	9	24.44	11	26.27	24	26.29	26	26.2	53	25.6
8/2.	長厚示数		-	1	20.66 (左)	15	21.13	3	21.23	5	22.45		-		-	6	21.97	7	21.5	7	20.1
6/7	骨体中央断面示数	3	117.86 (左)	3	107.64 (左)	41	111.72	25	108.71	13	105.91	12	107.08	12	105.56	23	109.22	33	110.3	55	109.8
10/9	上骨体断面示数	2	84.72 (左)	1	80.65 (左)	42	81.34	21	82.50	14	88.81	9	82.38	11	83.21	24	82.96	28	80.6	51	81.0

表７　下顎骨（㎜、度）(Mandibula)

		上ノ郷 6号土壙墓人骨 男性
65.	下顎関節突起幅	-
65(1).	下顎筋突起幅	-
66.	下顎角幅	-
67.	前下顎幅	-
68.	下顎長	-
68(1).	下顎長	-
69.	オトガイ高	-
69(1).	下顎体高（右）	30
	（左）	-
69(2).	下顎体高（右）	27
	（左）	29
70.	枝高（右）	-
	（左）	-
70(1).	前枝高（右）	-
	（左）	73
70(2).	最小枝高（右）	-
	（左）	59
70(3).	下顎切痕高（右）	-
	（左）	-
71(1).	下顎切痕幅（右）	-
	（左）	-
71.	枝幅（右）	-
	（左）	30
71a.	最小枝幅（右）	-
	（左）	30
79.	下顎枝角（右）	-
	（左）	126
66/65	下顎幅示数	-
68/65	幅長示数	-
68(1)/65	幅長示数	-
69(2)/69	下顎高示数（右）	-
	（左）	-
71/70	下顎枝示数（右）	-
	（左）	-
71a/70(2)	下顎枝示数（右）	-
	（左）	50.85
70(3)/71(1)	下顎切痕示数（右）	-
	（左）	-

表８　上腕骨（㎜）(Humerus)

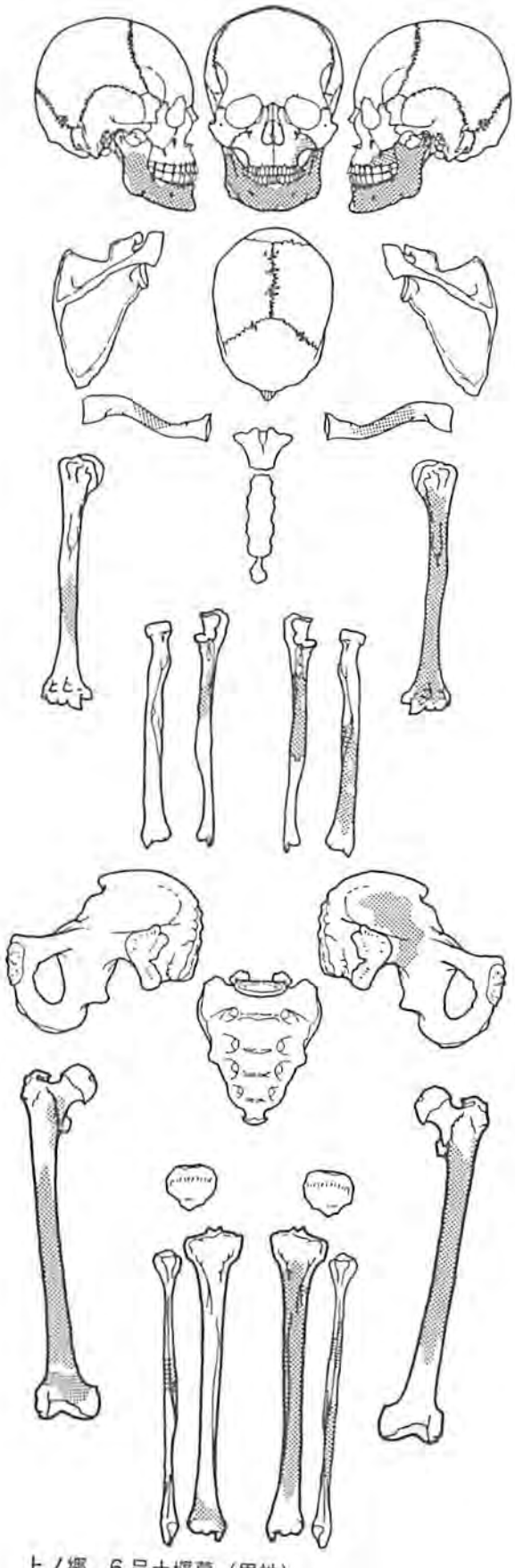
		上ノ郷 6号土壙墓人骨 男性
1.	上腕骨最大長（右）	-
	（左）	-
2.	上腕骨全長（右）	-
	（左）	-
3.	上端幅（右）	-
	（左）	-
3(1).	横上径（右）	-
	（左）	-
4.	下端幅（右）	-
	（左）	-
5.	中央最大径（右）	-
	（左）	25
6.	中央最小径（右）	-
	（左）	17
7.	骨体最小周（右）	-
	（左）	64
7(a).	中央周（右）	-
	（左）	69
8.	頭　周（右）	-
	（左）	-
9.	頭最大横径（右）	-
	（左）	-
10.	頭最大矢状径（右）	-
	（左）	-
11.	滑車幅（右）	-
	（左）	-
12.	小頭幅（右）	-
	（左）	-
12(a).	滑車幅および小頭幅（右）	-
	（左）	-
13.	滑車深（右）	-
	（左）	-
14.	肘頭窩幅（右）	-
	（左）	-
15.	肘頭窩深（右）	-
	（左）	-
6/5	骨体断面示数（右）	-
	（左）	68.00
7/1	長厚示数（右）	-
	（左）	-

表9　大腿骨（mm）(Femur)

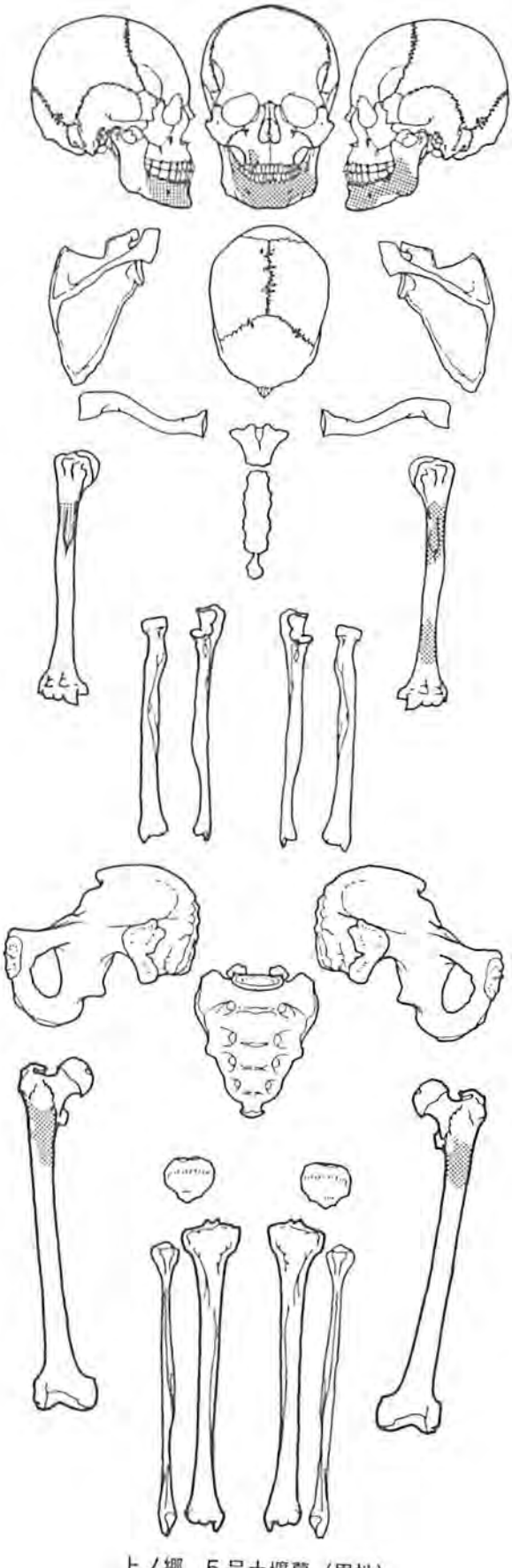
	上ノ郷 6号甕棺 男性	上ノ郷 6号土壙墓 男性	上ノ郷 4号土壙墓 男性	上ノ郷 11号甕棺 男性	平均値 n	平均値 M	Min.	-	Max.	上ノ郷 7号甕棺 女性	上ノ郷 11号住居 女性	平均値 n	平均値 M
1. 最大長（右）	-	-	-	-		-				-	-		-
（左）	-	-	-	-		-				-	-		-
2. 自然位全長（右）	-	-	-	-		-				-	-		-
（左）	-	-	-	-		-				-	-		-
3. 最大転子長（右）	-	-	-	-		-				-	-		-
（左）	-	-	-	-		-				-	-		-
4. 自然位転子長（右）	-	-	-	-		-				-	-		-
（左）	-	-	-	-		-				-	-		-
6. 骨体中央矢状径（右）	-	29	-	-	1	29.00				-	27	1	27
（左）	-	30	29	30	3	29.67	29	-	30	27	-	1	27
7. 骨体中央横径（右）	-	24	-	-	1	24.00				-	23	1	23
（左）	-	24	28	24	3	25.33	24	-	28	23	-	1	23
8. 骨体中央周（右）	-	84	-	-	1	84.00				-	80	1	80
（左）	-	85	87	87	3	86.33	85	-	87	81	-	1	81
9. 骨体上横径（右）	32	-	-	-	1	32.00				-	-		-
（左）	-	30	29	-	2	29.50	29	-	30	-	-		-
10. 骨体上矢状径（右）	23	-	-	-	1	23.00				-	-		-
（左）	-	26	24	-	2	25.00	24	-	26	-	-		-
15. 頚垂直径（右）	-	-	-	-		-				-	-		-
（左）	-	-	-	-		-				-	-		-
16. 頚矢状径（右）	-	-	-	-		-				-	-		-
（左）	-	-	-	-		-				-	-		-
17. 頚周（右）	-	-	-	-		-				-	-		-
（左）	-	-	-	-		-				-	-		-
18. 頭垂直径（右）	-	-	-	-		-				-	-		-
（左）	-	-	-	-		-				-	-		-
19. 頭横径（右）	-	-	-	-		-				-	-		-
（左）	-	-	-	-		-				-	-		-
20. 頭周（右）	-	-	-	-		-				-	-		-
（左）	-	-	-	-		-				-	-		-
21. 上顆幅（右）	-	-	-	-		-				-	-		-
（左）	-	-	-	-		-				-	-		-
8/2 長厚示数（右）	-	-	-	-		-				-	-		-
（左）	-	-	-	-		-				-	-		-
6/7 骨体中央断面示数（右）	-	120.83	-	-	1	120.83				-	117.39	1	117.39
（左）	-	125.00	103.57	125.00	3	117.86	117.86	-	125.00	117.39	-	1	117.39
10/9 上骨体断面示数（右）	71.88	-	-	-	1	71.88				-	-		-
（左）	-	86.67	82.76	-	2	84.72	84.71	-	86.67	-	-		-

表10　中央周の比

		上ノ郷 6号土壙墓 男性
橈骨 / 尺骨	（右）	-
	（左）	-
橈骨 / 上腕骨	（右）	-
	（左）	-
鎖骨 / 上腕骨	（右）	-
	（左）	-
上腕骨 / 大腿骨	（右）	-
	（左）	81.18
上腕骨 / 脛骨	（右）	-
	（左）	-
脛骨 / 大腿骨	（右）	-
	（左）	-
腓骨 / 脛骨	（右）	-
	（左）	-



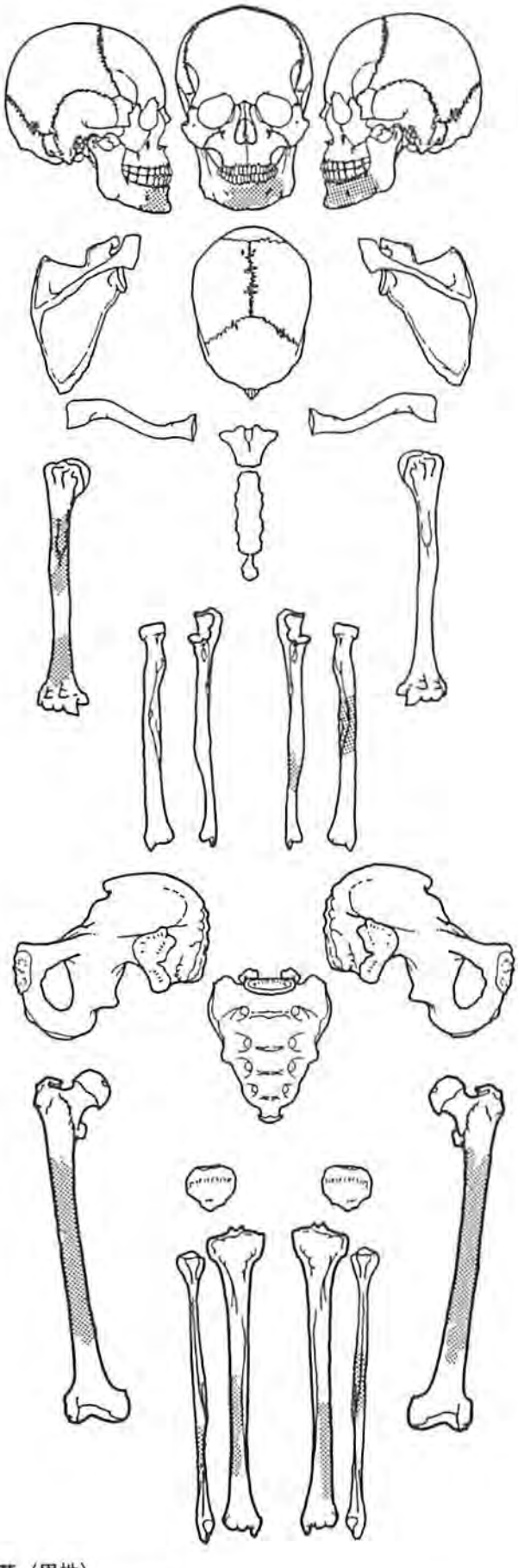
上ノ郷　6号土壙墓（男性）



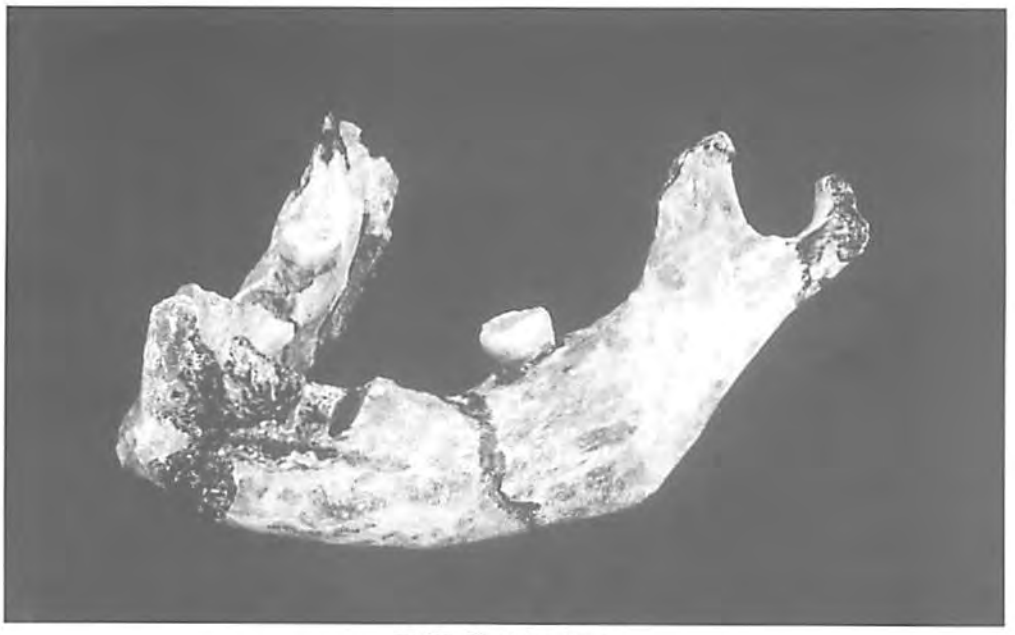
上ノ郷　5号土壙墓（男性）

図2-1　人骨の残存図（アミかけ部分）

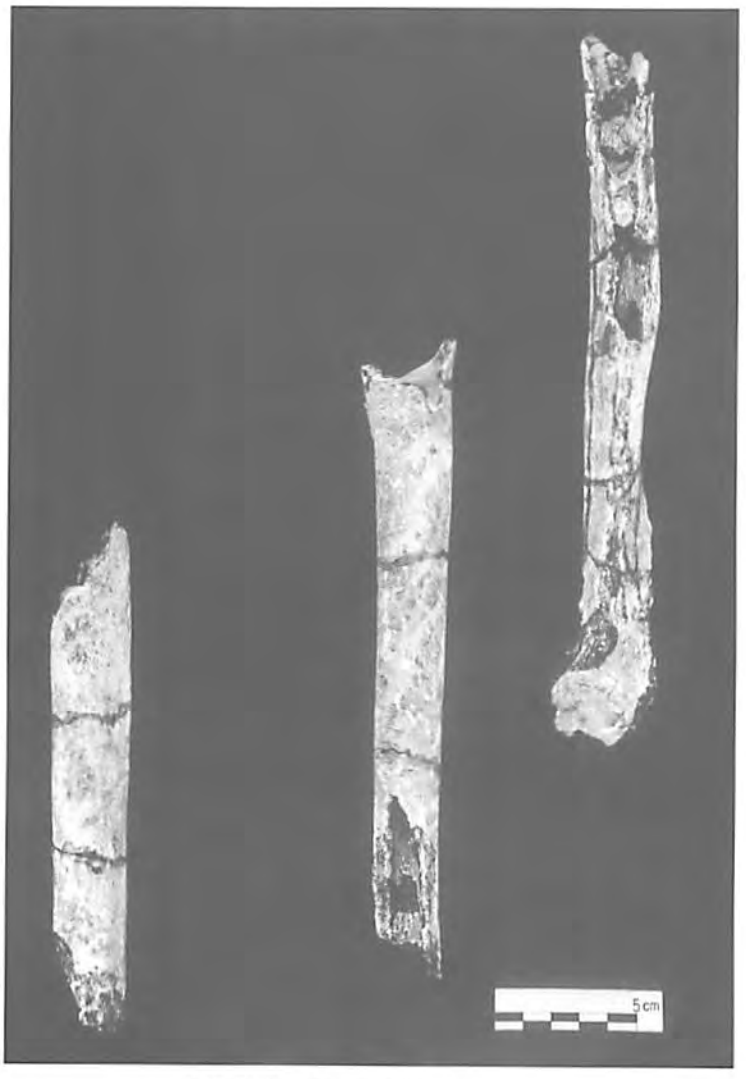
(Fig. 2-1 Regions of preservation of the skeleton. Shaded areas are preserved.)



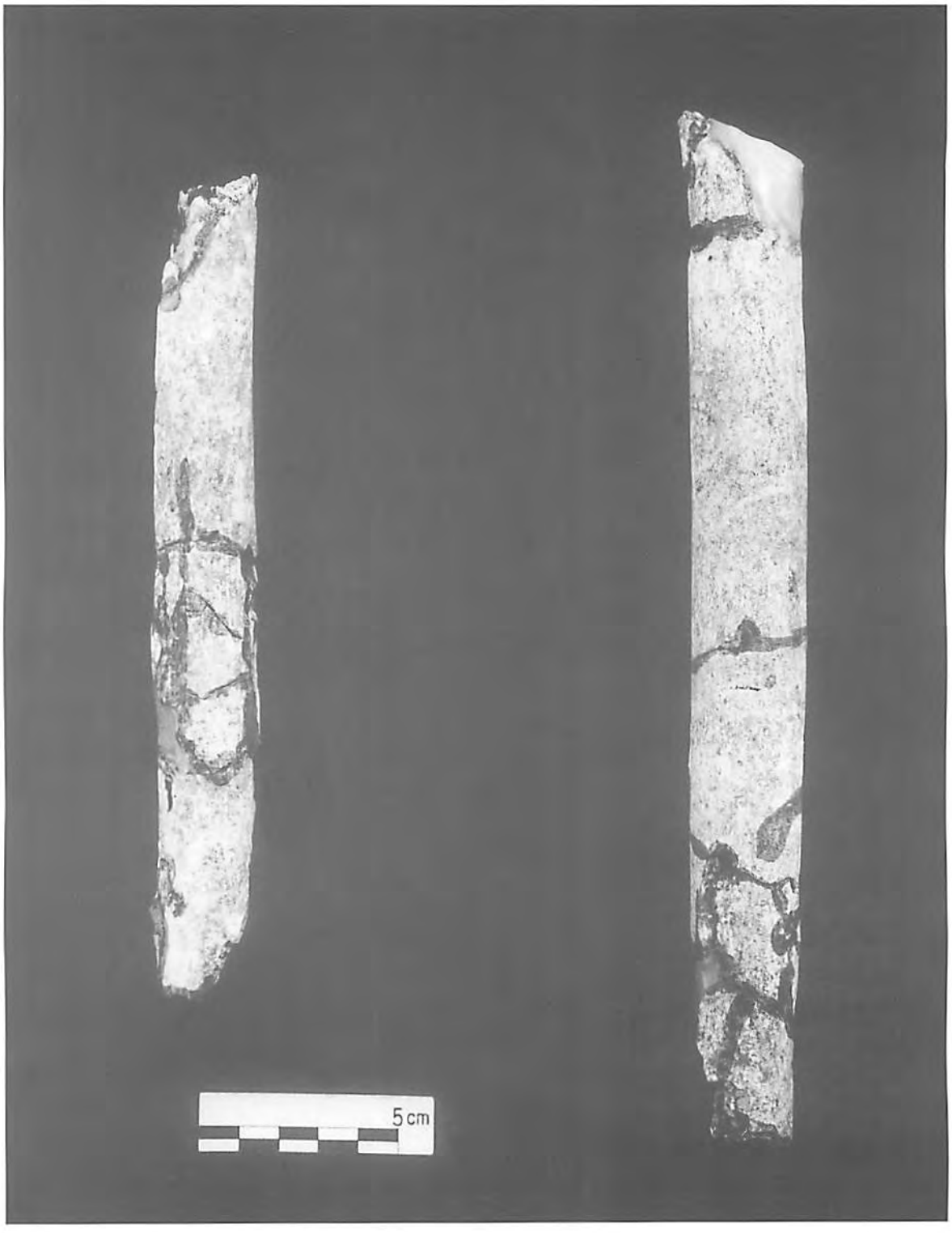
上ノ郷　4号土壙墓（男性）
図 2-2　人骨の残存図（アミかけ部分）
(Fig. 2-2 Regions of preservation of the skeleton. Shaded areas are preserved.)



下 顎 骨 (Mandibie)
上ノ郷 6 号土壙墓(男性)(The Kaminogo S-075,male)

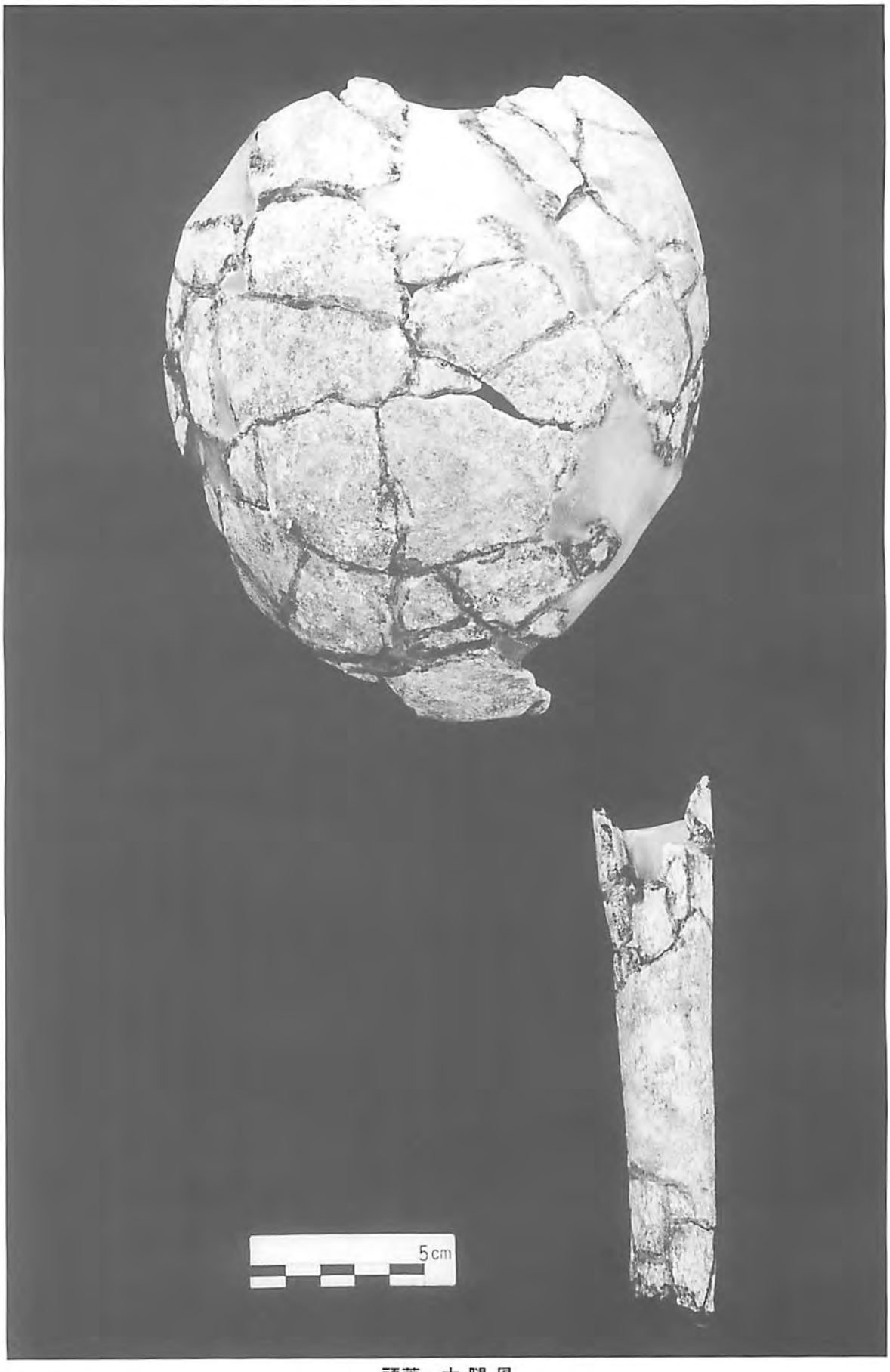


四 肢 骨 (The limb bonnes)
上ノ郷 6 号土壙墓(男性)(The Kaminogo S-075,male)



大 腿 骨 (Femur)
上ノ郷 4 号土壙墓 (男性) (The Kaminogo S-077,male)

大 腿 骨 (Femur)
上ノ郷 11 号土壙墓(女性) (The Kaminogo S-071,femaie)



頭蓋・大腿骨
上ノ郷 11 号甕棺墓(男性・壮年)
(The Kaminogo S-088, young abult male)

観　察　表

第２表　甕棺墓一覧表

遺構名	型式				組み合わせ		規模	埋置方位	埋置角度	備考
	単棺	複棺			上棺	下棺				
		接口	覆口	呑口						
1号甕棺	－	－	○	－	甕		小型	N-75°-W	22°	人骨粉あり
2号甕棺	－	○	－	－	甕		大型	N-78°-W	29°	人骨（性別不明）、
3号甕棺	－	○	－	－	甕		大型	N-67°-W	4°	人骨（性別不明）、頭位－東、粘土目張りあり
4号甕棺	－	○	－	－	甕		大型	N-83°-E	20°	人骨（男性）、頭位－東
5号甕棺	○	－	－	－	甕		小型	N-33°-W	－	
6号甕棺	－	－	－	－	甕		中型	N-84°-W	44°	蓋は掘削により消失、人骨（男性）、頭位－西
7号甕棺	－	○	－	－	鉢	甕	中型	N-84°-E	47°	蓋は小型の甕、人骨粉
8号甕棺	－	○	－	－	鉢	甕	小型	N-36°-E	23°	
9号甕棺	－	－	－	○	甕		中型	N-83°-E	11°	人骨（性別不明）、頭位－西
10号甕棺	○	－	－	－	甕		大型	N-76°-W	3°	石蓋・人骨（男性）、頭位－東
11号甕棺	－	○	－	－	鉢	甕	大型	N-77°-W	6°	人骨（性別不明）、頭位－西
12号甕棺	－	－	○	－	甕		中型	N-76°-E	52°	人骨（女性）、頭位－西

【規模】　大　78㎝以上
　　中　50㎝以上～78㎝未満
　　小　50㎝未満

第３表　甕棺法量表

	器種	法量（cm）				打欠内径	突帯		胎土	色調		調整	備考
		口径	胴部最大径	底径	器高		総本数	断面形状		外面	内面		
1号甕棺（上棺）	甕	44.8	43.5	9.4	49.4	－	1	三角形	角閃石・長石 石英・雲母	浅黄橙 7.5YR8/3	灰黄褐 10YR6/2	内外面共にハケ目後ナデ調整。口縁は横ナデ調整。底部はナデ調整。突帯あり。	黒斑あり
1号甕棺（下棺）	甕	－	41.4	11.0	(43.8)	28.4～29.1	1	三角形	角閃石・長石 石英・鉧石 赤色酸化粒	浅黄橙 7.5YR8/4	にぶい黄橙 10YR7/2	内外面共にハケ目後ナデ調整。口縁内端は全周打ち欠き。胴部に刻み目突帯あり。	胴部下部内面から穿孔あり
2号甕棺（上棺）	甕	－	57.9	9.8	(62.2)	39.2～40.5	1	三角形	雲母・長石	浅黄橙 10YR8/3 灰白色 10YR8/2	浅黄橙 10YR8/3 灰白色 10YR8/2	内外面共にハケ目後ナデ調整。頸部は打ち欠き。胴部には工具によるナデ調整と刻み目突帯あり。底部はナデ調整。一部、工具によるナデ調整あり。	黒斑、黒彩？あり
2号甕棺（下棺）	甕	47.0	68.1	12.7	87.7	－	2	三角形 方形	角閃石・長石 石英・雲母	浅黄橙 10YR8/4 にぶい黄橙 10YR7/4	にぶい黄橙 10YR7/4 にぶい橙 7.5YR7/4	内外面共にハケ目後ナデ調整。口縁は横ナデ調整。胴部に突帯あり。底部はナデ調整。	黒斑、黒彩？あり
3号甕棺（上棺）	甕	40.1	69.2	13.8	82.0	－	1	方形	角閃石・長石 石英・雲母	浅黄橙 10YR8/4 7.5YR8/4 にぶい橙 7.5YR7/4	にぶい橙 7.5YR7/4 にぶい黄橙 10YR6/4	内外面共にハケ目後ナデ調整。口縁は横ナデ調整。胴部には刻み目突帯あり。底部はナデ調整。	黒斑、黒彩？あり
3号甕棺（下棺）	甕	46.2	74.7	12.8	96.8	－	3	三角形 方形	角閃石・長石	にぶい黄橙 10YR7/4 にぶい橙 7.5YR6/4	にぶい橙 7.5YR7/4～ 6/4	内外面共にハケ目後ナデ調整。外面には一部、工具によるナデ調整あり。口縁は横ナデ調整。内端は全周打ち欠き。胴部に１条ずつの突帯と刻み目突帯あり。	黒斑、黒彩？あり
4号甕棺（上棺）	甕	39.4	56.5	9.4	73.2	32.0～33.0	1	方形	長石・石英	灰黄 2.5Y7/2	灰黄 2.5Y7/2	内外面共にハケ目後ナデ調整。口縁は横ナデ調整。内端は全周打ち欠き。胴部には刻み目突帯あり。	
4号甕棺（下棺）	甕	42.1	61.6	14.0	80.0	34.5～35.5	1	方形	長石・石英 雲母	浅黄橙 10YR8/3	灰黄褐 10YR6/2	外面はハケ目後ナデ調整。内面はナデ調整。口縁は横ナデ調整。内端は全周打ち欠き。胴部には刻み目突帯あり。	黒斑あり
5号甕棺	甕	21.8	27.5	8.9	33.2	－	1	三角形	長石・石英 雲母・赤褐色粒	浅黄橙 7.5YR8/6 橙 7.5YR6/8	浅黄橙 7.5YR8/ 橙 7.5YR6/8	内外面共にハケ目後ナデ調整。口縁は横ナデ調整。口唇部には刻み目あり。胴部には刻み目突帯あり。	黒斑あり
6号甕棺	甕	40.0	(47.8)	－	(22.4)	－	1	三角形	長石・雲母 石英	橙 5YR6/6 6/5	橙 2.5YR6/6	内外面共にナデ調整。口縁は横ナデ調整。内端は全周打ち欠き。頸部下に突帯あり。	黒斑あり
6号甕棺（下棺）	甕	－	56.2	11.4	(66.6)	－	2	三角形	長石・雲母	浅黄橙 10YR8/3 にぶい黄橙 10YR7/3	浅黄橙 10YR8/3 にぶい黄橙 10YR7/3	外面は工具によるナデ調整。内面はナデ調整。頸部は全周打ち欠き。 胴部に２条の突帯あり。	黒斑あり

	器種	法量（cm）				打欠内径	突帯		胎土	色調		調整	備考
		口径	胴部最大径	底径	器高		総本数	断面形状		外面	内面		
7号甕棺（上棺）	鉢	27.1	－	10.5	17.4	－	－	－	長石・石英 雲母 赤褐色粒	明赤褐色 5YR5/6 橙 7.5YR6/8	浅黄橙 7.5YR8/6	外面はミガキ調整。内面はハケ目後ナデ調整。口縁は横ナデ調整。	黒斑、黒彩？あり
7号甕棺（下棺）	甕	35.4	52.0	11.0	69.2	－	2	三角形	長石・石英 金雲母	にぶい黄橙 10YR6/4	にぶい褐 7.5YR5/3	内外面共にナデ調整。口縁は横ナデ調整。胴部に2条の突帯あり。	黒斑あり
8号甕棺（上棺）	鉢	26.6	－	(13.4)	(17.5)	－	－	－	角閃石・長石 石英・雲母 赤褐色粒	浅黄橙 10YR8/3	浅黄橙 10YR8/3	外面は工具によるナデ後ミガキ調整。内面はナデ調整。口縁は横ナデ調整。	黒斑あり
8号甕棺（下棺）	甕	27.8	26.9	7.6	40.9	－	－	－	長石・石英 雲母 赤褐色粒	にぶい黄橙 5YR7/4 浅黄橙 10YR8/4	浅黄橙 7.5YR8/4	外面はハケ目後ナデ調整。内面と底部はナデ調整。口縁は横ナデ調整。底部内面には指頭圧痕あり。	煤付着
9号甕棺（上棺）	甕	－	57	11.6	(69.3)	31.3～31.5	1	M形	長石・石英 輝石	明赤褐 2.5YR5/6	明赤褐 2.5YR5/6	外面はナデ調整。内面はハケ目後ナデ調整。頸部は全周打ち欠き。胴部下部には外側からの穿孔あり。突帯あり。	黒斑あり
9号甕棺（下棺）	甕	46.2	46.7	8.5	72.6	－	1	三角形	長石・石英 輝石・金雲母	にぶい黄橙 10YR7/3	にぶい黄橙 10YR7/3	内外面共にナデとハケ目後ナデ調整。口縁は横ナデ調整。胴部下部に外面からの打撃による穿孔あり。突帯あり。	黒斑あり
10号甕棺	甕	63.2	－	－	(17.4)	－	1	M形	長石・石英 雲母	橙 2.5YR6/8	明赤褐 5YR5/8	内外面共にナデ調整。口縁は横ナデ調整。口縁下に突帯あり。	黒斑あり
10号甕棺（下棺）	甕	67.6	68.1	12.5	115.9	－	4	三角形	長石・石英 金雲母	橙 2.5YR5/6	明赤褐 2.5YR5/6	内外面共にハケ目後ナデ調整。口縁は横ナデ調整。口縁下には2条の突帯あり。胴部にも2条の突帯あり。	石蓋甕棺、黒斑あり
11号甕棺（上棺）	鉢	66.2	－	12.8	35.6	－	1	三角形	長石・雲母	明赤褐 2.5YR4/6	明赤褐 2.5YR5/6	内外面共にナデ調整。底部は工具によるナデ調整。口縁下に突帯あり。	黒斑あり
11号甕棺（下棺）	甕	74.3	76.4	13.8	123.2	－	2	三角形	長石・石英 雲母	明赤褐 2.5YR5/6 5YR5/6	橙 2.5YR6/6～6/8	外面は工具によるナデ調整。胴部中央には2条の突帯あり。内面はナデ調整。口縁は横ナデ調整。	黒斑あり
12号甕棺（上棺）	甕	51.8	53.9	7.8	59.0	－	1	三角形	角閃石・長石 石英・雲母	にぶい黄橙 10YR7/3	にぶい黄橙 10YR7/2	内外面共にハケ目後ナデ調整。口縁は横ナデ調整。頸部下には突帯あり。	黒斑あり
12号甕棺（下棺）	甕	39.2	59.2	10.4	75.0	－	2	三角形 方形	長石・雲母	にぶい黄橙 10YR7/4 浅黄橙 2.5YR7/4	にぶい黄橙 10YR7/3 6/3	内外面共にハケ目後ナデ調整。口縁は横ナデ調整。胴部に1条ずつの突帯と刻み目突帯あり。	黒斑あり
13号甕棺	甕	－	50.1	－	(37.4)	－	1	三角形	長石・石英	浅黄橙 10YR8/4	浅黄橙 10YR8/4	内外面共にハケ目後ナデ調整。胴部に刻み目突帯あり。	黒斑あり 元位置を保たず

	器種	法量（cm）				打欠内径	突帯		胎土	色調		調整	備考
		口径	胴部最大径	底径	器高		総本数	断面形状		外面	内面		
14号甕棺	上甕	42.4	57.4	−	(43.1)	−	2	三角形方形	長石・石英	橙 7.5YR6/6	橙 5YR6/6 にぶい黄橙 10YR6/4	外面はハケ目後ナデ調整。内面はナデ調整。口縁は横ナデ調整。内堵は全周打ち欠き。胴部に刻み目突帯あり。	黒斑あり 元位置を保たず
15号甕棺	下甕	−	57.6	12.0	(61.4)	−	2	三角形方形	角閃石	にぶい橙 5YR6/4 2.5YR6/4	にぶい橙 7.5YR7/4 6/4	外面はハケ目後ナデ調整。内面はナデ調整。胴部中央には2条の突帯あり。	黒斑あり 元位置を保たず
4号住居	甕	(44.8)	(60.0)	−	(51.4)	−	2	三角形方形	角閃石・石英	にぶい黄橙 10YR7/2 7/3	にぶい橙 7.5YR7/3 7/4	内外面共にハケ目後ナデ調整。胴部に刻み目突帯あり。	黒斑あり
4号住居	甕	−	(69.1)	−	(37.8)	−	2	三角形方形	長石・石英 雲母	浅黄橙 7.5YR8/4 橙 5YR6/8	浅黄橙 10YR8/4	内外面共にハケ目後ナデ調整。内面には指頭圧痕あり。胴部には1条ずつ突帯と刻み目突帯あり。	赤彩？
3号不明遺構	甕	(45.4)	−	−	(6.0)	−	−	−	長石・石英 雲母・赤褐色粒	浅黄橙 10YR8/4 ～ 8/6	浅黄橙 10YR8/4 ～ 8/6	内外面共にナデ調整。口縁は横ナデ調整。	黒斑あり

第４表　土器観察表

番号	遺構名	器種	法量 (cm) 口径	底径	器高	胎土	色調 外面	色調 内面	調整	備考
1	１号住居	鉢	(11.8)	－	(6.9)	角閃石・長石 石英・雲母	にぶい橙 7.5YR6/4	灰褐 7.5YR5/2	内外面共にハケ目後ナデ調整。指頭圧痕あり。	
2	１号住居	鉢	(11.9)	－	(7.2)	角閃石・長石 石英・雲母・赤色粒	にぶい橙 7.5YR7/4	にぶい黄橙 10YR7/2	外面はハケ目後ナデ調整。内面はナデ調整。指頭圧痕あり。	
3	１号住居	壺	(15.8)	－	(3.3)	角閃石・長石 石英・赤色粒	にぶい黄橙 10YR7/3	にぶい黄橙 10YR7/3	内外面共にナデ調整。内面は剥離。	
4	１号住居	壺	－	－	(8.3)	角閃石・長石 石英・雲母 赤色酸化粒	にぶい黄橙 10YR7/4	にぶい黄橙 10YR7/2	外面はハケ目後ナデ調整。頸部には櫛描平行文と櫛描流水文あり。内面はハケ目後ナデ調整。	
5	１号住居	台付甕	19.7	－	(34.3)	角閃石・石英 金雲母・白色粒 赤色粒	にぶい黄褐 10YR5/3	にぶい黄橙 10YR7/3	外面はタタキ後ハケ目調整。内面はハケ目後ナデ調整。口縁部には内外面共にハケ目調整あり。	
6	１号住居 １号溝	台付甕	14.4	－	(30.9)	角閃石・長石 石英・雲母 赤色酸化粒	褐 7.5YR4/3	にぶい橙 7.5YR7/4	外面はタタキ後ハケ目調整。内面はハケ目調整。指頭圧痕あり。口縁部には内外面共にハケ目調整あり。	外面に黒斑あり
7	２号住居	鉢	(16.7)	－	(18.0)	角閃石・長石・石英 雲母・赤色粒	にぶい橙 7.5YR7/4	にぶい黄橙 10YR7/4	内外面共にハケ目後ナデ調整。口縁部には穿孔あり。外面と口縁部には赤彩あり。	
8	２号住居	鉢	－	6.4	(22.4)	長石・石英・凝石 雲母	にぶい橙 7.5YR7/4	橙 5YR6/6	内外面共にハケ目後ナデ調整。	胴部に穿孔あり
9	２号住居	高杯	－	－	(5.7)	角閃石・長石 石英・雲母	にぶい黄橙 10YR7/3	にぶい黄橙 10YR7/3	外面は粗いハケ目後ナデ調整。内面は粗いミガキ調整。暗文あり。	
10	２号住居	高杯	－	(17.1)	(21.0)	角閃石・長石・石英 雲母・赤色酸化粒	にぶい黄橙 10YR7/3	にぶい黄橙 10YR7/3	内外面共にハケ目後ナデ調整。絞り痕あり。	
11	５号住居	鉢	(12.2)	－	(3.9)	角閃石・長石・石英	明赤褐 2.5YR5/6	にぶい橙 7.5YR7/4	外面はナデ調整。内面はミガキ調整。	赤色土器
12	８号住居	小型鉢	6.1	－	4.5	雲母	橙 7.5YR7/6	にぶい橙 7.5YR6/4	外面はハケ目後ナデ調整。内面には指頭圧痕あり。	
13	４号住居	鉢	(14.4)	－	(9.2)	角閃石・長石 石英・雲母	橙 7.5YR7/6	橙 5YR6/6	外面胴部はハケ目後ナデ調整。内面はナデ調整。指頭圧痕あり。	
14	４号住居	コップ型土器	6.2	－	(9.7)	長石・石英	にぶい黄橙 10YR7/3	にぶい黄橙 10YR6/3	外面はミガキ調整、一部ハケ目調整。内面はハケ目調整後ナデ調整。	
15	４号住居	鉢	－	－	(5.2)	角閃石・長石・石英 雲母・赤色粒	にぶい橙 7.5YR7/4	にぶい橙 7.5YR7/4	外面は櫛状工具による調整。内面はミガキ調整。口縁は横ナデ。	
16	４号住居	高杯	(30.2)	－	(4.8)	長石・石英・雲母 赤色粒	暗赤褐 5YR3/4	赤褐 2.5YR4/8	外面はハケ目後ナデ調整。内面はミガキ調整。	赤色土器
17	４号住居	高杯	－	－	(4.0)	角閃石・長石 石英・雲母	にぶい黄橙 10YR7/4	明赤褐 2.5YR5/8	内面・口縁部共にミガキ調整。暗文。	赤色土器
18	４号住居	甕	(15.8)	－	(12.2)	長石・石英 雲母	にぶい橙 7.5YR6/4	にぶい橙 7.5YR6/4	外面はタタキ後ハケ目調整。内面はハケ目後ナデ調整。	

土器観察表

番号	遺構名	器種	法量 (cm)			胎土	色調		調整	備考
			口径	底径	器高		外面	内面		
19	4号住居	甕	−	−	(10.1)	角閃石・長石 石英・輝石・赤色粒	にぶい黄橙 10YR7/4	にぶい黄橙 10YR7/2	外面はタタキ後ハケ目調整。内面はハケ目調整。	
20	6号住居	鉢	(15.5)	−	(13.6)	角閃石・石英・雲母 赤色酸化粒	にぶい橙 7.5YR7/3	にぶい黄橙 10YR7/4	内外面共にハケ目後ナデ調整。口縁部、内面に指頭圧痕あり。	
21	6号住居	甕	(21.5)	−	(32.9)	長石・石英・輝石 白色粒・赤色粒	にぶい黄橙 10YR6/3	にぶい黄橙 10YR7/4	外面はタタキ後ハケ目調整。内面はハケ目後ナデ調整。指頭圧痕あり。	
22	6号住居	台付甕	(19.8)	−	(37.3)	石英・輝石・金雲母 白色粒・赤色粒	褐 10YR4/4	橙 7.5YR7/6	外面はタタキ後ハケ目調整。内面はハケ目後ナデ調整。口縁部には内外面共にハケ目調整あり。	
23	6号住居	甕	22.4	−	(33.5)	角閃石・石英 白色粒・赤色粒	にぶい橙 7.5YR7/4	灰黄 2.5Y6/2	外面はタタキ後ハケ目調整。内面はハケ目後ナデ調整。指頭圧痕あり。口縁部には内外面共にハケ目調整あり。	
24	9号住居	鉢	(11.4)	−	7.2	角閃石・雲母 赤色酸化粒	灰黄褐 10YR5/2	暗灰黄 2.5Y5/2	外面はハケ目後ナデ調整。内面はナデ調整。口縁は横ナデ。	
25	9号住居	甕	−	−	(6.2)	角閃石・長石・石英 雲母・白色粒	橙 5YR7/8	にぶい橙 7.5YR7/4	内外面共にハケ目調整。口縁は横ナデ。	赤色土器
26	9号住居	壺	−	−	(31.1)	角閃石・長石・輝石 雲母・赤色粒	灰褐 7.5YR5/2	灰黄褐 10YR6/2	外面はハケ目後ナデ調整。櫛描円文もしくは櫛描流水文あり。内面はハケ目後ナデ調整。	
27	9号住居	甕	−	7.5	(4.4)	角閃石・長石 石英・雲母	橙 7.5YR7/6	浅黄 2.5Y7/3	外面はハケ目後ナデ調整。内面はナデ調整。指頭圧痕あり。	
28	9号住居	壺	21.4	−	51.2	角閃石・石英 金雲母・赤色粒 白色粒	にぶい黄橙 10YR7/4	にぶい黄橙 10YR7/4	外面はハケ目後ナデ調整、頸部には櫛描平行文と櫛描流水文あり。内面はハケ目後ナデ調整。指頭圧痕あり。口縁は横ナデ。	
29	11号住居	鉢	(9.0)	−	5.7	角閃石・長石・石英	灰褐 7.5YR6/2	灰褐 7.5YR5/2	外面胴部はナデ調整。底部はハケ目調整。内面はナデ調整。指頭圧痕あり。	
30	11号住居	鉢	(12.6)	(4.6)	6.9	長石・石英・角閃石	にぶい黄橙 10YR6/4	灰黄 2.5Y6/2	内外面共にハケ目後ナデ調整。	
31	11号住居 12号住居	鉢	(13.5)	−	(8.4)	長石・石英	にぶい橙 5YR7/4	にぶい橙 7.5YR7/4	外面胴部は粗いハケ目後ナデ調整。底部はタタキ後ナデ調整。内面はハケ目後ナデ調整、指頭圧痕あり。	
32	11号住居	鉢	13.1	−	10.0	長石・石英	にぶい黄橙 10YR7/3	にぶい橙 7.5YR7/4	外面はハケ目後ナデ調整。部分的に、ナデ消す。内面はナデ調整。指頭圧痕あり。	
33	11号住居	鉢	10.0	−	(8.6)	長石・石英	にぶい黄橙 10YR7/3	にぶい黄橙 10YR7/4	外面は回転ナデとハケ目調整。底部はハケ目調整。内面はナデ調整。指頭圧痕あり。	
34	11号住居	鉢	−	−	(11.2)	長石・石英・雲母 赤色酸化粒	にぶい橙 7.5YR7/3	にぶい橙 7.5YR7/4	内外面共に粗いハケ目後ナデ調整。	
35	11号住居	鉢	(17.6)	−	(7.2)	角閃石・石英 赤色酸化粒	橙 7.5YR6/6	橙 7.5YR6/6	外面はハケ目後ナデ調整。内面は削り後ナデ調整。	
36	11号住居	鉢	18.5	−	(9.4)	角閃石・石英 赤褐色粒	浅黄橙 7.5YR8/6	にぶい黄橙 10YR7/2	外面はハケ目後ナデ調整。内面はナデ調整。指頭圧痕あり。	

土器観察表

番号	遺構名	器種	法量 (cm)			胎土	色調		調整	備考
			口径	底径	器高		外面	内面		
37	11号住居	鉢	19.6	−	(10.1)	雲母 赤色酸化粒	にぶい橙 7.5YR7/4	にぶい橙 7.5YR6/4	外面はハケ目後ナデ調整。内面はナデ調整。 指頭圧痕・一部削りあり。	
38	11号住居	鉢	(18.7)	−	(9.4)	長石・石英	にぶい橙 7.5YR7/4	にぶい橙 7.5YR7/3	外面はハケ目後ナデ調整。内面はナデ調整。 指頭圧痕・粉痕あり。	
39	11号住居	鉢	21.5	−	10.4	長石・石英・雲母	にぶい橙 7.5YR7/4	浅黄橙 7.5YR8/4	外面はハケ目後ナデ調整。内面はナデ調整。 指頭圧痕あり。	
40	11号住居	高杯	(33.9)	−	(5.8)	角閃石・長石 石英・金雲母	にぶい黄橙 10YR7/2	にぶい黄橙 10YR7/3	外面はハケ目後ナデ調整。口縁部と内面には暗文あり。	
41	11号住居	壺	16.2	−	(5.2)	長石・石英・雲母	にぶい黄橙 10YR7/4	にぶい黄橙 10YR7/3	外面は横ナデ調整。内面はハケ目後ナデ調整。 頸部は板状工具による削り調整。	
42	11号住居	壺	(18.0)	−	(13.3)	角閃石・雲母 赤色酸化粒	にぶい橙 7.5YR7/4	にぶい橙 5YR7/4	外面はハケ目後ナデ調整。頸部には櫛描平行文と櫛描流水文あり。内面はハケ目後ナデ調整。 指頭圧痕あり。口縁は横ナデ。	
43	11号住居	甕	−	−	(12.0)	角閃石・長石 石英・雲母	にぶい黄橙 10YR7/3	浅黄橙 10YR8/3	内外面共にハケ目後ナデ調整。口縁は横ナデ。	
44	11号住居	甕	21.8	−	(16.8)	角閃石・長石 雲母・赤色粒	にぶい黄橙 10YR7/3	にぶい黄橙 10YR7/3	外面はタタキ後ハケ目調整。内面はハケ目後ナデ調整。指頭圧痕あり。	
45	11号住居	甕	20.5	−	(24.3)	角閃石・長石・石英・赤色酸化粒	灰褐 7.5YR6/2	にぶい黄橙 10YR7/4	外面はタタキ後ハケ目調整。内面はハケ目後ナデ調整。指頭圧痕あり。口縁部には内外面共にハケ目調整あり。	
46	11号住居	台付甕	(21.2)	−	(42.2)	角閃石・長石 赤色酸化粒	黒褐 10YR3/2	にぶい黄橙 10YR7/3	外面はタタキ後ハケ目調整。内面はハケ目調整。指頭圧痕あり。口縁部には内外面共にハケ目調整あり。	
47	11号住居	台付甕	19.6	−	(37.3)	角閃石・石英 鉱石・金雲母	灰黄褐 10YR4/2	にぶい黄橙 10YR6/3	外面はタタキ後ハケ目調整。内面はハケ目後ナデ調整。指頭圧痕あり。口縁部には内外面共にハケ目調整あり。	
48	11号住居	台付甕	−	(11.2)	(33.4)	角閃石・長石・鉱石・赤色酸化粒	にぶい黄橙 10YR6/3	にぶい橙 7.5YR7/4	内外面共にハケ目後ナデ調整。指頭圧痕あり。	
49	11号住居	台付甕	−	14.4	(18.7)	角閃石・長石 石英	浅黄 2.5Y7/3	浅黄橙 10YR8/4	内外面共にハケ目後ナデ調整。	
50	11号住居	台付甕	−	(14.6)	(12.7)	角閃石・長石・鉱石・赤色酸化粒	にぶい黄橙 10YR7/3	にぶい黄橙 10YR6/3	内外面共にハケ目後ナデ調整。	
51	11号住居	台付甕	−	13.9	(20.7)	角閃石・石英 赤褐色粒	にぶい黄橙 10YR7/4	にぶい黄橙 10YR7/2	内外面共にハケ目後ナデ調整。内面には指頭圧痕あり。	
52	11号住居	台付甕	−	13.4	(10.8)	角閃石・雲母	にぶい黄橙 10YR7/2	にぶい黄橙 10YR7/3	内外面共に粗いハケ目後ナデ調整。内面には指頭圧痕あり。	
53	11号住居	台付甕	−	16.5	(11.5)	石英・鉱石 赤褐色粒	浅黄 2.5Y7/3	浅黄 2.5Y7/3	外面はタタキ後ナデ調整。内面はハケ目後ナデ調整。	

土器観察表

番号	遺構名	器種	法量 (cm)			胎土	色調		調整	備考
			口径	底径	器高		外面	内面		
54	12号住居	鉢	(14.6)	−	(3.4)	雲母・長石	浅黄橙 10YR8/3	浅黄橙 10YR8/4	内外面共にナデ調整。口縁部に穿孔あり。	
55	13号住居 22号土坑	甕	−	8.8	(7.0)	角閃石・長石 石英・輝石 金雲母	にぶい黄橙 10YR7/3	にぶい灰黄 2.5Y6/2	外面はハケ目後ナデ調整。内面はナデ調整。指頭圧痕あり。	
56	15号住居	鉢	(8.8)	−	(5.0)	長石・石英・雲母 赤色酸化粒	浅黄橙 7.5YR8/4	にぶい黄橙 10YR7/2	外面はハケ目後ナデ調整。内面は指押さえ後ハケ目調整。	
57	15号住居	鉢	9.3	−	5.8	角閃石・長石 石英・雲母 赤色酸化粒	浅黄橙 10YR8/3	灰白 10YR7/1	外面はハケ目後ナデ調整。内面はナデ調整。指頭圧痕あり。	
58	15号住居	鉢	13.5	−	10.4	角閃石・長石 石英・輝石・雲母 赤色酸化粒	浅黄橙 7.5YR8/4	明褐灰 7.5YR7/2	外面はハケ目後ナデ調整。内面はナデ調整。指頭圧痕あり。	
59	15号住居	鉢	(19.9)	−	9.1	長石・石英	にぶい黄橙 10YR7/4	にぶい橙 7.5YR7/4	外面はハケ目後ナデ調整。内面はナデ、一部削りあり。口縁部に指頭圧痕あり。	
60	15号住居	高杯	(33.3)	−	(6.6)	長石・石英・雲母 赤色酸化粒	浅黄橙 10YR8/3	浅黄橙 10YR8/4	外面は粗いハケ目後ナデ調整。内面はミガキ。口縁部と内面には暗文あり。	
61	15号住居	甕	−	−	(31.0)	金雲母・赤色粒	にぶい褐 7.5YR5/3	にぶい橙 7.5YR7/4	内外面共に、ハケ目後ナデ調整。	
62	15号住居	甕	20.3	−	(28.8)	角閃石・長石 輝石・雲母 赤色粒	黒褐 10YR3/2	にぶい黄橙 10YR6/3	外面はタタキ後ハケ目調整。内面はハケ目後ナデ調整。	
63	15号住居	甕	(19.1)	−	(25.8)	角閃石・長石 雲母	灰黄褐 10YR5/2	にぶい黄橙 10YR6/3	内外面共に、ハケ目後ナデ調整。	
64	15号住居	台付甕	(19.2)	−	(42.9)	角閃石・金雲母 白色粒	褐 7.5YR4/3	にぶい黄橙 10YR7/4	外面はタタキ後ハケ目調整。内面はハケ目後ナデ調整。指頭圧痕あり。口縁部には内外面共にハケ目調整あり。	
65	15号住居	台付甕	17.5	(9.8)	35.8	角閃石・金雲母 白色粒	にぶい黄橙 10YR7/3	にぶい黄橙 10YR6/3	外面はタタキ後ハケ目調整。内面はハケ目後ナデ調整。	
66	15号住居	壺	15.9	−	(16.5)	角閃石	にぶい黄橙 10YR7/3	にぶい黄橙 10YR7/3	外面はハケ目後ナデ調整、頸部には櫛描平行文と櫛描流水文あり。内面はハケ目後ナデ調整。口縁部には刻み目あり。	
67	15号住居	壺	19.1	−	(21.8)	角閃石・長石 石英・赤色酸化粒	にぶい褐 7.5YR5/4	にぶい橙 5YR7/4	外面はハケ目後ナデ調整、頸部には櫛描平行文と櫛描流水文あり。内面はハケ目後ナデ調整。指頭圧痕あり。口縁は横ナデ。磨耗著しい。	
68	16号住居	碗(須恵器)	(12.6)	8.1	4.5	白色粒・黒色粒	灰 N 5/0	灰 N 5/0	外内面共に回転ナデ。高台貼り付け。	
69	17号住居	手づくね	−	−	(5.5)	長石・石英	橙 7.5YR7/6	橙 7.5YR6/6	全体的に指による押さえ。	
70	17号住居	小型丸底壺	8.2	−	8.8	長石・石英・輝石	にぶい橙 7.5YR7/4	にぶい橙 7.5YR6/4	外面はハケ目後ナデ調整。内面は削り後ナデ調整。底部には穿孔あり。	

土器観察表

番号	遺構名	器種	法量 (cm)			胎土	色調		調整	備考
			口径	底径	器高		外面	内面		
71	17号住居	鉢	17.6	−	(7.0)	長石・石英・雲母	にぶい黄橙 10YR7/3	にぶい橙 7.5YR7/4	内外面共にハケ目後ナデ調整。	
72	17号住居	高杯	16.8	10.7	12.7	長石・石英	にぶい橙 7.5YR6/4	にぶい橙 7.5YR6/4	内外面共にハケ目後ナデ調整。脚部内面には絞り痕あり。	
73	21号土坑	台付甕	−	7.3	(32.9)	角閃石・長石 石英・金雲母	にぶい黄褐 10YR5/3	黒褐 10YR3/2	外面はハケ目後ナデ調整。脚部から胴部下部にかけてヘラ状工具によるナデ調整。内面はハケ目後ナデ調整。指頭圧痕あり。	
74	23号土坑	杯	(10.6)	6.0	4.8	長石・石英・輝石 赤色酸化粒	橙 5YR7/6	橙 5YR7/6	内外面共に回転ナデ調整。底部は回転ヘラ切り、板状圧痕あり。	
75	24号土坑	杯	−	5.6	(3.3)	長石	橙 7.5YR7/6	にぶい橙 7.5YR7/4	内外面共に回転ナデ調整。	口縁は打ち欠きか？
76	24号土坑	杯	(10.5)	5.2	4.4	長石 赤色酸化粒	にぶい橙 5YR6/4	橙 5YR6/6	内外面共に回転ナデ調整。	
77	24号土坑	杯	(11.7)	6.2	4.9	長石・赤褐色粒 白色粒	橙 5YR6/6	橙 5YR6/6	内外面共に回転ナデ調整。底部は回転ヘラ切り。	焼成後穿孔
78	1号溝	壺	(15.4)	−	(10.2)	長石・石英・雲母 赤色酸化粒	褐 7.5YR4/3	にぶい黄橙 10YR6/3	外面頸部から口縁にかけてミガキ調整。胴部はハケ目後ナデ調整。内面は頸部にハケ目後ナデ調整。	
79	2号溝	高杯	−	19.3	(19.6)	角閃石・長石 石英・雲母 赤色酸化粒	にぶい黄橙 10YR7/3	にぶい黄橙 10YR7/4	外面はハケ目後ナデ調整。内面はハケ目後ナデ調整、絞り痕、指頭圧痕あり。	
80	3号不明遺構	浅鉢	−	−	(3.8)	長石・石英・雲母	黄灰 2.5Y4/1	黒褐 2.5Y3/1	内外面共にミガキ調整。黒色磨研土器	
81	3号不明遺構	甕？壺？	−	(8.5)	(4.5)	角閃石・長石 石英・雲母	浅黄橙 10YR8/4	黄灰 2.5Y4/1	外面・底部共にハケ目後ナデ調整。内面はナデ調整。	底部に黒斑あり
82	3号不明遺構	甕	(29.4)	(4.8)	(31.4)	角閃石・長石 石英・金雲母	浅黄 2.5Y7/3	灰黄 2.5Y7/2	外面は刻み目突帯より上部はミガキ調整、下部はハケ目後ナデ調整。内面はハケ目後ナデ調整。	
83	3号不明遺構	甕	−	−	(14.3)	角閃石・長石 石英・雲母 赤色酸化粒	にぶい黄橙 10YR7/4	にぶい黄橙 10YR7/3	内外面共にハケ目調整。指頭圧痕あり。口縁部は横ナデ。	
84	4号不明遺構	甕	30.2	6.4	31.9	角閃石・石英 雲母・黒色粒	赤褐 2.5YR4/8	橙 5YR7/6	外面は全体的にミガキ調整。内面はハケ目後ナデ調整。口縁と外面に暗文あり。	赤色土器
85	G−23・24	鉢	(15.1)	−	(2.3)	角閃石・雲母 白色粒	にぶい橙 7.5YR7/3	にぶい黄橙 10YR7/3	内外面共に横ナデ調整。口縁内面にハケ目調整、穿孔、赤彩あり。	
86	E・F−9・10	鉢	(13.1)	−	(10.8)	角閃石・石英 雲母	灰黄 2.5Y7/2	灰白 10YR8/2	内外面はハケ目後ナデ調整。内面には指頭圧痕あり。口縁部には穿孔あり、横ナデ。	
87	C〜F−21・22	無頭壺	(8.4)	−	(3.0)	角閃石・長石 白色粒	灰黄褐 10YR6/2	黄灰 2.5Y5/1	外面はハケ目後ナデ調整。内面はナデ調整。指頭圧痕、絞り痕あり。	赤色土器

土器観察表

番号	遺構名	器種	法量 (cm)			胎土	色調		調整	備考
			口径	底径	器高		外面	内面		
88	−	無頸壺	6.4	5.3	8.4	角閃石・長石 雲母	にぶい黄橙 10YR7/4	浅黄 2.5Y7/3	外面胴部上部はハケ目後ナデ調整。下部はミガキ調整。内面はハケ目後ナデ調整。穿孔あり。外面と口縁部には赤彩あり。	
89	F−9・10	鉢	(13.5)	−	(11.6)	長石・石英・雲母 赤色酸化粒	にぶい黄橙 10YR7/3	にぶい黄橙 10YR7/4	外面はタタキ後ナデ調整。内面は削り後ナデ調整。	
90	−	鉢	12.6	8.3	9.5	長石・石英・雲母	浅黄 7.5YR8/4	にぶい橙 7.5YR7/4	外面は板状工具によるミガキ調整。口唇部にはハケ目あり。四方向に穿孔あり。内面はハケ目後ナデ調整。	口縁部に4ヵ所穿孔あり 煤付着
91	E・F−17・18	壺	−	−	(4.5)	長石・石英・雲母	にぶい橙 7.5YR6/4	橙 5YR6/6	内外面共にハケ目調整。外面は沈線6条。	
92	E・G−2	小型鉢	−	−	(5.6)	長石・白色粒	にぶい黄橙 10YR6/3	にぶい黄橙 10YR6/3	外面胴部上部はハケ目後ミガキ調整。下部はナデ調整。内面底部は多方向のハケ目調整。	
93	F−9	小鉢 (ミニチュア)	(4.4)	−	2.3	長石・石英・輝石	にぶい橙 7.5YR6/4	橙 7.5YR6/6	全体的に指による押さえが見られる。手づくね。	
94	C〜F−21・22	鉢	(9.7)	−	7.1	角閃石・長石	灰黄褐 10YR6/2	灰黄褐 10YR5/2	外面はハケ目とミガキ調整。内面は指ナデ調整。	
95	G−9・10	鉢	(15.6)	−	(7.0)	角閃石・長石 雲母	黒 10YR2/1	にぶい黄橙 10YR7/4	外面はヘラミガキ調整。内面はナデ調整。暗文あり。	
96	E・F−27・28	鉢	(16.0)	−	(7.9)	長石	にぶい褐 7.5YR6/3	にぶい黄褐 10YR5/3	内外面共にハケ目後ナデ調整。外面には板状工具によるタテ方向の削り調整あり。口縁は横ナデ。	
97	E・F−5・6	鉢	(20.6)	−	(8.9)	角閃石・長石・石英 雲母・赤色粒	にぶい橙 7.5YR6/4	にぶい橙 7.5YR6/4	外面はハケ目後ナデ調整。内面はナデ調整。指頭圧痕あり。口縁部は横ナデ。	
98	F−9・10	鉢	(21.4)	−	(8.8)	角閃石・長石 石英・雲母	にぶい黄橙 10YR7/4	にぶい黄橙 10YR7/3	内外面共にハケ目後ナデ調整。内面には指頭圧痕あり。	
99	C・D−25・26	鉢	21.5	−	11.9	角閃石・輝石 雲母・赤色粒	橙 5YR7/6	にぶい黄橙 10YR7/2	外面はハケ目後ナデ調整。内面はナデ調整。指頭圧痕あり。	
100	E・F−11・12	壺	−	−	(3.1)	長石・雲母 角閃石	橙 5YR6/6	にぶい褐 7.5YR5/4	内外面共にハケ目調整。口縁は横ナデ。	
101	C〜F−21・22	壺	−	−	(3.7)	角閃石・長石 石英・雲母	浅黄 2.5Y7/3	浅黄 2.5Y7/3	内外面共にナデ調整。口唇部には2段の刻み目あり。	
102	E・F−17・18	−	−	−	(3.3)	長石・石英	明赤褐 2.5YR5/8	浅黄橙 10YR8/3	外面はヘラミガキ調整。内面はナデ調整。	赤色土器
103	E・F−3・4	甕？	−	−	(3.8)	角閃石・長石 石英・雲母 赤色酸化粒	にぶい橙 7.5YR7/4	橙 7.5YR7/6	内外面共にナデ調整。内面には一部ハケ目あり。頸部には連続文あり。	
104	C・D−23・24	甕	−	−	(8.2)	角閃石・長石 石英・雲母 赤色酸化粒	にぶい黄橙 10YR6/4	にぶい黄橙 10YR7/4	外面はハケ目後ナデ調整。内面はナデ調整。刻み目突帯。	

土器観察表

番号	遺構名	器種	法量 (cm)			胎土	色調		調整	備考
			口径	底径	器高		外面	内面		
105	E・F－21・22	甕	－	－	(10.9)	角閃石・長石 石英・雲母 赤色酸化粒	にぶい橙 7.5YR7/4	にぶい黄橙 10YR7/4	内外面共にナデ調整。刻み目突帯。指頭圧痕あり。	
106	E・F－27・28	鉢	(18.0)	－	(15.4)	角閃石・長石 雲母	黒褐 10YR3/1	灰黄褐 10YR4/2	内外面共に粗いハケ目後ナデ調整。	
107	－	甕	19.5	－	(11.9)	角閃石・雲母	にぶい黄橙 10YR7/2	にぶい黄橙 10YR7/3	内外面共にハケ目後ナデ調整。口縁部、内面に指頭圧痕あり。	黒斑
108	C～F－17・18	甕	－	9.4	(6.4)	長石・石英	にぶい黄褐 10YR7/4	灰黄褐 10YR6/2	外面はハケ目後ナデ調整。内面はナデ調整。	
109	C・D－25・26	高杯	30.3	－	(9.4)	輝石・雲母 赤色粒	浅黄橙 10YR8/3	浅黄橙 10YR8/3	外面はハケ目後ナデ調整。口縁部と内面には暗文あり。	
110	E・F－19・20	高杯	(23.4)	－	(4.5)	長石・石英・雲母	橙 5YR6/6	明赤褐 5YR5/6	外面はナデ調整。内面はミガキ調整。口縁部には線刻あり。	
111	C・D－25・26	高杯	－	19.8	(17.2)	角閃石・長石 石英・雲母	にぶい黄橙 10YR7/3	にぶい黄橙 10YR7/3	外面はタタキ後ナデ調整。内面はハケ目後ナデ調整。絞り痕あり。	
112	E～G－9・10	浅鉢	－	－	(4.0)	雲母	灰褐 7.5YR4/2	黒 5Y2/1	内外面共にミガキ調整。内面には赤色顔料塗布あり。	
113	C～F－11～14	深鉢	－	－	(15.1)	角閃石・長石 石英・雲母	明黄褐 2.5Y7/6	浅黄 2.5Y7/4	外面は貝殻条痕。内面はヘラ削り調整。	
114	－	壺	10.4	－	16.0	角閃石・長石 石英・雲母 赤色酸化粒	にぶい黄橙 10YR7/4	橙 7.5YR7/6	外面胴部上部はハケ目後ナデ調整、下部はナデ調整。内面は削り後ナデ調整。穿孔あり。	
115	E・F－17・18	長頸壺 (須恵器)	－	－	(14.6)	長石	灰白 5Y7/1	暗黄灰 2.5Y5/2	内外面共に回転ナデ調整。	全体に自然釉
116	C・D－23・24	甕(須恵器)	(21.2)	－	(8.4)	長石	灰 7.5Y4/1	オリーブ黒 7.5Y3/1	外面は格子目タタキ後ナデ調整。内面は当て具痕(同心円文)。口縁は横ナデ。	117と同一か？
117	C・D－23・24	甕(須恵器)	(21.2)	－	(14.9)	長石	灰 10Y5/1	灰 7.5Y4/3	外面は格子目タタキ後ナデ調整。内面は当て具痕(同心円文)。口縁は横ナデ。	116と同一か？
118	C・D－24	甕(須恵器)	(19.8)	－	(25.0)	長石	灰 7.5Y6/1	灰 10Y5/1	外面は格子目タタキ後ナデ調整。内面は当て具痕(同心円文)。口縁は横ナデ。	
119	C・D－25・26	蓋(須恵器)	15.4	－	4.1	白色粒・黒色粒	灰 N 4/0	暗オリーブ灰 2.5GY4/1	外面は回転ヘラ削り後ナデ調整。内面は回転ナデ調整。	
120	C・D－23・24	杯 (須恵器)	11.2	6.7	5.0	長石・白色粒	灰 5Y6/1	灰 5Y5/1	内外面共に回転ナデ調整。底部は回転ヘラ削り。	
121	C・D－25・26	杯	(12.0)	(5.0)	4.3	雲母・赤褐色粒	橙 5YR7/6	橙 5YR7/6	内外面共に回転ナデ調整。底部は回転ヘラ切り。板目圧痕あり。	
122	C・D－25・26	鉢	15.4	－	7.4	長石・輝石 赤色粒	橙 5YR7/6	橙 7.5YR7/6	内外面共に回転ナデ調整。底部は回転ヘラ削りあり。	
123	E・F－3・4	椀	－	(9.0)	1.3	雲母	橙 5YR6/6	橙 5YR6/6	内面はナデ調整。底部は回転ヘラ削り、板目圧痕あり。高台貼り付け。	

土器観察表

番号	遺構名	器種	法量 (cm)			胎土	色調		調整	備考
			口径	底径	器高		外面	内面		
124	C・D－21・22	杯	－	4.7	(1.8)	雲母	にぶい橙 7.5YR7/4	にぶい黄橙 10YR7/4	内外面共に回転ナデ調整。底部には板状圧痕あり。	赤色土器
125	E・F－3・4	杯	(13.1)	(9.4)	3.0	長石・雲母 赤色酸化粒	橙 2.5YR6/6	橙 2.5YR6/6	内外面共に回転ナデ調整。底部は回転ヘラ削り。	赤色土器
126	C・D－25・26	鉢	－	(8.8)	(1.8)	長石 赤色酸化粒	橙 7.5YR7/6	にぶい橙 7.5YR7/4	内外面共に回転ナデ調整。底部は回転ヘラ削り。暗文あり。	
127	C・D－29・30	台付小皿	(11.4)	(5.9)	2.7	角閃石・輝石 雲母	にぶい黄橙 10YR7/4	青黒 5PB2/1	外面は回転ナデ調整。内面はミガキ調整。	内面黒色
128	E・F－17・18	椀	(13.2)	7.4	5.1	長石・雲母 金雲母 赤色酸化粒	にぶい黄橙 10YR6/3	黒 10YR2/1	外面は回転ナデ調整と回転ヘラ削り調整。内面はミガキ調整。暗文あり。底部は回転ヘラ切り調整。	内面黒色
129	E・F－17・18	甑	－	－	(7.7)	角閃石・長石・石英・雲母・赤色粒	褐灰 10YR4/1	灰黄褐 10YR5/2	全体的に指押さえ。	
130	－	甑	(28.6)	－	(18.7)	角閃石・石英・金雲母・黒曜石 赤色粒	にぶい黄橙 10YR6/3	にぶい橙 7.5YR6/4	外面はハケ目後ナデ調整。内面はヘラ削り。口縁は横ナデ。取っ手はナデ調整、指頭圧痕あり。	

第５表　石製品観察表

番号	遺構名	種類	法量				石材	備考
			縦(cm)	横(cm)	厚み(cm)	重量(g)		
1	10号住居	石包丁	5.2	11.0	0.8	53.2	頁岩	
2	10号住居	石包丁	5.1	11.1	0.5	51.8	頁岩	
3	10号住居	石包丁	4.9	11.8	0.5	47.2	頁岩	
4	10号住居	石包丁	3.9	8.3	0.5	22.0	頁岩	
5	11号住居	石鏃	(4.1)	(1.7)	0.2	1.6	頁岩	
6	4号溝	石鏃	(3.9)	(2.2)	0.2	1.6	頁岩	
7	6号土壙墓	石鏃	(5.0)	1.9	0.2	3.4	頁岩	
8	B－12	石鏃	(4.0)	(1.8)	0.2	2.2	頁岩	
9	9号住居	石斧	(7.7)	(2.3)	2.9	62.2	蛇紋岩	
10	E･F－5･6	磨製石斧	(12.3)	6.9	3.5	391.0	砂岩	

写真図版

3号甕棺出土状況

4号甕棺出土状況

6号・7号甕棺出土状況

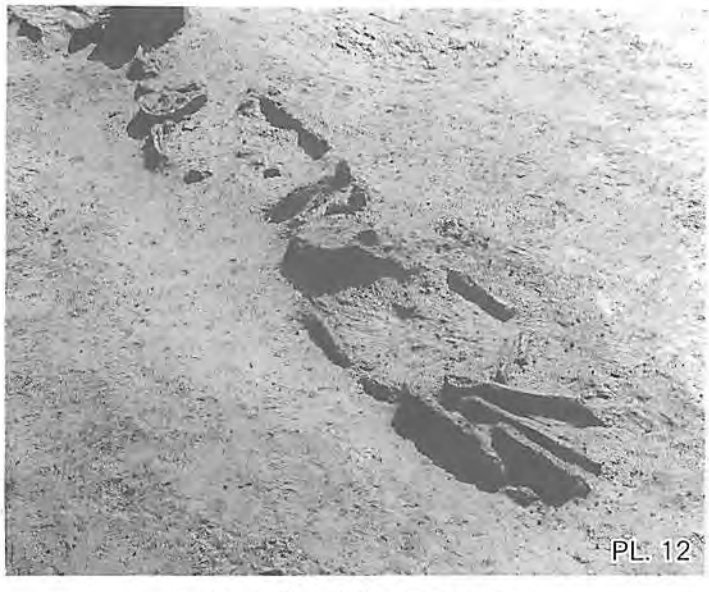
6号甕棺人骨出土状況

9 号甕棺人骨出土状況

12 号甕棺人骨出土状況

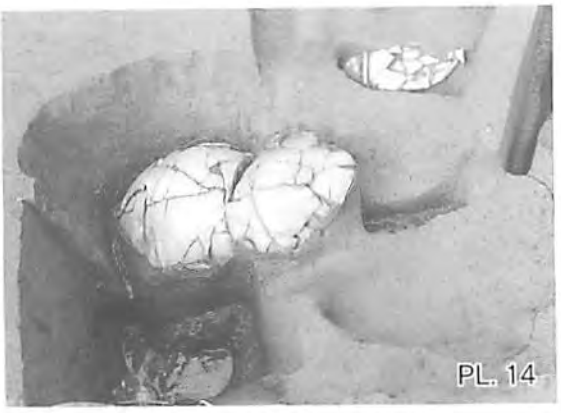
10 号甕棺人骨出土状況

4号・5号・6号土壙墓人骨出土状況全景



4号・5号土壙墓人骨出土状況

6号土壙墓人骨出土状況



1 号・2 号甕棺出土状況

3 号甕棺出土状況

4 号甕棺出土状況

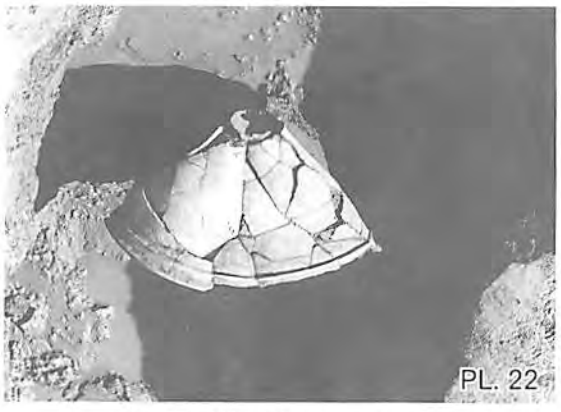
5 号甕棺出土状況

8 号甕棺出土状況

9 号甕棺出土状況

10 号甕棺出土状況

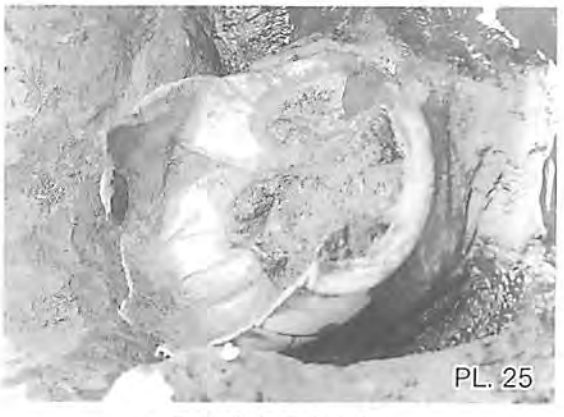
12 号甕棺出土状況



11 号甕棺（上）出土状況

11 号甕棺（下）出土状況

2 号甕棺人骨出土状況



3 号甕棺人骨出土状況

9 号竪穴住居跡完掘状況

10 号竪穴住居跡石包丁出土状況

11 号・12 号・13 号竪穴住居跡完掘状況

16 号竪穴住居跡（古代）完掘状況

5号竪穴住居跡、5号～8号土坑完掘状況

7号・8号竪穴住居跡、17号～21号土坑完掘状況

1号土壙墓完掘状況

1号土壙墓人骨出土状況

1号溝完掘状況

4号溝遺物出土状況

4号不明遺構遺物出土状況

調査区水没状況（調査終了1時間後）

PL. 38

1 号甕棺

PL. 39

2 号甕棺

PL. 40

9 号甕棺

PL. 41

8 号甕棺

PL. 44

4号甕上棺　口縁打ち欠き

PL. 42

3号甕棺

PL. 45

4号甕棺

PL. 43

3号甕下棺　口縁打ち欠き

PL. 46

4号甕下棺　口縁打ち欠き

PL. 47

5 号甕棺

PL. 50

7 号甕棺

PL. 48

6 号甕棺（上棺の可能性あり）

PL. 49

6 号甕下棺

PL. 51

12 号甕棺

PL. 52

10 号甕棺

PL. 53

11 号甕棺

PL. 54

3 号不明遺構出土甕

PL. 55

4 号不明遺構出土甕（赤色土器）

PL. 56

甕棺集合（1）

PL. 57

甕棺集合（2）

PL. 58

甕棺集合（3）

PL. 59

1 号竪穴住居跡出土台付甕

PL. 60

2 号竪穴住居跡出土高杯

PL. 61

2 号竪穴住居跡出土鉢（黒髪式）

PL. 62

8 号竪穴住居跡出土杯

PL. 63

4 号竪穴住居跡出土コップ型土器

PL. 64

6 号竪穴住居跡出土鉢

PL. 65

6 号竪穴住居跡出土台付甕

PL. 66

9 号竪穴住居跡出土壺

PL. 67

11 号竪穴住居跡出土鉢

PL. 68

11 号竪穴住居跡出土鉢

PL. 69

11 号竪穴住居跡出土鉢

PL. 70

11 号竪穴住居跡出土鉢

PL. 71

11 号竪穴住居跡出土台付甕

PL. 72

11 号竪穴住居跡出土台付甕

PL. 73

11 号竪穴住居跡出土台付甕

PL. 74

15 号竪穴住居跡出土鉢

PL. 75

15 号竪穴住居跡出土鉢

PL. 76

15 号竪穴住居跡出土鉢

PL. 77

15 号竪穴住居跡出土甕

PL. 79

15 号竪穴住居跡出土壺

PL. 78

15 号竪穴住居跡出土台付甕

PL.80

21 号土坑出土台付甕

PL. 81

一括　無頸壺

PL.82

一括　鉢

PL. 83

17 号竪穴住居跡出土鉢

PL. 84

17 号竪穴住居跡出土手づくね

PL. 85

17 号竪穴住居跡出土高杯

PL. 87

一括　壺

PL. 86

23 号・24 号土坑出土杯

PL.88

一括　甑

PL. 89

10 号竪穴住居跡内Pit出土石包丁

石　鏃

PL. 90

PL. 91

甕集合

PL. 92

壺集合

PL. 93

鉢集合

あ と が き

本調査を行うにあたり、御協力いただいた鉄道建設・運輸の鉄道建設本部九州新幹線建設局熊本建設所、地元関係者の皆さん、御指導と御助言をいただいた土井ヶ浜遺跡人類学ミュージアムの松下館長、熊本市教育委員会に感謝の意を称します。

次々と検出される甕棺と人骨。2000年という歴史の重みに感動で体が震えたことが、今も昨日のように思い出されます。平成13年5月、上ノ郷遺跡（旧熊本平野条里跡）の発掘調査に携わってから、4年近い歳月が流れようとしています。初めての発掘調査に戸惑いと不安の連続でした。作業開始当初は湧水に悩まされ、水抜きが続く毎日でした。1月末が調査の終了と期間が決められた後の11月後半、続々と甕棺が検出されました。「期間内に調査が終了できるのだろうか？」という思いが常に胸の中にありました。そんな自分を助け支えてくれたのは、指導・助言を与えていただいた文化課の諸先輩、現場での指示を的確に出す嘱託職員、暑い中も寒い中も額に汗して作業を続ける作業員の方々でした。人と繋がることの大切さが現場を終了する大きな要因であった、そのことを深く認識させられました。

報告書を担当することになってからも、自分の能力のなさに嘆き、戸惑いと不安の日々が続きました。ここでも、数多くの方々に支えてもらいました。土器の水洗い・註記・接合をしていただいた一次整理作業員の方々、報告書作成に関わってくださった二次整理作業員の方々、そして、調査から報告書作成まで指導していただいた文化課の諸先輩と嘱託職員、皆さんのお陰で、本書が刊行する日を迎えることが出来ました。

調査する機会に恵まれたこと、そして、この調査に携わっていただいた全ての皆さんに感謝をして、結びの言葉とします。本当にありがとうございました。

【発掘作業員】〈順不同、敬称略〉

井上修、今村明美、岩瀬登、岩野政廣、上田昌秀、上野宏二、上村浄、上村久子、内田忍、内山正二郎、梅田誠、浦本忠幸、蟹川菊美、木本哲次、木庭孝子、境百合子、柴田道子、下田稔、杉本宣男、積本佳孝、竹本一幸、竹本博和、田中和博、谷口喜雄、津崎百合子、遠山宏、中村直美、中村由起子、西信二、西岡正治、西岡チズコ、西山美紀子、濱田由美子、濱田義雄、平見直美、藤本妙子、前田和子、増田智行、松尾琢磨、松田幸昭、南瀬隆敏、桃井哲夫、元松律子、森健次、森本勉、森本将生、若木亜紀

【整理作業員】〈順不同、敬称略〉

今村幸枝、緒方千代子、永山邦子、山内洋子、境美恵子、吉岡直子、入舟多美子、木村典子、江島岡子、後藤直美、上村孝子、柿原尚子、緒方涼子、高松孝子、中島史子、吉本清子、塚本博子

報告書抄録

フリガナ	カミノゴウイセキ
書名	上ノ郷遺跡
副書名	九州新幹線建設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査
巻次	
シリーズ名	熊本県文化財調査報告
シリーズ番号	第239集
編著者	今村　和徳
編集機関	熊本県教育委員会
所在地	〒862-8609　熊本県熊本市水前寺6丁目18番1号
発行年月日	平成19年3月31日

フリガナ 所収遺跡名	フリガナ 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
カミノゴウイセキ 上ノ郷遺跡	クマモトシシママチ 熊本市島町	201	555	32° 45' 57"	130° 40' 59"	H15.5.21 ～ H16.1.31	2,000㎡	九州新幹線 建設工事

所収遺跡名	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
上ノ郷	弥生時代中期	甕棺墓12基 土壙墓6基 土坑22基	弥生土器（甕） 磨製石鏃 弥生土器	
	弥生時代後期	竪穴住居跡15軒 溝状遺構4条	（鉢、杯、壺、甕） 石包丁	
	古代	竪穴住居跡2軒 土坑3基	土師器 （鉢、杯、壺） 須恵器（壺、甕）	

(遺跡の概要) 調査の結果、次のようなことが判明した。

① 弥生時代中期後半の甕棺墓12基、土壙墓6基等が検出され、それらの遺構から人骨が20体出土した。弥生時代中期後半の墓域が存在していた可能性が高い。

② 弥生時代後期の竪穴住居跡15軒、溝状遺構4条等が検出された。弥生時代後期の集落が存在していた可能性がある。

＊この遺跡で特筆すべき事項は、弥生時代中期後半の甕棺墓が人骨とともに確認されたことである。

熊本県文化財調査報告書　第239集

上ノ郷遺跡

発行年月日　平成19年3月31日

編集・発行　熊本県教育委員会
〒862-8609　熊本県熊本市水前寺6丁目18番1号

印　刷　敬島印刷株式会社

18 教委 教文
② 002

この電子書籍は、熊本県文化財調査報告第 239 集を底本として作成しました。閲覧を目的としていますので、精確な図版などが必要な場合には底本から引用してください。

底本は、熊本県内の市町村教育委員会と図書館、都道府県の教育委員会と図書館、考古学を教える大学、国立国会図書館などにあります。所蔵状況や利用方法は、直接、各施設にお問い合わせください。

書名：上ノ郷遺跡
発行：熊本県教育委員会
〒862-8609　熊本市中央区水前寺 6 丁目 18 番 1 号
電話：　096-383-1111
URL：http://www.pref.kumamoto.jp/
電子書籍制作日：2015 年 12 月 24 日

なお、熊本県文化財保護協会が底本を頒布している場合があります。詳しくは熊本県文化財保護協会にお問い合わせください。
熊本県文化財保護協会
URL：http://www.kumamoto-bunho.jp/